

カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想と  
チェコの建築の近代化過程

KAREL TEIGE'S ARCHITECTURAL PHILOSOPHY IN THE  
MODERNIZATION PROCESS IN CZECH ARCHITECTURE

2013年7月

早稲田大学創造理工学研究科 建築学専攻 建築意匠論研究

岩澤錠児

Joji IWASAWA

-目次-

序論

---

第一節 カレル・タイゲの諸活動と現代のチェコの文化芸術運動への影響

第二節 既往のカレル・タイゲ研究と問題の所在

第三節 研究の方法と目的

- 1) 20世紀前半における社会主義にもとづく建築運動の枠組みとその現代的位置づけ
- 2) ハンガリーの近代建築運動との対比と中東欧近代建築史における位置づけ

第四節 本論文の構成と展望

第一章 19世紀後半から20世紀半ばまでのチェコの時代背景とタイゲの諸活動について

---

第一節 展望

第二節 20世紀半ばまでのチェコの時代背景とタイゲの建築に関する活動について

- 1) 17世紀から20世紀初頭：国家的な成立に至るまでのチェコの歴史的過程
- 2) 1920年代～30年代：国家的な成立からナチス・ドイツの台頭まで
- 3) 1930年代後半～1940年代：ナチス・ドイツの侵攻と第二次世界大戦まで
- 4) 1940年代～1950年代：第二次大戦後から親スターリニズム国家へ
- 5) カレル・タイゲの建築を中心とした活動履歴（1900年～1951年）

第三節 要約

第二章 チェコ近代建築史の編纂におけるタイゲの評価軸

---

第一節 展望

## 第二節 チェコの近代建築の起端とチェコの建築におけるアイデンティティの確立

- 1) チェコにおける建築的アイデンティティの模索とヨセフ・ジーテク
- 2) チェコのセセッションと百周年記念全領邦記念博覧会

## 第三節 チェコの近代建築におけるヤン・コチェラの位置づけとその影響

- 1) ヨーロッパ近代建築の文脈におけるコチェラの位置づけ
- 2) コチェラとチェコのキュビズム建築の世代

## 第四節 アドルフ・ロースの位置づけに見るタイゲの評価軸

- 1) タイゲによるアドルフ・ロースの再評価
- 2) ロース論におけるマルキシズムに基づく経済論から構成主義への展開

## 第五節 ロシア構成主義に基づく建築のチェコへの導入と当時のチェコ近代建築の状況

- 1) チェコにおける構成主義の建築の確立の過程
- 2) チェコにおける構成主義の実践の状況
- 3) 構成主義の理念と誤読、社会階級制度と住宅、そして都市の問題への展開

## 第六節 要約

---

# 第三章 1930年代前半のタイゲの建築思想とチェコの建築の近代化過程

## 第一節 展望

## 第二節 ル・コルビュジェに関する一連の論稿

- 1) 「ムンダネウム」
- 2) 「発展段階」
- 3) 「ル・コルビュジェと新たな建築」
- 4) 「輝く都市」

## 第三節 著作『最小限住居(Nejmenší byt)』に見るカレル・タイゲの建築思想

- 1) 建築と社会の関係について
  - 1-1) 建築における社会構造の問題の抽出
  - 1-2) 住宅危機に見る都市の歴史的な文脈

- 2) 女性の解放と建築
  - 2-1) 女性の解放の思想に基づく建築思想の起端
  - 2-2) 女性の解放の思想に基づいた建築論の編纂
  
- 3) 近代建築批判
  - 3-1) 近代の住宅における様式性と芸術性
  - 3-2) 近代都市計画における金融資本の誘導の二重構造
  - 3-2) 近代建築の理念と芸術的作家性の矛盾
  
- 4) 都市・建築モデルの提示
  - 4-1) 都市における区画計画と土地投機との関係
  - 4-2) ソビエトの影響と自らの都市・建築モデルの提示
  
- 5) 自国チェコの動向への反応
  - 5-1) 「L-プロジェクト」に見るタイゲの建築理念
  - 5-2) VČELA コンペに見るタイゲの現実性の追求と問題提起

#### 第四節 要約

---

### 第四章 1930年代後半から1940年代後半のタイゲの建築思想と論説「自然と建築の序説」

#### 第一節 展望

#### 第二節 1930年代後半から1940年代のタイゲの建築思想の変遷

- 1) 社会主義リアリズムとシュルレアリスムについて
- 2) スターニズムの台頭以降のソビエト建築について
- 3) シュルレアリスム運動の継続

#### 第三節 論稿「自然と建築の序説」におけるタイゲの建築思想

- 1) 自然と建築との関係史について
- 2) 近代都市計画と自然について
- 3) 庭園建築の歴史的背景とその状況について
- 4) シュルレアリスムとランドスケープについて

#### 第四節 要約

### 結論

---

#### 結論

· 参考文献一覽

· 謝辭

· 著者經歷



## 序論

### 第一節 カレル・タイゲの諸活動と現代のチェコの文化芸術運動への影響

本論は、20世紀初頭のチェコの建築の近代化過程において思想的側面から重要な役割を果たしたとされる人物、カレル・タイゲ(Karel Teige) (図1) について論ずるものである。

タイゲは1920年代から東西冷戦にいたる1950年代までのチェコ・アヴァンギャルド芸術運動の中で「デヴィエトシル (DEVĚTSIL)」<sup>1)</sup>等の芸術グループを組織し、タイポグラファー、編集者、建築批評家、シュルレアリストとして活動し、その活動期間において芸術論、建築論、フォト・モンタージュ作品、タイポグラフィ作品等、多くの言説と作品を残している。

カレル・タイゲは1900年12月13日、プラハに生まれる。父ヨセフは市の公文書局に勤務、さらに著名な芸術史家でもあった。タイゲが高校に入学する頃には、第一次世界大戦の影響によってプラハの芸術文化は停滞していたとされる。しかし、終戦間際にチェコの国民的作家であるカレル・チャペック (Karel Čapek)<sup>2)</sup>の実兄ヨセフ・チャペック (Josef Čapek)<sup>3)</sup>らが芸術グループ「頑固派 (Tvrdošijní)」<sup>4)</sup>を結成し、タイゲは彼らと活動を共にし、自らも作品を発表し始めた。そんな中、1917年のロシア革命はチェコにおける近代芸術運動の過程にいた多くのアヴァンギャルド芸術家たちに大きな影響を与えた出来ごとであった。1918年10月、アメリカにいたトマーシュ・マサリク (Tomáš Masaryk)<sup>5)</sup>がオーストリア＝ハンガリー帝国からの独立を宣言し、同年11月には正式にチェコスロヴァキア共和国 (第一共和国) が成立し、初代大統領にマサリクが選出された。その首都となったプラハにはダダ、未来派、バウハウス、ロシア構成主義などのヨーロッパ各国のアヴァンギャルド運動が流れ込んできた。1917年以後、戦争検閲の部分的緩和により都市部では寛容な表現環境が形成され、プラハの若い無名のアーティスト達の作品も、もはや反戦をテーマとしなくなっていた。このような状況の下でタイゲは1917年から1918年にかけて、前述の「頑固派」グループの創立メンバーに紹介され、作品も発表する。

このようにキャリアを出発させていたタイゲは、1919年にカレル大学美術史学科に入学し、その翌年にアヴァンギャルド芸術グループ「デヴィエトシル」を結成する。1920年12月6日発行の日刊紙「プラハ日報」にデヴィエトシルの宣言が掲載される。

「われわれの時代は二股に裂かれている。われわれの背後に残されているのは、書庫の塵に成り下がったとして語られる古き時代であり、われわれの前方で煌めいているのは、新しい日々である。みんなのために、はっきりとしたもの言いをしなくてはならない。また、みんなで新生活の土台の建設に取りかからねばいけない。本日ここに、若い芸術家や作家、画家、建築家、役者が、家族として集い、ナッパ服を着た人たちとともに立ち上がり、新しい生活のために戦いに、自分たちで乗り出そうとしている。ブルジョワがそうしようしないのだから。アルトゥシュ・チェルニーク、ヨセフ・フリッチ、ヨセフ・ハヴリーチェク、アドルフ・ホフマイステル、カレル・プロクス、ヤロスラフ・サイフェルト、イヴァン・スク、ラディスラフ・スース、ウラジミール・シュトウルツ、カレル・タイゲ、ヴラジスラフ・ヴァンチュラ、カレル・ヴァネク、カレル・ヴェセリーク、アロイス・ワフスマンは、

デヴィエトスィル芸術家協会と名乗ることになった。どうして、と問われたら、こう答えよう。人は自分独りでは、組織的にも芸術的にも、大したことなどできはしない、とよく分かっているからだ、と。なにかをやり遂げようと思ったら、新しい考えで結ばれた人たちが、ひとつにまとまる必要がある。若造といわれようが、文無しといわれようが、とにもかくにも、そうせずにはいられないのだ。なぜなら、古い文学は、それがなんと呼ばれようが、階級意識にどっぷり染まりきって、金持ちの趣味に迎合して憚らないのだから。しかし、ここに集う芸術家は若き革命児であり、そうであるがゆえに、やはり革命児である人たち—とはすなわち労働者—と手を携えよう。そうして初めて一步前に進むことができるのだ<sup>6)</sup> (1920年12月6日発行の日刊紙「プラハ日報」デヴィエトスィル宣言)

デヴィエトスィルには画家、作家、詩人、編集者、建築家、写真家、舞台作家、役者、音楽家らが集った。翌1921年、タイゲは「図と前イメージ (OBRAZY A PŘEDOBRAZY)」<sup>7)</sup>とタイトルをつけられた論稿を「頑固派」の表明文として雑誌「ムサイオン(Musaion)」に発表した。1923年、『ディスク (DISK)』に発表された「絵画と詩 (Malířství a poesie)」<sup>8)</sup>では、絵画と詩の二つの世界を佳境する概念が示されている。

デヴィエトスィルはチェコ・アヴァンギャルド運動の中心的なグループであった。1920年代の間、この前衛運動には若い世代の多くの革新的な作家、画家、建築家、カメラマン、作曲家、劇場支配人、批評家、ジャーナリストたちが引き寄せられていった。徐々に組織化されたこのグループは、活動数年の間に60人以上のメンバーが所属していたとされている。当初、イデオロギーを持たなかったデヴィエトスィルであるが、その後、タイゲがスポークスマンとなって本格的に活動していく。1922年にパリを訪問したタイゲは、かの地でマン・レイ、レジエ、ブランクーシ、ピロ等多数の主要なパリのアヴァンギャルドの人脈と交流を果たした。タイゲはパリで会ったすべてのアーティストの中でもマン・レイに最も興味を引かれたとされている。マン・レイのフォトグラム(レイヨグラフ)と写真からの影響は、その後のタイゲのフォト・モンタージュ作品にマン・レイがしばしば引用されていることからもうかがえる。このパリ滞在の間に、タイゲは建築、写真撮影とフィルムに対する興味を増していたとされ、実際、建築と写真はその後タイゲの活動の中で常に重要な位置を占めることになる。そして翌1923年、デヴィエトスィルの建築家グループはARDEVと名乗り機関誌『Stavba (スタヴァ)』を発刊する。ARDEVは同時期のエル・リシツキーらによる『ヴェシチ(Veshch)』や、ハンガリーのモホリ＝ナジラの『マ (MA)』ともつながりを持っていたとされており、チェコ・アヴァンギャルド運動の活動範囲は国際的に広がっていった。同年、プラハのソビエト連邦大使館に「モスクワ言語学サークル」の中心人物であったロマン・ヤコブソン<sup>9)</sup>が赴任した。ヤコブソンはすぐにデヴィエトスィルのメンバーと交流し、その中でマヤコフスキー、フレーブニコフ、エセーニン、パステルナークの詩を朗読したとされる。そして、リシツキーとエレンブルク、そして構成主義理論をデヴィエトスィルのメンバーに紹介したとされる。

そして1924年、タイゲは“視覚的な詩”の概念を雑誌「ホスト(Host)」第3号に「ポエティズム(Poetism)」というタイトルで発表する<sup>10)</sup>(同論稿は1928年にデヴィエトスィルの機関誌「レド(ReD)」第一巻9号に「ポエティズム宣言」という表題で再び発表された)。ここでは唯物史観に基づきポエティズムと構成主義をそれぞれ上部構造と下部構造に置くタイゲの考えが示されている。この中で「ポエティズムは生活の頂点」とし、「生きて楽しむための芸術」をタイゲは提唱している。その年の末にはタイゲの論稿「絵と



詩」、シュティルスキーの論稿「絵画」が収められた機関誌『ディスク (DISK)』第一号が創刊され、タイゲはタイポグラフィも手がけている (図版2)。タイゲはこの「絵と詩」というテキストのなかで初めて「絵画詩」というに概念、手法ついて言及している。そして、この絵画詩は 1925 年をピークとして 1927 年ころまで制作されることになる (図版3,4)。



図版1 カレル・タイゲ



図2 『ディスク (DISK)』 (1923)



図3 カレル・タイゲ, 絵画詩, 「キティラ島への出発」(1923-1924)



図4 カレル・タイゲ, 絵画詩, 「旅先からの挨拶」(1924)

1920年代にはタイゲの活動は既成のジャンルを越えて多岐に広がっており、タイポグラフィの分野でも多くの雑誌や詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァル等のデヴィエトスシルのメンバーの著作の装丁を手がけていた(図版5,6)。そのデザイン理論は構成主義をベースにしたものであった。1927年に発表された論稿「モダン! タイポグラフィ (Modern! Typo)」<sup>11)</sup>では構成主義に基づくタイポグラフィ理論について述べている。タイゲはここで、近代タイポグラフィの父とされるウィリアム・モリスのアーツ&クラフツを構成主義タイポグラフィの対極に位置づけ、そして当時の広告産業は後述するハンガリーのモホリ＝ナジが「タイポフォト」と称したタイポグラフィとフォトグラフィの組み合わせを評価している。ここでタイゲは、ヴィジュアル・コミュニケーションとしてのタイポグラフィのあり方について、光学的な観点から近代絵画と比較しながら再構成を試みている。さらにタイゲは近代詩がタイポグラフィに及ぼした影響について言及し、ステファノ・マラルメとマリネッティーに言及している。そしてタイゲはこの論稿の最後で、タイポグラファーと印刷技師の関係を建築家と建築技師とのコラボレーションに例えており、これらのタイポグラフィ論の中での近代絵画、近代詩、そして建築への言及には、多岐に渡る活動において多様な領域を接続していく彼の思想的な指向性がうかがえる。



図5 機関誌『レド(RED)』(1928)。装丁;カレル・タイゲ

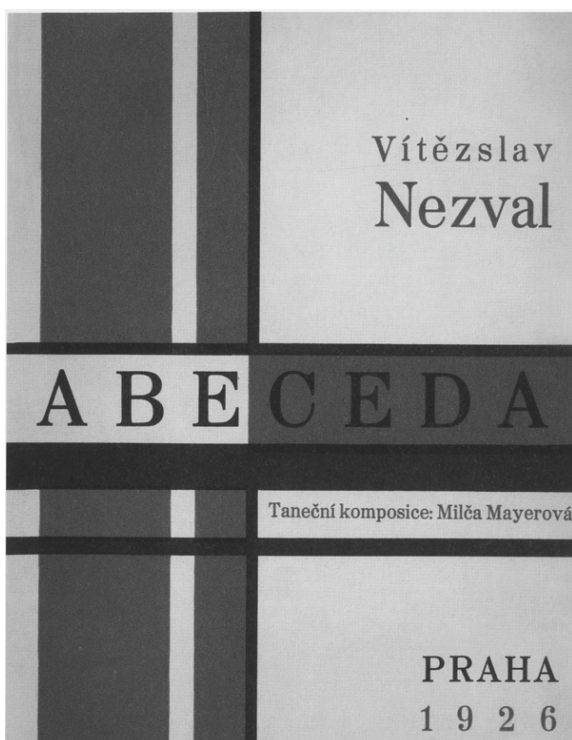


図6 ヴィーチェスラフ・ネズヴァル, 『ABCED』 (表紙), 1926. 装丁; カレル・タイゲ



図7 ヴィーチェスラフ・ネズヴァル, 『ABCED』 (内容), 1926. 装丁; カレル・タイゲ

またタイゲは、1930年代から自身のライフワークともなるフォト・モンタージュの作品制作を開始している。ナチス・ドイツとスターリニズムの台頭による政治的な動乱の時代の間もタイゲはフォト・モンタージュ作品を制作し続けた。1935年の最も初期のコラージュから、最後のフォト・モンタージュ作品は彼の享年である1951年の日付がある（図版8, 9, 10, 11, 12, 13）。

タイゲのフォト・モンタージュは単なる日記ではなかった。それらにはエロチックなモチーフが繰り返し使用され、独特なオブジェや建築物の引用、そしてランドスケープと女性の肉体がユートピア的なシーケンスを形成するタイゲのフォト・モンタージュ作品は特異な世界観をもつものである。そして1932年の論説「フォト・モンタージュ (O fotomontazi)」<sup>12)</sup>ではフォト・モンタージュの新しいメディアとしての重要な特色として誰にでも扱える表現方法であることを示唆し、芸術における専門性からの解放をタイゲは訴えている。



図8 No. 1 (1935)



図9 No. 323 (1946)



图 10 No. 325 (1946)

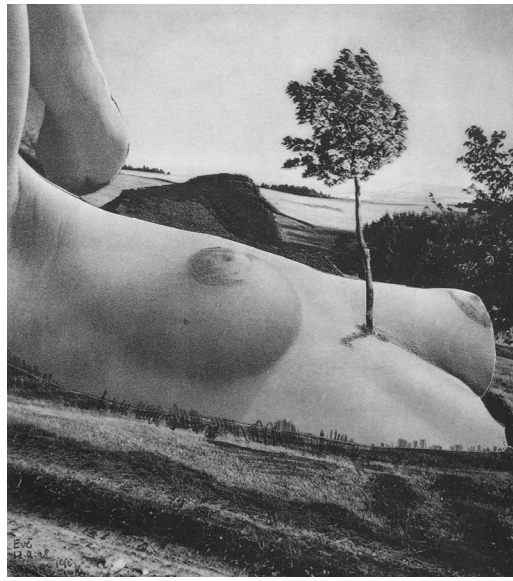


图 11 No. 355 (1948)



图 12 No. 373 (1951)

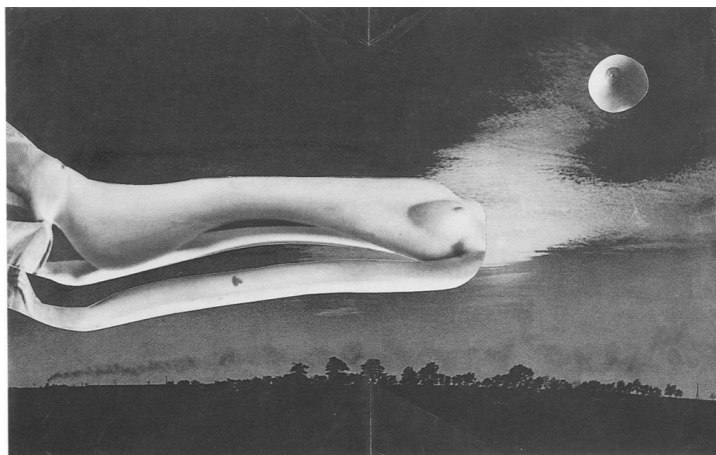


图 13 No. 374 (1951)

これらの多岐にわたる活動の中、当時ソビエトで進行するスターリニズムに対して批判的な立場を取ったタイゲは、アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム第二宣言」をきっかけに、チェコにおけるシュルレアリスム運動を主導する。1934年3月21日、プラハでシュルレアリスム・グループが結成され、タイゲが代表をつとめる。1935年には論稿『社会主義リアリズムとシュルレアリスム(Socialistický Realismus a Surrealismus)』<sup>13)</sup>を発表する。1936年になるとソビエトではモスクワ裁判が行われ、スターリニズムが進行していった。翌1937年、タイゲはモスクワで行われた全ソ建築家同盟総会に参加する。そこでタイゲはスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムが主流となり始める状況を目の当たりにする。1938年には、タイゲはチェコ国内のスターリン主義者からの攻撃とナチス・ドイツの全体主義に対抗するかたちで、論稿「流れに逆らうシュルレアリスム (Surrealismus proti proudu)」<sup>14)</sup>を発表している。

しかし1939年、ナチス・ドイツの侵攻によってチェコスロヴァキア共和国は占領・解体され、同時にチェコのアヴァンギャルド運動は実質的に終焉を迎える。第二次大戦中の東欧諸国はナチス＝ドイツの支配下におかれ、それに対する抵抗運動も拡大していく。タイゲ等のチェコ・シュルレアリスム運動は地下活動への移行を余儀なくされ、占領下において地下出版を継続していたとされる。また同年、タイゲは『芸術の現象学 (Fenomenologie Umění)』<sup>15)</sup> という全10巻を予定した著作の執筆に着手している。

1944年10月6日、ソ連は旧チェコスロヴァキア共和国の国境を越え、ルテニア、スロヴァキアを解放し、1945年5月9日には首都プラハを解放した。同年、タイゲはシュルレアリスムによる内的世界から外的世界をつなぐ生成手法についての論稿「内的モデル (vnitřní model)」<sup>16)</sup>を発表、そして戦後の1947年には、プラハで「国際シュルレアリスム展」が開かれ、タイゲを中心とする新しい組織が結成される。しかし、1948年に共産党が政権を奪取し(「二月事件」)、チェコにおいて親スターリニズム政策が取られると、タイゲ等のシュルレアリスム運動はふたたび地下活動への移行を余儀なくされる。その地下における活動の最中、1951年にカレル・タイゲは心臓発作でその生涯を終える。そして上述の『芸術の現象学』はその完成を見ることはなかった。

タイゲ亡き後、シュルレアリスム運動を引き継ぎ、牽引したのは批評家ヴラチスラフ・エフェンベルゲル (Vratislav Effenberger)<sup>17)</sup>であったとされる。1948年の「二月事件」以降の親スターリニズム体制の元、活動の危機を迎えていたチェコのシュルレアリスム運動は、1956年のフルシチョフのスターリン批判やハンガリー動乱を契機に緩まった文化統制の緩和以降も地下で活動していた。1960年代にはいると、新たに、現在日本でもその著作が出版されている詩人ペトル・クラール(Petr Král)<sup>18)</sup>等が活動に参入する。1967年にはエフェンベルゲルが主導し、タイゲにささげる回顧展も企画されている。そして1948年にチェコ国内における共産党体制に対する一連の改革運動は「プラハの春」と呼ばれ、その機運が盛り上がりを迎えた同年8月、ワルシャワ条約機構軍がチェコに侵入しチェコスロヴァキア全領土を占領下に置く「チェコ事件」が起きる。またしても危機を迎えたチェコのシュルレアリスム運動ではエフェンベルゲル等が属する新たなグループが結成され、現在世界的な名声を得ている映画監督ヤン・シュバンクマイエル (Jan Švankmajer)<sup>19)</sup>も当時ここに参加している。その後も1970年代から1980年代に入っても、シュルレアリスム・グループの活動は継続される。そして1989年のチェコにおける民主化革命である「ビロード革命」と東西冷戦体制の終結によって、チェコのシュルレアリスム運動は表舞台で脚光を浴びることになる。また、「ビロード革命」後の連邦最後の大統領であり、1993年1月に新たに成立したチェコ共和国の初代大統領

であるヴァーツラフ・ハヴェル (Václav Havel)<sup>20)</sup> は1960年代から活動する劇作家であり、「プラハの春」以降の時代に逮捕・投獄されながらも反体制活動を行ってきた人物である。世界的なベストセラー小説であり米国の監督フィリップ・カウフマンによって映画化もされた『存在の耐えられない軽さ』(1984年)等の作品を発表している作家ミラン・クンデラ(Milan Kundera)<sup>21)</sup> もチェコのシュルレアリスム運動からの影響について述べており<sup>22)</sup>、タイゲ等を端緒とするチェコの近代芸術運動は東西冷戦中ものその脈流を維持しつづけ、それは現代のチェコの文化芸術運動へと引き継がれているといえる。そして、前述のクンデラやシュバンクマイエルを筆頭に、これら脈流を受け継ぐ現代のチェコのアーティストたちは世界的な評価を受けている。

## 第二節 既往のカレル・タイゲ研究と問題の所在

カレル・タイゲおよびチェコのアヴァンギャルド芸術運動に関する研究は、冷戦終結後のヨーロッパの左翼アヴァンギャルド運動を再評価する流れの中で、タイゲは本論の第三章でも触れる、ル・コルビュジェとの1929年のムンダニウム論争の英語翻訳の発表(1974年)を契機に歴史に再浮上することとなったとされている<sup>23)</sup>。また、チェコの近代芸術運動が東西冷戦後の国際社会で再評価されるきっかけとなったのは1988年のダルムシュタットのマティルデンヘーエ美術館主催の『20年代と30年代のチェコ美術—前衛と伝統』展であったとされ<sup>24)</sup>、カレル・タイゲ個人については、1993年にイタリアの建築デザイン誌『ラセーニャ (Rassegna)』が「建築家・詩人カレル・タイゲ」特集<sup>25)</sup>を出版している。そして1999年にはMIT (Massachusetts Institute of Technology) 出版より、パラツキー大学、オロモウツ大学で教鞭を取る美術・建築史家のロスティスラフ・シュバーハ (Rostislav Švácha) 等によるタイゲのデザイン、美術、思想、建築のそれぞれの分野での活動概要を取りまとめた総合的な研究書として『カレル・タイゲ1900-1951』<sup>26)</sup>が出版されている。2001年にはニューヨーク大学付属グレイ・アート・ギャラリーで、『ドリーム・アンド・ディスイリュージョン -カレル・タイゲとチェコ・アヴァンギャルド』展が開催されている。

チェコ国内においてはプラハ・シティ・ギャラリーの主任学芸員であるカレル・スルプ (Karel Srp) によってタイゲのシュルレアリスム作家としてのフォト・モンタージュ作品がまとめられており<sup>27)</sup>、また、タイゲのタイポグラフィの作品についても同じくスルプによって作品集としてまとめられ発表されている<sup>28)</sup>。建築分野では、建築史家でありブルノ工科大学建築学科 (Vysoké Učení Technické v Brně) の教授であるウラディミール・シュラペタ (Vladimír Šlapeta) によるチェコの機能主義建築に関する著述の中で、「デヴィエトシル」からCIAMのチェコ代表として後述の芸術グループ「左翼戦線(Levá fronta)」における活動まで、建築批評家としてのカレル・タイゲの活動概略についての言及がなされている<sup>29)</sup>。タイゲの建築に関する先行研究としては、上述のロスティスラフ・シュバーハ (Rostislav Švácha) の一連の研究が特筆される。前述のMIT出版のタイゲの研究書に寄稿した論文「ムンダネウムの前後：建築アヴァンギャルド理論家としてのタイゲ (Before and After the Mundaneum : Teige as Theoretician of the Architectural Avant-Garde)」<sup>30)</sup>に加え、シュバーハの著作『ニュー・アーキテクチャー・イン・プラハ (New architecture in Praha)』<sup>31)</sup>においてチェコの近代建築史が包括され、その中で建築批評家としてのカレル・タイゲの活動概略について述べられている。同じくシュバーハの論文「シュルレアリスムとチェコ機能主義 (Surrealism and Czech Functionalism)」<sup>32)</sup>では、シュルレアリスムへと傾倒するチェコ・アヴァンギャルド運動とチェコの機能主義建築の関連についてまとめられており、ここでもタイゲが中心人物として言及されている。そして、同じくシュバーハの論文「建築批評家としてのカレル・タイゲ (Karel Teige jako teoretik architektury)」<sup>33)</sup>では、9頁にわたる全文の中でタイゲの建築批評家としての概略が述べられており、貴重な既往論文といえる。また、MIT出版の研究書ではエリック・ドゥルホッシュによる「最小限住居」の概念とタイゲの建築理論についての論文<sup>34)</sup>やクラウス・スペシュテンハウゼンとダニエル・ワイスによるタイゲのCIAMでの活動をまとめた論文<sup>35)</sup>もそれぞれ掲載されている。加えて、チェコ国内のいくつかの学術論文において「ポエティスム」等の芸術分野、あるいはチェコの機能主義建築に



ついて考察の中でのタイゲへの言及等がなされている。

日本におけるカレル・タイゲに関する既往研究は、井口壽乃による近代デザイン分野に関する一連のもの<sup>36)</sup>に加え、建築分野では近江栄、矢代真己、市川祐子による一連の既往研究があり<sup>37)</sup>、これらの既往研究によってタイゲが日本に紹介された。

本論では、タイゲとチェコのシュルレアリスム運動についても触れる。美術分野から見たタイゲとチェコのシュルレアリスム運動については、前述のMIT出版のタイゲの研究書の中の論稿「カレル・タイゲのコラージュ、1935-1951：エロティック・オブジェ、社会的オブジェ、そしてシュルレアリストのランドスケープ・アート (Karel Teige's Collage, 1935-1951: The Erotic Object, the Social Object, Surrealist Landscape Art)」<sup>38)</sup>において言及されており、本論文で取り上げるタイゲの論稿「建築と自然の序論」に関しては同研究書の「近代建築批評としてのタイゲの最小限住居論 (Teige's Minimum Dwelling as a Critique of Modern Architecture)」<sup>39)</sup>において一文のみが引用され、その概略に触れられている。

日本においては西野嘉章の『チェコ・アヴァンギャルド ―ブックデザインにみる文芸運動小史』<sup>40)</sup>において、ブックデザインを軸としたチェコの近代芸術運動史がまとめられ、その中でチェコのシュルレアリスム運動の概要について触れられている<sup>41)</sup>。また、赤塚若樹の『シュバンクマイエルとチェコ・アート』<sup>42)</sup>では、前述の映画監督ヤン・シュバンクマイエルを中心とする著述の中で、チェコのシュルレアリスム運動について小史としてまとめられている。

このようにチェコを含む海外および国内のカレル・タイゲの既往研究は、芸術グループでの活動やCIAM等を含むタイゲの社会主義に基づく建築活動および建築思想の大枠の概略、機能主義や合理主義の建築論に関するもの、あるいは芸術分野やデザイン分野において「ポエティズム」や「構成主義」等のタイゲが発表した個別の芸術思想、およびシュルレアリストとしての作品を紹介したもの、そして建築批評家カレル・タイゲの活動履歴についての概略であるといえる。これらのことから、カレル・タイゲが残した建築についての論稿から彼の具体的な言説を詳細に整理し、当時のチェコの社会的情勢と逐次照し合せた体系的な論究を試みる必要があると筆者等は考え、そして上述のロスティスラフ・シュバーハの一連の先行研究を発展させるものとして本論文を位置づけるものである。

### 第三節 研究の方法と目的

本論文は、前述のカレル・タイゲの多岐に渡る活動の中から建築批評家としての側面に着目し、彼が残した多様な領域に渡る文献資料の中から、主に建築に関連する論稿を抽出する。そして、それら論稿におけるタイゲの言説を、新興国家であったチェコの近代建築史の編纂におけるタイゲの評価軸、および同時代のチェコの社会情勢に対応した建築思想の推移の二つの側面から整理し、分析する。

そこから、当時のチェコの建築の近代化過程におけるタイゲの建築思想の変遷の詳細とその枠組みの一端を示すことを本論の目的とする。加えて、本論の目的は以下の二つの射程を含むものとする。

#### 1) 20世紀前半における社会主義にもとづく建築運動の枠組みとその現代的な位置づけ

はじめに、本論文における20世紀前半における所謂社会主義に基づく建築思想の枠組みの見直しについて述べたい。

建築史家のケネス・フランプトンによれば、

「一般的な近代運動の歴史の中で、チェコのアヴァンギャルド芸術運動の中心人物であったカレル・タイゲの名前は長い間表舞台に登場することはなかった。大戦間のチェコのモダニズム期に多くの寄稿論説を発表しながらも、タイゲは社会主義リアリズムのレットテルと、第二次世界大戦の後の情報規制によって、近代運動の歴史の俎上に上ることはなかった。タイゲはヨーロッパの近代文化史における西欧主体の歴史軸から外れ、同時に冷戦時代の共産政権の下の政治圧力によってその論説は発禁扱いを受けていた」<sup>43)</sup>

と、冷戦時代の状況について解説している。つまり、20世紀後半に至るまで、いわゆる西側諸国からの「社会主義」という単一の分類によって、20世紀前半の社会主義に基づく建築運動は一種のバイアスがかかった状態であったといえる。しかし東西冷戦以降、八束はじめによるエル・リシツキーからヴェニス兄弟、OSA、イワン・レオニドフ、タイゲをはじめヨーロッパの近代建築家に大きな影響を与えた都市理論書『ソツゴロド』を著したニコライ・A・ミリューチン、あるいはモイセイ・ギンズブルグ等のソビエトにおける社会主義に基づく建築思想についての細密な再考をはじめ<sup>44)</sup>、当時東側諸国であったハンガリー、ポーランドを含めた近代の建築運動の見直しが行われている<sup>45)</sup>。それらに加え、オランダ人マルト・スタムから構成主義の考えを受け継いだスイスのハンス・シュミットとヴェルナー・モーザーを中心とし同じくスイス人のハルネス・マイヤーと動きをともにした「ABCグループ」による国際構成主義運動への再評価<sup>46)</sup>。また、マイヤーやドイツ人のルードヴィヒ・ヒルベルザイマー等の社会主義に基づく建築思想に対する再評価の動きなどが挙げられるだろう<sup>47)</sup>。これら20世紀前半の社会主義に基づく建築運動に対する現代の視点からの見直しの潮流を踏まえ、チェコの建築の近代過程におけるカレル・タイゲの建築思想を改めて整理し、再定義することですること、これまで「社会主義」という枠組みでくられてきた20世紀前半の近代建築運動の系譜に対して、新たな視座を提供したいと筆者は考える。

また、カレル・タイゲの建築論の背景にある社会主義思想について分析を行うことで、当時の近代建築における社会主義の思想的な枠組みについても改めて整理したいと筆者は考える。本論で取り扱うタイゲの建築に関する言説には、カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルスからの影響はもとより、レフ・

トロツキーの思想まで。そして19世紀末から活動し社会主義の立場による女性解放運動を主導したクララ・ツェトキン<sup>48)</sup>の影響、そしてイタリアの左翼思想家であるアントニオ・グラムシが命名した生産モデルである「フォーディズム」<sup>49)</sup>への言及も見られる。さらに、いわゆる「空想的社会主義」という枠組みに置かれ、現在その再評価が進んでいるシャルル・フーリエ、アンリ・ド・サン＝シモン、ロバート・オウエンの社会主義思想の先駆者<sup>50)</sup>たちについてもタイゲの論稿の中で言及がなされている。これらの社会主義思想に影響を及ぼした人物等に対する一連の再評価の機運に対して、建築を通じた再考を試みたい。加えて、当時の社会主義思想に重要な作用を及ぼしたスターリニズムに基づく「社会主義リアリズム」に対して向けられた言説は、今日の視点からの社会主義思想の再考に際して重要な記録となるといえるだろう。また本論文で取り上げる、社会主義思想と都市・建築論との関連や「革命的リアリズム」の概念についての第二次大戦後における考察では、アンリ・ルフェーヴル等の著作が特筆される<sup>51)</sup>。

これら以上のことから、本論文の目的の射程は現代的な意義を含むものと筆者は考える。

## 2) ハンガリーの近代建築運動との対比と中東欧近代建築史における位置づけ

また、隣国ハンガリーの建築の近代化過程の概略を踏まえることで、東欧の近代建築史におけるタイゲを中心とするチェコの建築の近代化過程を対比させることで中東欧近代建築史に新たな知見をもたらすことを本論文のもう一つの射程としたい。

参考として、本論文の中心であるチェコ（ボヘミア）と同様に同じく中東欧に属するオーストリア＝ハンガリー二重帝国にあったハンガリーの近代建築に関する概要を以下に記したい。

第一次大戦で敗戦国となったハンガリーがオーストリアから独立し、ハンガリーの最初の社会主義の首相となり、その後大統領となったカーロイは貴族階級に属していた。ハンガリー企業の大部分を所有していたのは教育された中産階級の一部のユダヤ人であり、そしてこの事実は最終的に反ユダヤ主義へと向かうことになる。

ハンガリーにおけるファシズムはイタリアとドイツのファシズムに先行した。旧オーストリア・ハンガリー元海軍大将のホルティ・ミクローシュ(Vitéz Nagybányai Horthy Miklós)<sup>52)</sup>が政権を握ると、貴族が再び国を統治し、反ユダヤ主義組織を含む何十もの全国的な過激派組織が現れた。ハンガリー国の次のドラマティックな展開は、ムッソリーニとヒットラーに傾倒するゲンベシュ・ジュラ(Vitéz jákfai Gömbös Gyula)<sup>53)</sup>の下でハンガリーが第一次大戦で失った領土を取り戻す目論見で枢軸国に加わったことである。ハンガリー主導者の保守的で国粋主義的な社会政治的な傾向と増大する反ユダヤ主義の動きは直結していた。そのような状況で、ハンガリーの民主主義の推進と自由社会の下に集う産業及び文化的エリート層ユダヤ人はモダニズム建築を支持した。ハンガリーの20年間の独立の間の社会的、政治的、そして文化的に不利な状況にもかかわらず、機能主義建築を確立したことは特筆に値するものである。ホルティ政権は、自由で根なし草的で破壊的で共産主義的な建築よりも、国粋的な記念碑的デザインもしくは愛国心に基づいた新古典主義に興味を持っていたとされる。ユダヤ人はハンガリーでの経済活動を続け、機能主義建築を支持した。ホルティは少数ユダヤ人を迫害することを拒否した。これは恐らくニュルンベルク裁判でホルティがどんな罪にも問われなかった理由であるとされるものである。これによって、保守的な政府

の政策と保守的な国民にもかかわらず、ハンガリーは一連の重要な近代建築を生み出し、その進歩的な才覚は次第に国際舞台でも発揮されていたと考えられる。

ラズロ・モホリ＝ナジ(Laszlo Moholy-Nagy)<sup>54)</sup>は同年、構成主義に触発されて「ダイナミック構成主義動カシステム(Dynamische Konstruktivistische Kraftsystem)」宣言書を、ベルリンのアヴァンギャルド雑誌『嵐(Der Strum)』に書いた。ハンガリーの近代主義が確立した1919年から1939年に、ハンガリーのモダニストたちはドイツのバウハウス、CIAM、およびロシアの構成主義との関係を築いていった。また、首都ブダペストはウィーンと近いこともあり、オープンな国際的交流を広げることとなった。そして、近代的な実験的住宅展示会が組織され、1933年にブダペストにおいて最初の住宅展示会が行われた。多くの著名なデザイナーが参加し、その中にはファルカス・モルナール(Farkas Molnár)<sup>55)</sup>(図版13)やヨーゼフ・フィッシャー(József Fischer)<sup>56)</sup>(図版14)などがいた。モルナールはバウハウスで1921年から1925年まで研究をしていた。1927年にハンガリーに戻った後、モルナールはCIAM議会にハンガリーを代表して参加し、国際的アヴァンギャルドたちとの密接な関係を維持していた。アルフレッド・フォバット(Forbát Alfréd)<sup>57)</sup>はワルター・グロピウスの下で1920年から1922年まで働き、機能主義者としての経験を積んだ。フォバットはハynes・マイヤーの下でも働き、彼と一緒にソ連に行った。フォバットは1933年にソ連から戻った。また、多くのハンガリー人がバウハウスへ向かった。その中にマルセル・ブロイヤー(Marcel Lajos Breuer)<sup>58)</sup>がいた。ブロイヤーは、1920年と1925年の間にバウハウスで研究し、1925年に家具設計室を担当し、最終的に20世紀に最も賞賛された家具デザイナーのひとりとなった。1923年、バウハウスのイデオロギーの危機の中で、グロピウスはモホリ＝ナジに教務に着くよう頼んだ。その後、ブロイヤーとモホリ＝ナジはアメリカ合衆国でもその特筆すべき活動を続け、成功と名声を得た。

以上のように、ハンガリーの近代建築とその背景には、ユダヤ人による近代建築の主導、ハンガリー・ファシズムの政治体制の影響、そしてバウハウスとの緊密な関係がその特徴として挙げられる。この事例との対照から、本論におけるタイゲとチェコの建築の近代化過程について、東欧近代建築史からの視座を与えたいと考える。

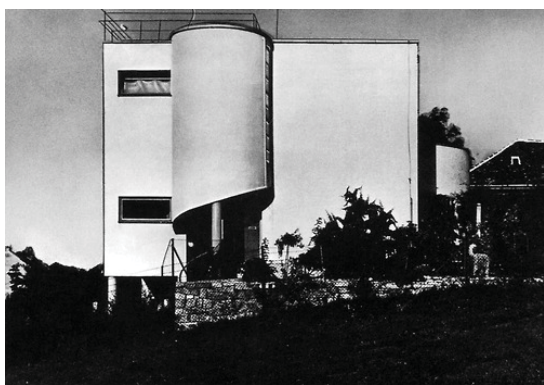


図14 ファルカス・モルナール、「レイトー通りの家」(1932)

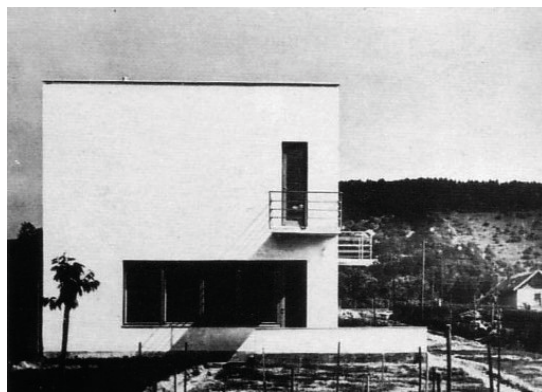


図15 ヨーゼフ・フィッシャー、「サタルカ通りの家」(1932)

#### 第四節 本論文の構成と展望

本論は、以下に構成される。

まず第一章において、チェコの近代国家成立までの歴史的な変遷を示し、そこにタイゲの、主に建築に関する活動履歴を重ね合わせることで、本論で取り上げるタイゲの建築思想とその背景となるチェコの建築を取り巻く状況の関係性の理解に奥行きをあたえることを意図する。

次に第二章では、タイゲの建築に関する論稿の中から、当時の新興国家であったチェコの近代建築史の編纂に関する彼の言説を整理し、時系列に沿って五つの節にまとめる。これによって、19世紀末からの民族運動の興隆から、20世紀初頭の近代国家としての成立、そして当時の国際的な芸術運動の潮流の中で、構成主義の国際的な波及に対する反応と変遷するチェコの建築の近代化過程に対するタイゲの評価軸を解明する。

第三章では、1930年代前半のタイゲの建築に関する一連の論稿を整理し、それらの言説を、彼の建築理論の形成において中心的な役割を果たすル・コルビュジェに関する一連の論稿についての節と、当時のタイゲの建築思想の集大成といえる著作『最小限住居(Nejmenší byt)』についての節にまとめることによって、1930年代前半のチェコの建築を取り巻く状況における彼の建築思想の一端を解明する。

最後に第四章では、スターリニズムとナチス・ドイツの台頭という切迫する政治的な状況下において、タイゲがシュルレアリスム運動へと参与する時期の論稿と、第二次大戦を経て、彼の最後の建築論といえる「自然と建築の序説」における彼の言説についての節にまとめる。この一連の論稿から、タイゲの1930年代から晩年にあたる1940年代後半にいたるタイゲの建築思想を解明する。

結論においては、序論および本論第一章から第四章を要約し、それをもって本論の全体のまとめとした。

## 註

- 1) 「デヴィエトシル (DEVĚTSIL, 1920-1931) はチェコ・アヴァンギャルドのイデオロギーに関する中心的な存在だった。この前衛運動には、1920年代の間に、若い世代の多くの革新的な作家、画家、建築家、カメラマン、作曲家、劇場マネージャ、批評家、ジャーナリストが引きつけられていた。だんだんと組織化したこのグループは、活動した数年の間に、60人以上のメンバーがいた。」(František Šmejkal, “DEVĚTSIL : AN INTRODUCTION”, *Devětsil: Czech Avant-garde Art - Architecture and Design of the 1920's and 1930's*, Museum of Modern Art, Oxford, 1990, p.9.)
- 2) 1890年1月9日 - 1938年12月25日。チェコの作家、劇作家、ジャーナリスト。
- 3) 1887年3月23日 - 1945年4月。チェコの画家、作家。
- 4) S.K.ノイマンによって1918年に設立された画家のグループ。1924年に解散。
- 5) 1920年に初代チェコスロヴァキア大統領に選ばれ、以降2度の再選を果たす。1935年に辞職、1937年に死去。マサリクについての詳細は、石川達夫、『マサリクとチェコの精神 アイデンティティと自律性をもとめて』, 成文社, 1995. を参照されたし。
- 6) 西野嘉章, 「チェコ・アヴァンギャルド -ブックデザインにみる文芸運動小史」, 平凡社, 2006, 57-58頁。  
(Devětsil Association of Artists, *Statement, Pražské pondělí* 6, Dec, 1920.)
- 7) Karel Teige, "Obrazy a předobrazy", *Musaion* 2, 1921, pp.19-20.
- 8) Karel Teige, "Malířství a poesie", *DISK* 1, 1923.
- 9) 1896年生まれのプロシア人の言語学者。その後プラハに移住し、「プラハ言語学サークル」に参加する。
- 10) Karel Teige, "Poetismus", *Host*, Vol. 3, No. 9-10, 1924.
- 11) Karel Teige, "Moderní Typo", *Typografia* 34, pp.189-198, 1927.
- 12) Karel Teige, "O fotomontazi", *Žijeme* 2, 1934.
- 13) Karel Teige, "socialistický realismus a surrealismus", *Socialistický realismus : sborník*, Jarmila Prokopová, 1935, pp.120-181.
- 14) Karel Teige, *Surrealismus proti proudu*, Společnost Karla Teiga, 1938.
- 15) Karel Teige, *Fenomenologie Umění* (Unpublished manuscript), Výbor z díla II Zápasy o smysl moderní atvoby Československý spisovatel, 1969.
- 16) Karel Teige, "Vnitřní model", *Kvart* 5, pp.149-154.
- 17) Vratislav Effenberger (1923-1986); チェコの文芸評論家。
- 18) Petr Král (1941-); チェコの作家。ペトル・クラール (著), 阿部 賢一 (訳), 『プラハ』, 成文社, 2006. が出版されている。
- 19) Jan Švankmajer (1934-): プラハ生まれのシュルレアリストの芸術家、アニメーション作家・映像作家、映画監督。
- 20) Václav Havel, (1936 - 2011); プラハ生まれ。チェコの劇作家、チェコスロヴァキア大統領 (1989年 - 1992年)、チェコ共和国初代大統領 (1993年 - 2003年)。
- 21) Milan Kundera (1929-); チェコ生まれのフランスの作家。著作に『存在の耐えられない軽さ』, 千野栄一 (訳) 集英社, 1993. 等がある。
- 22) 赤塚若樹, 『シュバンクマイエルとチェコ・アート』, 未知谷, 2008, pp. 246-247.
- 23) Jan Švankmajer (1934-): プラハ生まれのシュルレアリストの芸術家、アニメーション作家・映像作家、映画監督。
- 24) 西野嘉章, 『チェコ・アヴァンギャルド ブックデザインにみる文芸運動小史』, 平凡社, 2006, 18頁.
- 25) *53 Rassegna (Karel Teige, Architecture and Poetry)*, Princeton Architectural Press, 1993.
- 26) Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.
- 27) Karel Srp, *Karel Teige*, TORST, 2001.

- 28) Karel Srp, *Karel Teige a typografie-Asymetrická harmonie*, Akropolis, 2009.
- 29) Vladimír Šlapeta and Wojciech Leśniowski, "Functionalism in Czechoslovakian Architecture", *East European Modernism: Architecture in Czechoslovakia, Hungary and Poland Between the Wars*, Thames & Hudson Ltd, 1996, pp.59-109.
- 30) Rostislav Švách, "Before and After the Mundaneum : Teige as Theoretician of the Architectural Avant-Garde", Eric Dluhosch and Rostislav Švách, *op.cit.*26, pp106-139.
- 31) Rostislav Švách, Jan Malý, *The architecture of new Prague : 1895-1945*, MITpress, 1995.
- 32) Rostislav Švách, *Surrealism and Czech Functionalism*, *Umění LV*, 2007, pp. 316-328.
- 33) Rostislav Švách, Karel Teige jako teoretik architektury *Historia artium*. Olomouc : Univerzita Palackého, 1998, pp. 145-155.
- 34) Eric Dluhosch, "Teige's Minimum Dwelling as a Critique Modern Architecture", Eric Dluhosch and Rostislav Švách, "*op.cit.*26, pp.140-193.
- 35) Klaus Spechtenhauser and Daniel Weiss, "Karel Teige and the CIAM : The History of a Troubled Relationship", *Ibid.*, pp.216-291.
- 36) 井口 壽乃, 『カレル・タイゲによる「ポエティズム」の造形概念についてチェコにおける近代デザインに関する研究(1)』 デザイン学研究. 研究発表大会概要集 (47), 4-5, 2000-10-16 日本デザイン学会. 等がある。
- 37) 矢代真己, 市川祐子, 近江栄, 『カレル・タイゲのチェコスロヴァキア近代建築運動に果たした役割について: 建築理論家カレル・タイゲ研究・その1』, 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1997, pp. 355-356, 1997-07-30 日本建築学会.  
矢代真己, 市川祐子, 近江栄, 『論文「構成主義の理論」にみるタイゲの近代建築理念について : 建築理論家カレル・タイゲ研究・その2』, 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1997, pp. 357-358, 1997-07-30 日本建築学会.  
市川 祐子, 矢代真己, 『前衛芸術家組織「デヴィエトシル」の建築分野の会員とその活動内容について : 建築理論家カレル・タイゲ研究・その3』, 学術講演梗概集, F-2, 建築歴史・意匠 1999, pp. 337-338, 1999-07-30 日本建築学会.
- 38) Eric Dluhosch and Rostislav Švách, *op.cit.*26, pp.293-323.
- 39) *Ibid.*, pp.141-215.
- 40) 西野嘉章, *op.cit.*24,
- 41) *Ibid.*, pp.135-144.
- 42) 赤塚若樹, *op.cit.*22, pp222-239, pp.246-275.
- 43) Kenneth Frampton, "Introduction", Eric Dluhosch and Rostislav Švách, *op.cit.*26, pp.3-9.
- 44) 八束はじめ, 『希望の空間—ロシア・アヴァンギャルドの都市と住宅 (住まい学大系)』, 住まいの図書館出版局, 1988. 八束はじめ, 『ロシア・アヴァンギャルド建築』, INAX 出版, 1993.
- 45) ハンガリーに着いては、井口壽乃, 『ハンガリー・アヴァンギャルド—MA とモホイ=ナジ』, 彩流社, 2000. ポーランドについては、デイヴィッド・クラウリー (著), 井口壽乃 (訳), 菅靖子 (訳), 『ポーランドの建築・デザイン史—工芸復興からモダニズムへ』, 彩流社, 2006. 等がある。
- 46) シーマ・イングバーマン (著), 宮島照久, 大島哲蔵 (訳), 『ABC: 国際構成主義の建築1922-1939』, 大竜堂書店, 2001.
- 47) K. マイケル ヘイズ (著), 松畑 強 (訳) 『ポストヒューマニズムの建築—ハンネス・マイヤーとルートヴィヒ・ヒルベルザイマー』, 鹿島出版会, 1997
- 48) Clara Zetkin (1857 - 1933); ドイツの政治家・フェミニスト。社会主義の立場による女性解放運動を主導し、女性解放運動の母とされる。
- 49) アンтониオ・グラムシ (著), 東京グラムシ会『獄中ノート』研究会 (訳), 『 ノート22 アメリカニズムとフォーディズム』, いりす, 2006.

- 50) 空想的社会主義者シャルル・フーリエへの再評価については、石井洋二郎、『科学から空想へ』，藤原書店，2009. 等が挙げられる。
- 51) アンリ・ルフェーヴル、『都市への権利』，筑摩書房，2011. アンリ・ルフェーヴル、『都市への権利』，福村出版，1976.
- 52) Vitéz Nagybányai Horthy Miklós (1868 - 1957) ; 20世紀のオーストリア＝ハンガリー二重君主国の海軍軍人、戦間期ハンガリー王国の元首である執政をつとめる。
- 53) Vitéz jákfai Gömbös Gyula, (1886 - 1936) ; 20世紀のハンガリーの軍人、政治家、首相 (1932-1936) 。1919年にホルティ・ミクローシュがクン・ベーラの共産主義政権に対し反革命蜂起を起こすと、直ちに「ハンガリー全国防衛連盟」を結成する。ナチスを始めとするミュンヘンの極右勢力と交流を持ち、1923年には「人種防衛党」を結成。ベニート・ムッソリーニのファシスト党独裁に範を取ったファシズム国家の建設を唱える。
- 54) Moholy-Nagy László (1895 - 1946) ; ユダヤ系ハンガリー人の写真家、画家、タイポグラファー、美術教育家。1923年から1928年までバウハウスに招聘され、教鞭をとる。1937年のアメリカ亡命後は、シカゴにニュー・バウハウスを設立する。
- 55) Molnár Farkas (1897- 1945) ; ハンガリーの建築家、画家、グラフィック・アーティスト
- 56) Fischer József (1901- 1995) ; ハンガリーの建築家、社会民主主義の政治家。
- 57) Forbát Alfréd (1897 - 1972) ; ハンガリーの建築家、画家、バウハウスのメンバーの一人である。
- 58) Marcel Lajos Breuer (1902-1981) ; 建築家、家具デザイナー、バウハウスのメンバーの一人である。

#### 図版出典

- 1) Karel Srp, *Karel Teige*, TORST, 2001.
- 2) Karel Srp, *Karel Teige a typografie-Asymetrická harmonie*, Akropolis, 2009, p.36.
- 3) *Ibid.*, p.41
- 4) *Ibid.*, p.40
- 5) *Ibid.*, p.104.
- 6) *Ibid.*, p.72.
- 7) *Ibid.*, p.76.
- 8) *op.cit.*1, p.1.
- 9) *Ibid.*, p.
- 10) *Ibid.*, p.67.
- 11) *Ibid.*, p.77.
- 12) *Ibid.*, p.84.
- 13) *Ibid.*, p.85.
- 14) Vladimír Šlapeta and Wojciech Leśniowski, *East European Modernism: Architecture in Czechoslovakia, Hungary and Poland Between the Wars*, Thames & Hudson Ltd, 1996, p143.
- 15) *Ibid.*, p133.





## 第一章 19世紀後半から20世紀半ばまでのチェコの歴史的背景とタイゲの諸活動について

### 第一節 展望

本論の第一章では、チェコの歴史的背景とカレル・タイゲの活動について整理していきたい。

本論の研究対象であるカレル・タイゲが生きた時代における、近代国家としての当時のチェコスロヴァキア共和国を構成する民族は、チェコ人とスロヴァキア人である。スロヴァキアは1037年にハンガリーの領土になってから、第一次世界大戦の後に合併するまで、ボヘミア、モラヴィアの歴史とほとんどつながりが無かった。それに対してボヘミアのチェコ人は、13、14世紀頃から優れた文学作品を生み出し、15世紀には有名なフスの宗教改革によって先駆を成した歴史的背景をもっている。現在、1993年にチェコとスロヴァキアは分離し、チェコ共和国となっている。

これらの前提を踏まえ、本論における歴史の概観は主にチェコ人、およびチェコ人の地域であるボヘミアとモラヴィア地方を主体としたものとして取り扱うものとし、当時の近代国家としての表記を「チェコスロヴァキア」、それ以外の事象については基本的に「チェコ」と表記するものとする。

カレル・タイゲがその論稿の中で触れているチェコの建築の近代化過程の時代背景は、その民族的なアイデンティティの確立から、近代国家としての独立、大戦間の経済的な安定期を経て、ナチス・ドイツ、スターリニズム台頭、そしてナチス・ドイツの侵略による近代国家としての危機から、第二次大戦後から親ソビエト国家へと向かう政治体制への変遷と、大きく揺れ動いていった。

タイゲの活動した時代背景を理解するために、本章の第二節、第三節においてチェコの近代国家としての成立からの国家的な危機、そして第二次世界大戦を経てその後の戦後の政治体制へと至る歴史的背景と、当時のチェコの建築に関連した歴史的な事柄について触れたい。そして第四節においては、上記のチェコの歴史的な背景に反応した、タイゲの建築を中心とした諸活動の概略についてまとめる。

これらに先がけ、当時のチェコの政治的、社会的情勢とタイゲの活動の相互関係を明確にするために代表的事項を次の年表にまとめた。

表1 チェコの社会的情勢とタイゲの活動及び建築関連の主要論稿の年表

年	歴史的背景	タイゲの活動と建築関係の主要論稿
1867	アウスグライヒ	
1879	チェコ最初の「国民劇場」が建立	
1900		ブラハに生れる。
1910	チェコ人の社会民主党と労働組合がオーストリア社会民主党から民族的な分派となった連合体から分離。	
1914	第一次世界大戦勃発。	
1919	マサリクによる独立宣言。	カレル大美術史科入学。
1920	1920年4月、新議会のための選挙が行われ、社会民主党が第一党となる。	「デヴィエトスィル」結成
1922		『ジヴォト II』発行 パリを訪問し、ル・コルビュジェ等と交流する。
1923	言語学者ロマン・ヤコブソンがブラハのソ連大使館に赴任。	『スタヴバ』発刊。
1925		ソビエト訪問。
1927	チェコの産業、発展を続ける。	著作『ソビエト文化』出版。 「ポエティスム宣言」発表
1929	ブルトン『第二宣言』発表。 世界恐慌が起る。	「左翼戦線」結成。 論稿「ムンダネウム」発表。
1930	共産党の詩人コストカ・ノイマン、第三代議長に選出。 チェコの工業を背景とした経済的な安定が続く。	チェコ・グループ代表として CIAM に参加。 著作『チェコスロヴァキアの近代建築』出版。 論稿「発展段階」発表。 論稿「ル・コルビュジェと新しい建築」発表。 ハンネス・マイヤーの招きによりバウハウスで講演を行う。
1931		ル・コルビュジェがブルノにおいて講演を行う。
1932	ズデーテン＝ドイツ祖国戦線が民族主義的活動を開始。	ブラハでの「詩学・1932年」国際展。 論稿「輝く都市」発表。 著作『最小限住居』出版。
1933	ヒトラー、ドイツ首相となる。	『ヤロミール・クレイツァルの仕事』出版。
1934	ヒトラー、ドイツの最高指導者となる。	ブラハでシュルレアリスム・グループ結成。
1935	ブラハ政府、ソ連と相互援助条約を締結。	論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム」発表。 アンドレ・ブルトンがチェコで講演を行う。
1936	モスクワ裁判が始まる。	批評集『シュルレアリスム』発行。
1937	全ソ建築家同盟総会が開催される。	全ソ建築家同盟総会に参加。 論稿「ソビエト建築の発展-古典主義の復活とソビエト様式の追求-」発表。
1938	ズデーテン＝ドイツにおけるナチ化が進行。 連邦制のチェコスロヴァキア共和国に改編される。	「流れに逆らうシュルレアリスム」発表。
1939	ナチス・ドイツがチェコ進駐。	チェコのアヴァンギャルド運動の事実上の終焉。 公的な活動から撤退する。
1945	首都ブラハ解放。	論稿「内的モデル」発表。
1947	チェコ政府、マーシャル・プランへの不参加決定。	論稿「自然と建築の序説」発表。
1948	チェコ共産党が政権を奪取（「二月事件」）。 親スターリニズム国家へと進む。	チェコ・シュルレアリスム運動、地下へと移行。
1951		死去。 論稿「芸術の現象学」未完となる。

## 第一節 20世紀半ばまでのチェコの社会的背景とカレル・タイゲの建築に関する活動について

### 1) 17世紀から20世紀初頭の国家的な成立に至るまでのチェコの歴史的背景

17世紀の始め、ボヘミアのチェコ人にとって重要な転機が訪れた。ボヘミアのプロテスタントの諸侯は1620年の「白山の戦い（ピーラー・ホラの戦い）」<sup>1)</sup>においてハプスブルク軍勢力に敗北し、ボヘミア貴族は排除され、新しい国王派のドイツ系貴族がつくり出された。ボヘミア王位はハプスブルク家の世襲となり、1627年の「新領邦条例」でボヘミア国会は官吏任命権その他権利を奪われた。カトリックが唯一の宗教となり、ドイツ語が公用語となり、チェコ語はその地位を貶められ、チェコの民族的な文化はこのときに危機を迎えた。そしてこれ以降、ボヘミアはハプスブルク家の属領となり、以降「ドイツ化」支配が続くことになる。

1848年のフランス二月革命はハプスブルク帝国に深刻な影響を及ぼし、首都ウィーンその他領土内においても長い間専制的抑圧に苦しんだ諸民族が自由と解放を求めて、あいついで蜂起した。1848年前半にはハプスブルク帝国は領内諸民族、特にチェコとハンガリーの抵抗に遭い、その基盤は大きく揺らいだ。しかし、この年の半ばから形勢は革命側に不利に動き、翌年1849年のオーストリアの単一不可分の君主国であるという宣言で、オーストリア＝スラヴ主義はその終焉を迎えようとしていた。チェコ人の進出によって、ドイツ民族主義が発達し、汎ゲルマン主義のシェネラーはスラヴ人、カトリック教、そしてユダヤ人に激しい敵意を向けた。1895年に首相になったパデニー1897年、実質チェコ人有利の新言語令を發布し、ドイツ人とチェコ人の対立は深まった。1907年に皇帝は完全普通選挙制の導入を図るも、結果チェコ人大衆の勢力を増大させ、民族紛争は拡大していった。

18世紀後半よりボヘミアにおけるチェコ人の文化的覚醒とナショナリズムが高まりを見せた。オーストリアの啓蒙的君主政治のヨーゼフ二世が諸地方の伝統を無視して、ウィーン政府による中央集権的支配を実現させようとした際、ボヘミア貴族は自らの歴史的特殊性を主張し、長らく下層民の言語であったチェコ語に光を当てた。さらに、18世紀初頭からボヘミア各地で工業が発展したため、中産階級が台頭し、農耕社会から産業社会への移行が始まり、フス運動や宗教改革における民族の歴史的記憶と結びつけられた。この流れの中に、スラヴ言語学の開拓者にしてチェコ語を文章語へと高めたヨセフ・ドブロフスキー (Josef Dobrovský)<sup>2)</sup>のチェコ語辞典は語彙の一新と現代チェコ語の確立に大きな役割を果たしたとされ、西欧ロマン主義の文学作品を翻訳したヨセフ・ユングマン (Josef Jungmann)<sup>3)</sup>らもいた。さらに歴史家のフランティšek・パラツキー (František Palacký)<sup>4)</sup>は「チェコ民族史」を書き、中世末期のフス運動がチェコ民族の間に民主主義の基礎をつくった、という解釈を示し、チェコ人をして西欧自由主義の先駆者とした。また、パラツキーは1848年にプラハでスラヴ人会議を開き、汎スラヴ主義が提案された。

1867年、オーストリア帝国は、イタリア統一戦争・普墺戦争等の戦争に敗北し、外交においてはロシア帝国との関係を悪化させ、その世界的地位を低下させてきた。そのような中、多民族国家であるオーストリア帝国内の諸民族は活発に自治・権利を獲得するための運動をしていた。連邦的改変を求める声が諸民族からあがったが、権利を失いたくない支配者階級のドイツ人の抵抗と国色の変化を恐れた皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の反対もあり、マジャール人（ハンガリー人）と協力して帝国内の諸民族を抑えること

とした。このドイツ人とハンガリー人との妥協は「アウスグライヒ(Ausgleich)」<sup>5)</sup>と呼ばれる。このアウスグライヒ以降、チェコ人は経済的にも文化的にも進歩し、1868年にシュコダ兵器工場がプルゼンにつくられ、チェコ最初の大銀行が設けられ、商工業が発展した。

この時代には、チェコの国民的な音楽家であるベドジツヒ・スメタナ (Bedřich Smetana)<sup>6)</sup>の交響詩「我が祖国」やアントニン・ドヴォジャーク(Antonín Leopold Dvořák)<sup>7)</sup>の「新世界より」などの作品が生まれ、1879年にはチェコ最初の「国民劇場 (Národní Divadlo)」<sup>8)</sup>が開設された。それが焼失すると、市民の寄付によって1883年に再建された。同時に、高等教育を受けたチェコ人の中産階級が成長したとされている。建築においては、19世紀中ごろからはネオ・ルネサンス様式が趨勢を占めるようになってきた。ネオ・ルネサンス様式は民族復興運動と結びつき、1860~1890年代にかけて流行した。この様式は劇場、博物館、美術館、等の文化施設に使用され、その代表的建物は前記の国民劇場に加えて、旧市街のヴルタヴァ河畔に建つ「芸術家の家(Rudolfinum)」<sup>9)</sup>とヴァーツラフ広場の端に建つ「国民博物館 (Národní Mzeum)」<sup>10)</sup>等である。

## 2) 1920年代~30年代：国家的な成立からナチス・ドイツの台頭まで

1895年に首相になったパデニーは、1897年に実質チェコ人有利の新言語令を發布し、ドイツ人とチェコ人の対立は深まった。1907年に皇帝は完全普通選挙制の導入を図るも、結果チェコ人大衆の勢力を増大させ、民族紛争は拡大していった。1910年にはチェコ人の社会民主党および労働組合はオーストリアの組織から完全に独立した。1914年6月、サラエヴォで起きたオーストリア皇位継承者夫妻暗殺事件は第一次世界大戦の引きがねとなった。戦争によって各国でナショナリズムの高まりを迎えた。1915年から1916年にかけて、チェコ人は帝国の独立性が失われたハプスブルク家に対して、自己の権利を主張し始めた。1917年にロシア三月革命がおり、ハプスブルク帝国領土内の住民の民族的、社会的な不満は煽られ、アメリカの参戦によってデモクラシーと民族権拡大の要求は高まった。再開されたオーストリア国会で、チェコ人その他スラヴ民族の代表はハプスブルク帝国を、自由で同権の諸民族からなる連邦国へと改編することを要求したが、ドイツ人、マジャール人の反発を受けて事態は悪化した。

後のチェコスロヴァキア共和国の初代大統領トマーシュ・マサリク (Tomáš Masaryk)<sup>11)</sup>は、1891年から1893年までオーストリア議会議員を勤め、1907年から1914年までオーストリア・ハンガリー帝国からの独立運動を行い、第一次世界大戦勃発時には国家反逆罪で逮捕されることを避けるために国外へ逃亡した。マサリクは海外亡命者による独立運動の代表者であった。

マサリクは1850年、モラヴィアのホドニーンの労働者階級に生まれた。当時モラヴィアはオーストリア・ハンガリー帝国のオーストリア領内にあり、現在はチェコ共和国の領土となっている。父親のヨーゼフ・マサリクはオーストリア・ハンガリー帝国のハンガリー領出身のスロヴァキア人で、マサリクの母テレゼ・マサリコヴァ (旧姓クローパコヴァ) はモラヴィア出身のチェコ人であり、このことが後のチェコスロヴァキア建国に大きく影響を及ぼすことになる。

1914年にオーストリアを脱出したマサリクは、1916年に独立運動の中央組織として、パリに「チェコスロヴァキア国民会議」を創設し、エドヴァルド・ベネシュ (Edvard Beneš)<sup>12)</sup>がその書記長となった。

マサリクは1917年にロシアを訪問し、11月革命に遭遇し、ヨーロッパへ帰る途中でアメリカ合衆国を

經由した際、チェコスロヴァキア民族国家論を主張し、ウィルソン大統領の賛同と、在アメリカのスロヴァキア人とルテニア人の好感を得た。1918年6月4日、連合諸国はチェコスロヴァキア軍団を同盟国と認め、6月30日にはフランスが、8月14日にはイギリスが、パリの「チェコスロヴァキア会議」を承認し、9月3日にアメリカ合衆国もマサリクと国民会議を事実上のチェコスロヴァキア政府と承認した。そして同年、ハプスブルク帝国の軍事的、経済的消耗は頂点に達し、住民は飢餓状態にあった。

1918年10月、チェコを統治していたオーストリア＝ハンガリー二重帝国が崩壊。同年同月パリのチェコスロヴァキア国民会議は臨時政府の成立を宣言し、第一次大戦の連合側から承認される。同年同月、マサリクがオーストリア＝ハンガリー帝国からの独立を宣言する。同年11月にはプラハで革命的国民会議の第一回会合が開かれ、ハプスブルク家の主権を排除し、共和国制を宣言する。ここに正式にチェコスロヴァキア共和国（現在は「第一共和国」と呼ばれている）が成立し、初代大統領にマサリクが選出された。これはチェコ人とスロヴァキア人による合同国家であった。

1919年10月に入り、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体は急速に進み、10月14日、パリのチェコスロヴァキア国民会議は臨時政府の成立を通告し、連合側から承認された。同月18日にはアメリカにいたマサリクはワシントンでチェコスロヴァキア国の独立を宣言し、これに基づき10月28日、プラハのチェコ国民委員会はオーストリアの官庁から平和的に施政権を獲得した。翌10月31日、プラハの国民委員会を代表するカレル・クラマーシュ（Karel Kramář）<sup>13)</sup>を首相、ベネシエを外相とする新政権を決定。11月14日には、チェコ人とスロヴァキア人はプラハに革命的国民会議の第一回会合を開き、ハプスブルク家の主権を正式に排除し、共和制を宣言し、ジュネーヴの決定を正式に承認した。ここに独立国家としてのチェコスロヴァキア共和国が誕生した。これはチェコ人にとって「白山の戦い」から約300年ぶりの独立であり、スロヴァキア人にとってはハンガリー支配下になってから約900年ぶりのことであった。

この時代のチェコスロヴァキア共和国の特徴は、東・中欧新興諸国のなかで例外的に西欧の資本主義諸国に近い経済的発展をみせ、市民社会が進み、西欧型の議会政治がよく機能したことである。チェコ人の地域は1867年以降経済発展を続け、1914年までに、裕福なチェコ人とドイツ人の中産階級が発生し、双方入り交じった産業プロレタリアートが成長していった。

チェコスロヴァキア共和国は当初から国内のドイツ人やスロヴァキア人との民族的な問題を抱えていたが、1920年代には一応の政治的安定を達成し、民主制度を機能させることに成功した。1920年2月29日、新憲法は採択された。西欧式の中央集権、民主憲法がつくられ、これを元にチェコスロヴァキア共和国は近代民主主義国家として順調な立ち上がりをもせた。この民主国家の成立の社会的背景として、ハプスブルク家支配による支配のため、チェコ人のあいだに伝統的特権貴族はなく、政治的にも社会的にも国民的な支配者の伝統が失われていたことがあげられる。第二には、サンジェルマン条約とトリانون条約によって、豊かな鉱物資源と工業を継承し、それに伴う経済的発展が理由にあるとされている。

新共和国には多くの政党が生まれ、1920年にはチェコ人とスロヴァキア人の政党が11、ドイツの政党が7、マジャー人（ハンガリー系）の政党が4つあった。1920年4月、新議会のための選挙が行われ、社会民主党が第一党となり、ドイツ人社会民主党、農民党、社会党と続き、大勢が左翼化している傾向を示した。1920年12月には共産主義者に指揮されたゼネストがおこるが、最終的にこの行動は失敗に終わった。

大戦間のチェコの内政は、小政党分立の傾向をもち、連立内閣に終始した。1938年まではブルジョワ的

政党を中心とする保守的な連合政府がつづき、中道で安定し、ファシズムへ走ることはなかった。その理由としては、主要な五大政党党首の組織する「五党委員会」の巧みな運営によって、各派の利害を調整しながら、西欧的民主共和制の原則を守り続けたことがあげられる。第二の要因は、チェコ人の社会的、政治的主権が確立したため経済が復興し、この経済的状況によって少数民族やスロヴァキア人の反発が減ったことがあげられる。1926年頃からドイツ第三帝国成立までは、チェコは民主主義の全盛を迎えた。それによって階級的な対立は増大したが、民族間の闘争は減少した。高度に資本主義化したチェコの産業は、1929年の世界恐慌にも強さを発揮した。旧ハプスブルク帝国からうけついで工業遺産を活用し、世界の市場に進出し、1932年を除けば輸出超過が続いた。独立から1938年までのチェコは中央ヨーロッパでユニークかつ輝かしい知的業績と経済的成果を築きあげ、彼ら中産階級は強く、そして文化的で知的な伝統を啓蒙していたとされる。チェコにおける、オーストリアとドイツとの強い歴史的な結びつきの結果としての産業基盤は洗練されおり、ヨーロッパで最も良質なものの1つであった。チェコの製造業部門は最高品質の兵器、車、列車、飛行機、ガラス、鉄鋼、および消費財を作り出していた。

そのようなチェコの産業における状況の中で、チェコ文化においてプラハがヨーロッパ的状况を体現させているとすれば、ブルノ地方は産業の中心であった。ブルノはその工業的潜在能力と重要な国際的拠点性によってチェコの近代建築建築の中心都市になった。1929年にはピクトル・ブルジョアがベルギーの建築についての講演をプラハで行った。1930年、ミース・ファン・デル・ローエがブルノに「チューゲンハット邸」を建てた。モラヴィア生まれのオーストリア人であるアドルフ・ロースは、同年、プラハに「ミュラー邸」を建てた。この時期、他にも著名な外国人アヴァンギャルド建築家が招かれチェコで講義を行い、また建築作品を建てた。1931年、プラハでのハンス・マイヤーの連続講義の期間に、アンリ・ヴァンデ・ヴェルデ、ワルター・グロピウス、およびハンス・シュミットがドイツから招かれた。オランダの H. P.ベルラーへもプラハを訪問し、講義を行った。パリからは4人の著名な近代建築家がやってきた。ル・コルビュジェ、アンドレ・リュルサ、マ・ローツ、アルバート・ラブラードはプラハとブルノを訪れて講演を行った。1935年には、マルト・スタムがチェコの機能主義建築の中心地であるブルノを訪れ、ソ連の都市計画について講演を行った。また、彼はプラハのババ(Baba)地区の住宅開発のデザインにも寄与した。

このような幅広い国際交流の下、中産階級のサポートによって洗練された産業をベースに、チェコは短期間に独自の機能主義建築を確立していった。

### 3) 1930年代後半～1940年代：ナチス・ドイツの侵攻と第二次世界大戦までの時代背景

ドイツにおけるナチス政権の出現により、ふたたびドイツ人とチェコ人の抗争が激化した。ズデーテンのドイツ人地域の住民の間にはショーヴィニズムが発達し、ドイツ系住民の大多数はドイツのヒトラーの権力増大とナチスに追従的であった。ボヘミアにはすでにナチスのチェコスロヴァキア支部があり、汎ゲルマン的拡張論と反ユダヤ主義を主張し、ズデーテン＝ドイツ人（ズデーテン地方のドイツ人）の支持を受けていた。またボヘミアの青年ナチスは国民体育会を組織し、チェコスロヴァキアの大部分のドイツ併合を狙っていた。ズデーテン地方のナチスは同年10月初旬、自発的に解散した。10月1日、コンラート＝ヘンラインがズデーテン＝ドイツ祖国戦線を結成して活動を開始し、1935年4月ズデーテン＝ドイツ党と改名し、1936年に再編成され、ナチス化していった。このような事態に対して、チェコ人は同盟国フランス、および1935年以降はソビエトとのつながりを強化しようとした。1935年にヒトラーが再軍備に

乗り出し、翌年3月にラインラントが再武装されると、フランスにはもはや東・中欧同盟国を助ける力はなかった。そこでベネシエは不本意ながらソビエトに向かざるを得なかった。ナチスとズデーテン＝ドイツ党の進出に不安を感じたプラハ政府は、1933年6月にソ連を正式に承認した。1935年5月のフランスとソ連の間の相互援助条約が成立すると、プラハ政府も5月16日にソ連との相互援助条約を締結した。このチェコの親ソビエト傾向はナチス・ドイツの反チェコ機運を高め、国内のズデーテン＝ドイツ人の民族主義に拍車をかける結果となった。1935年にマサリクのあとをついだベネシエと、新首相のミラン・ホジャ(Milan Hodža)<sup>32)</sup>はドイツとの共和路線を否定し、1934年のポーランド、1936年のオーストリアと同様のドイツとの提携・和解を退け、ドイツに対する強行路線をとった。

1938年3月のドイツのオーストリア併合後、ズデーテン＝ドイツにおけるナチ化はいつそうすすんだ。同年8月30日、ドイツは予備兵を招集し、チェコ問題に対する断固たる決意を示し、フランス、イギリス共に最悪の事態に対する準備を始めた。同年9月12日、ヒトラーはニュルンベルク大会の演説で、英・仏の干渉を排除し、チェコスロヴァキア政府に対してズデーテン＝ドイツ人の民族的自決権(分離)を要求する決意を表明した。そして、ヒトラーは10月1日までにズデーテン地方をドイツに明け渡し、ハンガリーの領土要求も聞くこと、という要求を突きつけた。プラハではホジャにかわるドイツ強硬派のシロヴィー将軍がこれを拒否。チェコ政府はドイツの侵攻に対して総動員に踏みきった。ドイツ国防軍も国境に終結し、この時点でイギリス、フランス、ソビエトもチェコ支持の態度を見せたため、ヨーロッパの緊張はその頂点に達した。この後も外交努力は続き、英首相チェンバレンはムッソリーニに親電をおくり、ムッソリーニの仲介でチェンバレン、ヒトラー、ダラディエ、ムッソリーニのあいだで討論がもたれ、9月30日未明にミュンヘン協定が成立し、プラハに送られた。チェコ政府は、ドイツ・イタリアとの戦争を恐れるイギリス・フランスの前にこの協定を飲まされ、ズデーテン問題はドイツの要求通りになった。翌10月1日、チェコ軍のズデーテン撤退直後、ドイツ軍は国境を突破し、ミュンヘン協定に定められた地域を占領した。1938年にはポーランドとハンガリーもチェコスロヴァキア内の自国の民族自決を迫り、10月1日にポーランドの要求を受け入れチェシース地方の工業化された西半分の譲渡を約束し、翌11日に引き渡した。ドイツ、ポーランド、ハンガリーによって領土を削られたチェコスロヴァキア共和国は、三つの自治区ボヘミア＝モラヴィア・スロヴァキア・ルテニアからなる連邦制のチェコスロヴァキア共和国に改編され、11月30日にエミル・ハーハ(Emil Hácha)<sup>14)</sup>が新大統領に就任した。

1939年3月にスロヴァキア政府が自治権拡大を要求すると、プラハ政府はスロヴァキアの強硬派ティソを罷免した。しかし、ティソはヒトラーの後援を得て、みずから新政府を組織し、14日にはスロヴァキアの完全独立を宣言した。同時にルテニア自治政府も独立宣言をし、チェコスロヴァキア共和国は事実上存続不可能となった。ヒトラーは14日、ハーハ大統領をベルリンによびよせ、15日早朝「チェコスロヴァキア大統領はチェコ国民の運命を信頼の念をもってドイツ帝国総統の手に委ねる」という文書に署名させ、ボヘミア・モラヴィア両州はドイツに編入され、保護領となったチェコスロヴァキア共和国は建国以来二十年余をもってここに解体した。

#### 4) 1940年代～1950年代：第二次大戦後から親スターリニズム国家へ

ヒトラーは併合したチェコ地方を「ボヘミア＝モラヴィア保護領」と名付け、全ての政党が禁止され、



大統領ハーハを党首とするファッショ的政治組織「民族協同体」が結成され、保護領政府の活動はドイツの監視下にあった。第二次世界大戦勃発後、ドイツはチェコ人の知識人と反ナチスの人々を一掃し、一般市民も逮捕され、拷問を受け、強制収容所へと送られたとされている。チェコ軍隊は解体され、チェコ人の高等教育は全て禁止された。ドイツのチェコスロヴァキア合併後にイギリスに亡命したベネシュは、第二次世界大戦勃発後の1939年11月、フランスにチェコスロヴァキア国民委員会を結成しようとしたが、翌年夏フランスが崩壊。7月23日にロンドンに臨時政府を設置。1941年7月の独ソ改選後、イギリス・ソ連両国はこれを亡命政府とみなし、ベネシュを国家元首と承認し、1942年10月にはアメリカもこれを承認した。ベネシュはとくにソビエトとの友好関係の維持に注意を払い、1943年12月にはモスク入りし、12日、友好相互援助条約を締結し、戦後の協力を約束し、社会化への準備がなされた。1944年10月6日、ソビエト軍は旧チェコスロヴァキア共和国の国境を越え、ルテニア、つづいてスロヴァキアを解放し、1945年5月9日には首都プラハを解放した。

第二次大戦中、東欧諸国はナチス＝ドイツの支配下におかれたため、これら諸国ではナチスとそれに従属した支配階級に対する抵抗運動が根強く広がった。多くの場合、共産党がもっとも積極的な役割をはたした。このような抵抗運動を即死、東欧解放の役割を果たしたのはソビエトであった。

こうして、東欧では共産党の勢力が急速に伸び、1945年から1948年の間にポーランド、ルーマニア、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、アルバニアに共産政権が樹立した。チェコスロヴァキア共和国では、ソビエトと協力するベネシュ政権がそのまま本国に復帰したため、共産党による完全な政権掌握は遅れ、自由主義者のベネシュが元首であったこともあり、1947年秋まで民主的自由がある程度維持されていた。

クレメント・ゴットヴァルト (Klement Gottwald)<sup>15)</sup> 大統領は1929年にチェコ共産党書記長に就任し、第二次大戦中はソビエトの首都モスクワで共産党パルティザンへの指揮を行っていた経歴の通り、非常にソビエトに対して忠実な人物であり、当時のソビエトの独裁者となっていたヨシフ・スターリンの政治手法をそのまま踏襲した。1947年6月、アメリカ合衆国がマーシャル＝プラン (ヨーロッパ復興計画) を発表すると、英・仏政府はその協議のためにパリ会議を開くことにし、チェコスロヴァキア政府は共産党出身の官僚を含む全員一致で参加を決めたが、直後にモスクワを訪問したゴットヴァルトは、スターリンからマーシャル＝プランへの参加はソビエトへの敵対行為である、と叱責された。その連絡を受けたプラハでは緊急閣議が開かれ、再び満場一致でパリ会議への参加拒否を決めた。

こうして、議会制民主主義を維持していたチェコスロヴァキア共和国は、スターリンによって外交的自由を奪われ、実質的に主権と独立を失うことになった。これ以後、世論は反ソ・反共の方向へと向かった。この情勢をみて、連立内閣の中心であった共産党はクーデターによる一党独裁に踏み切る決意を固め、スターリンもゴットヴァルト首相に実力行使を命じたと思われる。

1948年2月の政変のきっかけは警察人事を巡る閣内対立であった。ノクセ内相は非共産党員の警察幹部を罷免し、共産化工作を推し進め、警察を制圧した。それに講義する12人の非共産閣僚は一斉に辞表を提出し、社会民主党に同調を求めた。ゴットヴァルト首相は非共産党との同調を阻もうとし、ベネシュ大統領に非共産閣僚の辞表受理を迫った。この背景をもとに、ゴットヴァルト首相はプラハ全市を警察隊の統制下におき、労働組合の組織した民兵に総決起を指令し、反革命分子の一掃に乗り出した。辞表を出

した大臣達の政党本部や官庁は武装した民兵に占拠され、共産党に好ましからざる人物は次々と逮捕され、抵抗するものは暴行を受けた。社会民主党は共産党に同調する旨を表明した。2月19日にはソビエトのゾーリン外務次官がプラハを訪問し、圧力を加えた。ベネシュ大統領は、最終的にゴットヴァルトの圧力に屈し、非共産閣僚の辞表を受理し、ゴットヴァルトの提出した新閣僚名簿を承認した。いずれも共産党の同調者で占められ、共産党が絶対的支配権を握るに至った。3月10日にはマサリクが死体として発見された。

ベネシュ大統領は6月7日、ついに大統領を辞任し、9月3日南ボヘミアの別荘で死亡した。この後、チェコスロヴァキアは急速にソビエトの模倣に乗り出し、他のどの国よりも徹底的にスターリン主義の国家へと変貌したとされる。1948年2月のクーデター、いわゆる「二月事件」で共産党以外の政党が名目化されたあと、次には党内の不純分子を排除し、一枚岩体制の樹立を目指した。1948年10月から全党員の行動を調査することを決議し、党内の粛清が開始された。教育・宗教分野においてもソビエトの模倣があらわれ、上級学校ではマルクス主義哲学と共産主義イデオロギーの学習が強制化され、宗教の自由も特別の行政処置で制約を受けることになった。そのほか、新聞、労働組合、学制、スポーツ、保険制度にも徹底したソ連模倣がみられ、前出の共産党指導者内部の粛清もソビエトのスターリン主義と深く関連していた。1950年代のチェコスロヴァキア共和国とは、ソビエト・モデルへ近づくことであったとされる。

##### 5) カレル・タイゲの建築を中心とした活動履歴 (1900年～1951年)

タイゲと建築との関わりにおいて、1922年のパリへの訪問は、タイゲの思想に大きな影響を及ぼしたと考えられる。ここで、タイゲはオザンファン、ル・コルビュジェ、マン・レイ、レジェ、ブランクーシ、ピロ等多数の主要なパリ・アバンギャルドの人脈と知己を得たとされている。同年、タイゲはデヴィエトスィル所属の建築家ヤロミール・クレイツァル(Jaromír Krejcar)<sup>23)</sup>と共同で編集した『ジヴォト II (ŽIVOT II)』<sup>24)</sup>を発行する。当時のチェコには、前述の芸術家グループ「デヴィエトスィル」の他にいくつかのグループが存在し、その一つが「チェコスロヴァキア建築クラブ (Klub Československých Architektů)」であり、建築雑誌「スタヴァ (Stavba)」<sup>25)</sup>を出版し、タイゲはその編集に携わっている。そのメンバーのオールドジフ・スタリー (Oldřich Starý)<sup>26)</sup>はブルノ展示会のモデル住宅やプラハのクランド (Klando) の建物を設計した重要人物である。その他には、ヤン・ギラル (Jan Gillar)<sup>27)</sup>等が所属する「アカデミック建築家協会 (Asociace akademických architektů)」がある。1925年、タイゲはモスクワとレニングラードを訪問した。翌1926年、タイゲは論稿「構成主義とソ連の新しい建築 (Konstruktivismus a nová architektura v SSSR)」<sup>28)</sup>を発表する。1929年、チェコ・アヴァンギャルドの最左翼グループである「左翼戦線 (Levá Fronta)」<sup>30)</sup>が結成され、タイゲが議長となり前述の ARDEV は解体される。同年、ル・コルビュジェに対する批判的な論稿「ムンダネウム (Mundaneum)」<sup>31)</sup>を発表し、その後数年に渡りル・コルビュジェに関する一連の論稿を発表する。

同年、ハンネス・マイヤーの招きによって、タイゲはバウハウスで「建築の社会学、タイポグラフィ、美学」というレクチャーを行い、翌1930年にはチェコ・グループ代表として CIAM に参加し、国際的建築運動にも積極的に携わっていく。チェコの近代建築史について編述した著書『チェコスロヴァキアの近代建築 (M.S.A.2. Moderní Architektura v Československu)』<sup>32)</sup>を出版する。1932年には同上の著書においてチェコの構成主義建築の中心人物とされた芸術家集団デヴィエトスィルに所属の建築家ヤロミール

ル・クレイツァルについての著書『ヤロミール・クレイツァルの仕事 (práce jaromíra krejčara)』<sup>33)</sup> を出版。同年には CIAM での活動と並行してまとめられた著作『最小限住居(nejmenší byt)』<sup>34)</sup> も出版される。

1920年代後半からル・コルビジエ、ハルネス・マイヤー、ブルーノ・タウトら多くの西欧建築家がソビエトに招かれている。しかし、そのソビエトにおいてスターリン体制が確立すると、記念碑的な建築が増えてくる。1932年、モスクワにおけるソビエト・パレスの国際コンペにおいて、スターリニズムに基づいた古典主義的な建築が興隆する。1936年になるとソビエトではモスクワ裁判が行われ、スターリニズムが進行していった。翌1937年、タイゲはモスクワで行われた全ソ建築家同盟総会に参加する。そこではスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムが主流となり始めており、それを受けて、同年には論稿「ソビエト建築の発展 —古典主義の復活とソビエト様式の追求—(Vyvoj sovětské architektury -Obnova klasicismu a hledání sovětského slohu-)」<sup>36)</sup> を発表する。

戦後の1947年にはチェコの建築家ラディスラフ・ジャーク(Ladislav Žák)<sup>39)</sup>の著書『生活の風景(obytňá krajina)』<sup>40)</sup>の序文として「自然と建築の序説 (předmluva o architektuře a přírodě)」<sup>59)</sup> を発表する。同年、プラハで「国際シュルレアリスム展」が開かれ、タイゲを中心とする新しい組織が結成される。しかし、1948年に共産党が政権を獲り、チェコにおいて親スターリニズム政策が取られると、タイゲらのシュルレアリスム運動はふたたび地下活動へと移行し、その活動の最中、カレル・タイゲは1951年に亡くなる。

### 第三節 要約

このようにカレル・タイゲの活動した時代は、19世紀におけるチェコの民族運動の機運を受けた国家的な独立から大戦間の建築を含むアヴァンギャルド芸術運動の興隆、ナチス・ドイツの侵攻によるその終焉、そして第二次大戦後の親ソビエトの政治体制へと移行する時代と同期したものであった。その中で、民族運動と国民劇場等の建築的なアイデンティティの確立、ネオ・ルネッサンスが興隆する時代から国際的な近代建築運動への参与、チェコ国内での近代建築運動を含むアヴァンギャルド芸術運動の興隆と、ナチス・ドイツとソビエトにおけるスターリニズムの台頭への反応、そして政治的な抑圧化における活動と、当時のチェコにおける建築の近代化過程には、同時代の政治的、社会的、経済的な状況が密接に関連しているといえる。

そして、その渦中におけるカレル・タイゲのチェコのアヴァンギャルド芸術運動、およびその建築分野での活動は、これら当時のチェコを含むヨーロッパの政治的、社会的、および文化的な動向に反応したものと見える。

以上のことから、第一章におけるチェコの時代背景とタイゲの活動との対照は、タイゲの建築思想の枠組みを体系的に捉える上で重要な段階的手順であると筆者は考える。

## 註

- 1) 1620年11月8日に、ボヘミア（現在のチェコ共和国）の首都プラハ近郊の山、白山（チェコ語名ビーラー・ホラ Bílá hora）でのハプスブルク軍勢力とボヘミアのプロテスタント貴族との間で勃発した戦闘。ボヘミアのプロテスタント貴族は半日で壊滅した。
- 2) Josef Dobrovský (1753-1829) : ハンガリー生れのチェコ人司祭。学問的なスラヴ言語学の創始者。南ボヘミアのクラトビでチェコ語を、プラハで神学、哲学を学ぶ。『チェコ語と文学の歴史』(1792), 『チェコ語文法』(1809)、『古代スラヴ語の基礎』(1822)を著する。
- 3) Josef Jungmann (1773-1847) : チェコの言語学者や辞書編集者、翻訳家。
- 4) František Palacký (1798-1876) : 19世紀に活動したチェコの歴史家、政治家。
- 5) 1867年、多民族国家であるオーストリア帝国内の諸民族は活発に自治・権利を獲得するための運動をしていた。連邦的改変を求める声が諸民族からあがったが、権利を失いたくない支配者階級のドイツ人の抵抗と国色の変化を恐れた皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の反対もあり、マジャール人（ハンガリー人）と協力して帝国内の諸民族を抑えることとした。
- 6) 1824年3月2日-1884年5月12日。チェコの作曲家・指揮者・ピアニスト。
- 7) 1841年9月8日-1904年5月1日。チェコの作曲家。
- 8) 1879年、建築家ジーテックとシュルツの設計によってプラハにチェコ最初の国民劇場として建設された。
- 9) 「ルドルフィナム (Rudolfinum)」とも言われ、「国民劇場」を設計したジーテックとシュルツによって設計され、1884年に完成した。
- 10) 国民博物館はボヘミア愛国博物館の名の下に1818年に設立された。
- 11) 1920年に初代チェコスロヴァキア大統領に選ばれ、以降2度の再選を果たす。1935年に辞職、1937年に死去。マサリクについての詳細は、石川達夫、『マサリクとチェコの精神 アイデンティティと自律性をもとめて』, 成文社, 1995. を参照されたし。
- 12) 1884年5月28日-1948年9月3日。チェコスロヴァキアの政治家。チェコスロヴァキア首相 (1921-22)、大統領 (1935-38、1945-48)、外務大臣 (1918-35)
- 13) 1860年12月27日-1937年5月26日。チェコスロヴァキアの政治家。首相 (1918年 - 1919年)。
- 14) 1872年7月12日-1945年6月26日。チェコスロヴァキアの法律家であり、政治家。チェコスロヴァキア第二共和国の大統領、およびドイツ統治下のパーメン・メーレン保護領の名目的な大統領を務める。
- 15) 1896年11月23日 - 1953年3月14日) は、チェコスロヴァキア共産党の指導者。チェコスロヴァキア共和国首相 (1946-1948年)、チェコスロヴァキア大統領 (1948-1953年) を務める
- 16) 1890年1月9日 - 1938年12月25日。チェコの作家、劇作家、ジャーナリスト。
- 17) 1887年3月23日 - 1945年4月。チェコの画家、作家。
- 18) S.K.ノイマンによって1918年に設立された画家のグループ。1924年に解散。
- 19) 西野嘉章, 「チェコ・アヴァンギャルド -ブックデザインにみる文芸運動小史」, 平凡社, 2006, 57-58頁。  
(Devětsil Association of Artists, *Statement, Pražské pondělí* 6, Dec, 1920.)
- 20) Karel Teige, "Obrazy a předobrazy", *Musaion* 2, 1921.
- 21) Karel Teige, "Poetismus", *Host*, Vol. 3, No. 9-10, 1924.
- 22) 1895年生まれの建築家、家具デザイナー、グラフィック・アーティスト、建築理論家。1918年から1921年までプラハの美術学校でヤン・コチェラと共に建築を学び、1923年に独立。デヴィエトスシルのメンバーとなる。
- 23) 1922年12月に出版されたデヴィエトスシルの年鑑。副題は「新しい美術、構築、知的活動」。カレル・タイゲ、ヤロミール・クレイツァル編集。
- 24) チェコスロヴァキア建築クラブの雑誌。カレル・タイゲ編集。

- 25) Oldřich Starý (1884-1971) : チェコの建築家。チェコ工科大学の教授であり1949-1950年の学長を務める。
- 26) Jan Gillar (1904-1967) : チェコの建築家。デヴィエスィル、左翼線線に参加。
- 27) 1896年生まれロシア人の言語学者。その後ブラハに移住し、「ブラハ言語学サークル」に参加する。
- 28) Karel Teige, *sovětská kultura*, Odeon, 1927.
- 29) 「1920年代後半、CIAMに参加したチェコのアヴァンギャルド芸術家グループ「左翼戦線 (Leva Fronta)」はブラハで設立され、カレル・タイゲによって統率され、建築家ヨセフ・ホホルによって活発にサポートされた。」(Vladimir Šlapeta and Wojciech Leśniowski, *op.cit.*7, p.68.)
- 30) Karel Teige, "Mundaneum", *Stavba 1*, 1928-1929, pp145-155.
- 31) Karel Teige, *M.S.A.2. moderní architektura v československu*, Odeon, 1930.
- 32) Karel Teige, *práce Jaromíra Krejčara*, Václav Petr, 1933.
- 33) Karel Teige, *nejmenší byt*, Václav Petr, 1932.
- 34) Karel Teige, "socialistický realismus a surrealismus", *Socialistický realismus : sborník*, Jarmila Prokopová, 1935, pp.120-181.
- 35) Karel Teige, "Vyvoj sovětské architektury -Obnova klasicismu a hledání sovětského slohu-",
- 36) Karel Teige, "Surrealismus proti proudu"
- 37) Karel Teige, "Vnitřní model", *Kvart 5*, pp.149-154.
- 38) Ladislav Žák (1900-1973) : チェコの建築家、建築理論家、造園家。1930年代のチェコの機能主義建築の中心人物の一人。後に造園分野に専念する。
- 39) Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947.
- 40) Karel Teige, "předmluva o architektuře a přírodě" in ; Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947, pp.7-21.

#### 図版出典

図1: Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.

#### 参考文献

- 1) 矢田俊隆, 「ハンガリー チェコスロヴァキア現代史」, 山川出版社, 1978.
- 2) 山田朋子, 「中東欧史概論」, 鳳書房, 2001.
- 3) 西野嘉章, 「チェコ・アヴァンギャルド -ブックデザインにみる文芸運動小史」, 平凡社, 2006.
- 4) Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.
- 5) *53 Rassegna (Karel Teige Architecture and Poetry)*, Princeton Architectural Press, 1993.
- 6) Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.
- 7) Karel Srp, *Karel Teige*, TORST, 2001.
- 8) Karel Srp, *Karel Teige a typografie-Asymetrická harmonie*, Akropolis, 2009.
- 9) Vladimír Šlapeta and Wojciech Leśniowski, "Functionalism in Czechoslovakian Architecture", *East European Modernism: Architecture in Czechoslovakia, Hungary and Poland Between the Wars*, Thames & Hudson Ltd, 1996, pp.59-109.
- 10) Rostislav Švácha; Jan Malý, *The architecture of new Prague : 1895-1945*, MITpress, 1995.



## 第二章 チェコ近代建築史に関するカレル・タイゲの評価軸

### 第一節 展望

カレル・タイゲは、第一章で触れた 1930 年にチェコのオデオン (Odeon) から出版された著書『チェコスロヴァキアの近代建築 (M.S.A.2. Moderní Architektura v Československu)』<sup>1)</sup> (図1) の中で、19 世紀から本書出版当時の 1930 年代にいたるまでのチェコの建築の歴史的な系譜について論じている。第二章では、この『チェコスロヴァキアの近代建築』を中心に、チェコの近代建築史に関連する論稿におけるタイゲの言説を、「チェコの近代建築の起端とチェコの建築におけるアイデンティティの確立」、「チェコの近代建築におけるヤン・コチェラの位置づけとその影響」、「アドルフ・ロースの位置づけに見るタイゲの評価軸」、「ロシア構成主義に基づく建築のチェコへの導入と当時のチェコ近代建築の状況」と、時系列に沿って四つの節に整理し、それぞれの主題における歴史的な背景と照らし合わせながら、チェコの建築の近代化過程の系譜の編纂におけるタイゲの評価軸を解明したい。

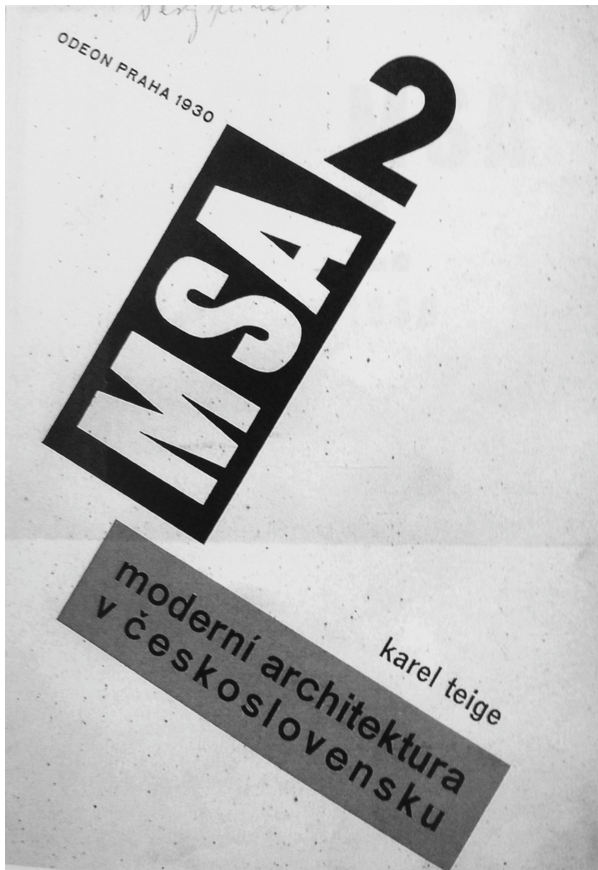


図1 カレル・タイゲ、『チェコスロヴァキアの近代建築』(1930)



## 第二節 チェコの近代建築の起端とチェコの建築におけるアイデンティティの確立

### 1) チェコにおける建築的アイデンティティの模索とヨセフ・ジーテク

1930年にチェコで出版されたタイゲの著書『チェコスロヴァキアの近代建築』に収められた論説「世紀末 (končící století)」<sup>1)</sup>において、タイゲは19世紀前半まで歴史を遡り、チェコの近代建築史の編纂を試みている。そこでタイゲは、チェコの19世紀の建築を歴史主義から解放する観点から見直す必要を説いている。タイゲはチェコの19世紀の建築を取り巻く状況について、

「19世紀の建築を歴史主義の様式的な混乱状態から解放することが必要である。このよろよろとした不毛な非創造的建築、この活気のない骨董趣味と時代遅れの技巧、この剽窃された歴史の様式の再構築は否認されねばならない。それに付随する民族的、フォークロアの流行に基づくナショナリズム。歴史主義の維持。19世紀を通じて作られた、健康的な建築デザインに対する強力な障害物。同様に、歴史的な保存の方法と原則のセンチメンタリズムは都市開発をも脅かした。建築が歴史主義者や地方人のアカデミックな空気の中で無為に過ごす間、工業技術は急速に前進した」<sup>2)</sup>

と述べている。タイゲはここで、19世紀のチェコの建築に見られる歴史主義の混乱、そして歴史地区保存主義者と19世紀に公衆衛生に関して最悪の記録を残したとされるプラハ中心部の衛生状況とを照し合せて批判している。それらの状況に対抗しうるものとして、タイゲはチェコにおける機械技術の進歩性を挙げ、その19世紀初頭からのチェコの機械技術の進歩性の立証として、パリよりも早く、1717年にプラハにおいて最初の工業技術学校が設立されたこと<sup>3)</sup>、そして1825年～1828年のヨーロッパ大陸での最初の、当時は馬引きであった鉄道の建設<sup>4)</sup> (図2) を取り上げている。ヨーロッパ大陸の最初の鉄道は、プラハ工業大学 (Pražská technika) の教授フランティシェク・アントニン・ゲルストネル (František Antonín Gerstner)<sup>5)</sup> によってボヘミアで造られたとされている。にもかかわらず、最初の蒸気稼働の鉄道の開通は比較的遅かった。1842年にはオロモウツからのプラハへの、1845年にはプラハからのポドモクリエへの蒸気稼働の鉄道路線の建設を始めた。前者は1845年に始業され、後者は1850年に始業された。その後、鉄道建設は丸20年の間中断し、1870年代に再開されている。

タイゲは、その当時の建築に関して、ローマ帝国様式が新しい建築的思想の先駆けであったとしている。タイゲによれば、それは建築の建設的実践との親密な関係を持った様式であったとされている。タイゲは、そのローマ帝国様式に新しい建築様式へとつながる原型を見いだしていたといえる。

「それは装飾が無く、シンプルな古典的輪郭に対する好みを示し、水平屋根を好んだ水平線主義へと結合された。」<sup>6)</sup>

と、ローマ帝国様式の中に無装飾性と水平性への指向を見いだしている。加えて、タイゲはローマ帝国様式と、ボヘミア地方の場所性との関連を考察する。

「ローマ様式は、分別のある唯物的かつ控え目であり、ボヘミアにおいて、アカデミックな虚飾とは無縁である。それはプラハとその田園地方にエレガントなプロポーションとシンプルな機能的形を持つ建築を与えた」<sup>7)</sup>

とし、ボヘミアの場所性とローマ帝国様式に親和性を見いだしている。そして、

「帝国様式は分別があり、唯物論的で、形式的に控え目で、すべてのアカデミックな虚飾とは無縁で

あると理解する」<sup>9)</sup>

と結論づけている。このローマ帝国様式のチェコにおける実践の具体例として、タイゲはイジー・フィシエル (Jiří Fischer)<sup>9)</sup> の設計による「プラハ税務署」(図3) を取り上げている。

以上のローマ帝国様式とボヘミアの場所性への言及から、つづけてタイゲはチェコにおける機械技術と建築の関連について述べている。チェコでは、1830年代の終わり頃には蒸気機関の工場は手工業に取って代わり、1860年代までには蒸気機関は当一般的なものになっていたとされる。この時代には、特に工場建築において、鋳鉄の桁、横ばりとの角柱の使用が増加し、屋根のスパンは鉄の支柱によって支持された。同時期、ガラスは表面材として初めて登場している。工場の煙突は高さ60~80メートルに上り、1840年以前に建設された煙突は資格をもつレンガ工によってフランスとベルギーで造られていたとされる。

タイゲはこれらの機械技術が発展する時代背景と照らし合わせ、この時代における実用性を伴った最も顕著な実例として、鉄骨造による吊り橋を賞賛している (図4)。

ここでタイゲは、19世紀のブルジョワ文化の象徴としての形式主義的な建築の興隆に対抗し、ローマ帝国様式の単純性と当時の機械技術による建築をチェコの建築の歴史的な基盤に置こうとしたといえる。

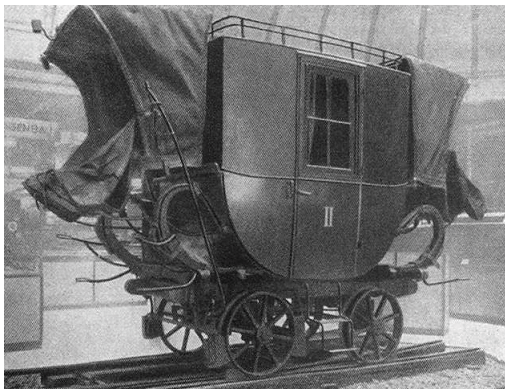


図2 ヨーロッパ大陸最初の鉄道車



図3 イジー・フィシエル「プラハ税務署」

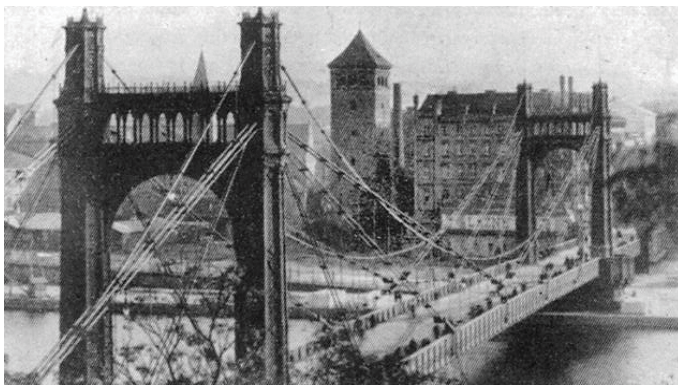


図4 プラハ、ステファニク吊橋

このようにチェコにおける建築の歴史的な基盤を整理した後、タイゲはヨセフ・ジーテク (Josef Zíték)<sup>10)</sup> を置く。

「「国民劇場」の設計者ヨセフ・ジーテクは歴史主義のドグマを超越した建築家であった」<sup>11)</sup> と、1881年に建設された「国民劇場」(図5、6)の設計者であるヨセフ・ジーテクを歴史的な文脈を踏まえたチェコ近代建築の起端とすることで、新興国であるチェコにおける建築的なアイデンティティの確立を試みている。当時のチェコ人は自らの寄付によってこの劇場をつくることを計画し、この経緯から前述の「国民劇場」はチェコにおける最初の国民的建築物となつたとされている。そして同様に、国民的建築物である前述の「芸術家の家」(図7)は1884年に建設されている。

ジーテクはいわゆるネオ・ルネサンスの系譜に位置づけられる建築家であったが、タイゲは、

「ヨセフ・ジーテクは作品に、歴史的な、つまりルネサンス様式を使った。しかし、彼は近代的な構成の精神のもとでそれらを使用した」<sup>12)</sup>

と、ジーテクの中に様式性を超えた近代性を見いだしている。またタイゲは、チェコにおけるジーテクをオランダにおけるピエール・コイベルスの位置づけになぞらえ、ジーテクをチェコの建築の発展にとっての重要人物と位置づけている。

「本当のチェコの近代建築はヤン・コチェラ、アドルフ・ロースとその後継者によってつくられた。

ヨセフ・ジーテクの作品は空論家、歴史主義的テーマへの否認によって印された。」<sup>13)</sup>

と、後述するヤン・コチェラ、アドルフ・ロースへとつながるチェコの建築の近代化過程の起点にジーテクを置くことで、チェコ近代建築の系譜を編纂しようとするタイゲの姿勢が確認できる。そしてタイゲは、ジーテクとヨセフ・シュルツ (Josef Schulz)<sup>14)</sup> による「芸術家の家」に、チェコにおける新しい建築概念の潮流をつなげている。

「芸術家の家」は、ボヘミア貯蓄銀行の創立50周年事業として着手され、1884年、ルドルフ皇太子にちなんで、「ルドルフィヌム (Rudolfinum) 」と命名されて完成した。この建築のコンサート・ホールはチェコ音楽界の中心となり、1885年のこけら落としのコンサートが行われ、1896年1月4日にはドヴォジャークが自作の序曲「オテロ」、聖書歌曲集の初演、「スラヴ狂詩曲」、交響曲「新世界より」を指揮し、チェコ・フィルハーモニーによる第一回演奏会が行われている。

タイゲによれば、この建築にはゴットフリート・ゼンパーからの影響がうかがわれ、内部と外部が論理的に結合された合理主義的傾向が見られるとしている。

「国民劇場」は1881年に、「芸術家の家」は1884年に、「国民博物館」は1893年に建設された。最後に、1897年、ヴァーツラフ・ロシュトラピル (Václav Roštlapil)<sup>15)</sup> によってストラコヴァ・アカデミア (Strakova akademie) が建設された。これらの建築と同時期に建てられたフェルナー・フェルディナンド (Ferdinand Fellner)<sup>16)</sup> とヘルマン・ヘルマー (Hermann Helmer)<sup>17)</sup> による「新ドイツ劇場 (Nové německé divadlo) 」<sup>18)</sup> は、同様に特筆すべき建築とタイゲは述べている。タイゲは、これらの国民的建築物の時代の後にチェコの建築はもう一度地方主義へと戻ったとしている。これについてタイゲは、

「国民劇場の時代の後、チェコの建築は再びその高い標準を失い、凡庸の荒野へと移って行った」<sup>19)</sup> としている。すなわちそれは、

「宮殿のような、ルネサンスの感化を受けた、質の記念碑的な軸線の計画が広まっていった」<sup>20)</sup>

とする時代であり、

「"チェコ・ルネサンス"を生み出す努力は、チェコの建築における後退的な作用を意味した」<sup>21)</sup>  
と、チェコにおいて形式主義的なネオ・ルネサンス様式が興隆してきた状況をタイゲは批判している。

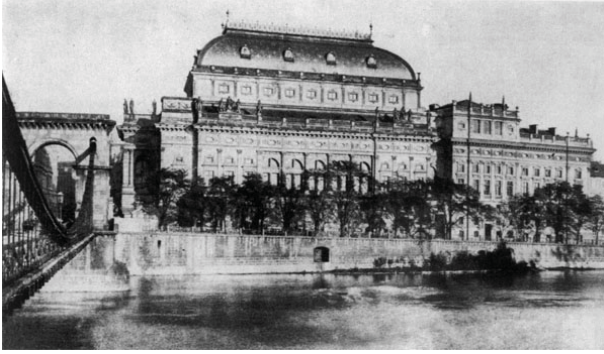


図5 ヨセフ・ジーテック、「国民劇場」：外観



図6 ヨセフ・ジーテック、「国民劇場」：内観

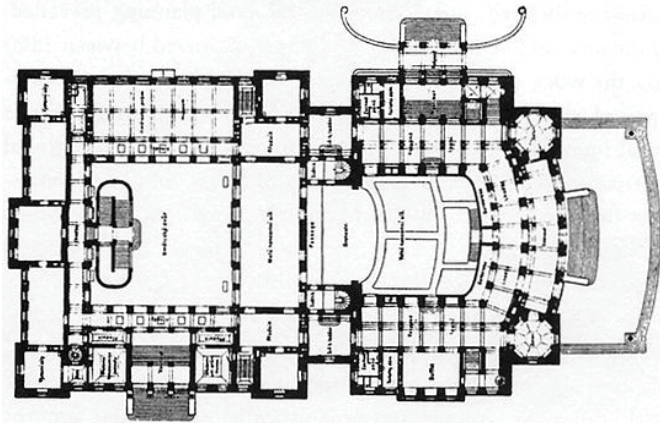
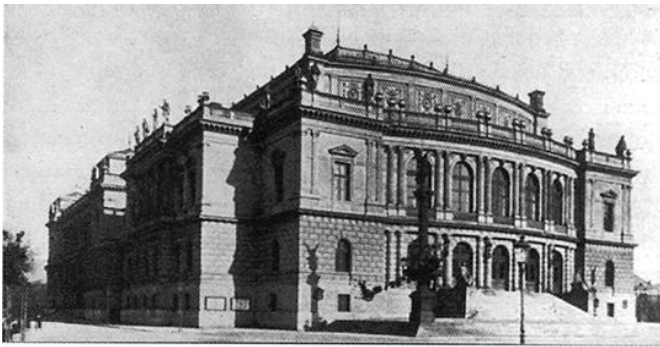


図7 ヨセフ・ジーテック「芸術家の家」：上、外観。下、平面図

## 2) チェコのセセッションと百周年記念全領邦記念博覧会

19世紀末のモダニズム運動のうねりはヨーロッパ全土に広がり、この運動にはイギリスのアーツ&クラフツ、ドイツのユーゲント・シュティール、パリのアール・ヌーヴォー、そしてウィーンとプラハのセセッションが含まれていた。そしてタイゲによれば、チェコにおける世紀の変わり目の建築は装飾的自然主義が全盛であったとされている。この現象はウィーン・セセッションの影響が見られるものとして、以下にタイゲは述べている。

「セセッションの主要なメリットは、主に否定性にあった。歴史主義の最終的な糾弾。歴史上の形の全てを、現代の装飾的な要素と入れ替える行為は、本来誤解を招く。セセッションは大胆に、正しく歴史の白紙状態を作り出した。そして建築表面から歴史上の形を取り除く、すなわち、飾りまたは装飾なしで、建築の誠実な表現でその表現を支えることができなかった。新しい様式を作成する努力は、歴史的に決定された。様式は、建築のシステムとしてではなく、装飾的なオーダーとして理解された。そして、近代の「様式」の本質が、まさしくその装飾単純に歴史上の装飾を新しい装飾と入れ替わるものと共存できないという事実に帰することは、セセッションの目的ではなかった。」<sup>22)</sup>

と、タイゲはセセッションの歴史主義からの解放を評価しながらも、その歴史主義的な名残を残す装飾には懐疑的であった。

つづけてタイゲは、フランスのアール・ヌーヴォーにおける東洋の影響（ジャポネスク）、そして1889年のパリ万博がフランスにおいて新しい若手建築家を輩出したことと、プラハの「百周年記念全領邦記念博覧会」との関連性について言及している。

1889年のパリ万博を受け、1891年にプラハにおいて、1791年のボヘミア博覧会の100周年を記念した産業博覧会、「百周年記念全領邦記念博覧会」が開催されている。タイゲによれば、パリとプラハの博覧会の両者とも鉄とガラスの近代建築の可能性を示し、エッフェル塔がパリの唯美主義者を憤慨させたことと、「百周年記念全領邦記念博覧会」におけるメイン・パビリオンである「産業宮殿」(図8)に対するプラハの唯美主義者からの拒否反応は同期したものと捉えている。加えてタイゲは、この博覧会における「ペトシーン監視塔」(図9)について、エッフェル塔の「小さなプラハ版」としての時代性を示したとし、エッフェル塔とパリ万博、そしてプラハの展示会とペトシーン監視塔とを関連させ、それらに共通する時代的な革新性について言及している。

「百周年記念全領邦記念博覧会は鉄の可能性を示した。それはガラスと鉄の近代の建築を予示した。エッフェル塔がパリの唯美主義者を非常に憤慨させたように、これは当然プラハの唯美主義者の間で否定的反応を引き起こした。ベジュリフ・ミュンツベルガー (Bedrich Münzberger)<sup>23)</sup> がプラハの博覧会用地に建設した産業宮殿 (1891) は、元来注目すべきで重要な建物であったのである」<sup>24)</sup>とタイゲは述べている。ここでタイゲはパリとプラハにおけるガラスと鉄の建築に対する否定的な反応の同時性を示すことで、逆説的に当時のチェコの建築の国際的な同時代性を前景化しようとしたといえる。

上述の通り、チェコ建築における世紀末は装飾的な自然主義（タイゲは「アーツ&クラフツ・スクールの遺産」と称している）が全盛であったとされ、この時代のチェコのセセッションは動乱期で特筆すべき建築物を生み出さず、最終的にチェコにおけるセセッション期を歴史主義からの転換と、そこからの方向性の喪失の時代とタイゲは位置づけている。そして、

「この時代の近代の特質を表現した建築は、橋、高架橋、駅舎、工場という実用的建造物のみであった」<sup>25)</sup>

とタイゲは述べ、実用的な建築に時代性を見出すことで、後のチェコ構成主義の確立へとつながる機械時代の前兆として、このチェコにおける「19世紀末」という時代の建築に対する位置づけを試みたといえる。



図8 ペジュリフ・ミュンツベルガー、「産業宮殿」(1891)



図9 「ペトシーン監視塔」(1891)

### 第三節 20世紀初頭のチェコの近代建築とヤン・コチェラ

#### 1) ヨーロッパ近代建築の文脈におけるコチェラの位置づけ

第二章第一節で述べたように、タイゲは19世紀のチェコの建築を総括し、機械技術とローマ帝国様式の水平性、そしてボヘミアの場所性とを結びつけた。そして、民族運動が高まる時代背景におけるヨセフ・ジークの建築をチェコにおける近代建築の系譜の起端として位置づけた。

そこからタイゲは、『チェコスロヴァキアの近代建築』に収録された論説「新しい世紀、新しい建築(Nové století – nová architektura)」<sup>26)</sup>において、チェコにおける新世紀、すなわち20世紀を迎えた建築の定義を試みている。

その論説「新しい世紀、新しい建築」の冒頭で、タイゲはチェコの作家ヒューバート・ゴードン・ショウアー (Hubert Gordon Schouer)<sup>27)</sup>の言葉を引用している。

「我々の駅と劇場は、アルハンブラ宮殿と同じ何かを持っているのだろうか？ 装飾的な衝動が沈静化する場所で、建築が機能主義の概念とともに浸透される場所で、我々は最大の近代性を経験する…。列車は黒い食堂のトンネルへと消える鉄の蛇のようなレールと結合する。広大な洞穴のようなドックで貨物を降ろすために決然とした進路に沿って海を縦横に動く汽船。電気ハンマーの轟音。それは自然の統制によって高揚され、我々の時代の進路と脈動の本当の生活の中で、全ての苦悩する現象を打ち砕く。ここでは、我々は新しい建築芸術（我々の将来の建築の胚芽）の条件を捜さなければならない。トンネルと高架橋、大きな川と湾の全域で引っ張られる巨大な鉄橋は、我々に方向を示唆する。建築のプロセスは日常的なニーズの満足感から発達し、そのルネサンスは同じ方法で起こる」<sup>28)</sup>（ヒューバート・ゴードン・ショウアー、「未来の建築」）

さらにショウアーからの引用は、チェコの機械時代における新世紀の建築論を示唆している。

「新しい建築は、新しい創造的才能の中心としての精神の本当の具現化である。これは建築的ルネサンスがたんに“技術的”でないことを担保し、そして、そのまま真の現代科学の精神を吹き込むのである。我々は、少なくとも部分的に、未来の建築を予見するいくつかの作品をすでに知っている。産業展示場とエッフェル塔である」<sup>29)</sup>（ヒューバート・ゴードン・ショウアー、同上）

とタイゲは述べ、当時のチェコの建築を席卷していた形式主義的なネオ・ルネサンス建築に対抗する「本当の起源」として、機能主義的な工業技術志向に基づく建築を提示している。そして形式主義的な建築様式に代わる工業的な建築として、前述のプラハの「百周年記念全領邦記念博覧会」とパリのエッフェル塔を再び取りあげている。この時代におけるエッフェル塔の象徴的な意味合いについて、ジークフリート・ギーディオンは以下に述べている。

「確かに、この大空に浮かび上がる塔の中には、エッフェルと同時代のジュール・ヴェルヌが唱えた技術的ユートピア思想のなにかが形象化されていた」<sup>30)</sup>（ジークフリート・ギーディオン、『時間・空間・建築』）

このような時代的思潮を背景として、タイゲは新世紀の機械時代の建築の先駆者としてオランダの建築家H・P・ベルラーへの名をあげている。

「オランダでは、H.P.ベルラーへは、古い、アカデミックな、歴史の建築物を拒絶して、その代わり

に唯物論者と構成的な建物の旗を掲げて、構成が幾何学に基づくと宣言する新しい綱領を宣言した」

31)

そしてタイゲは、同じくオランダの建築家アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデにも言及している。

「ヴァン・デ・ヴェルデは、機械とエンジニアリングと新しい美の最も純粋な具体化を認めた」<sup>32)</sup>と述べつつも、ヴァン・デ・ヴェルデの機械的美学は多分にロマンティシズム的であったとタイゲは捉えていた。タイゲは、ヴァン・デ・ヴェルデに見られる機械ロマンティシズムは、マリネッティの未来派による機械崇拜と同類であったとしている<sup>33)</sup>。

同様に、当時の近代絵画においても機械は同様に主要なテーマとなっており、それはフランスの画家であるフェルナン・レジェらによって実践されていた。タイゲはそれらの近代の芸術表現に対して、

「ルネサンスのヴィーナスに取って代わった」<sup>34)</sup>

と評している。しかし、最終的にタイゲは、ヴァン・デ・ヴェルデの近代性におけるファッション性、あるいはロマンティシズム的解釈は無秩序的な方向へ向かったと捉えていた。それに対して、タイゲはウィーンのオットー・ワグナーの明確性を対置しているが、その機能的な造形と論理的な美学はワグナー自身の作品において実現化されることはなかったとしている。

「ワグナーの主たる功績は、彼の理論において新しい建築が、近代の構造から生じねばならない事実を明らかにし、明確にしたということである」<sup>35)</sup>

とタイゲは述べ、その作品と理論とを分けて捉え、ワグナーの建築理論には同意を示している。

これらオランダ、オーストリアの建築の近代化の系譜を整理している。これらの国際的な建築の近代化過程の系譜を踏まえ、タイゲは自国チェコの建築の近代化の系譜の確立を試みたといえる。これについて、タイゲはこの論稿の冒頭部分において、チェコにおける新世紀の建築の確立の必要性を説いている。

「新しいチェコの建築の本当の起源と始まりは新しい20世紀において探求されなければならない。その新しい建築的秩序は、物質性、論理、機能性、経済性の目的の下、明確に宣言された」<sup>36)</sup>

とタイゲは述べており、20世紀を迎えたチェコにおける近代の建築の定義づけを試みている。

ここでタイゲは、前記のヨセフ・ジーテクを起端とするチェコの近代の建築の系譜を継承する者として、建築家ヤン・コチェラ(Jan Kotěra)<sup>37)</sup>を指定することで、20世紀初頭のチェコの近代建築の独自性の確立を試みたといえる。タイゲは、

「我が国では、1908年頃、ヤン・コチェラが純粋な理論の表現を示す作品を生み出すことに成功した」<sup>38)</sup>

とし、チェコにおける新世紀の建築の理論を具現化した建築家としてコチェラを位置づけている。

1871年、当時モラヴィアのブルノで生まれたヤン・コチェラは、1898年にオットー・ワグナーのウィーン美術アカデミーでの研究からプラハに戻り、プラハのアーツ&クラフツ・スクールの教授、マーネス芸術家協会(Spolek výtvarných umělců Mánes)の議長、および雑誌『ヴォルネー・スムニェリ(Volné směry)』の編集主任になった。このコチェラを中心としたチェコにおける近代建築の系譜の確立について、タイゲは同じく『チェコスロヴァキアの近代建築』の中の論稿「ヤン・コチェラとその時代(Jan Kotěra a jeho doba)」<sup>39)</sup>の中で述べている。

「ワグナーのウィーンでの実践はルネサンスと古典主義的傾向を持っていたが、それらは(ボヘミ



アにおいて) あちこちで潜在的な東洋的な雰囲気や退廃的な趨勢によって改変された」<sup>40)</sup> (括弧内注: 本稿著者ら)

と、タイゲは当時のチェコにおいてワグナーの建築の流れが変容している状況を批判している。その状況に対して、

「コチェラはウィーンにおけるセセッションのサロン趣味をはねつけた。(中略) コチェラは、それが流行であろうとなかろうと、ファサードの装飾主義に向かうよりも、常に明快な構造学 (tektonika) へと入っていった」<sup>41)</sup>

と、チェコにおけるコチェラの建築の立脚点を位置づけている。そしてタイゲは、

「コチェラはワグナー、そしてゼンパーを連想させる古典的でバランスがとれ、明瞭に分節されたマスを誠実に引き継いでいた」<sup>42)</sup>

と述べ、コチェラの建築にワグナーの建築を継承する特性を見いだしている。

一方、コチェラ自身は建築のデザインに関して、1900年に『ヴォルネー・スムニェリ』誌上で発表した論説「新しい芸術に関して(o novém umění)」<sup>43)</sup>において以下に述べている。

「空間と構造の創造が新たな運動に力を与えるものであり、それは形式や装飾ではない。前者は真実そのものであり、後者は真実を表現したものである」<sup>44)</sup> (ヤン・コチェラ、「新しい芸術に関して」) この言葉に対応するかたちで、タイゲは同じく論説「ヤン・コチェラとその時代」において以下に述べている。

「コチェラは簡素な装飾や形式的な実験よりも、総合的な空間と立体的な解決を上位に置いた。コチェラは主に空間性や構造的解決を求めることに専念し、純化されて抑制された方法で仕事をした」<sup>45)</sup>

と、装飾や形式と空間性に対する共通の視点からコチェラを評価している。そしてタイゲは、

「コチェラは近代チェコ建築の真の創設者と考えられ、社会的で画期的とみなすことができる。プラハにとってのコチェラは、オランダにとってのベルラーヘ、ベルギーにとってのオルタと同様なのである。それでも彼の現代的な実験精神はワグナーとベルラーヘが果たした貢献よりもさらに先へと向かった」<sup>46)</sup>

と位置づけることによって、ヨーロッパ諸国の建築家に見る建築の近代的思想の特性と自国のコチェラを同期させ、さらにその先進性に言及することで国際的文脈におけるチェコ近代建築の独自の系譜の編纂を試みたといえる。

また、コチェラはヨジェ・プレチニクと共にプラハにおいて建築の教育にも携わっており、多くのチェコの建築家がコチェラのもとで学んでいた。そして、コチェラが後の世代のチェコの建築家に与えた隔世遺伝的な影響について、タイゲは、

「コチェラの仕事は歴史的な形式主義や装飾的なセセッションからの決定的な離脱を意味している。このような理由から、戦後に構成主義の建築の理想を追求して近代建築家達はコチェラの実例を参照した」<sup>47)</sup>

と述べ、コチェラによってチェコの建築の潮流が装飾的なセセッションの流れから離脱し、そのことが第一次大戦後のチェコの構成主義の世代の建築家に隔世遺伝的な影響をもたらしたと分析している。

ここに見られるタイゲの装飾批判は単なる表面的な装飾の否定ではなく、建築理念に対して実践された

形態の矛盾に対する問題を含んでいたと考えられる。これについて、前述の論稿「新しい世紀、新しい建築」の中で、タイゲはヴァン・デ・ヴェルデの機械ロマンティシズムを批判し、ワーグナーのアカデミックな伝統への迷いを批判しながらも、「ウィーン郵便局」を「完全に近代の室内と、明確な調和のエレパンスの見本」と評価している。これと同様に、チェコにおけるヤン・コチェラのプラハ第十二区の「自邸」(図10)や同じくプラハ第十二区の「ライフテル邸 (Jan Laichter house)」(図11)の近代性と誠実性を評価している。これについて、同じく前述の論稿「新しい時代、新しい建築」の中でタイゲは以下に述べている。

「それは、装飾された芸術的オブジェであってはならない。我々は、近代において精神活動と一致するその任務と、それらの建物によってのみ成就することを理解しなければならない」<sup>48)</sup>

ここには、タイゲの建築における近代性に関する認識が確認でき、この近代性への考え方は彼の建築論において重要な位置を占めるものと筆者は考える。

これら一連の建築における近代性の成立への過程についての言及を踏まえ、最終的にタイゲはコチェラの建築的な態度について、本論稿「ヤン・コチェラとその時代」の最後において以下に結論づけている。

「たとえコチェラが、セセッション、キュビズム、国家主義、もしくは形式主義的な傾向の影響を受けてモダニズムから周期的に逸れていたとしても、彼の活動歴を通してモダニズムの理想に忠実なデザイナーであったことは間違いなく認められる」<sup>49)</sup>

と、チェコの近代建築史におけるコチェラの位置づけを試みている。



図10 ヤン・コチェラ、「自邸」(1908-9)



図11 ヤン・コチェラ、「ライフテル邸」(1908-9)

## 2) コチェラとチェコのキュビズム建築の世代

コチェラは二世代に渡るチェコの建築家を教育している。最初はアーツ&クラフツ学校のキュビズム世代、そして1911年から1923年に没するまでに関わった構成主義世代である。つまり、コチェラと構成主義世代の建築家との間の世代に位置するのが、チェコにおけるキュビズムの建築の世代であった。

1910年ころ、パベル・ヤナーク(Pavel Janák)<sup>50)</sup>、ヨセフ・ゴチャール(Josef Gočár)<sup>51)</sup> (図12)、ヨセフ・ホホル (Josef Chochol)<sup>52)</sup> (図13)、フラティスラフ・ホフマン (Vlastislav Hoffman)<sup>53)</sup>、およびオタカル・ノヴォトニー(Otakar Novotný)<sup>54)</sup>を含むキュビズムの建築家の世代は、当時の合理主義建築に不満を持ち、そしてキュビズムのプログラムを宣言した。ヤナークの「近代建築から建築へ」というオットー・ワグナーの合理主義に対する批判的な論稿を基に、ファサードを表情豊かな彫刻的装飾する精神的建築を提案していった。また、彼らはピカソとブラックの二次元的絵画の構造を立体的なヴォキャブラリーへと変換する試みを行った。そして、彼らはキュビズムの可塑性とスラヴ人の伝統の遺産とを融合しようとしたとされている。

タイゲは同じく『チェコスロヴァキアの近代建築』の論説「キュビズム」<sup>55)</sup>の中で、コチェラと上述のチェコのキュビズムの建築家について言及している。ここでタイゲは、

「ある種の対向の流れは、コチェラとロースの作品と考えに対する明らかな反動として1910年から出現した。プラハにおける、この独立した興味深い基本的な誤った反動は、キュビストの建築の一派に現れた」<sup>56)</sup>

と、コチェラの世代と1920年代からの構成主義の世代の間にあたる、1910年代にプラハに出現した上述のキュビズム建築について言及している。そしてタイゲは、

「ワグナー、またはベルラーへの一派の合理主義と純粋な構造学 (tektonika) と対照的に、(中略) おそらくその劇的な特性のために、キュビストはバロック形式と同じくバロック思想への回帰を宣言した」<sup>57)</sup>

とし、ここでタイゲはチェコのキュビズム建築をコチェラからのチェコの近代建築の流れに対して逆行するものとして定義づけていることが特筆される。



図 12 ヨゼフ・ゴチャール、「黒い聖母の家」(1912)

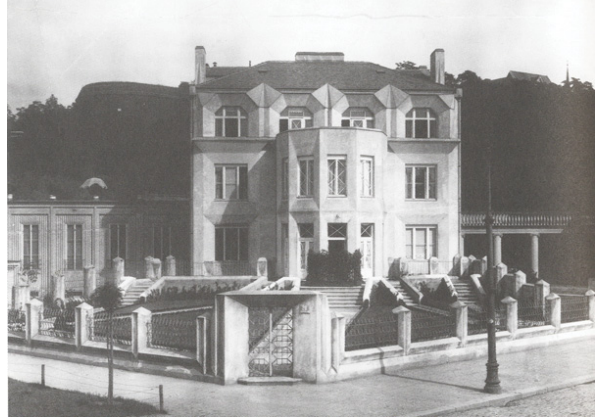


図 13 ヨゼフ・ホホル、ヴィシエフラド・ヒル下の住宅(1913)

#### 第四節 アドルフ・ロース論に見るタイゲの建築思想

##### 1) タイゲによるアドルフ・ロースの再評価

カレル・タイゲによる論稿「アドルフ・ロース (Adolf Loos)」<sup>58)</sup>は1929年～30年にかけて雑誌『スタヴバ』に書かれ、1930年の著作『チェコスロヴァキアの近代建築』に収録された。この当時のアドルフ・ロースの位置づけについて、建築史家レイナー・バンナムによれば、

「オーストリアでもロースに関する書物が二つ刊行された。ひとつは、かれの六〇歳の誕生日にちなんだ「記念論文集」(1930年)、もうひとつは、建築家としてのロースの仕事を研究したクルカの研究(1931年)であった。このように純粋にオーストリア人への立場への復帰という事実は銘記すべきである。というのも三〇年代の初めにおいては、ロースは明らかに二〇年代のはじめの頃のように指導的人物ではなかったからである。また、『宙に向けての発言』(\*筆者註：現在『虚空へ向けて』という邦題で日本で出版されている)は広く知られ、よく引用されたのに比べ、『それにもかかわらず』の方はそれほどではなかったように思われる。事実『宙に向けての発言』を読んだ建築家も、たとえ『装飾と犯罪』のことは知っていても、『それにもかかわらず』については、その存在さえ知らないことがままあったほどである。このように、かつての勢いを失ってきた理由はおそらく、ロースと新建築を実践した巨匠たちとの世代の相違、および二〇年代の感覚の激しい変化(これは、主に抽象芸術の未来派の思想の普及によってひきおこされたもので、これによってロースも古くさくみえた)、それに(たとえば)ル・コルビジエとの個人的いさかきがあったのではないかということなどにも求められるべきであろう」<sup>59)</sup>(レイナー・バンナム、『第一機械時代の理論とデザイン』)

と、1930年代前半において、ロースが歴史的な忘却の中にあつたことを指摘している。同様にタイゲの著述によれば、1930年当時、アドルフ・ロースの名は近代建築の先駆者の中でもめつたに言及されることがない存在であつたとされている<sup>60)</sup>。この時代におけるロースへの無関心の状況の中で、タイゲはここでロースを近代建築の先駆者と措定している。

「黙殺されていたアドルフ・ロースがこの時代の先駆者であるとあえて言おう。今日においてのみ、ロースが近代建築の問題に答える世代の唯一の人物であることを完全に確信する。同時代人の中でも卓越性を持った資質、というよりはむしろアドルフ・ロースは先駆者である」<sup>61)</sup>

ロースがウィーンで活動を開始した頃、プラハでは前述のヤン・コチェラがオットー・ワグナーの弟子として学び、そしてチェコへ戻って活動を開始していた。そのロースをしてタイゲは「構成主義を予見した」<sup>62)</sup>人物と定義している。

1870年、アドルフ・ロースは、当時オーストリア＝ハンガリー帝国の領内であつたチェコのブルノに生まれ、オーストリア人であり、ウィーンで活動をしていた。タイゲがこのロースに関する論稿を発表した時期(1930年)にはパリを拠点に活動をしていたとされる。

タイゲの言説からも、1898年の「カフェ・ムゼウム(Cafe Museum)」、1907年の「アメリカン・バー(American Bar)」等のウィーンにおけるロースの一連のプロジェクトは、当時、激しい論争を引き起こしたことがうかがえる。タイゲによれば、それらの論争はロースに対する「プチブル的趣味と偏見による攻撃」であつたとしている。そしてタイゲは、「ゴールドマン&ザラチュ(Goldman & Salatsch)」デパート、通称「ロースハウス」におけるイオニア式コラムの使用について言及している。タイゲは、ロースがあらゆ

る歴史的装飾を取り除いた後にイオニア式の柱を使用したことは、その純粋で完全な形態性にあると、タイゲは捉えていた。

「イオニア式コラムが何か博物館の遺跡ではなく、生きた形態（円柱の最も純粋で最も完全な形）であることを確信していたのである」<sup>63)</sup>

と、タイゲは述べている。

また、タイゲは、ロースのテラス・ハウスの計画の中に、ロースは近代建築におけるフラット・ルーフの必然性を確信していたとし、その中でロースのルーフ・テラスのアイデアに多くの機能性を見いだしたと述べている。これについてタイゲは、

「ルーフ・テラスは、単なる建物のカバーではなく、多くの生きた意義のある機能であった。閉じ込められ、眺望を奪われたと感じる裏庭の代わりに、決して十分に大きくない庭面へ、地平線まで、太陽、光、空気へ、そして眺望へと開放されたテラスで暖を取ることができる！ あなたが望むなら、最も気持ちの良い場所、最も明るい「室内」、全部が住宅である。ロースのテラス・ハウスの解決案は、近代建築の多くの考えに刺激を与えた。ロースは、後の作品において、そのことに対して非常に誠実なままでさえあった。最初は四半世紀前つくられたロースのテラス建築は、アンリ・ソーバージュによる後の建物より合理的な解決案を提示したのである」<sup>64)</sup>

と述べている。タイゲによれば、ロースのテラス・ハウスの案はイタリアの建築家アントニオ・サンテリアの都市計画に影響を及ぼしたとされており、アントニオ・サンテリアの「未来派中心都市」計画において、全ての通りがテラス・ハウスで埋め尽くされていたことについて言及している。そしてこのテラス・ハウスのアイデアは、最終的にル・コルビジェによって恒久化されたとタイゲは位置づけている。

ロースのテラス・ハウスについて、タイゲはアーノルド・ベネットの小説のタイトルから取ったとされる「グランド・ホテル・バビロン(Grand Hotel Babylon)」計画 (図14) の機能性について言及している。

「テラスを付けられたバビロン・ホテル・プロジェクトは、ホテル運営上の最も大きな負担を取り除いた。中庭に面しているセカンド・クラスの、暗い、荒涼とした部屋。日当たりがよい東で南の配置は、このタイプの建物によっていっそう広げられた。垂直の北のウィングを除いて、テラスは各々の部屋に取り付けられる。航空機の着陸のためとしてさえ、大きなルーフ・テラスは、さまざまな方法で使われることができる。バビロン・ホテルは、エジプトよりもメキシコのアステカのタイプに近いピラミッド2つのピラミッドから構成されている。ピラミッド（因習的に小さな霊安ホールをそばに占められる）の中のスペースは、ダンス場、冬園とスケートリンクの隣のロースのピラミッドで占められる。2つのピラミッドの間に、上記の部分からライトアップされる大きなホールがある。」<sup>65)</sup>

パリへの移住の前に、ロースはウィーン自治区のためのプロジェクト (図15) に取り組んでいた。政治改革によってオーストリア政府はウィーンにおける建築の社会化プログラムの開発を始めていたとされる。しかし、ロースによるテラス付労働者向けの集合アパートの計画が実現することはなかった。タイゲによれば、ロースは労働者のためのテラス・アパートの実現を夢見ており、それは労働者階級の子供の過酷な命運に対する解決を望んでいたためとしている<sup>66)</sup>。

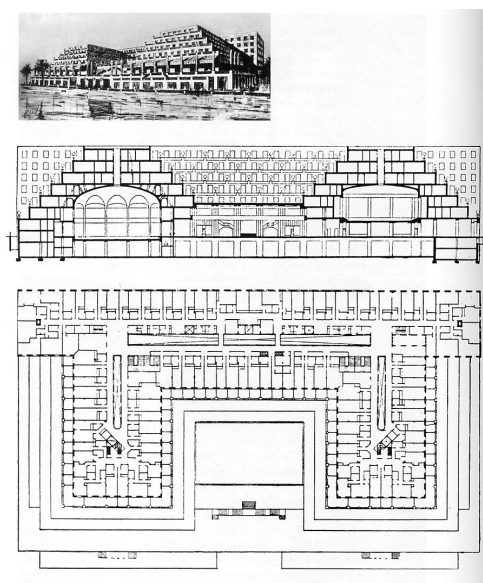


図 14 アドルフ・ロース「グランド・ホテル・バビロン」

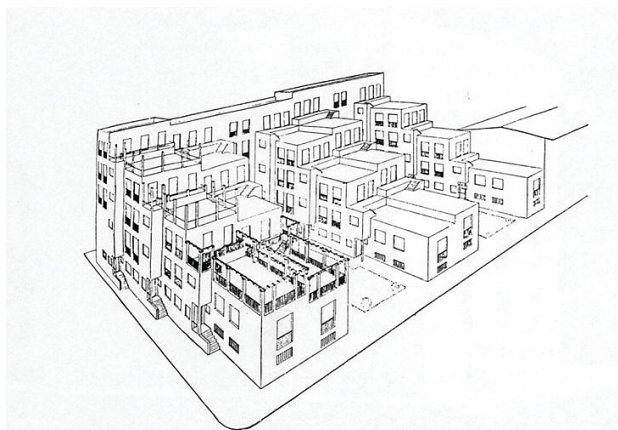


図 15 アドルフ・ロース「労働者の家」

## 2) ロース論におけるマルキシズムに基づく経済論から構成主義への展開

アドルフ・ロースのエッセイ集『虚空へ向けて (Ins Leere Gesprochen)』<sup>67)</sup> (\*筆者注：上記バンハムの邦訳引用における「宙に向けての発言」と同じ書籍)は1929年にチェコ語に翻訳され出版された。そのポレミツクな内容は、チェコ近代建築確立のための指針になったとタイゲは述べている。そしてタイゲは、ロースのセセッションに対する批判は、フォークロアの、歴史的、ファッション的、その他あらゆる装飾への宣戦布告であったとしている。

この論稿の中でタイゲは、ロースの装飾批判とマルキシズムに基づく経済論との関連性の観点から、資本主義批判としての装飾論といえる言説を残している。タイゲは、

「装飾は、弱点を隠した仮面になり、結局、一種の我々の機械文明が決定的に存在理由を否定した"芸術"となった。初期の資本主義の時代と機械生産の始まりにおいて、装飾は剰余生産に疑問を呈す社会的で経済的な要素を表した。それは生産の単純な経済目的を損ない、このように社会的抑圧における目立った要素となったのである。装飾は、更なる労働を労働者に要求した。労働者に社会的に不必要な労働の強制は、領主または資本主義者のサディズムの表れである。「この一夜中に破れるレースのために、数ヶ月の間レースをつくる苦痛を与えることは社会悪の表出である」と、ロースは正確に把握していたのだ」<sup>68)</sup>

とし、装飾の付加は労働者に超過労働を強い、それによって剰余価値を生み出すという理路がここに示されており、ここでタイゲはロースの「装飾」に対する批判をマルキシズムに基づく経済論の観点から読み替えたといえる。

「この新しい世紀は、一日8時間の平日労働日から、奴隷と農奴のそれより安い労働力を手に入れた。その合理化にもかかわらず、資本主義体制は装飾を省かなかった。逆に装飾品と贅沢なアイテムの生産は、今日、完全な工業生産のおよそ3分の1を占める。これは、より革新的な社会制度(社会主義)

から明白であるように、今日、産業の進化は余剰生産の危機を経験せず、装飾は望ましくない技術的な進歩の前兆となる。装飾は、それ自体が事実上何も生み出さない一種の生産を表し、積極的な価値をつくり出さないのである。そして、それは商品を一般的な経済消費に適さないようにする。ある時代において、資本主義が減じるか、著しく複雑になるような方法は、生産力の速度を落とす。ミシガン湖に廃棄される卵、国産車産業を脅かさないために戦後にフランスで燃やされた何千ものフォード車、ロシアの破滅的な飢餓の年にトウモロコシで熱せられて走るアメリカの蒸気機関、関税の複雑化、商業的なインフレーションの戦いと装飾について考えよう。装飾主義とは、一種の純化のシステムである。それは一部の人々に生産への不参与を強制し、特定の種類の労働のみを過剰にする。加えて、装飾の使用は生産と商業の様々な偽装を許すのである。商品は、装飾の付加によってその機能の欠如を補うのである」<sup>69)</sup>

とタイゲは述べ、装飾が資本主義社会における商品価値に密接に関連していることについて言及している。

ここでタイゲは、ロースの言説を通して、近代産業における装飾の中に階級社会に基づく経済的搾取を前景化させているといえる。タイゲによれば、

「贅沢な装飾は、重大で実質的な欠損をイチジクの葉で覆い隠す。欠損と装飾間の相関関係は、ほとんど至るところで確認できる。これはヒューマニティにとって古い重荷である。代用品としての装飾なのである。装飾的な物がかつて高価だったが、機械産業はその価値を逆転した。装飾が粗末な材料と仕上げによって明らかな欠如を隠すため、今日、最も装飾的な物は最も安くなるが、もしそれに装飾的な部分が無かったとしたら、上質の材料でできている堅実な製品のみが市場に出回るだろう。装飾は安い代用品として、資本主義的生産の貧欲と相関する。貧欲は、大量生産を邪魔するときは装飾をはぎ取ったが、商業的戦略と剰余生産と安値を維持するためにはそれを残した」<sup>70)</sup>

とし、機械産業時代における装飾が以前のそれとは意味が逆転し、商品の本質的な欠損を隠蔽するために用いられ、その装飾の付加のために労働者が剰余労働を強いられるという理路を示している。つまり、近代における装飾とは、資本主義システムにおける剰余価値そのものの具現化とタイゲは捉えていたと筆者は考える。

この様にタイゲは、ロースを介在することでマルキシズムに基づく経済論の観点から、装飾批判としての建築論へと展開している。そして、最終的にタイゲの経済論に基づいた装飾批判は、芸術と建築の分離の概念へと向かっている。ここでタイゲは、装飾芸術と建築の分離について、ロース言葉を引用している。

「わずかな一部建築物だけは、芸術に属している。墓と記念碑である」<sup>71)</sup> (アドルフ・ロース、『装飾と犯罪』)

このロースの言葉を踏まえ、タイゲは芸術と建築の分離について以下に述べている。

「抽象的な建築物としての墓と記念碑が実際にすべての建築の一部でなく、むしろ純粋で、絶対的な、さらに非具象的な彫刻であるが故、建築は芸術ではないのである」<sup>72)</sup>

と、タイゲは述べている。ここでは墓と記念碑に対する純粋な芸術としての位置づけから、それ以外の建築と芸術とを分節するというロースの考えが引用されており、この芸術と建築の分離の概念は後述のタイゲの言説においても繰り返し現れている。また、本論の第三章第二節 2 項でも後述するように、この概念はハンネス・マイヤーからの影響があると考えられる。これらを踏まえ、以上の一連の言説にはタイゲの



建築思想において重要な評価軸の一端が現れていると筆者は考える。

次にタイゲは、ロースの近代建築史における先見性へと言及している。タイゲは、

「1897年～1900年のエッセイ集は、ほとんど告発的なタイトル『虚空へ向けて』として、1921年にフランスの出版社ジョルジュ・クレ（Georges Crès）から出版された。これらは、本当に虚空に向かって語られる言葉だったのだろうか？答えは明らかである。これは1897～1900年にヨーロッパの少数だけが耳をすませ、とりわけ特に中央ヨーロッパにおける建築家のコミュニティにとっての真実であった」<sup>73)</sup>

としており、その中でもチェコを含む「中欧」におけるロースの影響力について言及している。

そしてタイゲは、ロースが近代建築史にもたらした影響を、チェコの近代建築史における構成主義の文脈へとつなげている。タイゲによれば、

「プラハでは、ヤン・コチェラが新しい歴史の建築的信頼の使者の身分をつかんだ。（中略）全く同じ頃、ル・コルビュジェ言うところの「新しい精神」の先駆者の一人は苦闘していた。彼こそ、長く誤解されることになる偉人であり、新しい建築の最もラディカルで重要な先駆者であった。多くの点で構成主義者のプログラム、そしてフランスのピュリズムの命題を予見していた人物はここにいた。この男は中世の使者ラスキンの最大の敵であり、新しい時代の建築の使者であった。この男こそアドルフ・ロースである」<sup>74)</sup>

と、ロースの先駆性について触れながら、

「チェコスロヴァキアの市民で、1870年にブルノに生まれた」<sup>75)</sup>

と、ロースの経歴を記していることから、ロースとチェコの近代建築の関連性を強調しようとするタイゲの意志が確認できる。そしてタイゲは前述のヤン・コチェラとロースを並べ、

「コチェラとロースのような先駆者によって、チェコスロヴァキアの建築家の新世代は未来の任務とともに将来へと目を向け、国際的な建築デザイン運営の基盤に加わることができるのである」<sup>76)</sup>

としている。これらの言説から、コチェラをチェコにおける構成主義の世代の建築家に対する歴史的な先駆者として措定したと同様、アドルフ・ロースをチェコの近代建築史の先駆者として措定しようとした言説には、チェコの近代建築史の編纂におけるタイゲの評価軸の一端が見られる。

そしてタイゲは、最終的にロースについて以下のように評している。

「イギリスとフランスの鉄の建築物の有名な作品が建設された。つまり、歴史主義と芸術のバランスから自由な、全く新しい建築における技術的で、産業的で、経済的な情勢はすでに存在していたのである。しかし、ロースはこれらの新しい現実を理解し、身につけることができた唯一の建築家であった。そして、それらから結果を出す方法と新しい建築のプログラムを表す方法を熟知している人物であった。彼はこの新しい生活の原則の具現者であった。これらのために、彼はアカデミックな機関の機械文明世紀における時代遅れの封建的な組織体によって、数十年の間にわたり抑圧され沈黙したのである。いくつかの引用で、我々はロースの建築的思想の革命的な影響を示した。我々は、今日、構成主義が、彼の信条を支える多くの論説を無条件に受け入れるとも指摘した。我々がしばしばロースの書籍の言葉に言及するならば、我々はその権威を絶対的とみなすのではない。確かに、ロースの真理にはある種の限界がある。それゆえに、それはいくらかの異議を案出するために必要なのである。

ロースの著作の強度はその反対論にある。ロースの「否定」のほぼ全ては、今日、まだ有効なのである」<sup>77)</sup>

ここでのロースの「否定」は、タイゲによって次のような近代建築の枠組みへの批評へと変換されている。

「ロースによる芸術としての建築への一貫した否定は、黄金分割、幾何学的なプロポーション、機械ロマンティシズムと形式主義的な偽構成主義のファッションナブルな審美的な迷信に対して、今日、再び使われることができるのである」<sup>78)</sup>

これら一連の言説を踏まえ、タイゲによるロース論は、その発表の時点（1930年）から約四半世紀前のロースの言説に構成主義と機能主義の原基を見いだすことで、チェコにおける構成主義の建築の系譜を確立しようとしたといえる。またタイゲは、この当時60才近くになり、歴史の中で忘却されていたとされるロースの建築思想に再び光を当て、その先駆性と影響力をチェコの建築の近代化の系譜に接続することによって、チェコの近代建築史における構成主義の理論的な体系化を試みたものと筆者は考える。

## 第五節 ロシア構成主義に基づく建築のチェコへの導入と当時のチェコの近代建築の状況

### 1) チェコにおける構成主義の建築の確立の過程

ロシアにおける構成主義の建築は、1920年代前半まではヴェスニン兄弟の「労働宮殿」のプロジェクトに象徴されるように計画案が中心であった。それらが実際の建築物として結実し始めるのは1920年代後半になってからとされている。この時代の構成主義の建築は、1925年にモイセイ・ギンズブルグ、アレクサンドル・ヴェニスーン等によって創設されたOSA現代建築協会を中心としていた。このグループは機関誌『現代建築SA』を翌1926年から刊行し、構成主義の理論を普及させる一方、国際的な交流も行ったとされる<sup>79)</sup>。これらの国際的な構成主義運動は、チェコを始め、ハンガリー、スイス、ドイツ、ポーランド等へと波及していった。

チェコにおける構成主義は、1923年、プラハのソビエト連邦大使館に「モスクワ言語学サークル」の中心人物であったロマン・ヤコブソンが赴任したことに端を発するとされる。ヤコブソンはすぐにタイゲ等デヴィエトスシルのメンバーと交流し、その中でマヤコフスキー、フレーブニコフ、エセーニン、パステルナークの詩を朗読したとする。そして、エル・リシツキーとイリヤ・エレンブルク、そして彼らの構成主義の理論をタイゲ等、デヴィエトスシルのメンバーに紹介したとされる。<sup>80)</sup>

タイゲは前述の論説「ポエティスム」で述べている通り、「ポエティスムは生活の頂点であり、その基礎は構成主義にある」<sup>81)</sup>と構成主義と自身のポエティスムの関係を位置付けており、構成主義とポエティスム二つの理論をそれぞれ下部構造と上部構造と置き換え、お互いが補完する関係を示すことでロシアの構成主義と自らの「ポエティスム」の思想との融合をはかろうとしたと考えられる。

タイゲによれば、チェコにおける構成主義の理解は、当初の正式な理解と異なった広範な理論的解釈を与えられた状況にあったとされる。この状況について、同じく『チェコスロヴァキアの近代建築』に収められた論説「構成主義の発現 (nástup konstruktivismu)」<sup>82)</sup>の中で、

「構成主義は、まず最初にロマンチックな機械崇拜 (mechanomania)、まるで未来派の市民主義 (civilismu)の機械の偶像崇拜の遺産のようなものとして理解された」<sup>83)</sup>

とタイゲは述べており、ここでの未来派におけるロマンティズムとは、労働者、技術者によって共有される類いの概念ではなかったとしている。タイゲは、未来派における「熱意」を、構成主義としてではなく、むしろヴァン・デ・ヴェルデのユーゲント・シュティールの延長と解釈しており、構成主義の概念における機械の定義について、絵画的な主題としてではなく、組織化されたエネルギーの延長として捉えようとしたとしている。また、機械については、産業革命に端を発する社会構造と文化文明の変革をおこし、封建制度を一掃するものとして位置づけ、機械産業によって手工芸は終焉し、近代デザインの概念にとっての「余計なもの」が排除された、とタイゲはみなしていた。その流れの中で、タイゲはラスキン・モリス主義による中世的手工芸性を構成主義の対局に置き、その伝統的規範と訓練に対して批判的であった。

ここでタイゲが意図していたことは「建築と芸術の分節」であり、この主題についてのタイゲの言説は前項におけるロースに関する論稿から、本論文の後の章においても繰り返し確認される。またタイゲは、建築的形態をより社会的で人道的見地からの合理性をもとに再構築することを試み、その理論的な裏付け

として構成主義を確立しようとしたと筆者は考える。これについてタイゲは以下に述べている。

「構成主義の建築は、芸術ではなく、建築の科学である。構成主義はフローバールが直感した "非人間的な未来芸術" と、あなたは捉えるかもしれない。構成主義建築のプログラムは、時代のすべての経済的、社会的、技術的、産業的、文化的要求を満たす建築的形態を予見する。それは外観において、同様にその配置と建設において、すべての建築の伝統を排除する」<sup>84)</sup>

というタイゲの言説に現れているといえる。ここでタイゲは、構成主義が建築だけではなく、社会的生活と関係するという考えを示している。この考えは、1928年に建築雑誌『スタヴバ』に発表した論稿「構成主義の理論に向けて(K teorii konstruktivismu)」<sup>85)</sup>におけるタイゲの言葉と対応している。

「構成主義は芸術の伝統的な美学と概念を否定する。われわれの文明はもはや美術や工芸のものではなく、機械文明である。いわゆる芸術が生活の中にもちこまれたとする歴史的、社会的仮定は有効性を失った。前機械時代の古い生産方式と建設的生産かつ社会的に組織化された今日の方法とのあいだの相違は絶対的である。弁証法的唯物論者の歴史観によって裏打ちされた構成主義は "芸術" という言葉のなかに隠れているものが、何世紀にもわたる創造活動において、生産や社会システムにおける変化と平行して、ある深遠な変化に耐えてきたということを理解している」<sup>86)</sup>

以上の流れを踏まえ、構成主義という国際的芸術運動を受け、タイゲはチェコスロヴァキア共和国という新興の近代国家において、この運動を反映した新たな建築論の確立を目指したと筆者は考える。ふたたび論稿「構成主義の発現」に戻り、タイゲはこれについて以下に述べている。

「科学的な唯物論者のイニシアティブと構成主義者の新世代の革命的創造によって芳醇になったチェコスロヴァキアの新しい建築は、おのずと国際的な文脈に基づいた。すべての国における近代建築の役割とは、新しい世界を建設することである」<sup>87)</sup>

とし、構成主義を取り入れることでチェコの近代建築を国際的な文脈に対応させることを試みている。そしてタイゲは上記の「チェコスロヴァキアの新しい建築」を象徴する者として、前述の建築家ヤロミール・クレイツァルを指定している。このクレイツァルのチェコの近代建築における位置づけについて、タイゲは同上の論説「構成主義の発現」の中で以下のように述べている。

「チェコスロヴァキアの建築の新しい運動の一番の代表はヤロミール・クレイツァルである。クレイツァルはチェコ建築の発展において、自身の作品上でヤン・コチェラの教えと現代の状況との統合を果たした」<sup>88)</sup>

とタイゲは述べ、自身がヤン・コチェラにおいて確立を見たチェコ近代建築の系譜にヤロミール・クレイツァル(Jaromír Krejcar)<sup>89)</sup>を接続させている。

ヤロミール・クレイツァルは1895年生まれの建築家であり、1918年から1921年までプラハの美術学校でヤン・コチェラに建築を学び、1923年に独立し、デヴィエトスィルのメンバーとなっている。クレイツァルは1921年に「中央市場のプロジェクト」を発表し、タイゲはこのプロジェクトを国家的装飾様式の影響で迷うチェコ建築にとって画期的なものであったとしている。2棟の高層建築は表層的装飾が排除され、「裸の、禁欲的な」建築構造体が現されているものであったとタイゲは述べている。これに続いて、クレイツァルのプロジェクトは「博士の家」(図16)、「プラハ第二地区オリンピック・ビル」(図17)、「ストラシュニツェ (Strašnice) 地区のヴィラ」(図18)、「ブベネチュ (Bubeneč) 地区のホテル」、「プラハ第八

区のアパート」、「ヴディスラフ・ヴァンチュラ (Vladislav Vančura) の別荘」、「プラハ第十二地区の事務職員協会ビル」、そして当局の禁止令によって実現されなかった「プラハ労働者スポーツ大会のためのスタジアム計画案」(図19)へと段階的に成熟していったとタイゲは述べている。また、前述の1933年に出版されたタイゲによるクレイツァルについての著書『ヤロミール・クレイツァルの仕事 (práce jaromíra krejčara)』<sup>90)</sup>において、

「その初期の作品から、近代建築作品が一般的な適用として後に取り入れたいくつかの要素を常に含んでいた点において、多くのクレイツァルの作品は最重要であるといえる。「中央市場計画」は構成主義近代建築の装飾的な建築に対する最初の反対声明であり、プラハの「オリンピック・ビル」はル・コルビュジェの形式的なピュリズムを乗り越えた根本的な一貫性を示した。そしてプラハのブルーニークの「スタジアム計画案」はチェコ建築における構成主義の科学的分析法の明確な実例であり、芸術的手法による建築作品を厳密に科学的手法によるものへと置き換えた」<sup>91)</sup>

と評している。このように、タイゲはチェコにおける構成主義に基づいた建築の確立をクレイツァルの建築作品に具体的に見いだすことで、その実証を試みたと考えられる。

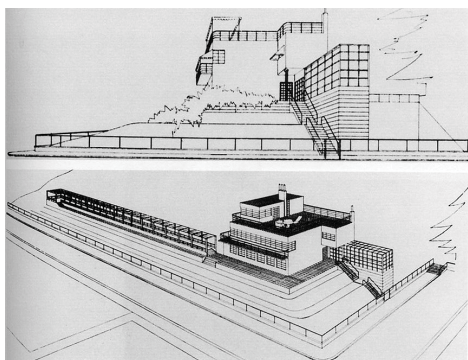


図16 ヤロミール・クレイツァル、「博士の家」(1923)

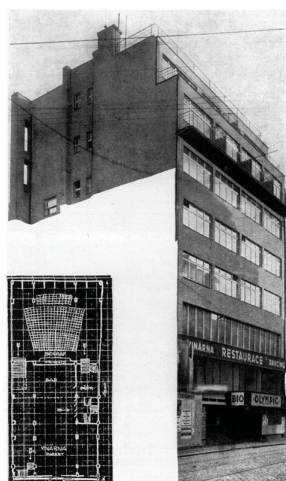
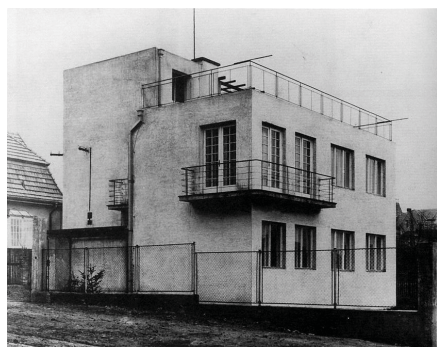
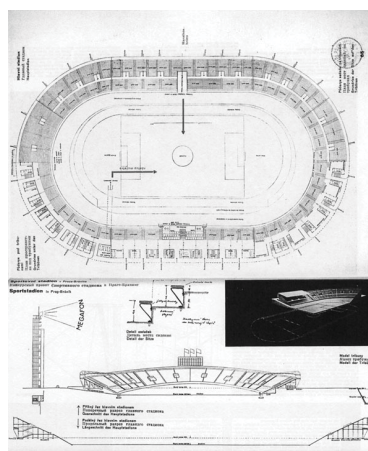


図17 ヤロミール・クレイツァル、「オリンピック・ビル」



(左) 図18 ヤロミール・クレイツァル「ストラシュニツェのヴィラ」(1926)



(右) 図 19 ヤミロール・クレイツァール「スタジアム計画」

## 2) チェコにおける構成主義の実践の状況

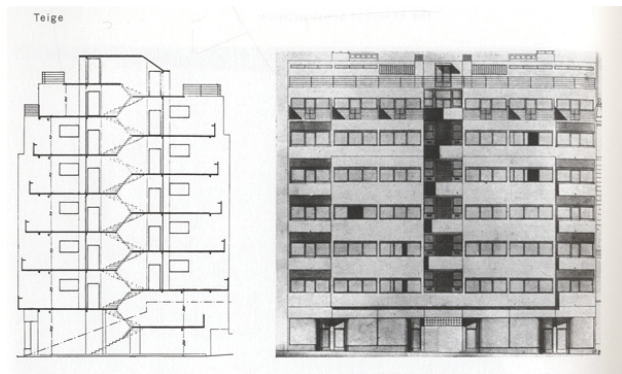
以上のように、タイゲは当時のチェコにおける構成主義の建築の体系化とその実践についてまとめている。つづけてタイゲは、チェコにおける構成主義の系譜にある同時代のチェコの建築家の活動についてレポートしている。

この中で、タイゲは建築家ベドジフ・フォイエルシュタイン (Bedřich Feuerstein)<sup>92)</sup> の「ニンブルク (Nymburk) 葬儀場」(図 20) の計画を新しい精神による建築の実現の機会として評価している。この計画は過渡期の段階として、形式主義が全く無いとはいえないものの、この葬儀場建築はチェコにおける新世代の構成主義建築の転換の象徴となったとタイゲは評している。その後、フォイエルシュタインは A.ペレの事務所で働くためにプラハを去り、その後アントニン・レーモンドの事務所で働くために日本へと向かっている。

そしてタイゲは、ヤロスラフ・フラグネル (Jaroslav Frágner)<sup>93)</sup>、エヴジェン・リンハルト (Evžen Linhart)<sup>94)</sup> (図 21)、カレル・ホンジーク (Karel Honzík)<sup>95)</sup> 等の新しい建築思潮を掲げる一群によって発表されたプロジェクトは、実現しなくとも当時のチェコにおけるモダニズム運動に大きな影響を与えていったとしている。フラグネルは「ムカヘヴォ (Mukachevo) のサナトリウム」、そしてプラハ近郊のバランドフ (Barrandov) 地区の住宅群(図 22)を設計した。さらにヨセフ・ハヴリーチェク (Josef Havlíček)<sup>96)</sup>、ホンジーク、リンハルトとパベル・スメタナ(Pavel Smetana)<sup>97)</sup> と共同で ČTK 通信社 (Československá tisková kancelář)、その他の住宅コンペにも参加している。リンハルトはプラハ第十三区の 1 ブロック全てのアパートを設計した。上記の集合住宅は、タイゲが提唱する建築理論である「最小限住居」の概念と対応するものであった。リンハルトはいくつかの住宅と共同ビルを設計し、ホンジークはプラハのビエフノフ (Bievnov) 地区の古い住宅のリノベーションを行った。オールドジフ・ティル(Oldřich Tyl)<sup>98)</sup> は、PVV ビルディングなどの作品によって「合理主義建築における最も統合的な作品の一つ」と評された。さらにプラハ第十三区のアパートと第二区の「YWCA ビル」(図 23) は、タイゲをして「その計画の大胆さの論理と建築的洗練において、近代チェコ建築の古典となる事例である」と、。



(左) 写真 20 ベドジフ・フォイエルシュタイン、ニンブルクの葬儀場 (1921)



(右) 写真 21 エヴジェン・リンハルト

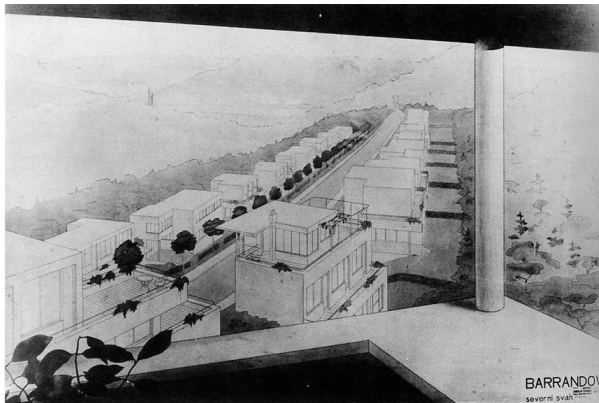


図 22 ヤロスラフ・フラグナル、「バランドフ田園都市」,1927.



図 23 オルドジフ・ティル、「YWCA ビル」

タイゲによれば、チェコスロヴァキアの近代建築にとって最も重要な出来事の一つは、1928年のブルノにおける現代文化展示会（Výstavy soudobé kultury）であったとされる。そこではヤロスラフ・ヴァレンタ（Jaroslav Valenta）<sup>99</sup>による展示ホール、ボフミール・チェルマーク（Bofumír Čermák）<sup>100</sup>によるパビリオンを始め、ボフスラフ・フス（Bohuslav Fuchs）<sup>101</sup>、スタート、ハヴリーチェクらによって建物は設計された。前述の通り、1920年代のチェコにおいてブルノは近代建築運動を象徴する都市になった。ブルノでは、デヴェロッパであるフランチシェク・ウヘルカ（František Uherka）とチェニェク・ルレル（Čeněk Ruller）の主導で、ドイツのワイゼンホフ住宅団地をモデルとした家族向けの住宅コミュニティが計画された（図 24）。これら住宅団地の大部分の住戸はフス、イジー・クロハ（Jiří Kroha）<sup>102</sup>らのブルノの建築家とプラハのヨセフ・シュテパーネク（Josef Štěpánek）<sup>103</sup>によって設計された（図 25）。タイゲは、その中でもフスの作品は高いヨーロッパ基準に達していたとしている。

チェコにおける新しい建築思想の実践の事例の流れにおいて、タイゲはヨセフ・ゴチャール（図 26）に言及している。コチェラの生徒でありパートナーでもあったゴチャールがいわゆる国家的装飾様式（ロンド・キュビズム）<sup>104</sup>を捨て、新しい建築運動に加わったことによって、運動を促進させたタイゲは評価している。そして、それはコチェラへの精神への回帰とタイゲは捉えていた。そして、同様の離脱がキュビズムの建築の世代であるパベル・ヤナークとオタカル・ノヴォトニーの後期作品にも見られ、彼らは歴史的折衷主義から、新しい建築の方向性と結びつくとタイゲは評している。

また、イジー・クロハの作品にも変化が見え、初期のキュビズム建築を否定し、タイゲいわく「構成主義をロマン主義的に誤読した」<sup>105</sup>とされる彼の作品は「形態における個人的恣意性」<sup>106</sup>に支配され、それは「構成主義の誤読」の事例としてタイゲによって位置づけされた。彼の作品を評してタイゲは、

「E・メンデルスゾーンの作品の記念碑的様式と同類のクロハの建築は、調和を欠いた乏しい計画、不器用で義務的な形態、その他いろいろな欠点を負っていた」<sup>107</sup>

としている。

このようにタイゲは、構成主義のチェコにおける理論的な確立を試み、それを基に当時のチェコにおける構成主義の建築の実践の状況を論評し、それらの理論と実践の状況を対照させている。

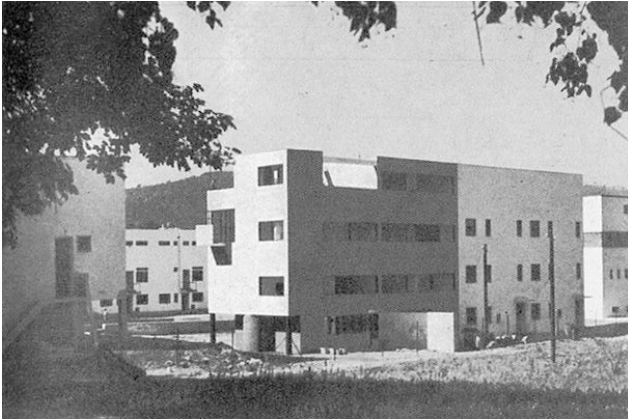


図24 ブルノのニュー・ハウス・コロニー (1928)

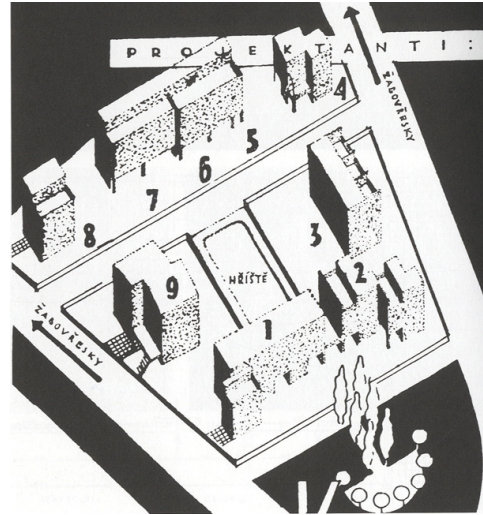


図25 ブルノのニュー・ハウス・コロニー (1928): 配置図



図26 ヨゼフ・ゴチャール、フラディック・クラロヴィエーの幼稚園,(1928).



### 3) 構成主義の理念と誤読、社会階級制度と住宅、そして都市の問題への展開

前項で触れたように構成主義の建築のチェコにおける体系化、そしてその実践の状況を示した後、論稿「構成主義の発現」の後半でタイゲは構成主義の形式主義的な誤読によって生まれるエピゴーネンの建築の危険性について言及している。

「構成主義の広範囲の解釈は、しばしば特定の建築家を単なる反装飾的な手法へと導く。装飾の無いファサード、フラット・ルーフ、コーナー・ウィンドウ、風変わりな幾何学体の構成。つまり、構成主義の作品に見られるいくつかの要素は、偽構成主義を生み出すために採用される。外観は美しいだろうが、それは間違っている。構成主義のそれを含む近代運動の成功に伴う危険性は、エピゴーネン、つまり模倣者、追従者の巨大な一群である」<sup>108)</sup>

とタイゲは述べ、構成主義の建築において、その形態のみが模倣された建築が出現していることを指摘している。タイゲはここで、機能と建築の本質的な関係と人間と社会の関係を考慮しない表層的で形式的な建築を「建築工芸」<sup>109)</sup>と称しており、その理念の誤読から派生する、構成主義の建築に内包された二重性を指摘している。

タイゲは、この種の構成主義を標榜する形式的な建築が、その社会的本質から逸脱し、ブルジョワ階級の豪華なヴィラのための新手の様式へと変質する先導の役割を果たす危険性を指摘している。タイゲは、近代建築という枠組みにおける理念が資本主義的なファッションへと消費されていく構造について、本論の第三章三節の2項で取り上げる、彼の近代建築の理論と実践における矛盾に関する一連の言説の中でも繰り返し批判を行っており、この時代の彼の建築思想の一端がここに確認できる。

この構成主義の建築の形骸化への警笛から、タイゲは近代建築の「住宅」が孕む矛盾についての問題へと目を向けている。

そして論稿「構成主義の発現」におけるタイゲの建築論は、構成主義の理論から実践を経て、都市の問題へと展開されている。

プラハの歴史的街並みの保存を訴える「古いプラハ・クラブ」に対して、「新しいプラハ・クラブ (Klub za novou Prahu)」は、都市の建設において近代の都市化と近代建築の原則を広めようという主旨によって、ヤロミール・クレイツァルの主導によって1924年に設立されている。この都市における問題について、タイゲはアメリカ合衆国を引き合いにして著述する。1930年当時、ヨーロッパの建築家にとってアメリカ合衆国は重要な主題であった。

「大部分の現代の都市は、現代生活のために役に立たない。これらの都市は、壊れた道具に似ている。エネルギーを浪費し、衛生的に、経済的に失敗し、そして結局は、美学的に失敗する。確かに、現代生活を求める要求に適応することができない都市は、現代生活によって必然的に放棄される。工業は、より有益な用地を探るか、生み出すために、不向きな中心地から移転する。近代の都市計画は、理論的に、または、実質的に、最も厳しくて難しい問題を解決する準備ができていない。明らかに、近代のメトロポリスは、田園都市 (周辺の住宅地域) のヨーロッパの原則で集中化 (それは、摩天楼の建設に至る) の "アメリカの" 原則の合理的な組合せを必要とする。中心地に属さないすべてを空にすることは必然的である。我々はそれらを分散化する必要がある。中心地に集中するために、都市の中心にあることを必要とされるすべてに関しても、同時に必然的である。我々は、都市に十分な酸素を

確保する庭園地帯を周辺部に配置し、まさしくその中央から通じている大きな輸送ラインに沿って緑地を置く必要がある。メトロポリス、州都、地域の知的な中心地は、今日の文化と文明のワークショップである」<sup>110)</sup>

このプラハにおける都市計画の考え方の相違は理念的な対立を生んだ。保存主義者はプラハの歴史的な中心地をそのまま保存することを求め、国家計画委員会は周辺のシステムをプラハの都市計画に導入しようと考えていたとされる。

1928年に国家計画委員会によって提案された計画は、保存主義者とプラハの起伏に富んだ地形に由来する深刻な交通問題との間で苦しむこととなった。公式委員会の予測では200万人の人口増加が見込まれた。拡張する都市プラハは、輸送問題だけでなく、深刻な住宅問題と公衆衛生の問題も含むものであったとされる。

タイゲは全ての都市地区には緊急の再開発が必要であると感じていたが、再開発運動は保存主義者の反対勢力と衝突することとなった。都心における古い地区の衛生的問題と人口密度は「スキャンダラス」とさえ言える状況であったとされ、タイゲはここで具体的な数値をあげてその緊急性を示している。タイゲによれば、具体的に労働者階級と貧困者が住んでいる地区における結核の症例の数は、9,071人の死亡者に対して1,307人は結核に起因し、1928年の統計によるとプラハ住民の1,000人に1.72人が毎年結核で死んでいたとされる。

このように、タイゲの構成主義の理論の根底には、実際の市井における労働者階級の貧困が緊急の主題として置かれていたと筆者は考える。

1929年、1930年のCIAM（近代建築国際会議）において、低所得者向け住宅の問題が議題された。その時期、チェコでは、ドイツ、スイス、オーストリアの工作連盟の住宅展示会を経て、チェコではチェコスロヴァキア工作連盟によるプラハのババ(Baba)地区の展示会が企画されている。このように、この時代の近代建築の枠組みにおいて、住宅の問題は特別な意味を持っていた。タイゲはこの問題に対して、

「住宅の問題の合理的な解決は、以下を意味する。(1)ブルジョアジーのライフスタイルと家庭生活と同じように何も持たないプロレタリアートの生活の必要性和ライフスタイルを理解する。(2)稼がねばならないプロレタリアの女性が、同時に家事もこなせないが故、すべての家事機能を取り除き集中化する。その結果、住宅問題の合理的な解決は、一戸建ての住宅ではない「ホテル」または「下宿」システムによる集合的住居を必要とする」<sup>111)</sup>

とタイゲは述べており、社会システムと建築との関連性の観点から見た、階級制度と住宅が関連する問題の枠組みが提示されている。ここでのタイゲの社会階級制度への批判に基づく労働者と女性の解放への建築論的なアプローチは、最終的に「最小限住居」論としてまとめられることになる（本論文、第三章第三節参照）。

これらのタイゲの都市と居住環境に関する言説から、彼の構成主義の建築論の根底にある、チェコ建築とチェコの労働者階級の実情に根ざした思想的な立脚点が浮かび上がってくると筆者は考える。それは単純な装飾批判としではなく、産業化された社会が生み出した資本主義的な欲動に根ざした余剰価値として利用される装飾性の批判として差し出されている。

そしてタイゲは論稿「構成主義の発現」の最後に、

「我々がここですることができるすべては、いくつかの業績に注意し、今日の誤りと妄想にいくらかに注目をひくことである。それが歴史主義とフォークロア的国家主義の影の決定的な道筋を決め、それが歴史のゲニウス・ロキに対する誤った信頼を蝕み、建築の進歩を妨げる伝統保護主義者の行きすぎを却下し、チェコの建築の構成主義の最も重要で明らかな成就是事実である。同時に、主な焦点は、装飾的な形式主義から建築の客観的な機能的な構成要素まで推移した。科学的な一度と唯物論者においてイニシアティヴと構成主義者（この合理的な建築）の新世代の革命の創造によって豊かにされるチェコスロヴァキアの新しい建築は、国際的な文脈に自然に基づいている。すべての国における現代建築の仕事のような仕事とは、新しい世界を建設することである」<sup>112)</sup>

と述べている。ここには、新興国家であるチェコの建築の歴史的な文脈と構成主義の国際的な文脈とを接続し、チェコにおける構成主義の位置づけと、チェコの建築の近代化の系譜を編纂するための理路の構築を試みる、タイゲの建築思想の一端が確認できる。

### 第三節 要約

#### 第二章における歴史的背景とタイゲの活動履歴

年	歴史的背景	タイゲの活動と建築関係の主要論稿
1867	アウスグライヒ	
1879	チェコ最初の「国民劇場」が建立	
1900		プラハに生れる。
1910	チェコ人の社会民主党と労働組合がオーストリア社会民主党から民族的な分派となった連合体から分離。	
1914	第一次世界大戦勃発。	
1919	マサリクによる独立宣言。	カレル大美術史科入学。
1920	1920年4月、新議会のための選挙が行われ、社会民主党が第一党となる。	「デヴィエトシル」結成
1922		『ジヴォト II』発行 パリを訪問し、ル・コルビュジェ等と交流する。
1923	言語学者ロマン・ヤコブソンがプラハのソ連大使館に赴任。	『スタヴァバ』発刊。
1925		ソビエト訪問。
1927	チェコの産業、発展を続ける。	著作『ソビエト文化』出版。 「ポエティズム宣言」発表
1929	ブルトン『第二宣言』発表。 世界恐慌が起る。	「左翼戦線」結成。 論稿「ムンダネウム」発表。
1930	共産党の詩人コストカ・ノイマン、第三代議長に選出。 チェコの工業を背景とした経済的な安定が続く。	チェコ・グループ代表として CIAM に参加。 著作『チェコスロヴァキアの近代建築』出版。 論稿「発展段階」発表。 論稿「ル・コルビュジェと新しい建築」発表。 ハンネス・マイヤーの招きによりバウハウスで講演を行う。

以上のことから、まず、タイゲは著作『チェコスロヴァキアの近代建築』の論稿「19世紀末」において、タイゲは新興国家としてのチェコの建築の歴史的な基盤を、チェコの機械技術の先進性、ローマ帝国様式、ボヘミアの場所性の三点に定めた。そこからチェコにおける最初の国民的建築である「国民劇場」の設計者であるヨセフ・ジーテクをチェコの建築の近代化の起端に置くことでその理論的な基盤を確立しようとしたといえる。

そして論稿「新しい世紀、新しい建築」において、ジーテクに置いたチェコにおける建築の近代化の起端から、タイゲはウィーンのオットー・ワーグナーからの影響とチェコ独自の文化の二つの流れを見いだした。そして、その融合としてヤン・コチェラを位置づけることでチェコの近代建築の系譜を国際的文脈と結びつけようとした。また、論稿「キュビズム」では、チェコにおけるキュビズム建築に対するタイゲの評価軸の一端が明らかになった。

つづく論稿「アドルフ・ロース」で、タイゲは近代建築の歴史におけるアドルフ・ロースの作品の先駆性を論じ、ロースの装飾批判をマルキシズムに基づく経済論を基に読み直し、社会主義思想に基づく構成主義の建築の原基としてロースを措定した。そこからボヘミア出身であるロースの建築思想をチェコの構成主義の世代の建築家へと接続させる理路を示すことで、チェコにおける構成主義の系譜の確立を試みた。論稿「構成主義の発現」と論稿「ヤロミール・クレイツァルの仕事」では、アドルフ・ロースとヤン・コ

チェラを端緒に置いたチェコの構成主義の建築の系譜から、その具現化をヤロミール・クレイツァルに見だし、そこから当時のチェコの構成主義の建築の実践の状況を批評することで、構成主義を含む当時のヨーロッパにおける国際的な近代芸術運動の動向に対応した、チェコの近代建築の同時的な動向を示そうとするタイゲの評価軸の一端と、タイゲの建築思想の中で重要な位置を占める、住宅問題に体する社会的なアプローチの理路が形成される過程が明らかになった。ここからタイゲは、これらのチェコの建築における理論的な動向を先導しながら、構成主義の建築の実践の状況と対照させている。

これら一連のタイゲの言説には、チェコスロヴァキアという新たに創出された近代国家における建築史を確立するために尽力するタイゲの姿が浮かび上がってくる。ここに見られるチェコの建築の近代化過程についてのタイゲの言説に見る彼の評価軸は、単なる教条的なイデオロギーを基調にした理論ではなく、当時のチェコの国内外の社会的、文化的状況の状況と克明に照らし合わせて編纂されたものといえる。

## 註

- 1) Karel Teige, *M.S.A.2. moderní architektura v československu*, Odeon, 1930., pp.5-37.
- 2) *Ibid.*, p.6.
- 3) *Ibid.*, p.6.
- 4) *Ibid.*, p.6.
- 5) František Antonín Gerstner(1795-1840) : 1835-1837 年の間には、彼の主導によって最初のロシア鉄道（サンクト・ペトルスブルグ-ツァールスコエ・セロー）が造られた。
- 6) Karel Teige, *op.cit.1*, p.7.
- 7) *Ibid.*, p.7.
- 8) *Ibid.*, p.9.
- 9) Jiří Fischer : ボヘミアの建築家。ジーテクトともに「国民劇場」（1879）を設計する。
- 10) Josef Zíték (1832-1909) : ボヘミアの建築家。「国民劇場」、「芸術家の家」（1884）等チェコの国家的建築物を設計した。
- 11) Karel Teige, *op.cit.1*, p.23.
- 12) *Ibid.*, p.24.
- 13) *Ibid.*, p.24.
- 14) Josef Schulz(1840-1917) : ボヘミアの建築家。
- 15) Václav Roštlapil (1856-1930) : ボヘミアの建築家
- 16) Ferdinand Fellner der Jüngere (1847-1916) : オーストリアの建築家。
- 17) Hermann Gottlieb Helmer(1849-1919) : オーストリアの建築家。
- 18) 新ドイツ劇場 (Nové německé divadlo) は、1888年にプラハに設立される。
- 19) Karel Teige, *op.cit.1*, p.26.
- 20) *Ibid.*, p.26.
- 21) *Ibid.*, p.27.
- 22) *Ibid.*, p.34.
- 23) Bedřich Münzberger (1846 -1928 ) : チェコの建築家
- 24) Karel Teige, *op.cit.1*, p.36.
- 25) *Ibid.*, p.37.
- 26) *Ibid.*, pp.38-43
- 27) Hubert Gordon Schauer (1862-1892) : チェコの作家。
- 28) *Ibid.*, p.38. (Originally from; Hubert Gordon Schauer, "*Staviteľství budoucnosti*", *Národný listy*, 1890.)
- 29) *Ibid.*, p.38.
- 30) ジークフリート・ギーディオン, 『時間・空間・建築』, 丸善, 1954, 304 頁.
- 31) Karel Teige, *op.cit.1*, p.39.
- 32) *Ibid.*, p.39.
- 33) *Ibid.*, p.40.
- 34) *Ibid.*, p.40.
- 35) *Ibid.*, p.40.
- 36) *Ibid.*, p.39.
- 37) Jan Kotěra(1871-1923) : チェコの建築家。モラヴィアの最大の都市ブルノ生まれの建築家。ウィーンでオットー・ワグナーの元で学んだ後にプラハで設計活動を行う。

- 38) Karel Teige, *op.cit.*1, p.42.
- 39) *Ibid.*, pp.44-62.
- 40) *Ibid.*, p.44.
- 41) *Ibid.*, p.45.
- 42) *Ibid.*, p.46.
- 43) Jan Kotěra, "o novém umění.", *volně směry IV.*, S.V.U. Mánes, 1900.
- 44) *Ibid.*, p.190.
- 45) Karel Teige, *op.cit.*1, p.47.
- 46) *Ibid.*, p.47.
- 47) *Ibid.*, pp.59-60.
- 48) *Ibid.*, p.43.
- 49) *Ibid.*, p.60.
- 50) Pavel Janák(1882-1956) : チェコの建築家。チェコのキュビズム建築の代表的建築家。
- 51) Josef Gočár(1880-1945) : チェコの建築家。チェコのキュビズム建築の代表的建築家。
- 52) Josef Chochol(1880-1956) : チェコの建築家。チェコのキュビズム建築の代表的建築家。
- 53) Vlastislav Hoffman(1884-1964) : チェコの建築家、画家、セットデザイナー、家具デザイナー、著述家。チェコのキュビズム建築の代表的建築家。
- 54) Otakar Novotný (1880- 1959) : はチェコの建築家、デザイナー。芸術アカデミーの教授でもあった。
- 55) Karel Teige, *op.cit.*1, pp.91-108.
- 56) *Ibid.*, p.91.
- 57) *Ibid.*, p.91.
- 58) *Ibid.*, pp.63-90.
- 59) レイナー・バンハム著, 石原達二, 増成隆士 訳, 『第一機械時代の理論とデザイン』, 鹿島出版会, 1976, 124-125 頁.
- 60) Karel Teige, *op.cit.*1, p.65.
- 61) *Ibid.*, p.65.
- 62) *Ibid.*, p.65.
- 63) *Ibid.*, p.66.
- 64) *Ibid.*, p.67.
- 65) *Ibid.*, p.70.
- 66) *Ibid.*, p.68
- 67) Adolf Loos, *Ins Leere gesprochen 1897-1900*. Georges Crès et Cie, Paris und Zürich 1921. Nachdruck: Prachner, Wien 1987, (日本語版は、翻訳:加藤淳, 監修:鈴木了二・中谷礼仁, 『虚空へ向けて』, 編集出版組織体アセテート, 2012.)
- 68) Karel Teige, *op.cit.*1, pp.74-75.
- 69) *Ibid.*, p.75.
- 70) *Ibid.*, p.75.
- 71) *Ibid.*, p.75. (\*日本語訳に関しては、アドルフ・ロース著, 伊藤哲夫 訳, 『装飾と犯罪—建築・文化論集』, 中央公論美術出版, 2005. より引用した)
- 72) *Ibid.*, p.75.
- 73) *Ibid.*, p.84.
- 74) *Ibid.*, p.84.
- 75) *Ibid.*, p.65.

- 76) *Ibid.*, p.90.
- 77) *Ibid.*, p.85.
- 78) *Ibid.*, pp.89-90.
- 79) 五十殿利治, 土肥美夫 編, 『コンストルクツィア 構成主義の展開』, 国書刊行会, 1991, 172頁.
- 80) ロマン・ヤコブソンとデヴィエトスィルのメンバーとの交流の詳細については、  
西野嘉章, 『チェコ・アヴァンギャルド ブックデザインにみる文芸運動小史』, 平凡社, 2006. を参照されたし。
- 81) 「ポエティスムは生活の頂点であり、その基礎は構成主義にある。」(カレル・タイゲ, “ポエティスム”, 井口壽乃, 園府寺司 編, 『アヴァンギャルド宣言-中東欧のモダニズム』, 三元社, 2005, 69 頁. (Originally published as ; Karel Teige, “Poeteism”, *Host3.červenc*,1924, pp197-204.)
- 82) Karel Teige, *op.cit.*1, pp.109-241.
- 83) *Ibid.*, p.112.
- 84) *Ibid.*, p.113.
- 85) Karel Teige, K teorii konstruktivism, Stavba VII, č.1, červenc, 1928, pp7-12.
- 86) 日本語訳は、井口壽乃, 園府寺司 編, *op.cit.*, 106 頁.より引用した。
- 87) Karel Teige, *op.cit.*1, p.239.
- 88) *Ibid.*, p.113.
- 89) Jaromír Krejcar (1895-1949) : チェコの建築家、家具デザイナー、グラフィック・アーティスト、建築理論家。1918年から1921年までプラハの美術学校でヤン・コチェラと共に建築を学び、1923年に独立。デヴィエトスィルのメンバーとなる。
- 90) Karel Teige, *práce jaromíra krejcara*, Václav Petr, 1933.
- 91) *Ibid.*, p52.
- 92) Bedřich Feuerstein (1892-1936) : チェコの建築家、画家、著述家。チェコ工科大学でヨジェ・ブレチニクの元で学ぶ。1929年～1931年、日本のアントニン・レーモンドの元で働く。
- 93) Jaroslav Fragner (1898-1967) : チェコの建築家。
- 94) Evžen Linhart (1898-1949) : チェコの機能主義と純粋主義の代表する建築家、家具デザイナー。
- 95) Karel Honzík (1900-1966) : チェコの建築家、建築理論家。
- 96) Josef Havlíček (1899-1961) : チェコの建築家。デヴィエトスィルのメンバー。
- 97) Pavel Smetana(1900-1986) : チェコの建築家。
- 98) Oldřich Tyl (1902-1909) : チェコの建築家。
- 99) Jaroslav Valenta : チェコの建築家。
- 100) Bofumír Čermák : チェコの建築家。
- 101) Bohuslav Fuchs(1895-1972) : チェコの建築家。
- 102) Jiří Kroha(1893-1974) : チェコの建築家。
- 103) Josef Štěpánek(1889 – 1964) : チェコの建築家。
- 104) ロンド・キュビズム : チェコにおける後期のキュビズムの建築。
- 105) Karel Teige, *op.cit.*1, p.217.
- 106) *Ibid.*, p.217
- 107) *Ibid.*, p.217.
- 108) *Ibid.*, p.217.
- 109) *Ibid.*, p.217.
- 110) *Ibid.*, p.223.



111) *Ibid.*, p.230.

112) *Ibid.*, p.239.

#### 図版出典

図 1 Karel Teige, *M.S.A.2. moderní architektura v československu*, Odeon, 1930.

図 2 *Ibid.*, p.7.

図 3 *Ibid.*, p.9.

図 4 *Ibid.*, p.11

図 5 *Ibid.*, p.20.

図 6 *Ibid.*, p.21.

図 7 *Ibid.*, p.25.

図 8 *Ibid.*, p.36.

図 9 *Ibid.*, p.37.

図 10 *Ibid.*, p.47.

図 11 *Ibid.*, p.49.

図 12 *Ibid.*, p.95.

図 13 *Ibid.*, p.99.

図 14 *Ibid.*, p.71.

図 15 *Ibid.*, p.69.

図 16 *Ibid.*, p.115.

図 17 *Ibid.*, p.116.

図 18 *Ibid.*, p.119.

図 19 *Ibid.*, p.48.

図 20 *Ibid.*, p.108.

図 21 *Ibid.*, p.132

図 22 *Ibid.*, p.130.

図 23 *Ibid.*, p.160.

図 24 *Ibid.*, p.210.

図 25 *Ibid.*, p.209.

図 26 *Ibid.*, p.224.



### 第三章 1920年代後半から1930年代前半のカレル・タイゲの建築思想と チェコの建築の近代化過程

#### 第一節 展望

雑誌『スバヴァ (Stavba)』の1923-1924年冬号に発表された論稿「新しい建築へ向けて(K nové architektury)」<sup>1)</sup>において、ル・コルビュジェに対するタイゲの最初の批判的なコメントが掲載されている。また、タイゲは1927年の論稿「ハイパーダダ (Hyperdada)」<sup>2)</sup>において、建築の記念碑性への批判的な立場を示している。これらの経緯を経て、タイゲによる、ル・コルビュジェの1929年ジュネーヴに国際連盟10周年を記念して計画された「ムンダネウム(Mundaneum)」<sup>3)</sup>計画案についての同名の論稿は、同年1929年に雑誌『スバヴァ (stavba)』に発表された(図1)。

この論稿は、マルト・シュタム、ハンネス・マイヤー、エル・リシツキー等が主導する、ル・コルビュジェの作品において、審美化された非合理的な原則を攻撃するキャンペーンの一環であったとされている<sup>4)</sup>。このタイゲの批判に対するル・コルビュジェの反論である「建築の防衛 (In defence of architecture)」のチェコ語訳は、1931年に雑誌『ムサイオン (Musaion)』に発表されている。

加えて、タイゲは1920年代後半から1930年代にかけて、ル・コルビュジェに関する一連の論稿を発表している。上述の1929年の「ムンダネウム (Mundaneum)」から、同じく雑誌『スバヴァ』の1929-1930年号に「発展段階(Etapy vývoje)」<sup>5)</sup>を、1930年には雑誌『インデックス(Index)』に「ル・コルビュジェと新しい建築 (Le Corbusier a nová architektura)」<sup>6)</sup>を、それぞれ発表されている。そして、1932年には、雑誌『スタヴィテル(Stavitel)』に「ル・コルビュジェの"輝く都市" (Le Corbusierovo "Zářící město")」<sup>7)</sup>を発表している。

このル・コルビュジェについての一連の論稿に対するタイゲの立脚点は、1931年に雑誌『ムサイオン』に発表された論稿「ル・コルビュジェと設計競技 (Odpoved Le Corbusierovi)」の最後に置かれた次の言葉に要約されるものと著者は考える。

「これは兄弟殺しのような議論ではない。現代建築を高く評価するものを否定することはできない。しかし近代建築の発展はあなた(ル・コルビュジェ)に感謝を、そして崇拜をし続ける。セントロソロジュを近代技術の傑作として評価し、著書『プレシジョン』の総合的な批評と分析をしなければならず、これを"アンチ-コルビュジェ"と命名するであろう」<sup>8)</sup>

また、これらル・コルビュジェに関する一連の論稿に加え、タイゲは、同年の1930年に論稿「建築の社会学 (K sociologii architektury)」<sup>9)</sup>、「最小限住居とコレクティブ・ハウス (Minimální byt a kolektivní dům)」<sup>10)</sup>、と前述の著作『チェコスロヴァキアの近代建築 (M.S.A.2. moderní architektura v Československu)』を発表し、翌1931年には論稿「建築と階級闘争 (Architektura a třídní boj)」<sup>11)</sup>を発表している。

以上のタイゲの1920年代後半から1930年代前半に至る一連の論稿を踏まえ、1932年にチェコのヴァーツラフ・ペトル (Václav Petr) から、著作『最小限住居(Nejmenší byt)』<sup>12)</sup>が出版される。『最小限住

居』は1931年に執筆され、1932年に出版されている。本書は全15章、全367ページから成る大著と呼べる書籍であり、そのタイポグラフィもタイゲ自身が手がけている(図2、3)。

以下がタイゲの著作『最小限住居』の目次である。

『最小限住居』目次:

0章「まえがき」

1章「序論—建築の弁証法と住宅の社会学に向かって」

2章「住宅危機—住宅の不足と過剰生産・人口過密・住宅対策」

3章「国際的な住宅不足」

4章「チェコスロヴァキアにおける近代建築と住宅」

5章「現代都市の表層—都市の成長／地方からの人口流入／市街中心地の問題、スラム撤去の問題／摩天楼とアメリカ都市の発達／人口過密と交通／都市への供給／イギリスの田園都市／近代都市計画：トニー・ガルニエとル・コルビュジェ／都市と都市環境の危機／都市と地方の対立の解決」

6章「19世紀における家庭と住宅—家族住宅／賃貸住宅／転貸」

7章「住宅形式の確信と現代住宅の改善—フランク・ロイド・ライトとル・コルビュジェ」

8章「モデル居住区と住宅展示会—」

9章「モダン・アパートとモダン・ハウジング」

10章「最小限住居」、11章「低層、中層、高層」

12章「近代都市計画」

13章「新しい住居形式に向かって」

14章「都市と地方の対立—いくつかの引用」

15章「結論—大衆住宅の動き」

この『最小限住居』出版当時の時代背景には、第一次大戦後に急速に拡大したヨーロッパ全域における住宅危機の問題があるとされ、それは「最小限住居の問題は、近代建築の今日の社会的現実と直面する差し迫った課題と、それに付随する深刻な住宅危機と直面している」<sup>13)</sup> という状況にあった。この当時のヨーロッパにおける住宅状況について、エル・リシツキーは1930年に出版された著作『革命と建築』の中で次のように述べている。

「住居の問題は、ヨーロッパ諸国において最も切実な問題である。ヨーロッパでは、戦争によって中断された建設活動を—戦前とは違った経済的、技術的条件のものにおいてではあるが—再開することが、その課題であるのに対して、われわれの場合には、根本的な文化価値にかかわる新しい社会問題を解決することが重要な問題となっている。我が国においては、大都市の労働者の住む湿っぽい地下室から、多くの部屋を備えたアパートや個人の別荘にいたるまで、住居様式のさまざまな違いは、すべて破棄された。ソヴェートの建築家には、互いに争いあう個人のために(ヨーロッパの場合)ではなく、民衆のために、新しいタイプの住居ユニットを標準形式としてつくりだすという課題が課せられたのである」<sup>14)</sup> (エル・リシツキー、『革命と建築』)

このような時代背景の中、1929年のフランクフルトでの第二回 CIAM(近代建築国際会議)において「最小限住居(Habitation minimum, Wohnung für das Existenzminimum minimum)」の問題が取り上げられる。チェコでは1930年にタイゲが中心となり CIAM チェコ・グループが結成され、同年のブリュッセルの第三回会議に初参加している。この会議の期間中、ベルギー・グループが「最小限住居週間 (Journées de l'habitation minimum)」という展覧会を開催し、チェコ・グループはここで活発に活動したとされ、タイゲ自身は「チェコスロヴァキアにおける新しい建築と住宅問題」というレクチャーを行っている。

これらの時代背景のもと、本書には CIAM の依頼でタイゲがまとめたレポートが含まれ<sup>15)</sup>、本書のタイトルも上述の CIAM における「生存最低限の階層の住居」の用語から付けたとされている<sup>16)</sup>。そしてタイゲ自身は、本書を「最小限住居を近代建築の問題の焦点とし、CIRPAC での仕事と CIAM をバックアップする意味を持つもの」<sup>17)</sup>と位置づけている。

そして、前述のタイゲの1920年代後半から1930年代前半にかけての一連の論稿において形成された主題も『最小限住居』において、再度まとめられている。

これらのことから、本書は当時の CIAM を中心とするヨーロッパ近代建築の国際的な動向に同期した1930年代前半のタイゲの建築思想が集大された著作であると筆者は考える。

以上、第三章の二節では、ル・コルビュジェに関する一連の論稿の分析から、この時代のタイゲの建築理論の形成の過程を整理したい。

そして、三節では、第二節の一連の論稿についての考察から抽出された、この時代のタイゲの建築論において中軸を成すいくつかの主題に加え、前述の CIAM を中心とした当時のヨーロッパの建築を取り巻く動向とを照らし合わせ、著作『最小限住居』にいたるタイゲの建築に関する論稿の主題を筆者が整理した。

そこから本書『最小限住居』におけるタイゲの言説を「建築と社会の関係」、「女性の解放と建築」、「近代建築批判」、「都市・建築モデルの提示」、「自国チェコの動向への反応」の五つの評価軸に分類し、分析を行いたい。



図1 カレル・タイゲ、「ムンダネウム」(『スバヴァ』1929-1939)

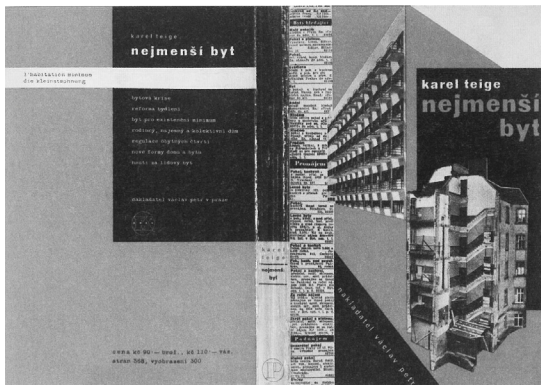


図2 カレル・タイゲ、『最小限住居』(1932) : カバー



図3 カレル・タイゲ、『最小限住居』(1932) : 表紙、裏表紙

## 第一節 ル・コルビュジェと近代建築に関する一連の言説

### 1) 「ムンダネウム(Mundaneum)」

「ムンダネウム」は、1929年ジュネーブに国際連盟10周年を記念して計画された世界文化センターの名称である。ル・コルビュジェはその施設の中心に位置づけられていた「世界美術館」の設計を担当し、「成長する建築物」なる、螺旋ピラミッド構造をもつ美術館を計画する(図4)。

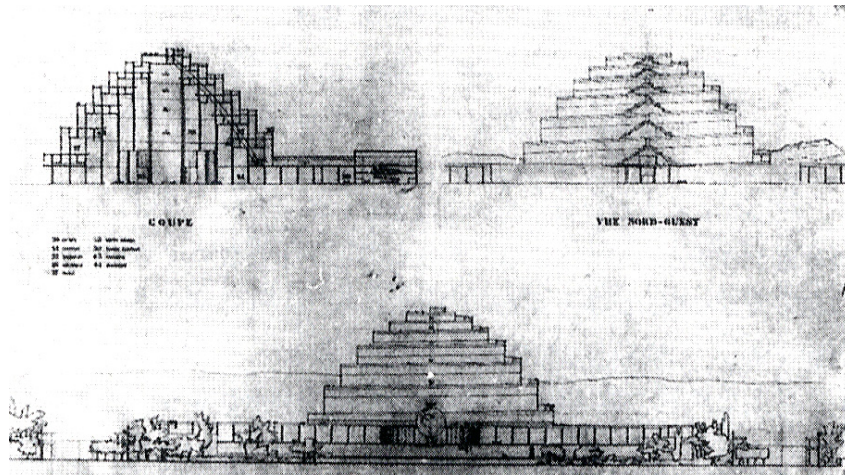


図4 ル・コルビュジェ、「ムンダネウム計画」(1929):「世界美術館」の断面図と立面図

このル・コルビュジェの計画案を受けて、タイゲは1929年、雑誌『スバヴバ』に論稿「ムンダネウム」を発表する。タイゲによれば、この計画は戦後の傑作となるはずのものであった。その建築は「歴史上最最大の戦争を起源とする国際連盟によって原理と永遠の平和を組織立て、世に伝える実験的試みであり、争う余地のない不完全な有機体とされるもの」<sup>18)</sup>になるべきとタイゲは捉えていた。ここでタイゲは、国際連盟の原理とムンダネウム計画の関係について以下のように述べている。

「ポール・オトレが示すように連盟は政府の連合であり、けっして国民との条約が結ばれているものではない、つまり文化的ではないのだ。この拠点は政治的であり、文化的ではない。軍事、法、ここでの絶対的権力は確信、明晰な見解に基づいているものではない。国際連盟の宿命は平和にある、そして平和は普遍的な懸念であり、政治に限られた話ではない。言い換えれば、秩序の維持は「広範な視野の国際連盟」が必要で現在の連盟はその一部としてしかないのである。オトレは「広範な視野の国際連盟」によって世界にちらばる国際労働組合の科学的、経済的、産業的提携と連邦政府を理解する。(世界初の国際交流協会は1842年に設立)これらの国際労働組合のめざすものは国際連盟と一体となって世界知的階級社会を築きあげることである。そしてこの中心的存在となるのが「ムンダネウム」なのである」<sup>19)</sup>

と、タイゲは国際連盟の理念から導き出されるムンダネウムのあるべき建築的なプログラムを位置付けている。そして、そのプログラムに基づく建築の位置づけについて、

「ムンダネウムは現在の最も高水準な知的、文化的施設となり、フランスの研究機関や大英博物館、

ベルリン、レニングラード、ワシントンの研究機関と肩を並べるものとなるであろう。世界近代の基点としてのムンダネウムは徐々に完全体へと向かう。初期段階では一時的な大学、国際労働組合の施設を収容する世界図書館、世界美術館が求められる」<sup>20)</sup>

と、タイゲは定義している。

この、タイゲによって導き出された国際連盟の理念に呼応したムンダネウムの建築的なプログラムに対し、ル・コルビュジェが提案した計画案は前述の通り「螺旋ピラミッド構造」の形態をもつものであった。このル・コルビュジェ計画案に対してタイゲは、

「この作品でル・コルビュジェは国際近代建築の歴史上において世界的な尊敬、称賛を得る人物像を獲得した。しかし、全コンセプトがこのサイトプランに集約されているが、混乱を誘い、古風な印象を与えていると感じるのは私だけであろうか。美術館のピラミッド形状は機能的な妥当性が皆無であり、エジプトよりむしろ古代メキシコ遺跡の様相をただよわせている」<sup>21)</sup>

と、自らが想定した、国際連盟の理念と対応したムンダネウムの建築的なプログラムに対する「ピラミッド型」という建築形態の齟齬を指摘している。それは主にピラミッド型の形態が誘発する古代的な歴史性のイメージについてのと、建築における機能性の齟齬への指摘であった。

「ムンダネウムのアクソメトリック図法の見せ方はエジプト、バビロン、アッシリア、マヤ、アステカまたはペルヴィアの考古学的な遺跡の航空写真を見せられているかのようである。これらの歴史的な懐古は際立ったものである。古代アメリカ大陸絶頂の文化を築きあげたマヤ文明の遺跡を思い出してみようではないか。これらの世界的に有名な廃墟（ウシュマル、チチェンイツァ、ユカタン半島のパレンケ、そしてグアテマラのコパン）はカルト宗教、埋葬地を奉る形而上的都市、主導者・聖職者のいる都市、太陽、星、月を奉る大聖堂としてのピラミッド（一人一人の神がいる神聖な空間、ピラミッド、宮殿建築にみられる原理的な形状すなわちキューブ、角柱、円柱、主軸に対するシンメトリの水平性の強調）を表象する。ル・コルビュジェのムンダネウム計画はもちろんメキシコ遺跡の廃墟のように装飾、彫刻、外装によって飾られているわけではない。かわりに近代的建設技術を駆使している。しかし近代建築は如何にして劇的に古代遺跡に類似するのであろうか？ル・コルビュジェのムンダネウムの非近代的で廃れた様相の根源はどこに存在するのであろうか？この過ちと幻想はなにかから発生しているのであろうか？」<sup>22)</sup>

と、その建築的な形態における歴史性と、近代建築という概念の間にある根本的な疑問を呈している。ここからタイゲは、ル・コルビュジェの計画案に見られる矛盾の根底に国際連盟それ自体が持つ矛盾を見いだしている。

「ムンダネウムの計画を綿密に分析する余地はない。教会がいかに近代科学に干渉するか（神聖なる空間はピラミッドの思想に従属するという事か？）、政治、外交、凝り固まった政権、軍事的な国家間の敵対関係というさまざまな問題を国際協力が解決するという考えにオトレがいかに辿りついたのか、多様な社会システムから端を発する国際連盟の統制下にある世界機関がいかにそれらを集約し、世界の変貌を計画的に推敲することができるのか…。国際連盟が政権、軍事力、外交と共同体であり、さらなる広範な連盟、すなわち国民が文化的活動を行った結果の政治的組織、つまり国際連盟が知るよしのないコンセプト、プログラムには含まれない、近代における人類の国際的政治同盟では



ないかぎり、ムンダネウムの提案は具体的な理論的根拠、現実的な機会をもって実現されうるものではないということだけは言える」<sup>23)</sup>

つまり、ムンダネウム計画は国際連盟の理念が持つ矛盾そのものが形態化されたものとタイゲは分析したといえる。ここで前景化された近代建築という枠組みにおける理念と形態の矛盾について、タイゲは次のようにその問題の構造の一般化を試みている。

「近代建築は抽象的考察、形式的なアカデミズムの擁護ではなく、実際的な機能、要求から生まれるものである。現実的な要求を備えたプログラム、工場、橋、鉄道駅、オフィス、労働階級者の住宅、学校、病院、ホテル、アパートで、こうした基本的な理解と問題設定があつてはじめて純粋な近代建築は生まれるものである。今日、教会、宮殿、城に関して、純粋で正確な創造的建設方法で現代の要求に則した建築的解決方法は存在しない。（「新しいプラハ・クラブ」は近代的劇場の理念をはっきり理解することができないという妥当な理由で新たな大劇場の建設に反対している。したがって建築家は実行にうつすことはできない。）革命と自由の栄光にすがりつくモニュメンタルな誓いの遂行にまい進した建築、現代の凱旋門、祝祭ホール、墓、宮殿、城は醜悪なものとなるであろう」<sup>23)</sup>

とし、ル・コルビュジェのムンダネウム計画案に現出した国際連盟の理念と形態の矛盾点から、そこに前景化された宗教性、歴史性、権威性に基づく記念碑的な性質は、「近代建築」という概念とは合致しないものという考えがここに示されている。ここに見られる、タイゲの近代建築という枠組みに対する批評的な姿勢は、彼の建築思想の根底の一端を成していると筆者は考える。

そしてタイゲはこれらの考えをもとに、前近代における建築が内包する芸術性の観点から、「プロポーション」という審美的な規範が近代の建築にも潜在する二重構造を指摘している。

「明らかな歴史主義、アカデミズムに傾注するなかで、ムンダネウム計画は芸術のように思考された建築の実行不能性を露呈している。またル・コルビュジェの失敗は、われわれの構成主義的見解がつねに戦ってきた美的、形式的理論、すなわち黄金比、幾何学的プロポーションである」<sup>24)</sup>

とタイゲは述べており、ル・コルビュジェのムンダネウムの計画案の根底に「プロポーション」という審美的な規範を見いだしている。

タイゲはつづけて、

「ムンダネウムの主要区域内の矩形の両側面を測量すれば、黄金比のプロポーションが隠されていることが分かる。さらにこの矩形以外のプロポーションではモニュメンタルな統一と調和したプロポーションも黄金比によって形づくられている。そしてさらには世界美術館の4隅の頂点は方位の4点と厳密に一致している。光を考慮したうえで、理論的な配置計画がなされるはずの美術館ホールの窓は過剰な象徴性によって犠牲になっており、ムンダネウムの最頂点のピラミッドは群を抜いて高くそびえ立っている。ムンダネウムはピラミッドの最頂点から交差する主要軸線によって全体的に統括されており、これらの軸が黄金比に分割している意図が容易に見受けられる」<sup>25)</sup>

と、ムンダネウムの計画全体（図5）が「プロポーション」によって規定されていることを指摘している。タイゲは、ここで使われている「プロポーション」という定義のもつ意味合いについて次のように述べている。

「角柱形の個々の建築物はムンダネウム全体のプロポーションのリズムに従いながら、黄金比によつ

て決定されている。今日の歴史美学がいまだにこれを信じ、有名な作品のほとんどはこの方法で調和がとられている。よってムンダネウムはプログラムの現実的で理論的な分析から生まれたものではなく、(なぜならこのプログラムは分析や解答をだすことが不可能であるからである)しかしアприオリな美と抽象的幾何学の考察という歴史的典型から生まれたものである。これは実際、コンストラクションの解答ではなく、コンポジションにすぎない」<sup>26)</sup>

ここでタイゲは、「プロポーション」という規範に内在する歴史的な類型と幾何学的な操作を「コンポジション」と定義し、建築それ自体を「コンストラクション」と定義することで、この両者のもつ性質を区別している。この着想はハルネス・マイヤーから影響を受けたものと考えられ、タイゲは本文中でマイヤーの言葉として以下を記している。

「この世のすべては以下の公式の産物である(機能×経済)。よってどれひとつとして芸術の産物ではないのである。あらゆる芸術は構成で、それ故に特定の目的に適するものではない。すべての生活は機能であり、それ故に芸術ではない。"船のドックのコンポジション"とは笑止千万である。しかし都市計画はいかにして設計されるのか？住宅のプランはどうか？コンポジションか機能か？芸術か生活か？」<sup>27)</sup> (ハルネス・マイヤー)

その上で、タイゲはムンダネウムをコンポジションであるとしている。そして、タイゲはこの考えを元に「コンポジション」と「コンストラクション」による「芸術」と「建築」の差異から、ル・コルビュジェのムンダネウム計画を「芸術」に位置づけている。

タイゲは、ムンダネウム計画に見られる黄金比のプロポーションの矩形である敷地、黄金比で引かれた主要連絡通路の軸、ピラミッドの象徴的なオリエンテーション(タイゲは「ポケット・サイズの方位計で事足りる機能を巨大な規模で演出している」<sup>28)</sup>と、これを揶揄している)等の「コンポジション」が実践的機能を無視し、古典的な審美的方程式である黄金比を近代の都市の問題に用いる矛盾をここで指摘している。

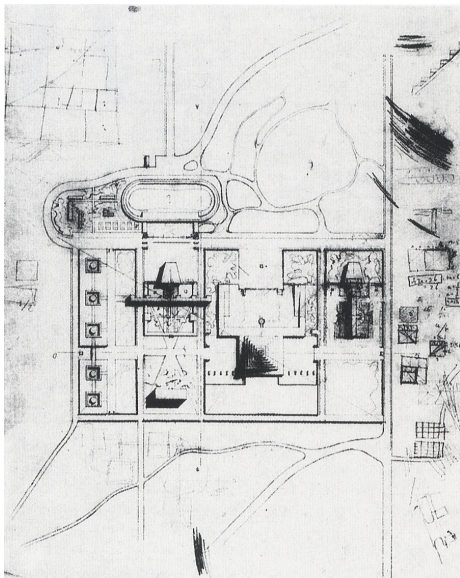


図5 ル・コルビュジェ、「ムンダネウム計画」：配置図

さらにタイゲは、ル・コルビュジェが「芸術」の立脚点から行う形態的な操作について、他の建築作品にも同様の指向性を見いだしている。

「ル・コルビュジェは彼の主張する「基準線」を満たすために、ヴァウクレッサン邸の2本の支持材のないスラブをファサードに突き出させている。この操作は、レオン・バッティスタ・アルベルティが個々の目的ではなく、内部空間、ファサードのプロポーションから窓の面積を必然的に導きだした方法と極めて似ている。アルベルティが、例えば階段を混沌とした要素の中で構成的に秩序を与えているものとして説明する点などに顕著に現れている。芸術としての建築は古物収集の呪縛から逃れることはできないのである」<sup>29)</sup>

とタイゲは述べ、ル・コルビュジェの近代の住宅に、ルネサンス期の建築家であるレオン・バッティスタ・アルベルティのプロポーションの操作が引用されていることを指摘している。タイゲは、これらの芸術的な操作は、近代における建築、すなわち「コンストラクション」に対する付加物として捉えていたといえる。それはつまり、

「もし美が実用主義に干渉するのであれば、建築的創造は不完全なものとなる。すなわち建築の仮面となり、素材的価値を付加する。(快適感、暖かみ、安定感など) 伝統文化によってこれは現在まで犠牲を払っても、義務だと見なされてきた。実用的機能性と横暴な芸術が混合し、一体化することは望ましくないと証明されたにもかかわらずである」<sup>30)</sup>

と述べているように、タイゲは建築から付加物（タイゲはここで「仮面」と称している）を切り離すことで、「コンストラクション」の抽出を試み、それはル・コルビュジェに代表される近代の建築家の作品に潜在する「芸術」の二重構造を明らかにすことでもあったと筆者は考える。

「もしムンダネウム計画に大いに熱中してしまうとすれば、それは何故ならこの創造者が近代建築を代表する人物であるからであり、創造者とともに近代建築全般に警告を出さなければならないのである。ムンダネウムは理論、伝統的偏見、「住居-宮殿」が含意するすべての意味での大失敗の実例を示している。つまり実用的建築が芸術的な"付加価値"をもつ、もしくは"支配"された状態を示す。現時点を出発点とし、アカデミズムや古典主義に傾倒することができるし、一方で科学的、技術的、産業的建築をめざして、"住宅は住むための機械である"という充実した現実をありのままに述べたモットーに立ち戻ることもできる。こうした両極的な立場の隙間には愚かな計画と妥協の答えしか存在しない」<sup>31)</sup>

つまり、タイゲにとってル・コルビュジェのムンダネウム計画は、"住宅は住むための機械である"というル・コルビュジェが標榜する近代建築の理念に対して、それが実践される際に芸術性や記念碑性やアカデミズムが混在する、近代建築という枠組みに潜在する二重構造を体現するモデルであったといえる。

## 2) 「発展段階(Etapy vývoje)」

タイゲは、雑誌『スバヴァ』の1929-1930年号に発表した論説「発展段階」において、ドイツ帝国工作連盟の展示会に当時の建築の進化と拡張の状況を見だし、その中に「新しく、国際的な」建築の形態の変化を確認している。その変化についてタイゲは「構成主義のプログラムの見解の改新」<sup>32)</sup> であるとしている。この当時のドイツ工作連名の博覧会を中心とした近代建築の最新の状況についてタイゲは、

「近年の材料、建物、設備、すべての近代的な建設の技術進歩は、歴史的伝統のコンセプトである「産業資本時代の幕開けとともに出現した建築とエンジニア技術」の分裂へと導くことを余儀なくされるだろう。フランス革命、イギリスとフランスでの初期の鉄の建設技術、後に建築の方向を大きく転換したアメリカの超高層ビルの骨格を起源とした新たな方法、生産の関係の成り行き、社会的構成のエネルギーの明確化は古典的美学に制裁を与え、アカデミズムの封建的な精神は、現代建築の主要な地位から姿を消し、その意味合いは多かれ少なかれ、二次的になった。そして国際化の起爆剤となったのが前述したドイツ帝国工作連盟の博覧会である」<sup>33)</sup>

と、当時のヨーロッパにおける近代建築を取り巻く状況の方向性について述べている。それは、ゴシック、ルネサンス、バロック、帝国様式等の、「ヨーロッパ内」での建築の潮流から、19世紀世紀末～20世紀初頭にかけての産業技術の発展による新たな建築の概念が、国民国家を超越していく変化であるとタイゲは捉えていた。

タイゲはこの時代の趨勢について、

「生産と経済の需要の圧力によって、個人主義的勢力は一律に標準化されるであろう。近代の流行と構成的国際活動の結果としての展覧会はここ2、3年の近代建築を定義するにあたり、近代建築の工法を評価する折よい機会であった。これは近代建築の潜在的な見込み、起源がどこにあるのか、そして発展段階と方向性を追求するもので、通常我々はここ三十年を近代建築として話をすすめている。そして近代建築以前の装飾を置くものが存在することを前提に考察する」<sup>34)</sup>

と、近代建築とされるもの発展の状況にあることを示している。

「しかし、新しい建築の誕生は、19世紀後半に芽生えた産業技術のいくつかの新しい理念の出現によって規定されず、むしろ世界の社会構造に根ざした生産過程の変動に基づいている。新たな建築は機械化した産業、資本社会の結晶化とともに生まれ、おそらく1830年頃の革命が起こった時代の反動的精神ではなく、製造から産業社会の変遷への生産システムが起源となっている」<sup>35)</sup>

とタイゲは述べ、19世紀以降に発生した近代建築という概念は、産業技術というハード面に因るものではなく、社会構造と生産システムというソフト面にその基盤を置いているという見解を示している。

この観点から、タイゲは20世紀における住宅が単なる技術的な変化のみが伴い、その実体は未だ19世紀以前の社会階級構造の内にあることを指摘している。

「現代建築の展覧会は生活環境の組織化、壮大な都市の発展による収益の最大化の需要がささやかれているなかで正当な時期に問題提起をした。19世紀を通じて、建築は完全に産業や商業に特化し、伝統・形式化された偏見は歴史的モニュメントを過大に評価したが、住居問題の新たな解決方法につながることはなかった。住宅は19世紀の大邸宅（もしくは宮殿）、賃貸バラックで構成され、少数特権的な資本主義において、この図式は大きな変化がないまま、何世代も続いた。貴族の大邸宅と騎士階級の城が、近代のヴィラ、マンション、別荘など地方個人主義的な住居の類型学を発展させていった」<sup>36)</sup>

とし、近代における住宅問題が単なる類型学に陥っていることを指摘し、そこからタイゲは、近代における社会構造、生産システムの変化に対応した住宅論を考察する必要性を説いている。

以上のように、タイゲはその基盤となる社会的な要素を整理し、近代における住宅論の確立へと向かう。

タイゲは、その住宅論を編纂するにあたって、まずフランク・ロイド・ライトを取り上げている。

「この鍵となるのはフランク・ロイド・ライトの住宅であった。アカデミズムの推すルネサンス宮殿の対称性を残しながら、ライトは自由に水平にプランを発展させ、開閉の空間を統合した。しかし、ライトのスタイルの類は、一般的な妥当性があると主張することはできない。有産階級1万人のための豪華なヴィラであるからである」<sup>37)</sup>

と、ライトの住宅におけるプランの特性を評価しながらも、その一般性の欠如を指摘している。次にタイゲは、ライトの"豪華なヴィラ"と引き合いに、ル・コルビュジェの近代の住宅における理念を置いている。

「"住宅は住むための機械である"をモットーとして、住宅問題の新たな解決方法を普遍的に模索したのはル・コルビュジェであった。ただし、住宅の個別の問題を解決しようとしたわけではなく、この問題を理論的に近代都市にからめて考察した。個人の空間をセルとしてアパートを普遍的な近代都市、壮大の都市の中において計画した。つまり、それは普遍的な私たちの住宅で、別荘のようなプライベートなものではなかった。そして、やがて集合住宅の問題に直面する。賃貸アパートの伝統的な建築、固定された不動のヴィラを拒否し、置き換えた。ル・コルビュジェの建築プログラムである大都市と住宅、彼の理論である"純粋主義建築"のプロジェクトは世界の現代建築に多大なる影響を与えた」<sup>38)</sup>

と、近代建築という枠組みの確立期におけるル・コルビュジェの理念における普遍性と純粋性に対して評価している。タイゲはつづけて、

「近代建築の発展に関する歴史的任務はル・コルビュジェに捧げられ、もし比較できるとするのなら、ピカソが近代絵画を代表するものと同じ流れである。(中略)ピカソとキュビズムにおいて絵画がめざましく発展したように、近代建築の発展は、ル・コルビュジェの"純粋"理論において躍進した」<sup>39)</sup>

と、ル・コルビュジェの近代建築の創成期における理論的な革新性を強調している。

「純粋主義建築は先例に従った結果として洗練される。すなわち技術の発展は新たな建築の大前提となり、建築の芸術的印象はただ機能的な素材にあり、建築の崇高さは装飾の幻想にあるのではなく、原理的な幾何学のプロポーションの調和にある。純粋主義は、建築を装飾芸術ではなく、華麗な照明の光と影が映る調和のとれた表面と高貴で華麗で正確なヴォリュームであると定義する。また純粋性が建築の実践であるのであれば、コンポジション、理論が、美しく、美的効果を我々に与える」<sup>40)</sup>

ここでタイゲは、ル・コルビュジェの純粋主義の建築が新たな審美性を内包していることを示唆している。そしてタイゲは、機能的形態と建築的形態の差異において、建築的形態が生来的にもつ永久性を指摘し、近代におけるそれとの差異を示している。

「機能的形態は生きており、発展するが、進行停止することがあるが、この発展の目的はこの段階をふむことではない。パルテノン神殿は、定義された形態ではなく、廃墟である。ギリシャの神殿は500年間妥当性を保ち続け、めざましい世界の社会変動が建築様式を変化させていたわけではなかった。対照的に、我々の近代建築は近代の生活スタイルに応じて変更する必要がある。すべての工業製品と同じように、化合物の形状が同質であり続けることはなく変化をとげるように、再構築されていくべきなのである」<sup>41)</sup>

つづけて、

「不変の永遠の形態は、死を意味するのである。つまり遺跡を指す」<sup>42)</sup>

と述べ、タイゲは近代以前の建築と近代の建築における形態の差異を、その社会的変動との連動性に見いだしているといえる。

「近代的な建築は永久性を希求するのではなく、半永久性を望むのである。モニュメントとして保存されるのではなく、近代建築は活動しながら、保たれていくのである。形骸化されることはないのである。実際に建築は、活発に活動しており、機能を失ったネクロポリスのピラミッド記念碑ではないのである。形態は機能を失ったときに、共に消滅すべきなのである」<sup>43)</sup>

とタイゲは近代における建築の形態に対する概念について述べている。

ここでタイゲは、古典建築と近代建築を、永久性と更新性と置き換えて定義している。そして、タイゲは不変の形態によって、建築が記念碑性を帯びると捉えている。

「歴史主義的で近代に表現主義を過剰に正当化する建築モニュメントは時代を超越した作品をつくることはできない。"永遠の都"などは存在しなく、遺跡（ローマ）や模範（ニュルンベルク）が唯一存在するだけである。建築モニュメントは文化の絶頂としてあがめられてきたが、それは創造の形骸化にすぎない。ざっと見たところ、いわゆる純粋さとは歴史家によると建築から美の永遠の規範を割り出すことができる。ファサードは古典的な文化である。一般的に美として認識され、実際の需要は日々変化しており、趣向や美的知覚はそう簡単に変わるものではない。例えばパラディオ、ブルネレスキ、ブラマンテにしてもかれらの作品のファサードのみが受入れられるだけではないか。現段階の状況、機能的側面を評価することなく、建築に関する"純粋なる美の審理"を探求しても、それは表面的である。実際に、ル・コルビュジェは迷信じみたアカデミズムや古典美学を洗い流した」<sup>44)</sup>

と、ファサードに象徴される審美性を伴ったモニュメントとしての建築と、そこから価値転換を行った近代の建築の確立におけるル・コルビュジェの功績を改めてここで示している。それを踏まえた上で、タイゲはル・コルビュジェの実際の作品におけるル・コルビュジェ自身が内包する矛盾点について以下に述べている。

「ル・コルビュジェが黄金分割、あるいは他のルールを建物に適用させていたのであれば、この操作は矛盾である。コンクリート構造を明確化したプロポーションは石工の建築と同じプロポーションをもつことはできない。近代的に標準化された建設部品の集合体のプロポーションがルネサンスの宮殿のようなヴォリュームになるはずがないのである。実利主義のあるべき姿、近代建築の機能的側面は、プロポーションの構成の制限内で抵抗ができるものなのである。例えば、ラ・ロシェ（La Roche）邸のサイド・ウイングは厳格なプロポーションの対象の一部であるが、建物の外側まで飛び出ている。ル・コルビュジェの理論は古典的な美学の境界を越えていないことを示している」<sup>45)</sup>

ここでタイゲは、ル・コルビュジェ自身が標榜したはずの近代の建築における機能性、その近代の素材と形態との実利的な関係性の中に、美学的なプロポーションが潜在している矛盾点を指摘している。

「今、ル・コルビュジェはスローガンを提出する。"住宅は住むための機械である"。住宅、宮殿...は同じ活動の産物で、同じ製品である。そうした家は目的にかなうためにある、なぜなのか？ シェルター、寒さ、暑さ、また全ての人々のさらなる必要を満たすために。つまり、ル・コルビュジェにとつ

て宮殿は住むための機械であり、それは建築の崇高、威厳、つまり芸術性が伴うのだ」<sup>46)</sup>

と、タイゲは述べている。ここでタイゲは、ル・コルビュジェのスローガンにおける「住宅」という語彙に社会階級的な「宮殿」も含まれると意識することで、ル・コルビュジェの「住むための機械」が具現化される際に内包された古典的な芸術性を前景化させたといえる。タイゲはここで、ル・コルビュジェのスローガンと実践の矛盾を指摘することで、近代建築という枠組みが依然として古典的な芸術性を内包している二重性を顕在化させたといえる。

「二項の相反する間で建築は自由な実用性を混合するのである。すなわち実用性が劣勢の叙情的側面が優勢な建築（宮殿や住宅）である。しかし、ル・コルビュジェは、我々の時代は決定的な"建築の転換期の瞬間"を迎えたと述べる。それは建築の潜在的な機能の形式が与えられた宮殿の威厳に "住む"機能が付加されたのである。これは実用性が叙情性を超越したということである」<sup>47)</sup>

タイゲはここで、前述のル・コルビュジェのムダネウム計画に関する論稿に用いた理路を再度用いてル・コルビュジェの住宅を分析している。

「ル・コルビュジェの新しい作品の多くが "妄想の宮殿 (bludem paláce)" に苦しむ。私はすでにムダネウム計画においてこの種の批判を行った。パリの西部郊外の自治区にあるガルシュ邸 (villa Garches) も社会統制を欠いた豪華な建築であったが、無制限の経済的なチャンスからは逃れられなかった。ただ住むに適する住宅には不釣り合いで大きく余分なロマン主義的なテラス、モックアップ、そしてホールや廊下に見られる社会的需要の黙殺はバロックの大豪邸や中世の城をつくっていることとかわらない」<sup>48)</sup>

これらのル・コルビュジェの建築に潜在する社会階級的な指向性と、その建築のプログラムと材料の性質との齟齬をタイゲは指摘している。

「また、ル・コルビュジェの別の弱点はコンクリートに見られる。ジークフリート・ギーディオンは、コルビュジェは鉄筋コンクリートの伝統を攻略できていないと認識している」<sup>49)</sup>

ここでタイゲは、鉄筋コンクリートという近代の材料が持つ強固な普遍的性質と、社会構造に連動した建築のプログラムの可変性が相反していることを指摘している。

「コンクリートは強く、固く、力強い。しかし、私たちの住居は強固であるべきではなく、柔軟に適応できなければならないのである。都市の住宅はホテル、カフェ、オフィス、ワークショップ、学校に使われ、壁が変化し、また他の目的に適応され、再構築されるのである。柔軟な適用が不可能な状況では多大なる支出が生まれ、彼らはその責任を他人任せにしているのである。適応のできない建築など、遺跡以外のなにものでもない」<sup>50)</sup>

と、タイゲはコンクリートという材料の持つ性質と近代の建築のプログラムとの齟齬について述べている。

このようにタイゲは上述のル・コルビュジェへの考察を経ることで、自らの近代の建築についての理論を体系化させていったといえる。そして、それは「社会学としての建築論」として著作『最小限住居』においてまとめられるものであり（本章第3節1項を参照）、この「発展段階」という論稿には、その一つの評価軸が形成される過程が確認できる。このタイゲの住宅の問題に関する評価軸の一端とは、タイゲ自身の言葉を借りれば、

「住宅危機は、他の社会問題と関係をもちながら、超越した理論的な形式となって解決に向かうのであ

る」<sup>51)</sup>

とされるものであった。

### 3) 「ル・コルビュジェと新たな建築 (Le Corbusier a nová architektura) 」

タイゲは、1930年、雑誌『インデックス』に発表した論稿「ル・コルビュと新たな建築」の冒頭で、ル・コルビュジェの初期の作品の創造的な演出、すなわち彼の一連の住宅プロジェクト、ガラスの超高層集合住宅プロジェクト、そして都市計画「輝く都市」について、「新たな建築の時代の幕開けとなった」と評している<sup>52)</sup>。タイゲは近代建築におけるル・コルビュジェの歴史的役割をピカソの仕事に例えている。

「もしル・コルビュジェの作品を近代の初期としてとらえるのであるならば、かれの理論・プログラム・プロジェクトへの批判は新たな時代へと発展するための試みとしてとらえられるであろう。8年、10年前、ル・コルビュジェでさえ「ユートピア思想」「素人芸」として数々のののしり・抵抗をのりきってきた中で新たな近代建築の時代を築き上げてきたのである」<sup>53)</sup>

と、タイゲは近代建築の先駆者としてル・コルビュジェの業績を称えている。そして、その後の時代の変遷にともなう状況の変化について、タイゲは以下に述べている。

「約10年前に現代芸術の権威に対して反論し、世界的な称賛を得たコルビュジェに異議を唱えたものは少数であったが、今日ではコルビュジェの前衛的な立ち位置は現実とは遠く離れたものとなり、彼のセオリーや計画に反対するものは増えていった。歴史は先導者に対して誤った事例を与えるが、コルビュジェに関しては、ディベート、議論から有益な、実用的で深い洞察を伴う訓戒を学ぶことができ、机上に置かれた問題を解明する手だてとなる。建築は現代社会の卓越した状況をどの分野よりも如実に反映している」<sup>54)</sup>

と、ル・コルビュジェの近代建築という枠組みにおける業績の再検討の必要性を示唆している。

タイゲは、技術発展によって前世紀に機械化したマクロ産業が新たな建築を誕生させ、工場や交通インフラはエンジニア技術によって刷新されたという近代の建築の変遷に対する認識を持っており、また、対象的に封建時代の名残である絶対主義的な長い歴史のアカデミズムによる都市形成は生活環境を硬直化させたとしている<sup>55)</sup>。タイゲは、このような当時の近代建築を取り巻く状況から発生した問題点を、ル・コルビュジェの住宅作品を俎上に上げることで対象化を試みたといえる。

「近代建築の発展の歴史の中でのル・コルビュジェの立ち位置はジークフリート・ギーディオンによって住宅と都市の主要な役目の問題提起された歴史的瞬間であると定義された。一目見えてみて、ル・コルビュジェの近代的住宅のコンセプトは、包括的な発展をあらわしているようである。しかしその発展は住宅の社会的特徴をとらえることができず、ブルジョアに迎合した住宅にとどまっている」<sup>56)</sup>

と、タイゲはル・コルビュジェの近代の建築における歴史的な功績とその後の問題点について述べている。

「ル・コルビュジェのヴィラは周到にブルジョアのクライアントの要望に答えている、ブルジョアが住宅に求める要求はアーティスティックな高級品、個人的な趣味、すなわち個人的な屁理屈である。まとめて、ブルジョア世帯や社会性をおびた生活環境は近代化による急激な変化を受入れていないのである。ピロティ、フラット・ルーフ、水平連続窓を挿入しているが、彼の作品は実際のところ貴族階級が居座る宮殿、豪邸で、「近代」建築全体は支配階級が居座るために築き上げられたように」<sup>57)</sup>



ここでタイゲは、ル・コルビュジェによる「ピロティ」、「フラット・ルーフ」という近代建築の原則が、社会階級制度に基づく個人的な嗜好品へと変容していることを指摘している。

「19世紀の支配階級は高級住宅の伝統保存を要求する。コルビュジェはこの要求に完全に答える。(中略) クライアントの社会的地位に見合った、贅沢な欲求を満たす建築が建つように尽力をつくす。より近代社会的で簡素な優雅さは特に光にあたるとそのシンプルさがでて、称賛の基準にも満たない下品な高級素材の美を凌駕する」<sup>58)</sup>

ここでタイゲは、ル・コルビュジェによる「近代」の建築のデザイン要素が、階級制度に基づく価値観の範疇で素材的な高級感という価値に単に置き換えられている、という解釈を示している。つまり、「近代建築の原則」を標榜するル・コルビュジェの建築のデザイン要素が、資本主義社会における高級商品、嗜好品へと価値変換されていることをタイゲは指摘したといえる。その価値変換の本質とは、

「上品な女性が豪華なバッグを求めると同じように、高級で美しいプロポーシオンの建築を求めらるのである」<sup>59)</sup>

と、タイゲによって比喩されている。つづけて、

「また 1925 年、コルビュジェはまだ "芸術家" として名声を勝ち得ていなかった。ガルシュのスタイン邸 (Villa Stein-de Monzie) は芸術性・快適性を過度にだしている。住宅というより彫刻である。表面のおおよそ三分の一のみが生活可能な範囲で、寝室、トイレ、ゲストルームのみである。その他は巨大なホール、ギャラリー、テラス、庭、橋、階段と奇妙なルーフラックである。住宅を航空機、船に見立てて設計をしており、理想主義的エンジニアの側面がうかがえる。2本の柱の間には巨大なホールが巧みに配置されているが、彫刻を鑑賞するための無駄な空間となっている」<sup>60)</sup>

と、ル・コルビュジェの住宅における過剰性について述べている。しかしタイゲは、ル・コルビュジェの芸術性を批判しつつも、ル・コルビュジェ自身が提唱する近代の建築の理念への回帰を唱えている。

「社会的な住宅スケールで住宅危機を、経済・機能を原則とする建築が解決することは間違いない。一方で富裕層に高級住宅を与え、モニュメントや彫刻に住ませることは、新たな社会組織を形成し、俗な芸術で富裕層を喜ばせることになるだけである。ディオゲネスが樽で生活していたように、"住宅は住むための機械である" と唱えるル・コルビュジェは有産階級一人に仕えるべきではない」<sup>61)</sup>

と、ル・コルビュジェが標榜した近代建築の理念が持つ本来の意味を改めて提示している。ここでタイゲによるル・コルビュジェへの批判は、この当時のヨーロッパにおける住宅危機の問題を背景としたものである。つまり、ル・コルビュジェの近代の住宅のスローガンの本来の意味は社会システムと連動したものであり、それらは当時の住宅危機を背景とした「最小限住居」の問題に直結するべきものとタイゲは捉えていたといえ、それは以下のタイゲの言葉に示されている。

「近代の住宅不足の原因を理解せずに貧困層の反乱を避けるために、ブルジョアにホームレスの住環境を提供するよう懇願したところで何もかわりはしない。完璧な答えなど何かしらの社会、経済と関連した反動がなければでてこないのである。ル・コルビュジェは「最小限住居」計画の問題を懸念しており、この問題とは向き合わずにブルジョア様式に傾倒しているのである」<sup>62)</sup>

とタイゲは述べており、ル・コルビュジェの建築作品における社会階級制度と芸術性は、住宅危機に対処を基盤とする「最小限住居」の考えと相反するという考えが示されている。これについてタイゲは、

「ル・コルビュジェは現代性について考察しているが、古い階級社会を「機械によってもたらされた新たな社会階級」として大都市での社会生活の知的な構造であると信じているのである(!!!)

「間もなく生産されるであろう…」という謳い文句のフォーディズムに魅了され、彼の主要な建築の課題はハーモニカのような、すなわち叙情的な空間とプロポーションによって生活の更新や家族の幸せに寄与するのである」<sup>63)</sup>

と述べ、ル・コルビュジェは近代性を標榜しながら、その実、階級社会に基づく家族制度に基盤を置いており、この社会階級制度と建築との関連において、芸術性がその媒介になっているという見解をタイゲは示している。

「ル・コルビュジェは近代建築の科学技術を芸術に置き換えて、発展の進行を麻痺させている。ブルジョアの特権である近代建築の芸術的領域の保持は、社会性が行き届かない作品のオーラ、その所有者の心理状態を取り扱い、社会スケールでの都市、住宅の計画を妨げている」<sup>64)</sup>

とし、その問題の一般化を試みている。

これら一連のル・コルビュジェへの批判の理路を構築する過程において、社会階級制度、住宅危機、芸術と建築の二重構造という、タイゲの建築論の根幹を占める主題の形成が見られる。

#### 4) 「輝く都市」

タイゲは1932年、雑誌『スタヴィテル』にル・コルビュジェの「輝く都市」についての論稿「ル・コルビュジェの"輝く都市" (Le Corbusierovo "Zářící město")」を発表している。

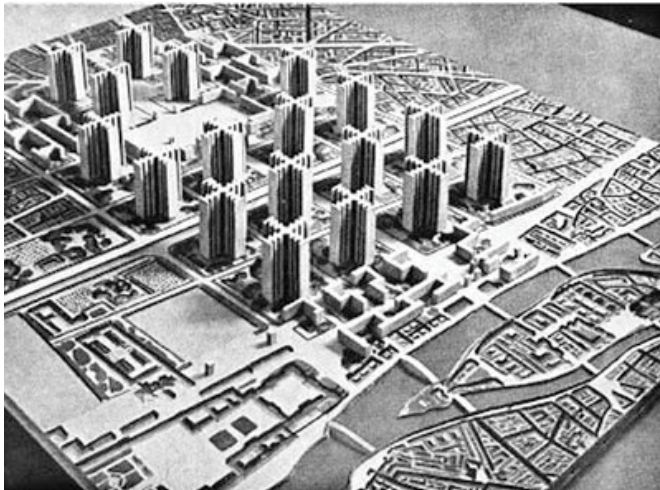


図6 ル・コルビュジェ、『輝く都市』：配置模型

そしてタイゲは、ル・コルビュジェの都市計画についての立ち位置について以下に述べている。

「都市化反対者に対して、ル・コルビュジェは自己の理論の定義と表象に矛盾がないことを主張する」

<sup>65)</sup>

まず、タイゲは、ル・コルビュジェの都市計画「ヴォワサン計画」を含めて、以下のように述べている。

「ヴォワサン計画と輝く都市の問題点は都市の中心にある。都市は周囲に拡散しがちで、中心は密に

なりづらい。中心を周囲に拡散するかわりに、コルビュジェは中央に焦点を絞り、都市中心の密集地帯の直径を短縮することを推薦した。貿易地点は都市の中央に、もし中央が拡張すれば、それはもはや中央ではない。これは矛盾を含まず、高層建築の条例にも適したものである。世界の都市を見れば一目瞭然のようにシカゴ、ベルリンは同じ密度でオフィスが中央に集中している。この中央から外周への拡張方法には、都市の規範にのっとった必然性があるのだ！財政的な損失を引き起こす危険な政策であることもさることながら、ル・コルビュジェは地価の低下した土地に一見矛盾すかのように都市の心臓を移植するが、その土地の資産価値は現在上昇しているのだ。コルビュジェによれば「大都市の中心市街地はダイヤモンドの畑のようである」という名言を残している」<sup>66)</sup>

タイゲは、ル・コルビュジェの都市計画に、都市機能を中心部へと集約することで資産価値の上昇に寄与するための操作が潜在していることを指摘している。それについてタイゲは、

「国は現在の所有者に、「現在の地価は今の数値だが、後々の地価が支払われる」と記された融資契約書を与えるであろう。現在の所有者である銀行は、国にいち早く元の額を支払うことになるであろう。もちろん制令に認可される以前の地価を告知しなければならない。(中略)ル・コルビュジェは自由主義経済学者と同様に土地所有の国営化に対して反対している」<sup>67)</sup>

と、ル・コルビュジェの手法を自由主義経済の手法に則っていると見なしている。

また、タイゲは、「輝く都市」におけるル・コルビュジェの住居部分の建築的なプランニングについて以下に述べている。

「輝く都市の住居部では12層にホテル設備が完備されているが、その配置は恣意的で中東風のデザインが施され、装飾的、非合理的、無駄が多い。(中略)実際は資本主義的な商業施設であり、産業と農業の生産地帯である社会主義的中心(物理的な中心ではない)を体現していない」<sup>68)</sup>

このル・コルビュジェの中心的なプランニングに対して、タイゲは1930年にソビエトで出版されたニコライ・A・ミリューチンの著作『ソツゴロド』における「線状都市」の概念を対比させている。

「社会主義的中心はどちらかと言うと線形都市に見られ、激しい移り変わりによって定義することができ、河川、鉄道、生産工場はこの何マイルにもものびる線状に沿って広がっている」<sup>69)</sup>

とタイゲは述べており、「線状都市」の概念への傾倒が確認できる。

また、タイゲは、ル・コルビュジェの建築的なスローガンに対して、その都市計画における金融資本の利益誘導を表す特質の矛盾を指摘している。

「『輝く都市』や著書『プレジジョン』にある都市論は、金融資本の利益と密接な建築思想の表現がなされている。今日の社会・経済の関わりの型枠を形づくる急進的な考察がなされている。周知のようにル・コルビュジェは1922年、「建築をめざして」でにおいて、建築か革命か？という問いを投げかけ、その回答としてスローガン「建築の革命」をうちだしたのである」<sup>70)</sup>

と、ル・コルビュジェの建築的なスローガンと金融資本的な都市計画の矛盾を指摘している。

ここに見られる、近代都市計画における金融資本的な性質の二重構造への批判、そしてミリューチンの『ソツゴロド』からの影響は、本章三節で取り上げるタイゲの著作『最小限住居』でも再び確認できる。

最後に、タイゲは「輝く都市」計画に潜在するもう一つの要素について述べている。タイゲは、

「これだけではない。領土拡張主義的なル・コルビュジェの都市開発は、中世都市を一新する近代の

科学的戦略であり、輝く都市はまさに近代の要塞と言えるだろう。おそらく周囲には壁は存在しない。しかしにもかかわらず爆撃から耐えるシェルターを搭載したテラスがそこにはあるのだ。軍事指揮官であるヴァウティエール (Vautheir) は『将来の航空および国の危険性 (Le danger aerien et l'avenir du pays)』の中で パリの「輝く都市」の高層ビル群は戦争に耐えうるコンクリート造の柱の支持、頑丈にコーティングされた外装を備え、広い空間と自由な広場と湖は都市の汚染された空気を濾過し、利便性が高く、必要条件を満たすものであるとしている<sup>71)</sup>

と、その軍事的な性能の高さについて指摘をしている。

### 第三節 著作『最小限住居(Nejmenší byt)』に見るカレル・タイゲの建築思想

#### 1) 建築と社会の関係について

前節のタイゲの一連の論稿において触れた彼の建築論におけるいくつかの主題を踏まえ、本章の三節では1932年のタイゲの著作『最小限住居』におけるタイゲの言説を「建築と社会の関係」、「女性の解放と建築」、「近代建築批判」、「都市・建築モデルの提示」、「自国チェコの動向への反応」の5つの評価軸に分類し、分析を行いたい。

はじめに、「建築と社会の関係」に関する彼の言説を整理したい。

#### 1-1) 建築における社会構造の問題の抽出

タイゲは建築と社会について『最小限住居』でこう述べている。

「本書は、すべての社会的、経済的、技術的、建築的側面とその展望における、大衆的プロレタリア住宅の問題として「最小限住居」の問題を議論する試みである。住宅危機の根本的要因を確定しようとすると同時に、それは広く行き渡った経済的、および社会的システムの相互関係と、それら要素の複雑な相互作用を辿り、その主因と構成要素によって住宅問題を分析する試みである。そして、その問題を生み出す状況に処置が施されたときのみ、その試みは達成される。統計データは建築と住宅の社会学への重要な援護である」<sup>72)</sup>

と、タイゲは住宅危機の要因を建築的側面からのみでなく、建築と社会構造の相互不可分な関係性の中に見だし、それに対する統計を援用した社会的なアプローチの必要性を示唆している。この建築と社会の関係性についてタイゲは、

「全ての居住プロセスは所定の社会秩序の構造を含む相互的、かつ他の社会的要因と密接不可分の関係にある。これらの考察の結果、近代建築作品は社会の編成と階級制度の構造と明らかに親密な関係にある。川床が川の流れに影響を及ぼすのと同様、建築物は時代の経済的、かつ技術的な状況の結果であり、他方では現代の経済と社会条件による存在である」<sup>73)</sup>

と分析しており、経済および社会階級の問題を建築の問題の下部構造として位置付けている。

このように、タイゲは住宅危機の問題に対して社会的なアプローチを試みる自らの分析の方法を示している。この方法を基に、

「我々の都市の住宅危機は、人口移動がそれらの集団内で起る経済的、社会的崩壊と密接に関係する事実によって説明される現象の結果である。(中略)我々の都市の住宅難は、都市人口の眩暈がするような増加に起因せず、むしろこれらの人口の社会構造的変化に起因する」<sup>74)</sup>

とタイゲは述べ、住宅危機を人口増加という一義的な原因に収斂させず、社会構造の枠組みから分析を試みている。つづけて、

「先の議論で我々は、社会危機としての住宅危機が人口の動態変化によって説明可能だけでなく、それが基本的な支配的経済システムにおける不可避な副作用を意味し、社会の人口構造に根源を持ち、都市と地方間の格差の増大と広い層の大衆の貧窮化によって同時決定されることを確信した」<sup>75)</sup>

と、タイゲは住宅危機の要因を分析し、

「住宅危機は、今日の経済的、社会的システムに内在する特性と見なされるべきである」<sup>76)</sup>

と、その現象を位置付けしている。ここには経済問題、都市問題、階級問題が複合的に関連する社会構造から当時の住宅危機の問題の解明を試みるタイゲの理論的な立脚点が示されているといえる。

## 1-2) 住宅危機に見る都市の歴史的文脈

これらの住宅危機と社会構造との分析を踏まえ、タイゲは住宅危機を近代の都市の歴史的な文脈を遡って分析を試みている。

「ヨーロッパの近代メトロポリスは中世に確立された都市形態に基づいて発達して、主に、以降の世紀を通して修正された基礎計画で進化し続けた。それは、主に 17 世紀の貿易ブルジョアジーを中心とした商業資本主義の時代とバロックの期間である。後の 19 世紀にいくぶん修正された計画にもかかわらず、それは単に中世都市の拡大した変形を表していた」<sup>77)</sup>

と、近代の都市構造が中世のそれから基本的に変化していないことをタイゲは指摘している。ここから、都市と地方が対立していく歴史的な過程の解明へとタイゲは論を展開している。その過程について、

「19 世紀始め、都市と地方間の分化は主に都市産業の搾取的な覇権によると言明されるようになった。そして、その覇権は村落の金融資本によって駆動された。都市社会の二つの主要な階層の対立も示された。今日の産業開発の始まりと産業主義の始まりの時代は、何人かの空想的社会主義者が正確に都市と地方の対立、つまり 2 つの相容れない地域形式の間の対立の根源を明らかにした時代でもあった」<sup>78)</sup>

とタイゲは述べ、都市と地方の対立の歴史的な過程における空想的社会主義者<sup>79)</sup>の果たした役割を挙げ、その中の一人であるシャルル・フーリエ (Charles Fourier)<sup>80)</sup>について、

「19 世紀初め、シャルル・フーリエはそれまでの都市と地方とは完全に異なる新しい解決策を提案した。フーリエのファランステールは、農業と工業生産を合同することで都市と地方の間の亀裂を克服する試みであった」<sup>81)</sup>

と述べており、フーリエが描いたファランステール<sup>82)</sup>の都市に関する歴史的な先駆性をタイゲが評価している点が特筆される。

これら都市の歴史的な文脈を踏まえタイゲは、

「多くの都市は 19 世紀の間に自身の要塞を破壊し、自身を世界的な商業の金融中心地へと変えた。  
(中略) 現代の資本主義的都市は工業と農業の間の結びつきを無条件に断ち切り、その限界まで都市と地方間の対立を押しすすめた」<sup>83)</sup>

と、中世の都市の歴史的な分岐点を示している。つづけて、

「都市は 19 世紀半ばに急成長を経験した。国民経済の重要性は増大した。メトロポリスは経済的および文化的生活の中心となる。工業に仕事を求め人々は地元を離れる。(中略) 生産の継続的な機械化と地方人口の大規模な集団移動によって、より悪化する求職者の余剰は、都市の継続的な人口過剰を生じさせる。そしてそれは、これまで都市に集中し増加する人口の生活水準を下げる」<sup>84)</sup>

と述べ、19 世紀以降の資本主義経済が原因とされる都市と地方の対立の激化から、人口の急激な移動と貧

窮化へ至る過程を分析することで、住宅危機の根源の究明をタイゲは試みている<sup>85)</sup>。

ここでのタイゲの分析は、建築単一の問題や住宅危機についての統計的分析のみにとどまらず、建築と社会の関係から、さらに都市の歴史的、思想的な背景をも辿って問題の抽出を試みたものといえる。そして、このように多様な領域を架橋し、それらが関連する社会的な構造の分析を基に都市・建築論へと向かう姿勢に、この時代のタイゲの建築思想の基盤があると筆者は考える。

## 2) 女性の解放と建築

次に、「女性の解放と建築」に関するタイゲの言説を整理したい。

### 2-1) 女性の解放の思想に基づく建築思想の起端

本書においてタイゲは後の社会主義フェミニズム理論に影響を及ぼしたとされる<sup>86)</sup> エンゲルスの著作『家族、私有財産と国家の起源』<sup>87)</sup> から引用をしている<sup>88)</sup>。

「家長父家族〔の出現〕とともに、またそれ以上に一夫一婦婚個別家族〔の出現〕とともに、この事情が変化した。家政のきりまわしは、その公的性格を失った。それはもはや社会とはなんの関係もないものになった。それは一つの私的役務となった。妻は、社会的生産への参加から追いだされて、女中頭となった。現代の大工業がはじめて彼女に—それもプロレタリア女性だけに—社会的生産に参加する道をふたたび開いた。だがそれとても、彼女が家族の私的役務の義務をはたせば、公的生产から排除されたままでびた一文もかせぐことができず、また公的産業に参加して自分の腕でかせごうと思えば、家庭の義務がはたせない、という程度のものである。近代の個別家族は、妻の公然または隠然の家内奴隷制の上に築かれており、そして近代社会は、この個別家族だけを構成分子にしてつくられている一集団である。夫は今日、少なくとも有産階級のあいだでは、大多数の場合、稼ぎ手、家族の養い手でなければならず、そしてこのことが夫に支配者の地位をあたえることは必要でない。夫は、家族のなかではブルジョアであり、妻はプロレタリアを表す」(F.エンゲルス)<sup>89)</sup>。

このエンゲルスの引用と、同じくエンゲルスの著作『住宅問題』における先駆的な思想を踏まえ<sup>90)</sup>、タイゲは19世紀から続く住宅問題を家族制度と女性の解放の側面から分析している。

「建築の技術的進歩がそのイメージに根本的变化をもたらしたとする仮定は誤りである。住文化は、人口、支配的イデオロギー(法的体制、道徳、美学)と様々な心理的要因(愛国的な感情、家庭の暖かさ、表現への憧れ、他)の中で、家族、階級と資産不公平の歴史的状况の結果として発達した」<sup>91)</sup>と、タイゲは建築の技術的進歩の背景にある思想的な問題を指摘しており、前述と同様、住文化における家族制度および性差も含む社会階級の問題を建築の問題の下部構造として捉え、そこから分析を試みている。また、ここでのタイゲの言説には当時のソビエトの社会主義思想の潮流が背景にあるといえる。具体的には、1910年代後半から1920年前後のソビエトにおける共産主義的問題として家族制度の問題を基盤とした女性の家事からの解放があったとされ、レーニンが愛読していた1863年のチェルヌイシェフスキーの小説『何をなすべきか』が後のソビエトにおけるコレクティブ・ハウジング(ドム・コムーナ)に影響を与えたとされているものである<sup>92)</sup>。これらを踏まえ、この一連の言説には社会階級の問題としての女性の解放の思想に基づくタイゲの建築思想の起端があると筆者は考える。

## 2-2) 女性の解放の思想に基づいた建築論の編纂

以上の建築と住文化、および社会階級との関係の考えを基に、タイゲは女性の解放の思想に基づく建築論を編纂していく。タイゲは住文化と女性の解放について以下のように述べている。

「女性、妻、母、姉妹または娘は常にブルジョワ家庭を機能させ続けるために、使用人もなく終りのない労働時間を過ごす。機械化された設備の導入による今日の家庭の合理化は、重荷をすこしだけ軽減し、妻の使用人としての仕事、料理人としての仕事の負荷をすこしだけ減らす。しかし、この種の家庭が全く廃止されない限り、家事任務の負担からの女性の完全な解放は成し遂げられない。既存の社会的関係と道徳的な慣例の制約があれば、多少の詳細に関する部分的な改良はありうる。しかし、居住全体としては全く重要ではない改革である。広義の改革は、一般の経済、社会的な規制の根本的な変革によってのみ達成することができる」<sup>93)</sup>

つまり、タイゲは社会階級の最小単位として家族制度を捉え、そこで抑圧されている女性の解放を社会階級問題の最小単位の解決とした。そして、その最小単位の解決を住文化と建築の改革に見いだすことで自らの建築論を組み立てており、ここに見られる理路は女性解放の思想に基づく彼の建築論の骨子といえる。

この思想的な基盤から、タイゲは当時の建築家の理念と実際の住宅デザインとの矛盾を指摘している。

「現在、現代の建築的な試みの大半は、家族をデザインの基本的な決定要素とする中小規模の住宅のための新しいデザインによる住宅改革を求め、生存最低限の住宅ですら、最小のサイズであるにも関わらず、既成の家族を基盤にしたファミリー・タイプとして提案されている。それらが一戸建賃貸住宅、あるいはアパートであるかに関わらず、最も近代的な住宅、あるいは改良された中小規模の住宅は家族基盤のレイアウトに基づいているのである」<sup>94)</sup>

とし、住宅改革を標榜する当時の建築のデザインが既存の家族制度に準拠する矛盾をタイゲは指摘している。その具体的矛盾点について、

「各々は個別のキッチンを持つ。各々のユニットには一般的なベッドをもつ共用のベッドルームが夫婦のためにある。そして、すべては忠実に従来の有産階級的な結婚の概念に従う。貧窮者のための近代的アパート、"モデルハウス"、"実験的な別荘"、"最小限住宅"、いずれにせよ、すべては家族スケールで提示される解決案なのである」<sup>95)</sup>

とタイゲは述べ、「家庭生活の崩壊は家族を扶養出来ない社会階層で始まった」<sup>96)</sup>とする、家族制度が崩壊した貧窮者の住宅に対し、女性を家事労働に従属させる住宅個別のキッチンと婚姻制度を前提とした夫婦のベッドルームという既存の家族制度に準拠する住宅プランが提案される点を彼は批判している。このタイゲの分析と批判によって、当時の女性の解放の問題における近代的な理念と実際の住宅のデザインとが相反する二重性が露にされたと筆者は考える。そして、タイゲはこれだけにとどまらず、

「今日の建築家と女性解放論者はしばしば十分な設備の近代的住宅が家庭の雑用を適切に緩和し、単純化すると主張する。働く女性が専門職において完全な8時間労働が可能で、幫助無しで家庭を管理し、子供を産み育て、それでもまだ教養がある人間の様に生きるための十分な時間を見つける。(中略) さらに公的生活と芸術的な趣味に参加する…。だが現実には。近代の働く女性のために促進されたその様なライフスタイルが、無力な改革主義に促進された不都合な妄想、狡猾な詐欺とまでは言わな



いが、自己欺瞞であったことを示した」<sup>97)</sup>

と述べており、一部の女性解放論者と建築家による「機械式快適性」<sup>98)</sup>による女性解放の発想と、あくまで多様な社会構造の反映として近代の住宅のプランを捉えるタイゲの建築思想との差異がここに示されている。つまり、タイゲは女性解放の思想それ自体に対しても一元的には捉えず、そこに内在する二重性について批判的な立ち位置を取っていたといえる。ここでのタイゲの言説には、建築における女性解放の思想の位置づけから、その思想が実践される際に発現する二重性の指摘へと向かう、一つの理念に収斂することのない彼の批評的な態度が現れていると筆者は考える。

### 3) 近代建築批判

つづいて、「近代建築批判」に関するタイゲの言説を整理したい。

#### 3-1) 近代の住宅における様式性と芸術性

上述の通り、タイゲは住宅危機を社会構造の視点から分析し、そこから具体的な建築論へと展開したといえる。この理路から、タイゲは当時の近代建築(moderní architektura)という枠組みが内包する矛盾について以下に分析を試みている。

「近代的な文化、時代、そして現代の社会(moderní kultuře, době a soudobé společnosti)の緊急性と適合性をもつ新しい住居形式の創造と住宅改革の最初の試みは、十分な財源が手元にある状況で起った」<sup>99)</sup>

ここでタイゲは、「高級別荘住宅(luxusní obydlí vila)」<sup>100)</sup>が当時の建築の改革運動の対象になっている矛盾を指摘し、

「住宅、特に宮殿は、単に実利主義的目的と見なされるだけでなく代わりに芸術的な創造と記念碑性の表れが一つに合わされ、それらが共に美学的、イデオロギー的に夫々の階級的利害の精神の内に存在することを表現するよう設計された。(中略)それは支配階級が自尊心を非常に増大させ、同時にそれが強く被支配層に作用する、という方法によってである」<sup>101)</sup>

と、その階級的な作用について分析している。つづけてタイゲは、

「例えばそのような建築が「新しい芸術」の外観を装うとき、過去のロマンティックな建築思想と闘っていると我々に信じさせようとしながら、この因習を永続させるのである」<sup>102)</sup>

と述べ、当時の近代建築の理念としての無装飾性が「新しい芸術の外観」という新たな様式性を孕んでいる二重性を指摘している。このようにタイゲは、当時の建築家が唱えるスローガンと芸術的作家性との矛盾を、様式性の問題として見いだしている。

そこから具体的な問題として、

「現在の状況下において、ほとんどの場合新築アパート住宅は単純に階級構成員の財力を超え、彼らの住居は最低限の生活しか与えられず、最低限の衛生と生物学的居住条件を遥かに下回る老朽化したあばら屋でありつづける」<sup>103)</sup>

と、タイゲは実際の貧窮層の生活状況を報告している。つづけて、

「今日の住宅危機に反応した建築アヴァンギャルドによってまき散らされた「最小限住居」のスロー

ガンは、現在の高級な「最小限住居」が「生存最低限」のレベルに実際に暮らす者にとって財政的に手が届かないという事実を隠蔽する」<sup>104)</sup>

と述べ、当時のアヴァンギャルドを標榜する建築家のスローガンとしての「最小限住居」と、その対象であるはずの貧窮層の実際の経済的状況と乖離していることを指摘し、批判している。

### 3-2) 近代都市計画における金融資本の誘導の二重構造

以上の批判を踏まえ、次にタイゲは当時の近代都市計画の事例として、1930年のル・コルビュジェの「輝く都市(La Ville Radieuse)」計画案に伏流する金融資本的プログラムを挙げている。

「ル・コルビュジェは中心地を周辺に拡大する代わりに、それまで遠くにあった郊外地域を中心地へ楔のような方法で挿入する。彼自身の言葉によれば、メトロポリスの中心地はこのようにして正真正銘の金鉱（確かに土地投機の金鉱！）へと変わるのである。このような手段で、ル・コルビュジェは金融資本、銀行、産業経済学者を抱き込んだ」<sup>105)</sup>

と、その計画の金融資本的な側面をタイゲは指摘している。次に、

「ル・コルビュジェは以下のシナリオを提案する。中心地の密度を増す。それで地価を上げる。増大した地価は彼によって提案された摩天楼の価値を増す。そして今までアクセスが困難だった近隣道路に面する不動産価値も同様に増大する」<sup>106)</sup>

とタイゲは述べ、「輝く都市」計画とそこに配置される高層建築物の金融資本的な作用を指摘している。これらを踏まえタイゲは、

「ル・コルビュジェの「輝く都市」と彼の都市理論は、金融資本の利益と密接に結びついた建築イデオロギーの明確な表れである。急進的、かつ技術的なアイデアが、今日の社会的、経済的状況の文脈の範囲内で従順に構成されている」<sup>107)</sup>

と述べ、当時のル・コルビュジェの建築的な理念の背景に金融資本の利益誘導の効果が潜在する二重構造を見いだすことで、当時の近代都市計画が内包する理念と実践の矛盾を批判している。

### 3-3) 近代建築の理念と芸術的作家性の矛盾

さらに、タイゲはル・コルビュジェを俎上に載せ、住宅のデザインに対する社会階級的な側面からの問題提起を行っている。

「正に昔の様に、支配階級の面々は個別の示唆的な特徴と表層的表現を力説する他に、建築家が住居に豪華さを付与することを期待する。施主に過去の豊かな装飾と貴重な材料を提供する代わりに、ル・コルビュジェは高価なテラスと素晴らしい空間的贅沢を提供する」<sup>108)</sup>

と述べ、ル・コルビュジェによる住宅のデザインが階級的な嗜好品へと価値が転換されていく過程を描写している。つづけて、

「ル・コルビュジェによって設計・建設される贅沢なヴィラは、今日のモダニストお得意の建築モデルになった。彼の五つの原則は、現在の服飾雑誌で広告されているレディーメイド服とテーラード・スーツの最新パターンと同等に重要なものとなった。フラット・ルーフ、テラス、水平窓、コンクリート製ファニーチュア、クロムの椅子、板ガラス等はモダンなフェティッシュとなり、様式における義務的な手法の地位を獲得したのである」<sup>109)</sup>

とし、ル・コルビュジェの近代建築の原則に依る住宅のデザイン要素がフェティシズムへと転化され、そこで付随した新たな様式性が資本社会に流通する消費材となっている具体的な状況をタイゲは指摘している。この理念と実践とが乖離した状況についてタイゲは、

「今日、住宅、あるいはどのプロダクト・デザインも、それ自身の目的よりもむしろ作家の才能の現れとして、主に知識層に賞賛されている」<sup>110)</sup>

と述べ、当時の近代建築家による住宅のデザインの根底にある芸術的な作家性をその要因とし、それらの背景にある社会階級的な思想を指摘している。これら一連の関係についてタイゲは、

「しかし結局、彼の個々のデザイン、計画、理論に対する上記の異論や批判は、建築の進歩の歴史に対するル・コルビュジェの貢献の重要性を決して損なうことはない。争点は、ル・コルビュジェの作品の芸術的で彫刻的で図像的な本質と現代建築の純正な真の成果を混同、同一視しないことである」<sup>111)</sup>

と、ル・コルビュジェの建築に潜在する芸術的な作家性を分節して捉える必要性を説いている。つづけて、

「つまり、単に美学的に、あるいは作家の素質または才能の地位と権力によって決定される特質が隔世遺伝することへの注意を怠るならば、非常に独創的で優れた個性が建築的進歩には有害であることが証明可能と想像しうる」<sup>112)</sup>

としている。つまり、ここでのタイゲの批判は芸術的な作家性それ自体に対するものではなく、「社会生活の再編成のための新しい科学としての将来性を持つ」<sup>113)</sup> という理念から「モダンな居住可能の記念碑的彫刻」<sup>114)</sup>へ変節していると捉えた、当時の既存の近代建築という枠組みに対する批判であると筆者は考える。

#### 4) 都市・建築モデルの提示

タイゲは上述のル・コルビュジェへの批判から近代の都市計画と建築デザインを批判したといえる。次に、これらの批判から具体的な都市・建築モデルの提案へと向かうタイゲの言説を整理したい。

##### 4-1) 都市における区画計画と土地投機との関係

タイゲは当時のヨーロッパの都市計画の現状について、

「住宅事情における進歩と改善には、人口密度の管理の必要性が付随する。しかし新しい地区においてさえ、周囲を建て込まれ内部にオープンスペースを持つ区画は、今日でさえも多くの都市の一般的な敷地開発の典型である。冷徹な土地投機、そして公衆衛生準備の頻繁な違反は、新しい建築法規によってある程度監理された。しかし残念なことに、これらの大部分の新しい規則は単に不動産投機における最低限の利益内の健康保護と市民の安全性の間の妥協だけでしかない」<sup>115)</sup>

と述べ、健康と衛生の面から問題があるとされた<sup>116)</sup> 既存の閉鎖型区画と金融資本の関係をとり上げている。つづけてタイゲは、

「ただ統一複合構造体として全ての区画の開発が可能な場合のみ、内部庭に面するアパート居室の窓によって内部の大きな中庭は庭園へと変質させられる。この改良されたサイトプランの性質は、狭く騒がしい道路面よりむしろ風通しがよく広々とした中庭に生活圏を面して配置するものである」<sup>117)</sup>

と述べ、金融資本主導ではなく、健康と衛生面を目的とした都市・建築の総合的な計画による解決方法を

提案している。この一つの事例として、タイゲはプラハのパンクラーツ（Pankrác）地区の調整街区計画に言及している。

「逆に言えば、彼らは周囲に建込んだ閉鎖型区画を拒絶し、非常に不規則ないわゆる“開放型区画”を代わりに負託することで我々の要求を満足させることができると偽るのだ。結局それは多くの点で、古い直交整列形式の閉鎖型区画より非常に悪化した衛生状況を生み出すことになる」<sup>118)</sup>

と、タイゲは地区当局の計画(図6)を批判し、チェコの機能主義世代の建築家である F. A.リブラ(František Albert Libra)<sup>119)</sup> の案を対置している (図7)。

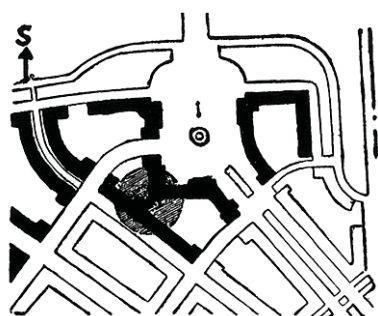


図7 パンクラーツ地区当局の調整街区計画プラン

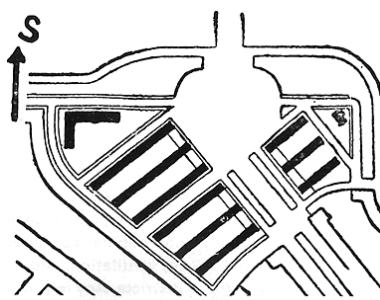


図8 F. A. リブラのプロポーザル案 (1930)

このように、タイゲは諸条件との複合的な関係性から解決すべきとする閉鎖型区画の問題と健康と衛生面の目的が単なる「区画の開放」という一義的な方法に収斂されている当時のチェコの状況を批判した上で、自身の理論を体現する F.A.リブラの案を提示することで、当時のチェコの都市計画の状況に反応したといえる。

#### 4-2) ソビエトの影響と自らの都市・建築モデルの提示

このチェコにおける区画の配置計画の状況に関する批判を踏まえ、タイゲは具体的な解決案へと論を展開している。

「どの配置計画方法を選ぶべきかという問題において、これらの問題のあらゆる決定も、社会編成の重要な問題、つまり社会的構成要素、あるいは居住地の形式次第であるため、一般的に有効な答えを出すことは不可能である」<sup>120)</sup>

とタイゲは述べ、複合的な関係性から配置計画を捉える自らの理論を示している。そして、その具体的な解決案として、

「唯一の解決方法は、標準化のメリットと単列住宅（ギャラリー形式）の効率化のために、狭い間口の奥行きのある計画によって最大限に敷地を開発することである」<sup>121)</sup>

と、「ギャラリー形式」(図8)をタイゲは提案している。さらに、

「長い住宅列は現在の不動産サイズと他の敷地限界を上回る広さを必要とする。実質的にそれらは一つの長い住宅に変わる。一般に数kmの長い住宅列は現在の同心的で求心的な都市開発に利用される敷地形状の既存の敷地の所有状況の下では不可能である」<sup>122)</sup>

とタイゲは述べ、「ギャラリー形式」という建築単体のモデルではなく、それが都市計画のモデルと併用される必要性について説き、具体例として当時のソビエトの社会主義の都市理論を援用している。

「しかし、そのような住宅の列は、線状都市の概念と完全に互換性を持つ。それは中心と中心商業地区を持たない。線状都市は、資本主義的都市の同心的形態に取って代わる。それは新しく高次の都市を表す。そして『ソツゴロド (sotsgorod)』におけるソビエトの事例において最も例証される」<sup>123)</sup>と、1930年にソビエトで出版されたニコライ・A・ミリューチンの著作『ソツゴロド』<sup>124)</sup>をタイゲは参照し、「線状都市」の概念(図9)による解決案を提示している。

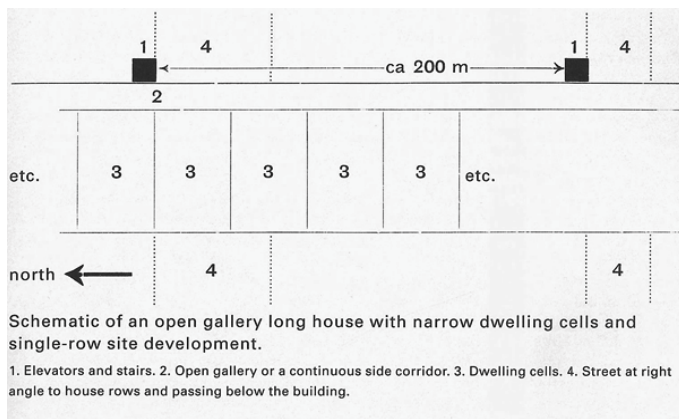


図9 間口が狭く奥に長い住居セルのギャラリー形式による

単列式敷地開発の概略図：図中の番号は、1.エレベーターと階段。2.オープンギャラリー、あるいは連続的のコリドール。3.住居セル。4.建物の下を通る道路。

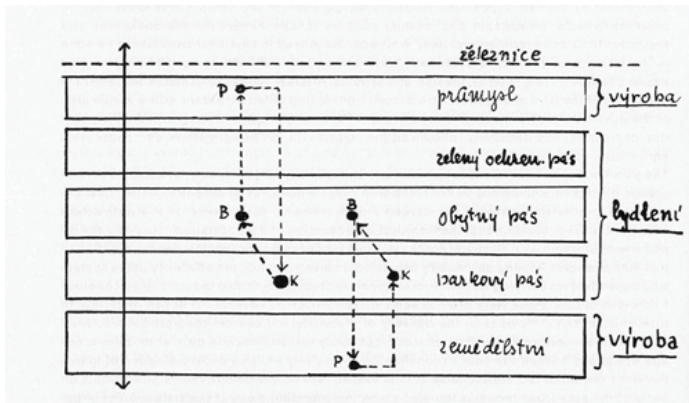


図10 「線状都市」の概略図：上部点線は鉄道。

四角は上から工業（生産領域）、緑地帯、住居帯、公園帯（居住領域）、農業帯（生産領域）を示す。

これら当時のソビエトの社会主義の都市・建築理論からの影響を踏まえ、タイゲの建築論は具体的な建築モデルの提示へ向かう。

「女性と子供を生産体系へ組み込むことは、伝統的な家族の崩壊に対する主要な推進力を提供する。男性との女性の平等、農学における科学的な進歩だけでなく、これら学校教育、農業の機械化の全ては、新しい居住区の形態と都市と村落の区別を不明瞭にするための前提条件を創造する。(中略)そ

して、それらは大衆のために一時的な新しい形式の居住の種類を生み、人々に半遊牧的な移動式生活を送ることを強いた」<sup>125)</sup>

とタイゲは述べ、自らの女性の解放の思想を基に、女性（および子供）の社会の生産体系への参加によって「半遊牧的な移動式生活」という新たな生活様式が発生する理路を示している。この新たな生活様式がもたらした新たな居住形式として、タイゲは「ホテル形式」（図 10）を導き出している<sup>126)</sup>。この形式について、

「これらの発展の副産物は近代ホテルである。（中略）ホテルは単に一つの住居形式の事例としてだけでなく、今日の住文化において、技術的に、そして組織的に最も円熟した形式としてもみなされねばならない。それは大規模な住宅生産が小規模な職人的生産と小規模な住居、職場としての家庭に取って代わる正にその時、ホテル形式はファミリー・アパート形式に代わる新案である。（中略）ホテルは現代の合理化され機械化された共益サービスであり、今日存在している最も技術的に先進の居住形式と考えられなければならない」<sup>127)</sup>

とタイゲは述べ、女性と社会の生産システムの関係の変化から生じた新たな生活様式に対応した新たな居住の在り方として、「ホテル形式」を位置付けている。

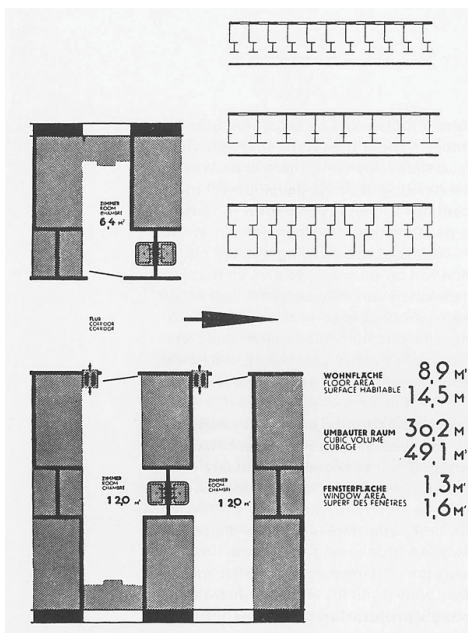


図 11 ホテル形式の略式図：居室プランと片側廊下による居室配置の概略図。

居室の連結部分には共用設備が置かれる。

この「ホテル形式」に対してタイゲは、

「最小限住居の問題への即応はコレクティブ・ハウスまたはドム・コムーナ概念によって最も特徴づけられる。それは個人的な家事機能のないアパートである。そして住居セルの蜂の巣は働く個人を対象とする。それはコレクティブ・ハウジングの文化的ニーズを満たすだけでなく、誰にでも同じ住宅事情を与え、家事サービスの集中化と集産化を提供する。基本的にコレクティブ・ハウスは子供の

保育所、下宿、クラブ施設によって補われる、一般の家事サービスの全てのシステムを含むホテル形式のライフスタイルの翻案版である」<sup>128)</sup>

と、ソビエトのドム・コムナ (dom-komuna)<sup>129)</sup> を関連づけている。これらのタイゲの言説には、「ホテル形式」に対してドム・コムナ の概念を援用し、女性の家事労働からの解放を目的とする家事機能の無い「住居セル」と住居から分離され集合化されたサービス機能施設をもつ、具体的な建築モデルの提示へといたるタイゲの建築理論の編纂の過程が見られる。

ここで提示された建築モデルを、タイゲは自国チェコの近代建築の具体的な動向と照らし合わせている。タイゲはここでチェコにおける「ホテル形式」の建築デザイン的具体例として、ヨセフ・ハヴリーチェク (Josef Havlíček)<sup>130)</sup> とカレル・ホンジーク (Karel Honzík)<sup>131)</sup> のコルドム (KOLDOM) 型<sup>132)</sup> とされる計画案 (図11) を、チェコにおける「ホテル形式」のコレクティヴ・ハウスの具現化として評価している。そして、この「ホテル形式」の「発展型」として、タイゲはヤン・ギラル (Jan Gillar)<sup>133)</sup> とヨセフ・シュパレク (Josef Špalek)<sup>134)</sup> によるプラハ市当局の公共アパートのコンベ案 (図12) を挙げ、「住居セル」の集合体が独立し、共同施設と分離された彼らの計画案を評価している。

この二つの計画案は1930年のブリュッセルでのCIAMの展示において発表されており、タイゲはこの時代のチェコの近代建築の動向を理論的に先導し、これらチェコ国内の実践的な成果を国際的に発表する活動を同時に行っている。ここに見られるタイゲの言説とチェコ近代建築を主導する活動の同期には、チェコとヨーロッパ諸国を接続しながら時代の動向に素早く反応する、理論と実践とが対応した彼の建築に対する姿勢が現れていると筆者は考える。

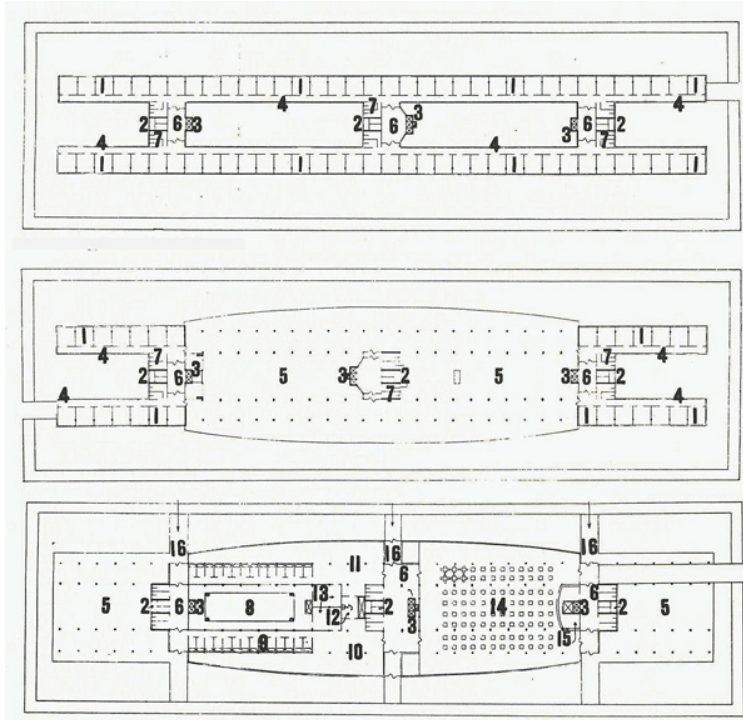


図12 ヨセフ・ハヴリーチェクとカレル・ホンジーク、プラハのKOLDOM型集合住宅計画案 (1930) : 上から住居階の基準プラン。中は住居セルとテラス等がある2階プラン。下は食堂等の共用部を含む1階プラン。

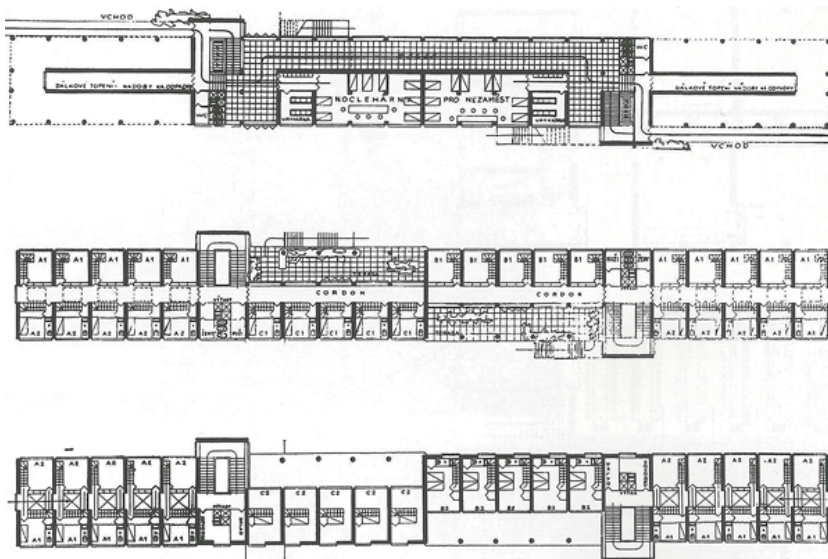


図 13 ヤン・ギラルとヨセフ・シュパレク、プラハ市当局の公共アパートのコンペ案（1930）：  
上、失業者用ホステルを含む 1 階プラン。中、住居階 A プラン。下、住居階 B プラン。

## 5) 自国チェコの動向への反応

最後に、「自国チェコの近代建築の動向への反応」についてのタイゲの言説についてまとめたい。

### 5-1) 「L-プロジェクト」に見るタイゲの建築理念

『最小限住居』において、タイゲは当時のチェコにおける二つの建築コンペに言及している。一つは、1930 年の中央社会保険会社（Ústřední sociální pojišťovna）による前述のパンクラーツ地区の小規模住戸形式集合住宅のコンペである。このコンペに提出された「左翼戦線（Levá Fronta）」<sup>135)</sup>のメンバーによる計画案(図 13、14、15、16)、通称「L-プロジェクト」について、

「L-プロジェクトは 5,000 人の住民の住宅地区の提案である。高さは各々 15 階建てで 15 の住居棟(各々 300 人の住民を収容する)は、文化レジャー棟、就学前の 500 人の子供達のための 6 つの別棟、医学の別棟、セントラルキッチン（工場）、屋外競技場、プール、スポーツ場、遊び場等をもつ。専用のトイレとシャワーをもつ住戸は 14.80 m<sup>2</sup>の延面積と、9.60 m<sup>2</sup>で 24 m<sup>2</sup>の居住部分を持つ。住居セルは休息と個人の私生活のためにのみ設計される。全ての住居の全ての部屋は南東の太陽の方角に対して適切に定められる。各階は 20 のユニットが含まれる。そして住居全体で合計 300 戸になる。各階には共有のテラスの領域がある。屋根はサンルームによって覆われている。1 階は 20 人に対して 1 つの浴槽の共同浴室と専用の別々の食品調理エリアをもち、セントラルキッチンから料理が提供されるセルフサービスの食堂で占められる。各々の住居部分は 4 台のエレベーターを持つ。これらどの住棟も、通常の伝統的な家族型アパートに含まれる何の機能ももたない」<sup>136)</sup>

とタイゲは述べ、このコンペに対する彼の具体的な建築プログラムがここに明確に提示されている。つづけて、



「L-プロジェクトは主に集合的居住の概念の実現可能性の実証を意図しており、このように従来のコンペというよりは、建築的マニフェストとして見なされなければならない」<sup>137)</sup>

としており、「L-プロジェクト」はタイゲの当時の建築思想の一端が具体的な建築プランとして明確に提示された計画案といえる。そして、その当時のチェコ近代建築における位置づけについて、

「L-プロジェクトは闘争に影響を及ぼさなかった。簡潔に言うと、それは将来の社会主義世界の住宅の憶測的解決を提案するが、今日の緊急の問題に対処しえない。代わりにそのモットーは「今、労働者のための住宅を！」であった。将来を見通すどんな抽象的デザインもユートピア的幻想として終わるにちがいない。なぜなら、社会主義的社会における未来の生活パターンがどのようなものか詳細に予測し、その生活様式について確定的に断言することは不可能だからである。L-プロジェクトは意識的に実際の経済状態を無視した。それは単に発達した社会主義の条件を仮定した都市での、集合的居住に関する仮説を意味するだけである」<sup>138)</sup>

と、タイゲは総括している。このことから、「L-プロジェクト」はタイゲ率いる「左翼線線」の理念的な先鋭性が明確に具体化された計画といえる。そして、ここに見られるタイゲの理念的な先鋭性には、この時代のチェコ近代建築の理論的な動向に対するタイゲの主導的な姿勢が現れていると筆者は考える。

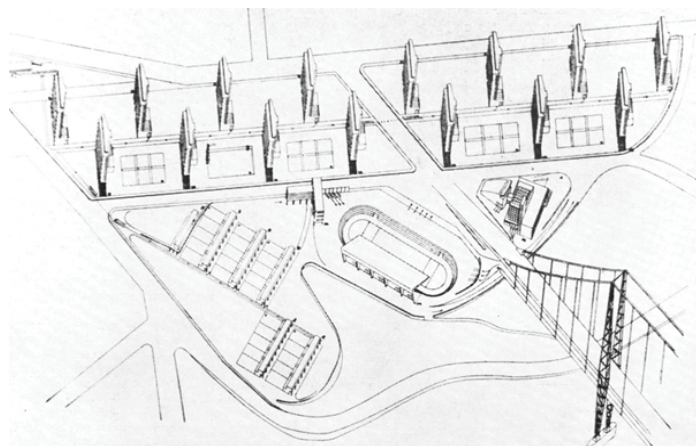


図 14 左翼線線、L-プロジェクト (1930) :

全体配置アクトメ図。図面上部に住居棟、図面中央に屋外競技場、右に文化レジャー棟が配置される。

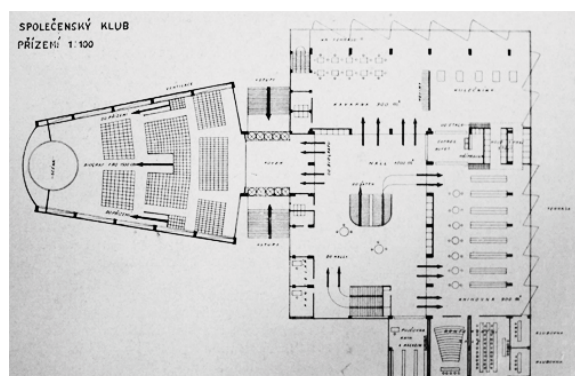


図 15 L-プロジェクト：文化レジャー棟1階社交クラブ・プラン。

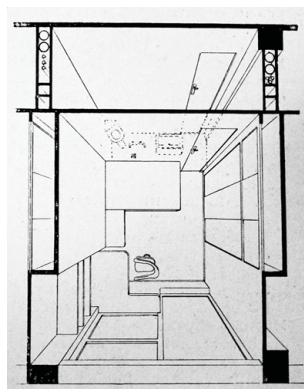


図 16 L-プロジェクト：住居セルの俯瞰パース。

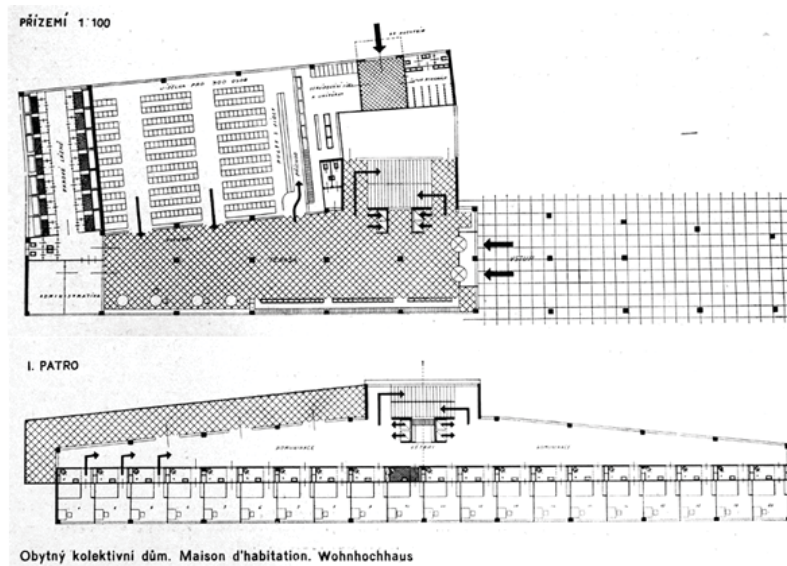


図 17 L-プロジェクト：住居棟（コレクティブ・ハウス）のプラン。  
上、共用の食堂とテラスのある1階プラン。下、住居セルのある2階プラン

## 5-2) VČELAコンペに見るタイゲの当時のチェコの状況における問題提起と現実性の追求

そして二つ目のコンペは、1931年のプラハ13区における生活協同組合(VČELA)の小規模アパートの住居地域のコンペである。このコンペについてタイゲは、

「コンペのプログラムは、プロレタリアートの特別な住宅の必要条件と従来の住宅形式の間に存在する相違を克服する方法を例証する、プロレタリア住居の本物の具体的モデルの提案を建築家に要求した。この場合、住宅形式の変化は公然とその社会的状況の変化に束縛され、その使命はそのような新しい住居形式のデザイン事例を提供することである」<sup>139)</sup>

と述べ、このコンペが実際の社会的な動向と同期したものとして位置付けている。このコンペは J.K.ジーハ (J.K. Říha)<sup>140)</sup> の案 (図 17, 18, 19, 20) に最優秀賞が与えられた。このコンペの位置づけについて、

「VČELA のコンペは、プロレタリア住宅が我々の現状において直面しなければならない全ての問題を前景化した」<sup>141)</sup>

とタイゲは述べ、それらの問題を次のように具体的に示した。

a. 根本的なコスト制約の緊急事態への対処；初期の投資費用と賃貸料を下げるために、包括的な合理化と標準化による建設と運営費用の節約。

b. 健康と安全性と快適性の最低限度を維持すると同時に真の「最小限の」アパートをできるだけ多く提供すること。

c. 敷地の不適切な方位に複合施設を適応させること。この理由からコンペ参加者の何人かは閉鎖型区画の解決案を選んだ。この敷地は列状住宅を考慮することが不可能であった。審査員は開放型区画解決案を支持し、J.K.ジーハの半開放型区画の解決案に一等を与えることに決めた。

d. これらのアパートの住民がまだそのような文化的な生活様式を受け入れる準備ができていないと

主張された為、当面、住宅の集産化の為に一貫して実行された解決案の全てのアイデアを放棄すること。代わりに、これらの建物においてコレクティブ・ハウジングの段階的な発展の機会を創造すること。(この必要条件は実際にコンペ・プログラムに含まれていた)

e. 新しいアパートの小さいサイズに相応しい新しい家具を手に入れる財源を持たない貧しい住民が、古い家具とともに引っ越せる方法をアパート・プランによって解決すること」<sup>142)</sup>

と、タイゲは VČELA コンペによって明らかにされた現実的な課題を総括している。最終的に上述した当時のチェコにおける二つの建築コンペについてタイゲは、

「L-プロジェクト」が社会主義の状況における仮定に概念的に基づいた一方、VČELA コンペは、現在の状況と現在の建築法規の枠組みの中における、労働組合の自立によるプロレタリア住宅の建設について考察した」<sup>143)</sup>

と、それぞれを位置づけている。

以上のことから、当時のチェコの近代建築を取り巻く動向の中で、タイゲは「L-プロジェクト」における理想的な先鋭性と VČELA コンペにおける現実性とを弁証法的に対置させたといえ、チェコの建築の近代化過程における彼の理論的側面からの主導と、その実践の際のコンフリクトとの振幅がここに記録されていると筆者は考える。

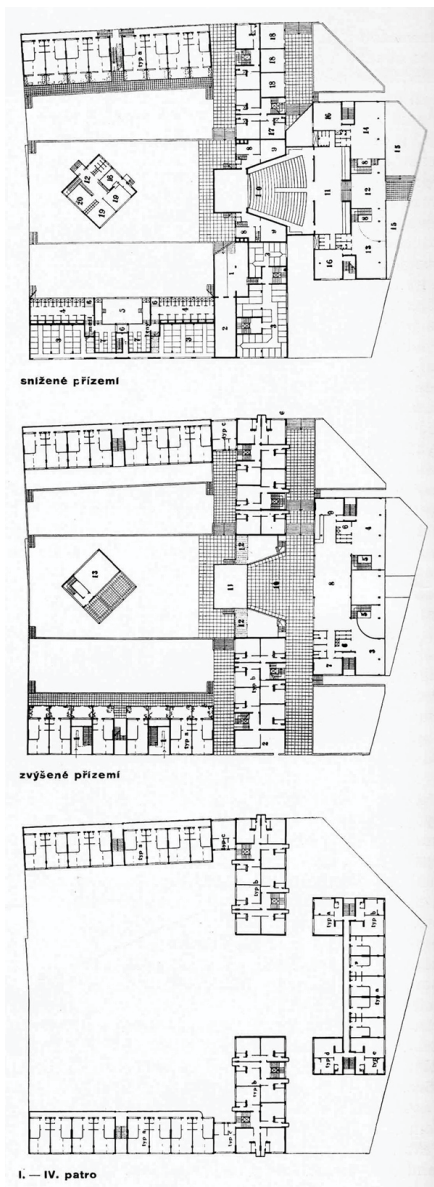


図 18 J. K. ジーハ、VČELA コンペ案 (1931) :

上から、ホール、レストラン、保育室、浴室等を含む地上階プラン。

中は共用食堂、厨房、ジム他の共用部と居室のある 2 階プラン。

下は居住階の基準プラン。

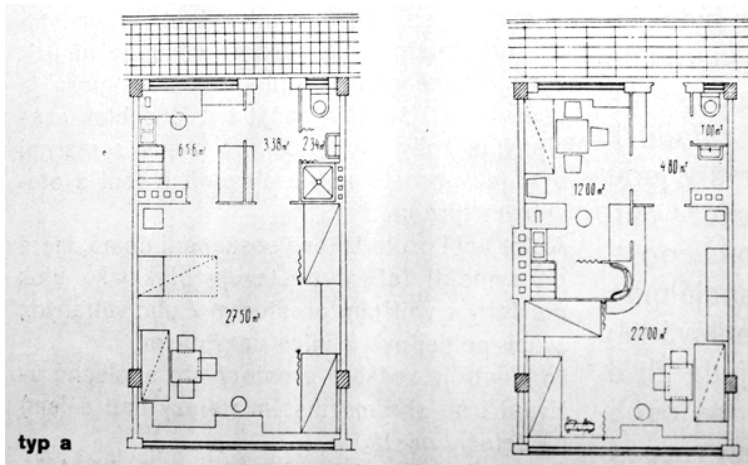


図 19 J. K. ジーハ、VČELA コンペ案：居室プラン a タイプ。

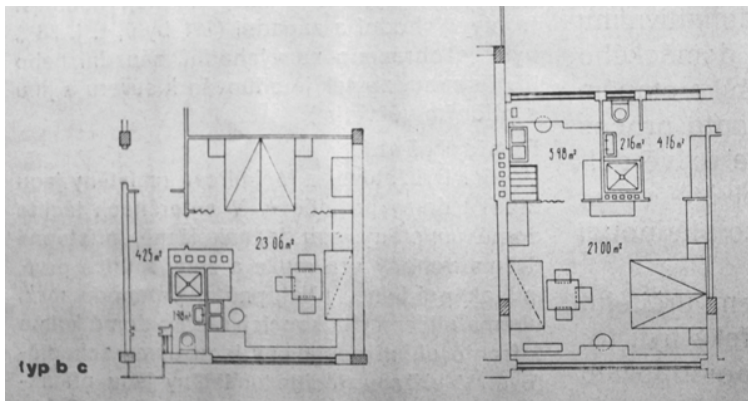


図 20 J. K. ジーハ、VČELA コンペ案：居室プラン b, c タイプ。

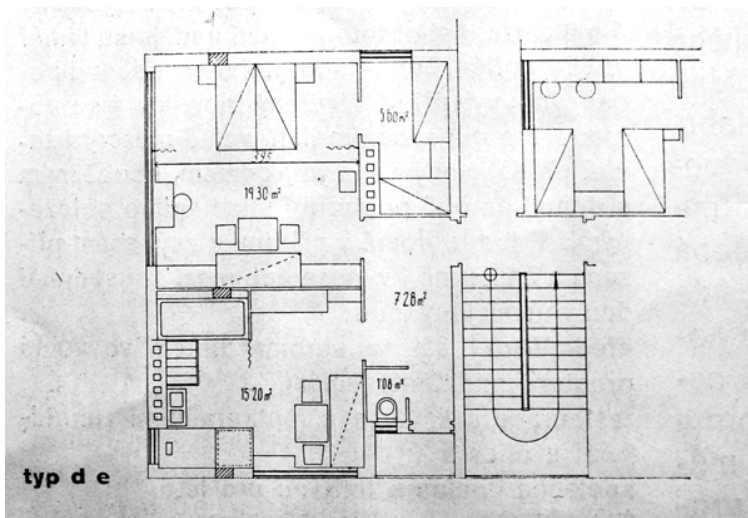


図 21 J. K. ジーハ、VČELA コンペ案：居室プラン d, e タイプ。

## 第4節 要約

### 第三章における歴史的背景とタイゲの活動履歴

1929	ブルトン『第二宣言』発表。 世界恐慌が起る。	「左翼戦線」結成。 論稿「ムンダネウム」発表。
1930	共産党の詩人コストカ・ノイマン、第三代議長に選出。 チェコの工業を背景とした経済的な安定が続く。	チェコ・グループ代表として CIAM に参加。 著作『チェコスロヴァキアの近代建築』出版。 論稿「発展段階」発表。 論稿「ル・コルビュジェと新しい建築」発表。 ハンネス・マイヤーの招きによりバウハウスで講演を行う。
1931		ル・コルビュジェがブルノにおいて講演を行う。
1932	ズデーテン＝ドイツ祖国戦線が民族主義的活動を開始。	プラハでの「詩学・1932年」国際展。 論稿「輝く都市」発表。 著作『最小限住居』出版。

第二節において、ル・コルビュジェへの一連の批判を通して一般化していった近代建築という枠組みに潜在する矛盾への批判は、この時代のタイゲの建築思想の形成において重要な役割を果たしたと筆者は考える。これら一連の論稿には、建築と記念碑性、建築と社会構造、建築と芸術、そして都市計画と金融資本の問題と、この時代のタイゲの建築思想の根幹を成す主題が散見できる。これらの主題は 1920 年代後半から 1930 年代前半のタイゲの建築思想の集大成といえる著作『最小限住居』にまとめられる。

第三節においては、著作『最小限住居』におけるタイゲの言説を「建築と社会の関係」、「女性の解放と建築」、「近代建築批判」、「都市・建築モデルの提示」、「自国チェコの動向への反応」の 5 つの評価軸から整理し、本書における彼の理論の展開を、彼の根幹となる思想から当時の都市・建築に対する批判、具体的な代案の提示に至るまで示した。本書において、タイゲは住宅危機の背景に社会構造の問題を見だし、そこに社会学的なアプローチを試みた。タイゲはこの考え方を基に、当時のヨーロッパの住宅危機の問題に対して、歴史的文脈を含む都市の問題、そして階級問題が複合的に関連する社会構造そのものの分析から取り組んだ。タイゲはこれらの多様な領域を架橋しながら、都市・建築における社会階級の問題を抽出し、最終的に女性の解放を目的とした建築論へと展開していった。この建築論の編纂の過程で、タイゲは女性の解放の理念と実際の住宅プランニングの矛盾、ル・コルビュジェ等を中心とする当時の近代建築のデザインと社会階級的な芸術性の矛盾、また、同じくル・コルビュジェを俎上に載せることで当時の近代の都市計画が孕む金融資本的プログラムの矛盾を批判した。

これら『最小限住居』の一連の言説に見られる、一つの理念に収斂することなく、その実践の状況と照らし合わせながら既存の近代建築という枠組みが内包する二重構造を批判し、当時の建築家が提唱する近代建築のスローガンの同一性を解体していく理路には、この時代のタイゲの建築思想の特質の一端が現れているといえる。そしてタイゲは上記の批判を踏まえ、当時のソビエトの社会主義の建築からの影響を含めた具体的な都市・建築モデルの提示へと建築論を展開した。そして、それらのモデルを基にチェコの二つの「ホテル形式」の具体的な計画案が提示され、最終的に当時のチェコの近代建築の状況を象徴する二つのコンペ、「L-プロジェクト」の理念性と VČELA コンペにおける現実性の対比へと至った。これらの一連の言説に見られるタイゲの建築思想の振幅は、1930 年代前半のチェコの建築の近代化過程における理論

的背景とその実践とが相克する状況の歴史的な記録として貴重なものと筆者は考える。

最後に、本書においてタイゲは社会階級問題から捉えた女性の解放の思想を建築論として展開し、社会における性差を含む階級の共存のあり方を具体的な建築提案として示した。ここに見られる女性の解放を建築論として追求したタイゲの思想は、フェミニズムの歴史的側面からも先駆的なものの一つと著者等は考える。本書が出版された1930年代前半は、いわゆる第一波フェミニズムと呼ばれる時代に相当する。この第一波フェミニズムとは、

「第一波フェミニズムとは第二波フェミニズム以前のフェミニズムを言う。こうした呼び方を作ったのは、当然にも、(現代において) 第一波フェミニズムに属する(と見なされる)当の人々ではなく、後世の(第二派以降の)人々である。(中略) なにしろそこには、非常に多くの国々において生まれたフェミニズムが含まれているだけでなく、フェミニズムが生まれてから後の一世紀半にもわたる歴史的時間までもが含まれているのであるから」(江原 由美子、金井 淑子 編、『フェミニズムの名著50』)

とされるものであり、1932年に女性解放の思想を具体的な建築論として示した本書は、このフェミニズムの歴史的な観点から先駆的なものと筆者は考える。また、同じく女性と建築を取り扱った1924年のブルーノ・タウトの著書『新しい住居 作り手としての女性(Die Frau Wohnen, Die als Schöpferin)』についてもタイゲ自身は本書の中で言及しており、ここでのタイゲの女性解放の思想に基づく建築思想は同時代の先行的な思想も踏まえたものであるといえる。

## 註

- 1) Karel Teige, "K nové architekture", *Stavba 2*, 1923, pp179-83.
- 2) Karel Teige, "Hyperdada", *ReD. Ročník 1*, 1927-1928, pp35-38.
- 3) Karel Teige, "Mundaneum", *Stavba 1*, 1928-1929, pp145-155.
- 4) Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.
- 5) Karel Teige, "Etapy vývoje", *Stavba 8*, 1929-1930, pp6-16, pp19-23.
- 6) Karel Teige, "Le Courbusier a nová architektura", *Index2*, 11-12, 1930, pp.83-86, 1930.
- 7) Karel Teige, "Le Corbusierovo Zárící", *Stavitel 13*, 1932, pp.21-28.
- 8) Karel Teige, "Odpoved' Le Corbusierovi", *Musaion*, 1931.
- 9) Karel Teige, "K sociologii architektury", *ReD 3*, 6-7, pp.161-223, 1930.
- 10) Karel Teige, "Minimální byt a kolektivní dům", *Stavba 9*, 1930-1931, pp.28-29, pp.47-50, pp.65-68, 1930.
- 11) Karel Teige, "Architektura a třídní boj", *ReD 3*, 10, pp297-310, 1931.
- 12) Karel Teige, *nejmenší byt*, Václav Petr, 1932.
- 13) *Ibid.*, pp15-16.
- 14) エル・リシツキー 著, 阿部公正 訳, 『革命と建築』, 彰国社, 1983年, 27頁。
- 15) Karel Teige, *op.cit.*12, p.21.
- 16) 『最小限住居』第3章がCIAMの依頼によるタイゲのレポートに相当する。
- 17) 「本書『最小限住居』は、CIAMの業務を助ける試みでもある。これが会議の出版物に使われた用語が、同様にこのテキストでも採用された主な理由である」(Karel Teige, *op.cit.*12, p364.)
- 18) Karel Teige, *op.cit.*3,p.146.
- 19) *Ibid.*,p.146.
- 20) *Ibid.*,p.147.
- 21) *Ibid.*,p.151.
- 22) *Ibid.*,p.151-152.
- 23) *Ibid.*,p.152.
- 24) *Ibid.*,p.153.
- 25) *Ibid.*,p.153.
- 26) *Ibid.*,p.154.
- 27) *Ibid.*,p.154.
- 28) *Ibid.*,p.154.
- 29) *Ibid.*,p.155.
- 30) *Ibid.*,p.155.
- 31) *Ibid.*,p.155.
- 32) Karel Teige, *op.cit.*5, p.7.
- 33) *Ibid.*,p.7.
- 34) *Ibid.*,p.7.
- 35) *Ibid.*,p.7.
- 36) *Ibid.*,p.8.
- 37) *Ibid.*,p.10.
- 38) *Ibid.*,p.10.



- 39) *Ibid.*,p.11.
- 40) *Ibid.*,p.11.
- 41) *Ibid.*,p.12.
- 42) *Ibid.*,p.12.
- 43) *Ibid.*,pp.12-13
- 44) *Ibid.*,p.13.
- 45) *Ibid.*,p.14.
- 46) *Ibid.*,p.14.
- 47) *Ibid.*,p.14.
- 48) *Ibid.*,p.14
- 49) *Ibid.*,p.15.
- 50) *Ibid.*,p.16
- 51) *Ibid.*,p.22.
- 52) Karel Teige, *op.cit.*6, p.83.
- 53) *Ibid.*,p.83.
- 54) *Ibid.*,p.83.
- 55) *Ibid.*,p.83
- 56) *Ibid.*,p.83.
- 57) *Ibid.*,p.83.
- 58) *Ibid.*,p.83.
- 59) *Ibid.*,p.84.
- 60) *Ibid.*,p.84.
- 61) *Ibid.*,p.84.
- 62) *Ibid.*,p85.
- 63) *Ibid.*,p.85-86.
- 64) *Ibid.*,p86.
- 65) *Ibid.*,p.24.
- 66) *Ibid.*,p.24.
- 67) *Ibid.*,p.25.
- 68) *Ibid.*,p.25.
- 69) *Ibid.*,p.25.
- 70) *Ibid.*,p.25.
- 71) *Ibid.*,p.28.
- 72) Karel Teige, *op.cit.*12, p.21.
- 73) *Ibid.*,p.34.
- 74) *Ibid.*,p.46.
- 75) *Ibid.*,p47.
- 76) *Ibid.*,p.63.
- 77) *Ibid.*,p105.
- 78) *Ibid.*,pp.107-108.
- 79) 「空想的社会主義者」については、五島茂、坂本慶一、「ユートピア社会主義の思想家たち」、『世界の名著 続8 オ

- ウエン サン・シモン フーリエ』, 中欧公論社, 1975年, 5頁-96頁. を参照されたし。
- 80) シャルル・フーリエ (Charles Fourier, 1772-1837)。ブザンソンの商人の家に生まれる。『四運動の理論』をはじめとする一連の著作で独自の「情念引力」理論を展開し、「ファランジュ」と呼ばれる農業共同体を提唱する。(石井洋二郎, 『科学から空想へ』, 藤原書店, 2009.より)
- 81) ファランステール (phalanstère) については、石井洋二郎, *Ibid.*, 144頁-148頁.を参照されたし。
- 82) Karel Teige, *op.cit.* 12, p.108.
- 83) *Ibid.*, p.108.
- 84) *Ibid.*, p.110.
- 85) 都市と地方の対立の概念については、「社会主義思想にとってみれば、都市はそれ自体封建制から脱皮した資本主義によって造営されたもので、『反デューリング論』でのエンゲルスの指摘をまつまでもなく、農村との対立の構造をも含めて様々な矛盾と搾取構造の結集したものであった。」(八束はじめ, 『ロシア・アヴァンギャルド建築』, INAX出版, 1993年, 299頁.) とあり、タイゲの言説はこれらの社会主義思想の流れを汲んだものと思われる。
- 86) 「本書は史的唯物論に立脚した「共同体論」「家族論」「国家論」の古典として名高い名著であるが、同時に、フェミニズム、とくにマルクス主義フェミニズムや社会主義フェミニズムにとってもっとも重要な基本文献として位置づけられてきた」(古田睦美, 「フリードリッヒ・エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』」, 江原由美子, 金井淑子・編, 『フェミニズムの名著50』, 平凡社, 2002年, 39頁.)
- 87) フリードリッヒ・エンゲルス, 『家族・私有財産・国家の起源』(Friedrich Engels, *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums des Staats*, Im Anschluß an Lewis H. Morgan's Forschungen, 1884.)
- 88) Karel Teige, *op.cit.* 12, p.160.
- 89) タイゲによるエンゲルスの引用文の邦訳に関しては、土屋保男・訳, フリードリッヒ・エンゲルス, 『家族・私有財産・国家の起源』, 1999年, 新日本出版社, 101頁-102頁. から参照した。
- 90) タイゲは本書において、F. エンゲルスの『住宅問題(Zur Wohnungsfrage)』(1887)からもいくつかの引用を行っている。
- 91) Karel Teige, *op.cit.* 12, p.160.
- 92) 八束はじめ, 『希望の空間—ロシア・アヴァンギャルドの都市と住宅(住まい学大系)』, 住まいの図書館出版局, 1988年, 25頁-26頁. によれば、1910年代後半から1920年前後のソビエトにおいて「だがより核心的で避けて通れぬ共産主義的問題としてあったのは、家族制の問題及びその一部としての女性の家事への隷属からの解放のそれである」とあり、レーニンが愛読していたとされる1863年のチェルヌイシエフスキーの小説『何をなすべきか』が後のコレクティヴ・ハウジング(ドム・コムーナ)に与えた影響について述べられている。ここに見られるタイゲの言説にはこれらのソビエトからの思想的な影響があると思われる。
- 93) Karel Teige, *op.cit.* 12, p.160.
- 94) *Ibid.*, p.162.
- 95) *Ibid.*, p.162.
- 96) *Ibid.*, p.162.
- 97) *Ibid.*, p.162.
- 98) *Ibid.*, p.162.
- 99) *Ibid.*, p.165.
- 100) *Ibid.*, p.165.
- 101) *Ibid.*, p.33.
- 102) *Ibid.*, p.33.
- 103) *Ibid.*, p.41.

- 104) *Ibid.*,p.41.
- 105) *Ibid.*,p.137.
- 106) *Ibid.*,p.137.
- 107) *Ibid.*,p.143.
- 108) *Ibid.*,p.168.
- 109) *Ibid.*,pp.168-169.
- 110) *Ibid.*,p.169.
- 111) *Ibid.*,p.169.
- 112) *Ibid.*,p.170.
- 113) *Ibid.*,p.169.
- 114) *Ibid.*,p.169.
- 115) *Ibid.*,p.277.
- 116) 当時のヨーロッパの近代都市の健康と衛生の問題は、本書の第5章「現代都市の表層」において、詳細にレポートされている。
- 117) Karel Teige, *op.cit.*12, p.277.
- 118) *Ibid.*, p.278.
- 119) 1891年生まれのチェコの建築家。
- 120) *Ibid.*,p.291.
- 121) *Ibid.*,p.291.
- 122) *Ibid.*,p.291.
- 123) *Ibid.*,p.291.
- 124) 『ソツゴロド』は七千部印刷され、当時の外人コロニーにまで広く行き渡り、一部は国外にまでもち出されている。  
(中略) 当時の” Bauwelt (建築世界)” のような雑誌で紹介されたロシアの都市計画に関する論文には必ずといってよいほどこの本への言及が行われている」(八束はじめ, *op.cit.*33, 311頁-312頁.)。原版は1930年に the State Publishing House RSFSRより出版、英語版は、N.A.Miliutin, *Sotsgorod: The Problem of Building Socialist Cities*, The MIT Press, 1975.
- 125) Karel Teige, *op.cit.*12, p.296.
- 126) タイゲは「ホテル形式の生活は近代建築の新しい現象ではない」と述べ、ル・コルビュジェの1922年の集合住宅 (Immeuble- villas) 計画案等を「ホテル形式」の先駆として挙げている。( *Ibid.*,p.305)
- 127) Karel Teige, *op.cit.*12, p.297.
- 128) *Ibid.*, pp.302-305.
- 129) 「ドム・コムーナ」については、八束はじめ, *op.cit.*33, 229頁-245頁. を参照されたし。
- 130) 1899年生まれ of チェコの建築家。
- 131) 1900年生まれ of チェコの建築家。
- 132) ソビエトのドム・コムーナの影響を受けた、チェコにおけるコレクティブ・ハウスのモデル。
- 133) 1904年生まれ of チェコの建築家。
- 134) 1902年生まれ of チェコの建築家。
- 135) 「1920年代後半、CIAMに参加したチェコのアヴァンギャルド芸術家グループ「左翼戦線(Levá Fronta)」はブラハで設立され、カレル・タイゲによって統率され、建築家ヨセフ・ホホルによって活発にサポートされた。」(Vladimir Šlapeta and Wojciech Leśniowski, *op.cit.*18, p.68.)
- 136) Karel Teige, *op.cit.*12, p.314.

- 137) *Ibid.*,p.314.  
138) *Ibid.*,p.314.  
139) *Ibid.*,p.349.  
140) 1893年生まれのチェコの近代建築家。1917年から18年までヤン・コチェラの下で働く。  
141) Karel Teige, *op.cit.*12,p.350.  
142) *Ibid.*,p.350.  
143) *Ibid.*,p.316.

#### 図版出典

- 図 1 Karel Teige, "Mundaneum" , *Stavba 1*, 1928-1929, p.145.  
図 2 Karel Srp, *Karel Teige a typografie-Asymetrická harmonie*, Akropolis, 2009. P.157  
図 3 *Ibid.*, p.157.  
図 4 ジャック リュカン 監修、加藤 邦男 訳、『ル・コルビュジェ事典』、中央公論美術出版、2007、320 頁。  
図 5 *Ibid.*, 320 頁  
図 6 ル・コルビュジェ (著), 坂倉準三 (訳), 『輝く都市, 鹿島出版会』, 1968.  
図 7 Karel Teige, *op.cit.*2.p.278.  
図 8 *Ibid.*, p.278.  
図 9 *Ibid.*, p.292.  
図 10 *Ibid.*, p.340.  
図 11 *Ibid.*, p.298.  
図 12 Karel Teige, *op.cit.*10, pp.145-147.  
図 13 *Ibid.*, p179.  
図 14 Karel Teige, *op.cit.*2.p.312.  
図 15 *Stavba 9*, Klub architektů,1930-1931, p.117  
図 16 *Ibid.*, p.117.  
図 17 *Ibid.*, p.117.  
図 18 *Stavitel 12*, Stavitelská sekce Klubu inženýrů a stavitelů,1931, p.76  
図 19 *Ibid.*, p.76.



## 第四章 1930年代後半から1940年代のカレル・タイゲの建築思想と論説「自然と建築の序説」

### 第一節 展望

1929年のアンドレ・ブルトンのシュルレアリスム「第二宣言」におけるマルクス主義とシュルレアリスムの協働の提案は、チェコにおいてタイゲ等デヴェトスィルのメンバーをシュルレアリスム運動への支持へと向かわせた。この時代のシュルレアリスム運動はヨーロッパにおける政治的な状況と密接に関連するものであった。1932年のプラハでの『詩学・1932年』国際展にはシュルレアリスム絵画が一同に会した。そして1934年3月21日、プラハでシュルレアリスム・グループが結成され、タイゲが代表をつとめることとなった。翌1935年には、ブルトン、エリュアール、シーマ等パリのシュルレアリストたちがプラハとブルノに招かれ、「シュルレアリスム国際会議」が開催された。ちなみに、これと同時期の1935年からタイゲはフォト・モンタージュ作品の制作を始めている(写真1、2)。

この時代における、シュルレアリスムの政治的な立ち位置について、酒井健の言葉を借りれば、

「シュルレアリスム革命」は二つの要請の実現を目指している。要請の一方は文化の領域、とくに芸術、その中でも詩の創作における西欧の刷新である。もう一方の要請は、既存の社会・経済制度の刷新である。当事者達の資質は、おおむね、前者の文化の領域にあった。実際、シュルレアリスム運動はまず文化運動として出発したのであり、その方面で新たな作品を多く残した。他方、社会・経済制度の刷新に関しては、シュルレアリスト、とくに主流派の人々は、共産主義に加担することでこれを果たそうとする。1927年、ブルトン、アラゴン、エリュアールは、こぞってフランス共産党へ入党した。」<sup>1)</sup>(酒井健、「バタイユ入門」)

という状況にあり、ソビエトの社会主義の動向はヨーロッパのアヴァンギャルド達に大きな作用を及ぼしていた。

この大きく揺れ動く動向の中、1932年、タイゲはモスクワにおけるソビエト・パレスの国際コンペの結果に伺えるスターリニズムの台頭に対して、即座に批判的な反応を示したとされる<sup>2)</sup>。そして1935年、タイゲは論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム(socialistický realismus a surrealismus)」<sup>3)</sup>を発表する。1936年になるとソビエトでは第一回モスクワ裁判が行われている。

1920年代に始まったアンドレ・ブルトンを中心とするパリのシュルレアリスム運動は、アラゴンの共産党入党といういわゆる「アラゴン事件」を契機に分裂に至った。同様に、1936年にはチェコのシュルレアリスム運動の中核にいたネズヴァルとタイゲが反スターリニズムの立場を取り、チェコのシュルレアリスム・グループは解体に至ったとされる<sup>4)</sup>。

翌1937年、タイゲはモスクワで行われた全ソ建築家同盟総会に参加する。そこではスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムが主流となり始めており、それを受けて、同年には論稿「ソビエト建築の発展 — 古典主義の復活とソビエト様式の追求—(Vývoj sovětské architektury ·Obnova klasicismu a hledání sovětského slohu-)」<sup>5)</sup>を発表する。1938年には、タイゲはチェコのスターリン主義者からの攻撃とナチス・ドイツの全体主義に対抗するかたちで、論稿「流れに逆らうシュルレアリスム (Surrealismus proti proudu)」<sup>6)</sup>を発表している。

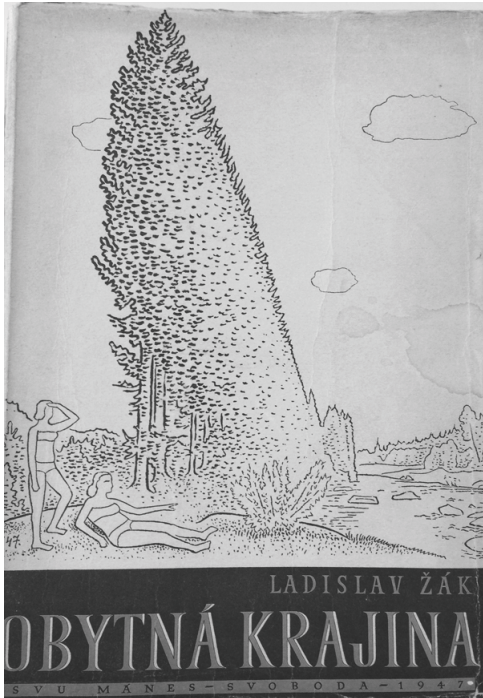
1939年、ナチス・ドイツの侵攻によって、チェコスロヴァキア共和国は占領・解体され、チェコのアヴァンギャルド芸術運動は実質的な終焉を迎える。しかし、公の活動から撤退を余儀なくされたチェコのシュルレアリスム運動は地下での活動へと移行する。ナチス・ドイツに占領されている間も、チェコのシュルレアリストたちはヨーロッパ諸国のシュルレアリストと連絡を取りながら活動をつづけて行ったとされている<sup>7)</sup>。そして1944年10月6日、ソビエト軍は旧チェコスロヴァキア共和国の国境を越え、ルテニア、スロヴァキアを解放し、1945年5月9日には首都プラハを解放した。同年、タイゲは論稿「内的モデル (vnitřní model)」<sup>8)</sup>を發表している。1945年のソビエト軍による首都プラハ解放後、東欧では共産党の勢力が急速に伸びる。戦後、自由主義者のベネシュが元首であったこともあり、チェコでは1947年まで民主的自由がある程度維持されていたとされる。同年、プラハで「国際シュルレアリスム展」が開かれ、タイゲを中心とする新しいシュルレアリスムの組織が結成される。

このような歴史的背景の推移の中、タイゲは1947年にチェコの建築家ラディスラフ・ジャーク(Ladislav Žák)の著書『生活の風景 (obytná krajina)』<sup>9)</sup>(写真3)の序文として、上述の論稿「自然と建築の序説 (předmluva o architektuře a přírodě)」<sup>10)</sup>(写真4)を發表する。同論稿はタイゲの最後の建築論と考えられるものである。その後、1948年に共産党が政権を奪取するという「二月事件」を契機に、チェコの文化芸術は厳しく取締を受けるようになる。その間のチェコのシュルレアリストは再び地下での活動を余儀なくされた。そして1951年にはタイゲを中心に新しいグループが結成されるが、その最中、同年にカレル・タイゲは亡くなる。

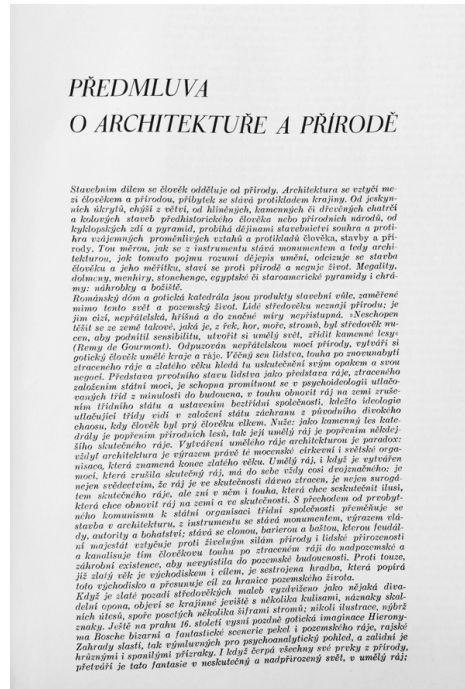
以上の時代的な背景を踏まえ、第四章の二節では、政治的に切迫する状況下における1930年代後半からのタイゲの一連の論稿を整理し、三節では彼の最後の建築論といえる論稿「建築と自然の序論」において提示されるいくつかの主題を筆者が「自然と建築との関係史について」、「近代都市計画と自然について」、「庭園建築の歴史的背景とその状況について」、「シュルレアリスムとランドスケープについて」、と四つの項目にまとめ、そこからこの時代のタイゲの建築思想の枠組みとその詳細について整理したい。



図1 カレル・タイゲとアンドレ・ブルトン



(左) 図4 ラディスラフ・ジャーク、『居住の風景 (obytná krajina)』(1947): 表紙。



(右) 図5 カレル・タイゲ、「建築と自然の序論」。



## 第二節 1930年代後半から1940年代のタイゲの建築思想の変遷

### 1) 社会主義リアリズムとシュルレアリスムについて

ナチス・ドイツとソビエトにおけるスターリニズムの台頭著しい時期にあたる1934年3月21日、プラハにおいてシュルレアリスム・グループ結成され、タイゲはこのグループの代表者をつとめた。また、同年には最初のソビエト作家会議が開かれている。そして1935年4月、タイゲ等チェコ・シュルレアリスム・グループはアンドレ・ブルトンらをチェコに招聘し、プラハとブルノで講演を開催している。そして同年、タイゲは前述の論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム」を発表している。この論稿の冒頭で、タイゲは政治的に切迫する状況下にあるチェコでの二つの芸術思想の対立について述べている。

「二つの党派は、世界観においては弁証法的唯物論に当てはまるという点では同一であるが、考え方や芸術の特別な方法論において異なっている。つまり、シュルレアリストのグループと、社会主義的リアリズムの支持者のグループである」<sup>11)</sup>

そしてタイゲは、この時代にソビエトで台頭してきたスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムに対して次のように述べている。

「そしてここでは、“社会主義リアリズム”というスローガンは、最近のソビエトの現実の強い圧力の元で生まれたことを言わなければならない」<sup>12)</sup>

と、当時の社会主義リアリズムというスローガンを取り巻く政治的な背景について述べている。この、ソビエトで台頭してきたスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムに対して、タイゲは同論稿の中で本来的な意味での社会主義リアリズムという言葉を再定義し対置させている。そしてタイゲは、そこからパリのシュルレアリスム運動の接続の可能性を示唆し、両者の接続点として「ロマン主義」という概念を配置している。タイゲによれば、

「社会主義リアリズムを先導する全ての理論家たちは、革命的ロマン主義は社会主義リアリズムの要素の一部であると強調する。(中略)シュルレアリスムは、ロマン主義が激変した最新の形式として定義され、その系統はバートランド、ボレル、そしてボードレー、ロートレアモン、ランボーを経て、エリュアール、シャール、ブルトン、そしてペレに至った。(中略)社会主義リアリズムの一般論から考えると、このシュルレアリスムの理論と実践の度合いにおいて、根本的な矛盾を我々は見つけていない」<sup>13)</sup>

とし、当時のソビエトの理論家が標榜したとされる社会主義リアリズムという概念に「革命的ロマン主義」<sup>14)</sup>という概念が介在していることをタイゲは指摘し、この「ロマン主義」という共通項を元に、シュルレアリスムとの接続が可能とする理路の構築を試みている。これについて、タイゲは以下にそれぞれを関係づけている。

「もしロマン主義が社会主義リアリズム全ての複合体における革命的要素の構成部分の一つであるならば、社会主義リアリズムの一部として考えられる革命的ロマン主義は、詩の世紀において発展と変革の最新の段階にあるシュルレアリスムでもあると考えられる」<sup>15)</sup>

つまり、タイゲはここで「革命的ロマン主義」という概念の弁証法的な段階としてシュルレアリスムを置き、当時のソビエトにおける社会主義リアリズムを「最新の段階にあるシュルレアリスム」として位置づ

けることで、それぞれが通底する関係と、両者の本質的な親和性と弁証法的な関係性をタイゲは示そうとしたといえる。この両者の本質的な定義から、タイゲは当時のソビエトの社会主義リアリズムに対して、「リアリズム」という言葉の解釈について言及している。

「現在、全ての社会主義リアリズムに含まれている、小説、絵画、演劇、そして映画のリアリズムの主要な弱点は、現実を人間の感覚的、かつ知的な活動や主観ではなく、外形的なオブジェや過程の形態でしか見ないことであるという共通点を我々は述べることができる。それは今のところ経験上のオブジェの形態としてのみ知られている全てのリアリズムにおける現実であり、精神的現実としての内的な生活は無視されている。そして事実や主観的な心理学の要素を無視することは芸術の枯渇である」<sup>16)</sup>

とし、当時のソビエトの社会主義リアリズムが外的な形態の記述においてのリアリズムであり、内的な精神性を記述する意味でのリアリズムが除外されていることをタイゲは指摘している。そして、この当時のソビエトにおけるスターリニズムに基づく社会主義リアリズムの問題点の表出として、当時のソビエトの建築の状況を取り上げタイゲは以下に述べている。

「今日のソビエトの文学、芸術、映像と建築生産における大多数の立ち位置は、模倣された教育的古典主義と古典的リアリズムが常にある、と我々に強い印象を与えている。これは特にソビエトの絵画とソビエト建築のことであり、それらは今や悲観的な装飾主義と形式主義に埋もれてしまっている」<sup>17)</sup>

とし、当時のソビエトにおける社会主義リアリズムに基づいた建築が模倣的な古典主義へと向かったこと、そして、そこに見られる外形的な装飾主義と形式主義的な側面をタイゲは批判している。そして、その背景にある理論的な文脈について、

「(前略) ソビエトの建築理論家たちは、ソビエトの建築はその歴史と古典的な教育において成り立つが、過去の建築様式を模倣することはないという、しかし「古典への回帰」は古典様式の模倣、もしくはある種の新古典主義（正確には擬似古典主義）を生み出すこと、もしくは後のルネサンスや構成主義建築を少しずつ拾い集めた、変動する不規則な折衷主義へと導くことを経験が示している」<sup>18)</sup>

とタイゲは述べ、当時のソビエトの建築における古典主義に対する指向性から、過去の建築様式の模倣が混在する折衷主義が生まれるとし、当時のソビエトの社会主義リアリズムが内包する性向が建築において表出する過程を分析している。そして最後に、シュルレアリスムの果たす役割についてタイゲは次のように述べている。

「シュルレアリスムはロシアの詩とロシア芸術の発展に関与していない。しかし、ソビエトの社会主義芸術は、弁証法的リアリズムとシュルレアリスムが西欧の反詩的現実から奪還した詩的現実と、この反詩的現実が革命的挑戦として構築したものへの対抗を高めている最中だと仮定することができる」<sup>19)</sup>

とされる言説には、ソビエトにおける社会主義リアリズムと西欧におけるシュルレアリスムとを弁証法的に対応させることで、ソビエトにおけるそれが一つのプロセスであるという理路を提示し、当時のスターリニズムの台頭する状況における社会主義リアリズムに対して理論的に刷新を試みるタイゲの姿勢が確認できる。これらのことから、この論稿には当時のスターリニズムの台頭に対して反対の意を表明するタイ

ゲの政治的態度が示されていると筆者は考える。

## 2) スターニズムの台頭以降のソビエト建築について

1932年にソビエトでソビエト・パレスの国際コンペを契機に、ソビエトでの政治的な背景を伴った建築的な潮流の変化が顕著になりつつある1937年、タイゲはモスクワで行われた全ソ建築家同盟総会に参加する。そこでは上述の通りスターニズムに基づいた社会主義リアリズムが主流となり始めていた。同年、これらのソビエトにおける建築的な潮流を受けてタイゲは前述の論稿「ソビエト建築の発展—古典主義の復活とソビエト様式の追求—」を発表している。この論稿の冒頭で、タイゲはソビエト・パレスのコンペについて以下に述べている。

「モスクワにて開催されたソビエト・パレスの第一回国際コンペティションの年（1932年）、それはソビエト建築における古典主義と折衷主義の復活の始まりの日付である。以後、ソビエトの建築デザインにおいて起きた重要な歴史的転換、つまり機能主義からの撤退として、また、過去の年々では全く目立たない位置にあった伝統的、古典的、折衷主義の建築概念の復活として概略的に説明できるその変遷は、ソビエト建築において生じた観念的な混乱の現れである」<sup>20)</sup>

そして、ここでタイゲが触れているソビエトの建築における古典主義への回帰の具体的な状況について、

「結局、ル・コルビュジェは "パルテノンの手本" のことを述べているが、古典への回帰、つまりドリス式、イオニア式、コリント式オーダーについて説いているわけではないことを我々は知っている」

<sup>21)</sup>

と、当時のソビエトの建築における古典主義への回帰に表層的な様式性を見だし、これを批判している。

つづけて、

「そして、社会主義建築の明白で生産的な価値は、建築や建築遺産における非ヨーロッパ的、非古典主義様式に見ることができ、特にごく近い過去（すなわち機能主義）の遺産は新しいソビエト建築として再利用し再処理されなければならない」<sup>22)</sup>

とタイゲは述べ、社会主義における建築の本来のあり方を示し、当時のソビエトの建築的な状況と社会主義の建築の本来の機能主義的な理念との乖離を指摘している。しかし、ここでタイゲは古典主義そのものを批判しておらず、社会主義思想と過去の様式の表層的な模倣の考えにおける齟齬を指摘していることが以下の言説に確認できる。

「一方で、古典主義は学ぶためにあるが、模倣するわけではなく、モダニズムの建物に古代の、もしくはルネサンスのガウンを着せることは不可能であるが、新しい様式に移行するという古典主義的原理は、社会主義の社会に適していたのである」<sup>23)</sup>

そして、この当時のソビエトにおける具体的な状況についてタイゲは、

「今日のソビエト建築の雑然とした理論は、今日普及しているソビエトの建築業界で実際に働く人以外の状況には当てはまらない。つまり、古代遺産とルネサンスの消極的な模倣、もしくは過去の様々な様式に、交互に、あるいは同時に寄生し変動する折衷主義である。この伝統主義的、折衷主義的な実践は、建築の指針として計画された社会主義リアリズムの考え方によって俗悪にされる。そして今日のソ連の文学、芸術作品のように、それは古いブルジョワにおける記述的なリアリズムによる社会主義リアリズムの名に基づき、ソビエト建築は、19世紀の建築が文学と芸術におけるリアリズム運動

を同時に適用した方法、すなわち伝統主義的なルネッサンス様式と折衷主義による建築を模倣する」

24)

と述べており、当時のソビエトにおける社会主義リアリズムに基づく建築が古典建築の様式的な折衷主義へと至る過程について、この論稿でも再び言及している。タイゲはこの様式的な折衷主義に対して、

「それは周囲から物体の表面を取り囲み、そして物体の外部イメージを伝える。つまり建築の外部の表面である。外的な形態はその内的な形態の反映であり、実際の内容と分離できずに繋がっている。この内的な形態は現象における主題に対して法則的に決定的であり、それは建物の外部を決定し、内的な形態は建物の内部と繋がっている。つまり実は一つのものなのである」<sup>25)</sup>

と述べており、前述の論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム」における論旨と同様に、事物の内と外の形態に対するタイゲの建築思想の一端が示されている。つづけて、この当時のソビエトにおける建築に対して、タイゲは以下に述べている。

「模倣や過去の建築様式の回帰が、一般民衆の階級に新しい建築の作風や感性をもたらすと信じることは間違いである」<sup>26)</sup>

と、その一般民衆との乖離をタイゲは指摘している。これらを踏まえ、

「ソビエトの学校に通う沢山の子どもたちの絵を我々は知っていて、そこではソ連の男女は理想的な社会主義都市の幻想を描く（中略）。つまり、それらはルネッサンスの宮殿でもギリシャの柱廊でもなく、果樹園に囲まれ、屋根に庭があり、明るく、鮮やかできれいな透明のガラスの家である」<sup>27)</sup>

とタイゲは述べ、彼自身による本来的な意味での社会主義に基づく建築像をここに提示している。しかし、タイゲがここで描写している「透明なガラスの家」のアナロジーは実際の建築の形式を標榜しているのではなく、

「現在は明確な形態をほとんど推測することもできないが、科学がここで詩と結ばれ、社会主義の無階級社会の人々の自由な生活と結ばれるような考えから生まれるであろう」<sup>28)</sup>

という、言葉による建築的なイメージとして提示されている。

### 3) シュルレアリスム運動の継続

1930年代初めからアンドレ・ブルトンがソビエトの共産党の芸術政策に対して問題を感じていたとされ、1931年の「アラゴン事件」を契機にパリのシュルレアリスム運動は分裂した。<sup>29)</sup> 1936年のスターリニズムへの反応を契機にチェコのシュルレアリスム・グループも解体へと至った。これらのシュルレアリスム運動を取り巻く政治的な状況の中、1938年、チェコのスターリン主義者達からの攻撃に応える形で、タイゲは論稿「流れに逆らうシュルレアリスム」を発表している。

タイゲはその冒頭で、ブルトンが1935年にプラハで行った講演をまとめた論稿「今日の芸術の政治的位置」<sup>30)</sup>の次の言葉を引用することで、ソビエトの共産主義とナチス・ドイツがヨーロッパにおいて台頭する状況下でのシュルレアリスムの政治的な立場を表明している。

「左翼の思想をしばしば絞殺するためには、マルクス主義者を迫害するだけでなく、すべての前衛芸術を禁止しなければならないということを、悲しいことに、ヒトラーとその共犯者たちはきわめてよく理解していました」<sup>31)</sup>（アンドレ・ブルトン、「今日の芸術の政治的位置」）

このブルトンの言葉を引用することで、ヨーロッパにおけるファシズムとソビエト共産党の台頭に対抗するシュルレアリスムの政治的な立脚点を示している。

「現在二つの前線、つまり保守的な右翼と伝統的反動、そして共産党の文化的前線に対して防御的な議論闘争を強いられているシュルレアリスム・グループは、政治の緊張が繁栄されている外的状況を完全に認識しており、反ファシズムの知的勢力の協同を必要としている。特に、社会主義グループにおいて党の区別なく報告されているアヴァンギャルド芸術と科学の行動の協力と団結において、それは必要であり、画一性の企てに対する創造の自由のための共同の苦闘に対し、それが本質的な準備に頼ることができる、改善の真の観念論的な基盤である」<sup>32)</sup>

とタイゲは述べ、当時のヨーロッパで興隆するファシズムに対するアヴァンギャルド芸術による抵抗の意志を表明している。

そしてこの後、1939年のナチス・ドイツの侵攻によるチェコの保護領化以降、チェコのシュルレアリスム運動はヨーロッパ諸国のシュルレアリスムと連絡を取りながら、地下出版というかたちで活動を継続したとされる<sup>33)</sup>。そして、1945年のソ連軍によるプラハ解放以降も、タイゲはシュルレアリスム運動を継続している。同年、タイゲは上述の論稿「内的モデル」を発表している。ここでタイゲは、

「絵画は、二つの段階において現れる。第一の段階は内部モデルの精神的な生成と、それが基本的に完璧に心にイメージが現れる瞬間によるインスピレーションによって定義される。時としてその間に第二の美的処理が施されるかもしれないが、第二の段階はキャンバスの上に心像を固定するプロセスである。結局、その形成の段階の間、内部モデルの精神的な形成プロセスにかなりの程度の影響を及ぼす。ここでは、我々は自身を上記のプロセスの対極に発見する。それは、内部モデルによる想像的絵画である。想像世界のスナップショット(snímku) によって、外的知覚は内部イメージに置き換えられる」<sup>34)</sup>

と、絵画において、内的なイメージが「スナップショット」によって外部化される過程について述べている。この「スナップショット」によるイメージから物質化へと至る生成モデルは、本章二節 2 項におけるシュルレアリスムおよび建築とランドスケープに関するタイゲの言説においても再び言及されており、特筆されるものである。

そして、美術表現における心理学的な考察において、シュルレアリスムの方法論が述べられている。

「我々は、自身を受動的状態へと沈めることで、イメージをとらえることが可能な感光板となる。それは睡眠状態、または催眠下で見る内的イメージ、無意識的な考えを出現可能にする状態、意志力と批評能力が弱められた状態に類似している」<sup>35)</sup>

と、無意識下の内的な世界から生み出されるイメージについて考察されており、第二次大戦後のタイゲのシュルレアリスム運動への継続的な参加がここに確認出来る。

これらの言説には、スターリニズムやナチス・ドイツの台頭から第二次世界大戦の終結までの政治的な動乱の中、タイゲは一貫してスターリニズムやナチズムに対抗しながらシュルレアリスム運動を継続するタイゲの姿勢がここに記されているといえる。

### 第三節 論稿「建築と自然の序説」におけるタイゲの建築思想

#### 1)自然と建築との関係史について

タイゲは、1947年に出版されたチェコの建築家ラディスラフ・ジャークの著書『生活の風景 (obytná krajina)』の前書きとして書かれた論稿「自然と建築の序説」の冒頭で、人間と自然と建築の関係史といえる思想を示している。

「建築物は人を自然から切り離す。建築は人と自然との間に屹立し、住居は風景の対立物となる。洞窟住居、枝でできた伏屋、土や石や木の小屋、車輪の付いた構造物、有史以前の人類や先住民、巨大な壁やピラミッドの建造物は、人と建築と自然の矛盾と多様な相互作用と反相互作用の歴史である。道具が歴史的記念物となるのと同様に、このようにして建築は芸術史という意味を持つに至り、建築物は人間とその尺度を疎外し、自然は生活と対立し、それを否定した」<sup>36)</sup>

と、タイゲは自然と人間と建築との関係を考察するにあたり、その前提となる評価軸をここで示している。

この中でタイゲは、歴史的な文脈から、建築が人と自然の間に置かれ、建築が人と自然との関係の記録そのものとなるという彼の思想的な枠組みの一端が示されている。ここでタイゲが述べている人間と自然と建築の関係史において、以下の文脈が示されている。

「人類の永遠の夢は失われた楽園と黄金時代を取り戻すことであるが、実際はその反対と否定の実現を探求している。抑圧的な階級イデオロギーが野生の混沌状態を救済して建国するのを眺めている間、楽園の概念として人類の最初の国家の発想は、国家権力を無くし、精神イデオロギーに抑圧された階級を過去から未来へ投影することができ、楽園を復元し、階級国家と社会階級の廃止を強く望むことであった」<sup>37)</sup>

と、失われた楽園への回帰の念を端緒とする、国家と階級社会の関係の変遷が綴られている。その過程において建築が置かれた位置づけについてタイゲは、

「結局、石の森のような大聖堂は自然の森林の否定であり、人工の楽園の否定は過去の本物の楽園を表す。建築で人工的な楽園を作ることは矛盾している。結局、建築はただ宗教的権力と世俗的な団体の表現であり、それは黄金時代の終わりをもたらす。もし人工的な楽園が本物の楽園が失った力を生み出せたとしても、それはある種曖昧なものである」<sup>38)</sup>

とし、社会主義思想の基盤にあるユートピア思想を背景に、人類が「失われた楽園」を再現しようする歴史的過程の中で建築が用いられていることを指摘している。そしてタイゲは、その楽園を再現するための過程で建築に付随していった権力的、宗教的な表現が本来の楽園の概念から乖離していく矛盾について言及している。

これらの人間と建築と自然の根本的な関係を踏まえ、タイゲは絵画表現を基にした建築と自然との関係史について述べている。

「16世紀の初め、人はヒエロニムス・ボスの後期ゴシック的な想像力による、現実離れた地獄の奇怪な風景や地上の楽園、エデンの園を喜んで夢見た。それは精神分析的な視点をよく表しており、それは優雅かつ恐ろしい光景であった。全ての描かれた要素が自然から引用されたとしても、これを人

工の楽園のガーゴイルとキメラのいる楽園の大聖堂、大聖堂の影の楽園のある超現実的な空想と超自然の世界へと変換させる」<sup>39)</sup>

とし、タイゲはヒエロニムス・ボス<sup>40)</sup>の絵画(\*筆者注:ここでのタイゲの言説から、エデンの園と空想上の動物、巨大な果物、石造の構造物などの広大な地獄の情景が描かれている『快樂の園』(図6)を指していると思われる)の中に、風景と建築の関係におけるシュルレアリスム的なイメージの発現を見いだしている。つまりそれは、絵画の中の全てのモチーフが自然から引用されながらも、それらのモチーフが想像力によって超自然、すなわちシュルレアリスムの風景へと変換されるという考えをタイゲは示唆していると筆者は考える。

つづけてタイゲは、同じく絵画表現に見られるユートピア思想と建築における表現の関係の歴史的な変遷について述べている。

「しかし既に、1432年の歴史的に画期的な作品であり転換点であるヘントの祭壇画は、楽園の夢が自然と一致している。ファン・エイク兄弟は実際のエデンの園、すなわち本物の人間のカップルで裸の男と女の人物であるアダムとイヴの庭園をつくったのである」<sup>41)</sup>

と述べ、ファン・エイク兄弟<sup>42)</sup>の作品『ヘントの祭壇画』(図7)の中に、楽園を直接的に表現した庭園の発現を認め、そこに新たな価値の転換を見いだしている。

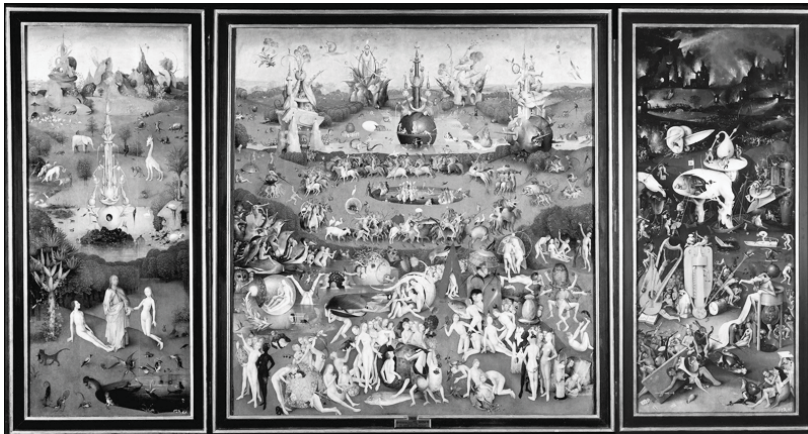


図6 ヒエロニムス・ボス、『快樂の園』(1503-1504 (他説あり))



図7 ファン・エイク兄弟、『ヘントの祭壇画』(1425-32)

そしてタイゲは、

「生活科学における生のイメージ、例えばマネの「草上の朝食」や、ルノワールやセザンヌの「水浴する女たち」は、自由な国の自由な人々の未来の楽園を予見した姿である」<sup>43)</sup>

とし、絵画表現の歴史的な変遷において、近代の絵画における自然への視点の変化にともなう楽園の概念の変化を指摘している。その変化とは、

「もし人間の自然との相互関係の強度、つまりルネサンスによって再覚醒したランドスケープへの理性和感性が印象派によって完全に発現されれば、何世紀もの間、人間と自然とを分離してきた壁であった建築はその消失の時を迎えるだろう」<sup>44)</sup>

と、人間の意識の変質が絵画における自然観に反映される過程の中で、自然の強度そのものの発現による、人間と自然の遮蔽物として存在してきた建築が消失するという概念をタイゲは示唆している。

これらの絵画を通じた人間と自然と建築とが関係する歴史観の文脈から、タイゲは近代に入ってから自然と建築の関係の変化について述べている。

「建築様式は支配階級の形貌であり、記念碑性は自然と人間性の否定であり、それは支配欲と権力の誇大妄想の現れである。それは例えば、ヘーゲルいうところの人間の真の確固たる資質としての自由の否定である。(中略) 19世紀の終わりに、例えばユーゲント・シュティールやアール・ヌーヴォーのような、古いマニエリスムから離脱する全く新しいモダンな若きスタイルが発生した。若者たちは建築の様式は苦痛であると主張する。今、環境を編成する機能的建築への直接的な経路が開かれた。様式的建築と記念碑性の消失によって、自由な生活の編成のための大地は解放されるのである」<sup>45)</sup>

とし、タイゲ自身がいうところの「フランス革命によって建築様式の終焉が訪れた」<sup>46)</sup>時代の到来において、建築の様式と記念碑性が持つ抑圧的な性質の放棄による階級社会からの解放について理路をタイゲは開こうとしたといえる。これら一連の言説には、階級社会からの解放を建築の装飾論として構築するタイゲの建築思想の特質の一端が現れていると筆者は考える。同時にタイゲは、資本主義社会の到来がもたらした都市と建築の関係のさらなる変化について言及している。タイゲは、



「建築や記念碑が力を失ったのではなく、多くの場合、より残忍な事実、つまり資本主義都市、すなわち吸血蜘蛛の都市、アンテナとタワーに覆われた都市が人間と自然との間に存在している。それは石の楽園ではなく石の地獄であり、全てのものや夢が反転してしまうような恐ろしい人工の新しい世界である。人間の魂を身体的な苦役から解放し、物質的な生活は人間の欲求を満足させるはずであった機械は、労働者から搾取し彼らを貧窮へと追いやるのである」<sup>47)</sup>

とし、様式を放棄した建築に代わって、資本主義が前述の建築の様式や記念碑性とは別の抑圧的な役割を果たしていることを指摘している。その変化の背景についてタイゲは、

「かつてのギルド都市の壁の内側には、森、低湿地、野原、ブドウ園や果樹園などがあった。資本主義都市においてその壁は解体され、都市郊外という、いわば潰瘍が点在するひどい周辺へと変化した。汚れた煤だらけの世紀の蒸気機関は製錬所や鉱山の工場のエネルギーを利用し、山岳、森林地域は工業地域といわゆる文明国の表層である荒涼とした工場建築物へと変わる。交通の発達や運送の発展は怪物のような都市の居住者たちを農村部の郊外と接続させ、自然を侵害し荒廃させるのである」<sup>48)</sup>

とし、それまでの中世の城壁を中心とした都市構造と自然との関係から、資本主義の到来によってその境界となる物理的な建築としての城壁が消失し、物理的な境界を失って拡張する近代の資本主義都市と、それを駆動する近代機械文明によって地方の自然環境が浸食されていく過程についてタイゲは分析している。

以上のように、絵画表現の変遷から見る、自然と建築との関係を軸とした歴史観を提示する中で、ユートピア思想と社会主義思想、絵画史におけるシュルレアリスムの風景の端緒、資本主義経済による近代の建築・都市構造の変化と自然環境の危機、という人間と自然と建築の関係史の編纂にあたるタイゲの評価軸が、論稿「建築と自然の序説」の前半に示されている。

## 2) 近代都市計画と自然について

以上の、歴史的な文脈からの人間と自然と建築の関係についての評価軸の提示から、近代の都市の状況への分析を経て、次にタイゲはつづいて近代における自然観と都市計画との関係へと言及している。

「ヨーロッパとアメリカで急速に広がった田園都市運動のイデオロギーは、"都市で働き、自然で暮らす" や "すべての人に自分の家と庭を" と、約束するスローガンによって飾り立てられた感傷的な家の形態へと陥り、未だに偽ブルジョワたちを脅かしつづける」<sup>49)</sup>

と、タイゲはここでエヴェネザー・ハワードの『明日の田園都市』<sup>50)</sup>等から始まった田園都市思想(図9)を取り上げている。この田園都市思想が実際の都市にもたらした状況についてタイゲは、

「人口の大部分、とりわけプロレタリアートや労働インテリ層は自身の生活階級を悟り、都会や郊外の接道のない不衛生な住宅で単調な生活をおくり、自身の庭付き住宅によって自分たちが住宅危機から救済されたと安易に信じている。プールや噴水、ガゼボやテニスコート付きの、わりと大きめな庭付きの、まるでイワシの缶詰のようなレンタル・バラック収蔵庫に收容されたいかがわしい近代のブルジョワのヴィラの居住区の人々は、それを理想的で完璧な生活だとしている」<sup>51)</sup>

とし、田園都市思想に基づいた郊外の一戸建て住宅が、住宅危機に対する本質的な解決をもたらさず、逆にその表層的に解釈された記号的要素が住宅危機の問題の本質を隠蔽しているという考えを示している。

タイゲは、この田園都市思想に對置して、「田園都市と逆の運動である」<sup>52)</sup>とするル・コルビュジェの1922年の「300万人の現代都市」、そして本論文の第三章二節で触れた「輝く都市 (Ville Radieuse)」の都市計画を置いている。このル・コルビュジェの都市計画についてタイゲは、

「ル・コルビュジェのイデオロギーはより先鋭的でありながら、田園都市理論よりも内的矛盾は少なかった。既に述べたように、田園都市は住居問題を解決しようとするが、既に述べたように都市の問題や交通問題、所有権の問題から住居問題を分離している。ル・コルビュジェは、例えば仕事の問題、交通、住宅供給と空間の再生と単一の構造として問題の分析を示すが、しかしその問題とランドスケープの問題を分離し、都市の矛盾と都市の経済と社会秩序の荒廃した現実の極めて表層的な関係性に触れる」<sup>53)</sup>

と、ル・コルビュジェの都市計画を田園都市思想と對置すると同時に、それを取り巻く個々の問題が分離されたル・コルビュジェの都市計画の方法論について疑問を呈している。

このように二項對立的に置かれた近代における都市計画の問題に對し、タイゲは第三項といえる選択肢を提示している。

「エンゲルスの『住宅問題』に記載された主張、すなわち「現代の都市を維持しながら住宅問題に立ち向かうという無意味な努力」を鑑みると、ル・コルビュジェの計画案より100年早く生み出された、フーリエの神託された魂におけるファランジュの素晴らしい結晶に、より先見の明が見られる。温室とガラスのホールのある宮殿、家族住宅ではない1,500人のための住居集群、それは「我々の都会や田舎の建物、またヴェルサイユ宮殿やエル・エスコリアルのいずれにも似ていなく」、土地全体に均等に点在し、森林と畑1平方マイルごとに必ず宮殿があり、農業生産と工業生産を結びつける。(中略) これらは大胆で驚嘆すべきものであり、ル・コルビュジェ的な都市よりも、人間の自由な生活の真の原型に近いものである」<sup>54)</sup>

とし、近代の都市問題への第三項として、シャルル・フーリエが構想したファランジュにおける都市・建築像の先駆性を評価しフーリエの思想を引用し、その先駆性を評価している。

また、本論文の第三章でも触れているように、シャルル・フーリエへの評価はタイゲの建築思想において一貫したものであり、特筆されるものである。

このように近代都市の問題を俯瞰したタイゲは、次にソビエトの都市・建築思想の歴史的な変遷について言及している。タイゲは、

「資本主義の全般的な危機が都市を深刻な難局へと誘引し、何千もの無職者、あるいは非居住者が新しい都市の設立へと向かったとき、ソビエトの建築は速いペースで巨大なスケールの計画が進行していた。開発的な段階にあるソビエトの生活における新しい経済的、社会的、そして文化的必要性に呼応した新しい都市形式の複雑で困難な問題は、ソビエトと西欧の建築アヴァンギャルドの創造的関心の中心となった」<sup>55)</sup>

と述べており、当時のロシア・アヴァンギャルド運動におけるソビエトの先駆性と、その西欧への影響を評価している。しかし、ソビエトの建築の先駆性は長続きすることは無かった。タイゲは、このソビエトの建築の変節について以下に述べている。

「左翼的建築において多くのイデオロギー的な提案が発展したが、その後の正式な第二次五か年計画の始まりにおいて、時期尚早で過激すぎると拒否され、都市の建設や再建設の計画にあたっていた建築家たちはギリシャ、ローマ、ルネサンスの建築にならう必要があるという当局の指導を受けた」<sup>56)</sup>とタイゲは述べ、ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術運動への大きな影響から、スターリニズムの台頭に伴う古典主義の復興へと至ったソビエトの建築の歴史的な変遷について再び総括している。

これら近代においける都市理論の歴史面からの整理から、タイゲは近代における都市計画の主題を抽出している。

「地区計画は部分的分析の統合であり、相互関係とエネルギー生産、住宅、交通、レクリエーション、そして鉄道、高速道路、道や水路の周縁経路との分類、それは近代アーバニズムの中心テーマとなった」<sup>57)</sup>

と、当時の近代都市計画の現状を分析している。そして、これらの近代の都市計画における問題についてタイゲは、

「ある時点では数平方キロメートルの自然環境を保護する一方で、他方ではかなり大きな範囲が破壊される。人類の生物学的、心理学的必要性に応じて判断されるべき風景の配置は、資本主義の搾取の犠牲となり、居住の場所として、保存、あるいは修復されるべき風景は、反対に経済的な風景を後退させる」<sup>58)</sup>

と、資本主義によって駆動される近代都市計画によって、自然環境および人間の居住環境に対して危機がもたらされていく過程とそこに発生する二種類の異なる性質の風景について、資本主義と自然環境にそれぞれ基盤をおく二つの風景が乖離していく過程が述べられている。

### 3) 庭園建築の歴史的背景とその状況について

タイゲは上述の都市と自然環境への問題提起からランドスケープ論へと展開され、そこから庭園建築の歴史的な背景について言及している。タイゲは、

「近代の計画は最大限の緑地帯を確保しようとするのを止めたが、庭園や果樹園の造成の大半は無思慮で時代遅れな、似たような様式の折衷技法が支配する、アール・ヌーヴォーが登場前の前世紀の建築を脅かす庭園建築であった。いくつかの例外を除き、庭園建築(zahradní architektura)は住居建築の発展に対して大幅に遅れている。(中略) 建築と都市計画は、現代における庭園のデザインを目標とするのである」<sup>59)</sup>

と、庭園建築の歴史的な認識と、その近代における位置づけについて述べている。

この近代における都市計画と庭園建築の関係について、タイゲはヨーロッパ各国の庭園の事例について参照している。

「ティヴォリ公園のエステ家のヴィラや、ポーリのヴィラ・カテナ、コンティのフラスカーティのヴィラ・トルロニアでは、草木や水、石造建築や彫刻が調和しながら混在し、それは近代の庭園建築の始まりでもある。そこにある住宅と庭は、視覚的に、そして有機的に一体となっている」<sup>60)</sup>

と、まず北欧における事例について言及し、その自然との有機的な関係と調和性において庭園建築の先駆としてタイゲは評価している。それに対し、フランスの庭園の事例についてタイゲは、

「啓蒙絶対主義や封建制度における庭園、つまりヴェルサイユ宮殿と城の原型は、視覚的な中心に建ち、全体を規定している（シェンブルン宮殿、サン＝スーシ城、ピョートル大帝の夏の宮殿等）。

（中略）これらの建築学の記念碑のようで様式にはめられたいわゆるフランス式庭園や、対称的に同心円状に導かれた道路や木、また幾何学的に編集された原始的な形態は、クリノリンでできた不自然で非人間的な衣装や、髪粉をかけたカツラをつけたさまざまな様式の登場人物が会したした光景であった。そこは舞台であり、彼らは役者であり、花火や優雅な舞踏会の夜祭りが開かれるか、親密で長閑な牧歌が奏でられるのである」<sup>61)</sup>

と述べており、その記念碑性と非日常的な劇場的要素について封建制度の具体的な反映と捉えていたといえる。つづけてタイゲはソビエトにおける事例について触れている。

「ソビエトの文化、庭園や娯楽は、劇場公園のより高いレベルでの複製、変形でもある。それらはロココの雅宴画における気高い風景の庭園のように、有名な式典や祝典が行われる場所である」<sup>62)</sup>

と、その非日常的な祝祭性をタイゲは指摘しており、この祝祭性の指摘にはスターリニズムの台頭以降の古典主義への表層的な指向に対する批判が内包されていると筆者は考える。

そして、これらヨーロッパ各国の事例を踏まえた上で、タイゲはイギリス式庭園について、

「建築化された公園劇場の正反対のものが、いわゆるイギリス式庭園である。庭園は常に自然とランドスケープを人工的に建築化したものであるが、建築の比率や自然の要素は可変的である」<sup>63)</sup>

と、述べている。そしてイギリス式の庭園の具体的な特徴として、

「構成された風景として、イギリス式庭園という言葉は絵画から引用して定義すると、構成された風景とは風景絵画を意味し、そこでは一つのフレームは凝縮された風景のカットであり、より表現に富んだ優美なモチーフであるため、我々は自然の美しさの一つの視点、すなわち実際には遠くに散らばった山や平原、森や畑、川、道路、橋、丘の廃墟や盆地の村を獲得することができる」<sup>64)</sup>

と、タイゲはイギリス式庭園の風景画的な構成における絵画的な特性と、単一フレーム内における多層的なシークエンスの構成を見いだしている。加えて、

「イギリス式庭園の風景はわかりやすいが、多くの狭く入り組んだ小道が目的もなく迷い、曲がりくねり、視覚的に囲まれた場所ではさらに多くの人々が勝手気ままに振る舞い、独りで遊歩する人、恋人同士、また和やかな小集団は、穏やかに隔絶された感覚をもつものである。初めは田舎の城下町の周辺に田畑としてつくられたものがその背景となり、それが民主化され、都会に暮らし仕事をする人々の避難場所となり、また、完全なる休息と親密で孤独な瞑想の場所ともあるのである」<sup>65)</sup>

とタイゲは述べ、イギリス式庭園のもつ多層的なシークエンス構成が歴史的な文脈を踏まえているという観点から、それらが人間にとって親密な環境を生み出す背景を分析している。

しかし、これらの各国の庭園への分析とイギリス式庭園への評価の後、タイゲは当時の近代の都市における庭園の置かれた状況について、以下のように批判的な見解を表明している。

「それらは今日、残酷に荒廃した工業、商業、居住区域における巨大で自然発生的で無秩序な拡大にある都市の中で、緑化資源の最も重要な供給源となった。大衆がその背景を知らないにも関わらず、中世の計画から生じた古い都市は未だに緑地に囲まれ、壁の内側には非常に多くの庭園があるが、それら庭園の一部は今ではみじめに取り残され、石の砂漠の中の人口過剰のオアシスとなった」<sup>66)</sup>

とし、産業の発展がもたらした近代の都市と庭園の関係が変質していった状況をタイゲは批判している。ここに見られるタイゲの言説は、イギリス式庭園への評価において述べられた旧来の都市と庭園の歴史的な文脈が資本主義の到来によって切断され、都市の自然の荒廃をもたらしたことへの批判と筆者は考える。

#### 4) シュルレアリスムとランドスケープについて

タイゲは、前述の絵画と庭園建築の歴史を踏まえ、それらが具現化する接点を示そうと試みている。

「我々はイギリス式庭園を構成された風景と定義した。生活の風景 (Obytná krajina) は公園となることでまた構成された風景となり、同時にある種の景観絵画は印象派でその頂点に達し、そして死に至った。ランドスケープは、建築と風景の分岐点として生じ、二次元イメージで構成され、そのフレームの中から三次元の現実へと出現する」<sup>67)</sup>

と、二次元の絵画のイメージが三次元の風景へと変換される、というタイゲのランドスケープに対する考えがここに示されている。

「この景観は印象派の風景ではなく、三次元の芸術作品であり、それは詩的な夢の具現化となり、自然の瞬間的な映像を提供する。それはヘーゲル的な意味で高次の意志のある人間性であり、人間化した自然であり、それは人間の体と魂の一部となる。(中略) ルソーの最後の作品である "楽園の夢" の風景画には、生きた風景の構成が行われ、それが確認できる。人間の共同体を社会主義へと誘う夢のように、ユートピアから科学へ、科学からリアリティーへ、すなわちランドスケープを幻想とユートピアで満たし、社会主義の実現のための科学的な空間計画による自然と共生への欲求へと移行する彼の履歴が記されている」<sup>68)</sup>

とし、フランスの画家アンリ・ルソー (Henri Julien Félix Rousseau) <sup>69)</sup> の 1910年に発表された最晩年の作品である『夢』(図12)の中に、内的なイメージと現実の自然とが接続されるランドスケープのモデルを見いだしていると筆者は考える。



図8 アンリ・ルソー、『夢』(1910)

これら、人間と自然と建築に関する評価軸の提示から、絵画表現に見る人間と自然と建築の関係の歴史的な文脈からの考察、そして庭園建築の歴史的な考察と近代都市への批判、そして絵画イメージと現実のランドスケープの接続へと展開される一連の言説から、タイゲは最終的に人間の生活へと言及している。タイゲは、

「今日、"永遠の住まい (stálého bytu)" ほど堅い言葉はなく、新しい人間にとって母港はただの足がかり地点となる。(中略) 「自由は家を出ることから成る」という仏の教えは、人間が永遠の住まいと家畜制を克服することによって新しいノマド生活 (nomádism) となる」<sup>70)</sup>

とし、生活における永住の概念からの離脱と「自由」の概念についての考察を示している。ここから、生活における「自由」の概念とシュルレアリスムの関係についてタイゲは以下に述べている。

「思考の運動はシュルレアリスムを招き、それは詩 (poezie)、愛、そして自由が収斂した知識に基づいている。詩は精神の自由と一致し、それを表現する。愛は人間の感情と行動の自由を生きる。自由が現実となるとき、生活は詩となる」<sup>71)</sup>

ここにタイゲによって提示された生活におけるシュルレアリスムと詩 (poezie)の関係性は、次のようなランドスケープのイメージへと変換されている。

「全ての生活を詩的に営む近代の彫刻家は、建築のような壮大で記念碑的な役目から離れるために、都市の建物や施設に怪しげなプラスチック製の装飾を施そうとする代わりに、都会の緑地の公園だけでなく、森の奥や住居区域の裏通りやオープンスペースにも彫刻を配する。そこでは、いくつかの部分が力強く全体としてモデル化され、レリーフや石、草木、水がそれぞれ自律する公園の集合としての公園へと変換され、そこでは自然の領域における詩的空間が具現化し、自然が神話化されるのである。風景画家の想像力は自然のスナップショット (snímku) であり、ここにおいて自然は詩的想像力のスナップショットとなる。例えば風景を構成するように、再自然化された自然のリアリティーは、詩的なリアリティーによって増幅される。科学による発展計画が古代の詩を変えたとき、人間は自然への愛から生まれ、奇跡的風景が人間の欲望と幻想的風景を奇跡的な新しい詩へと変える」<sup>72)</sup>

と、タイゲは描写している。ここには、本章第三節4項で触れた、シュルレアリスムの考えに基づいた「スナップショット」による内的なイメージとその物質化による外部への表出の生成モデルが踏襲されている。ここで示されたタイゲのランドスケープ論は、次にブルーノ・タウトの作品へと展開されている

「ジャックの新しい本に含まれる知識の光の中で得た、ブルーノ・タウトの "大地はよい住まい" という言葉の具体的で深遠な意味と目的は、表現主義者による1919年の「アルプス建築」の幻想的な計画において構想されたものである。それは水晶の宮殿によってヨーロッパの山々の領域が建築へと変容する夢、地球や他の星の建築学である。今日それは地球に到来し、自然は、城や神殿、そして建築のない、人間の居住地となる」<sup>73)</sup>

とタイゲは述べており、タウトの「アルプス建築 (Alpine Architektur)」に、自然そのものが人間の居住地となる、建築無き居住モデルの原型といえるイメージをタイゲは見いだしている。

そして以下のタイゲの言説には、現実の風景とシュルレアリスムの風景が交錯するランドスケープのイメージが示されているといえる。

「もし、詩的空想によって自然それ自身が自然公園をつくったとしたら、石の都市、迷路、洞窟、鍾乳洞のホール、さらには人間がつくった彫刻やプラスチックのオブジェも自然の空間の中に配置され、それらの自然空間をシュルレアリスム空間 (surrealistickým prostor)、あるいはシュルレアリスティックな風景 (surrealistickým krajina) と呼べる公園へと変えることができるだろう...」<sup>74)</sup>

このタイゲの言説に見られる、二つの世界を架橋するという着想について、タイゲは論稿「自然と建築の序説」の後半で以下に述べている。タイゲは、

「数千年前、中国の文化は自然と風景を意識的に創出した。中国風景画の最も有名な巨匠である呉道玄は、宮殿の壁に描かれた風景に入り込み、その中に消えていった。全ての中国の美術の感覚とギリシャ彫刻の感覚を表わす伝説は、生活と融合した詩の中でエロスの像を魔術的力と思考を具現化する願望によって生身の女性へと一変させたピュグマリオンの伝説に表現されている。天と地のタオ (Tao) は、人間の心の集中及び離脱の静かな時に入ってくる。タオと超現実、現実の世界で最も深い人間の詩を生きるための同じ願望である」<sup>75)</sup>

とし、「絵の中に消える中国人の画家のモチーフ」<sup>76)</sup>の逸話と、中国の「道 (Tao)」とされる概念を用いて、そこから現実と超現実という二つの領域を振幅する考えについて、その歴史的な背景について触れられている。

以上、これら一連の言説には、シュルレアリスムという概念を用いて、詩 (poezie) と風景、絵画的イメージと現実の空間という二つの世界を架橋することによって、新たなランドスケープ論の創出を試みるタイゲの建築思想の特質性が現れていると筆者は考える。

そして、本論稿「建築と自然の序論」の最後にタイゲは、

「中世における超人間、超自然的な建築は自然を知らず、そして受け容れず、大聖堂の建築は架空の人工の楽園をつくり出したが、今日、古代と新たな矛盾を内的に結合し、本能的な確信を取り戻すために、経済的な必要性の横暴な抑圧の下での発展のためではなく、自由に、心理学的、生物学的な動向と自然に準拠した叡智による人類史を形成する次元によって、自然とともにある真の地上の楽園としてのランドスケープの編成と、光と人類のための環境の創出を望むのである」<sup>77)</sup>

と述べており、この言説には、ユートピア思想を背景とする自然と人間との間に介在する建築の歴史的な関係の分析から、その関係の再構築を試みるタイゲの晩年の建築思想の一端が確認できる。

#### 第四節 要約

##### 第四章における歴史的背景とタイゲの活動履歴

1933	ヒトラー、ドイツ首相となる。	『ヤロミール・クレイツェルの仕事』出版。
1934	ヒトラー、ドイツの最高指導者となる。	プラハでシュルレアリスム・グループ結成。
1935	プラハ政府、ソ連と相互援助条約を締結。	論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム」発表。 アンドレ・ブルトンがチェコで講演を行う。
1936	モスクワ裁判が始まる。	批評集『シュルレアリスム』発行。
1937	全ソ建築家同盟総会が開催される。	全ソ建築家同盟総会に参加。 論稿「ソビエト建築の発展-古典主義の復活とソビエト様式の追求-」発表。
1938	ズデーテン＝ドイツにおけるナチ化が進行。 連邦制のチェコスロヴァキア共和国に改編される。	「流れに逆らうシュルレアリスム」発表。
1939	ナチス・ドイツがチェコ進駐。	チェコのアヴァンギャルド運動の事実上の終焉。 公的な活動から撤退する。
1945	首都プラハ解放。	論稿「内的モデル」発表。
1947	チェコ政府、マーシャル・プランへの不参加決定。	論稿「自然と建築の序説」発表。
1948	チェコ共産党が政権を奪取（「二月事件」）。 親スターリニズム国家へと進む。	チェコ・シュルレアリスム運動、地下へと移行。
1951		死去。 論稿「芸術の現象学」未完となる。

第三章において、1930年代前半のソビエトの社会主義の建築思想を援用したタイゲの建築論について触れた。これを踏まえ、第四章第二節では、1932年のソビエト・パレスのコンペを契機とするスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムの建築の台頭に対して明確に反対の意を示し、そこから本来的な社会主義リアリズムの考えとシュルレアリスムと架橋することでスターリニズムが台頭する状況に活路を見出そうと試みる、1930年代後半のタイゲの思想的な立脚点が明らかにされた。

それら一連の論稿を踏まえ、本章第三節では二次大戦直後の1947年の最後の建築論といえる論稿「建築と自然の序説」において、タイゲは建築と自然の関係を絵画表現における歴史的な考察から整理した。それらの考察をもとに、タイゲは当時の都市・建築の状況に対するランドスケープの新たな位置づけについての理路を示そうと試みている。そして絵画の二次元イメージを三次元へと転換することで、シュルレアリスムのイメージを現実のランドスケープへと架橋し、現実と超現実が交錯する新たな建築論の可能性の追求を試みるタイゲの姿勢が確認できる。加えて、論稿「建築と自然の序説」において人間と自然と建築、および近代の都市と環境の問題について考察を試みるタイゲの言説は、現代における建築と自然環境の問題の観点から先駆的な思想であると筆者は考える。



## 註

- 1) 酒井健, 『バタイユ入門』 筑摩書房, 1996, p. 75.
- 2) Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999.
- 3) Karel Teige, "socialistický realismus a surrealismus", *Socialistický realismus : sborník*, Jarmila Prokopová, 1935.
- 4) 西野嘉章, 「チェコ・アヴァンギャルド —ブックデザインにみる文芸運動小史」, 平凡社
- 5) Karel Teige, "Vývoj sovětské architektury -Obnova klasicismu a hledání sovětského slohu-", *třetí kapitola studie vývoj sovětské architektury*, 1-63.; v souboru *Monografie SSSR*, 1936, str. 239-299.
- 6) Karel Teige, *Surrealismus proti proudu*, Společnost Karla Teiga, 1938.
- 7) 赤塚若樹, 『シュババンクマイエルとチェコ・アート』, 未知谷, 2008.
- 8) Karel Teige, "Vnitřní model", *Kvart 5*, pp.149-154.
- 9) Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947.
- 10) Karel Teige, "předmluva o architektuře a přírodě" in ; Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947, pp.7-21.
- 11) Karel Teige, *op.cit.*3, p.120.
- 12) *Ibid.*, p.130.
- 13) *Ibid.*, p.159.
- 14) 「革命的ロマン主義」の概念の詳細については、アンリ・ルフェーヴル (著), 西川長夫, 小西嘉幸 (訳) 『革命的ロマン主義』, 福村出版, 1976年. 等を参照されたし。
- 15) Karel Teige, *op.cit.*3, p.159.
- 16) *Ibid.*, p.166.
- 17) *Ibid.*, p.179.
- 18) *Ibid.*, p.179.
- 19) *Ibid.*, p.179.
- 20) Karel Teige, *Výbor z díla II Zápasy o smysl moderní atvoby Československý spisovatel*, 1969, p.350.(original text: Karel Teige, *op.cit.*7.)
- 21) *Ibid.*, p.355.
- 22) *Ibid.*, pp.355-356.
- 23) *Ibid.*, p.357.
- 24) *Ibid.*, pp.357-358.
- 25) *Ibid.*, p.360.
- 26) *Ibid.*, p.363.
- 27) *Ibid.*, p.365.
- 28) *Ibid.*, p.365.
- 29) 「ブルトンはすでに一九三〇年初めからロシア共産党の芸術政策の貧困ぶりを思い知らされていた」とされ、シュルレアリスト、ルイ・アラゴン (Louis Aragon, 1897- 1982) は1930年代始めに「シュルレアリスムから Kommunismusへ、ブルトンからスターリンは、信仰の対象を変えつつあった」とされる。「アラゴンがロシアの雑誌『世界革命文学』(一九三一年七月)に発表した詩「赤色戦線」をフランス人の判事が「フランス軍人への不服従の煽動」と「殺人の教唆」の罪で告訴したいいわゆる「アラゴン事件」に対して、ブルトンはアラゴン擁護のパンフレット『詩の貧困』を書き始めた。しかしその発表前に、フランス共産党が彼らの雑誌『革命に奉仕するシュルレアリスム』第四号(一九三一年一二月)に掲載された画家ダリのテキスト「夢想」を「ポルノ的」と中傷していることを聞き、ブルトンは、

共産党の狭隘なエロティシズム理解に対する批判文をこのパンフレットに盛り込んで世に出したのだった（一九三二年三月）。しかしアラゴンはブルトンのこの共産党批判を快く思わず、ブルトンと「袂を分かつ」ことになるのである」（酒井健、『シュルレアリスム—終わりのなき革命』, 中央公論新社, 2011, 212-214頁.）

- 30) アンドレ・ブルトン, 「今日の芸術の政治的位置」, 『アンドレ・ブルトン集成』, 人文書院, 1970.
- 31) Karel Teige, *op.cit.*6, p.3.
- 32) *Ibid.*,p.66.
- 33) 赤塚若樹, 『シュババンクマイエルとチェコ・アート』, 未知谷, 2008, 259 頁.
- 34) Karel Teige, *op.cit.*8, p.150.
- 35) *Ibid.*,p.152
- 36) Karel Teige, *op.cit.*10, p.7.
- 37) *Ibid.*,p.7.
- 38) *Ibid.*,p.7.
- 39) *Ibid.*,pp.7-8.
- 40) Hieronymus Bosch (1450頃- 1516) : ルネサンス期のネーデルラント (フランドル) の画家。
- 41) Karel Teige, *op.cit.*10, p.8.
- 42) フーベルト・ファン・エイク (1366 - 1426) 、ヤン・ファン・エイク (1395-1441) の兄弟。共に初期フランドル派のフランドル人画家。
- 43) Karel Teige, *op.cit.*10, p.8.
- 44) *Ibid.*, p.8.
- 45) *Ibid.*, p.8.
- 46) *Ibid.*, p.8.
- 47) *Ibid.*, p.9.
- 48) *Ibid.*, p.9.
- 49) *Ibid.*, p.9.
- 50) Ebenezer Howard, *Garden Cities of Tomorrow*, S. Sonnenschein & Co., Ltd. 1902.
- 51) Karel Teige, *op.cit.*10, p.9.
- 52) *Ibid.*,p.10.
- 53) *Ibid.*,p.10.
- 54) *Ibid.*,p.10-11.
- 55) *Ibid.*,p.11.
- 56) *Ibid.*,p.11.
- 57) *Ibid.*,p.11.
- 58) *Ibid.*,p.11.
- 59) *Ibid.*,p.13.
- 60) *Ibid.*,p.13.
- 61) *Ibid.*,p.13
- 62) *Ibid.*,p.14.
- 63) *Ibid.*,p.14.
- 64) *Ibid.*,p.14.
- 65) *Ibid.*,p.14.
- 66) *Ibid.*,p.14.

- 67) *Ibid.*,p.18.
- 68) *Ibid.*,pp.18-19.
- 69) Henri Julien Félix Rousseau(1844-1919)：フランスの画家。
- 70) Karel Teige, *op.cit.*10, p.16.
- 71) *Ibid.*,p.19.
- 72) *Ibid.*,p.19.
- 73) *Ibid.*,p.19.
- 74) *Ibid.*,p.19.
- 75) *Ibid.*,p.20.
- 76) 「絵の中に消える中国の画家」に関しては、久保哲司、「絵の中に消える中国の画家：E・ブロッホ、ベンヤミン、アドルノ、ホーフマンスタールにおける一つのモチーフ」、『一橋論』,124(3),2000.378-389頁.を参照されたし。
- 77) Karel Teige, *op.cit.*10, p.20.

#### 図版

- 図1 Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press, 1999, p.373.
- 図2 Karel Srp, *Karel Teige*, TORST, 2001.
- 図3 *Ibid.*
- 図4 Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947.
- 図5 *Ibid.*, p.7.
- 図6 Walter Bosing, *Hieronymus Bosch c.1450-1546: Between Heaven and Hell*, Taschen Basic Art Series, Taschen America Llc, 2010.
- 図7 ティル=ホルガー・ボルヘルト, 『ファン・エイク Van Eyck』タッシェン・ジャパン, 2009.
- 図8 Ann Temkin, *Rousseau: The Dream*, Museum of Modern Art, 2012.

結論

---

## 結論

以上、序論および各章の考察によって明らかにされた成果を以下に要約し、これをもって本論の結論としたい。

### 1) 序論および第一章について

1-1) 序論において、既往のカレル・タイゲ研究の現状認識とその動向について考察し、本研究の目的は、カレル・タイゲの多岐に渡る活動の中から建築批評家としての側面に着目し、彼が残した多様な領域に渡る文献資料の中から主に建築に関連する論稿を抽出し、彼の言説を新興国であったチェコの近代建築史に関するタイゲの評価軸、および彼と同時代のチェコの社会情勢に対応した建築思想の推移の二つの側面から整理し、分析すること、当時のチェコの建築の近代化過程におけるタイゲの建築思想の変遷とその枠組みを解明することであることを明らかにした。

1-2) 第一章では、チェコにおける民族運動、チェコの新興国家としての成立、建築を含む国際的な芸術運動の自国チェコへの導入、ナチズムとスターリニズムの台頭への反応、そして政治的な抑圧化における活動と、これら当時のチェコを含むヨーロッパの社会的文化的動向とタイゲの活動および論稿の主題を照らし合わせることで、タイゲの活動および論稿の主題が、当時のチェコの政治的、社会的、文化的な時代背景に機敏に反応したものであることを示した。

### 2) 第二章について

つづく第二章では、タイゲの建築に関する論稿の中から、当時の新興国家であったチェコの近代建築史の編纂に関する彼の言説を時系列に沿って整理した。

2-1) タイゲの著作『チェコスロヴァキアの近代建築』の論稿「19世紀末」において、タイゲは新興国家としてのチェコの建築の歴史的な基盤を、チェコの機械技術の先進性、ローマ帝国様式、ボヘミアの場所性の三点に定めた。そこからチェコにおける最初の国民的建築である「国民劇場」の設計者であるヨセフ・ジーテクをチェコの建築の近代化の起端に置くことで、チェコの建築の近代化に対する理論的な基盤の確立を試みるタイゲのチェコの近代建築史の編纂における姿勢が明らかになった。

2-2) 同じく論稿「新しい世紀、新しい建築」において、ヨセフ・ジーテクを起端とし、近代化へと向かうチェコの建築の流れの上に、タイゲはウィーンのオットー・ワグナーからの影響とチェコ独自の文化の二つの流れを見だし、その融合としてヤン・コチェラを位置づけることでチェコの建築を国際的な近代建築の文脈と接続を試みるタイゲの評価軸の一端が明らかになった。また、論稿「キュビズム」では、チェコにおけるキュビズム建築に対するタイゲの評価軸の一端が明らかになった。

これら一連の言説から、20世紀初頭のチェコの建築の近代化過程の系譜の構築におけるタイゲの理路が

明らかになった。

2-3) 論稿「アドルフ・ロース」において、タイゲは近代建築の歴史におけるアドルフ・ロースの作品の先駆性を論じ、また、ロースの装飾批判をマルキシズムに基づく経済論を基に読み直し、社会主義思想に基づく構成主義の建築の原基としてロースを措定した。そこからボヘミア出身であるロースの建築思想をチェコの構成主義の世代の建築家へと接続させる理路を示すことで、チェコにおける構成主義の系譜の確立を試みるタイゲのチェコの近代建築史における評価軸の一端が明らかになった。

2-4) 論稿「構成主義の発現」と論稿「ヤロミール・クレイツァルの仕事」において、アドルフ・ロースとヤン・コチェラを端緒に置いたチェコの構成主義の建築の系譜から、その具現化をヤロミール・クレイツァルに見だし、そこから当時のチェコの構成主義の建築の実践の状況を批評することで、構成主義を含む当時のヨーロッパにおける国際的な近代芸術運動の動向に対応した、チェコの近代建築の同時的な動向を示そうとするタイゲの評価軸の一端が明らかになった。また、タイゲの建築思想の中で重要な位置を占める、住宅問題に体する社会学的なアプローチの理路が形成される過程が明らかになった。

### 3) 第三章について

そして、第三章において、1920年代後半から1930年代のタイゲの建築思想の一端を整理した。

3-1) タイゲのル・コルビュジェに関する一連の論稿を整理し、論稿「ムンダネウム」と論稿「発展の段階」における近代建築と歴史性の問題、芸術と建築の分離の問題、そして「ル・コルビュジェと新しい建築」における建築と社会階級制度の問題、論稿「輝く都市」における近代都市計画と金融資本の問題に渡る、1920年代後半から1930年代前半のタイゲの建築思想の中軸となる主題が編纂される過程が明らかになった。

3-2) 著作『最小限住居』において、タイゲは女性の解放の理念と実際の住宅プランニングの矛盾、ル・コルビュジェ等を中心とする当時の近代建築のデザインと社会階級的な芸術性の矛盾、また、同じくル・コルビュジェを祖上に載せることで当時の近代の都市計画が孕む金融資本的プログラムの矛盾を批判した。これらの一連の言説に見られる、一つの理念に収斂することなく、その実践の状況と照らし合わせながら既存の近代建築という枠組みが内包する二重構造を批判し、当時の建築家が提唱する近代建築のスローガンの同一性を解体していく理路を示し、この時代のタイゲの建築理論の枠組みの一端を明らかにした。

3-3) 同じく『最小限住居』において、当時のソビエトの社会主義の建築からの影響を含めた具体的な都市・建築モデルの提示へと建築論を展開した。そして、それらのモデルを基にチェコの二つの「ホテル形式」の具体的な計画案が提示され、最終的に「L-プロジェクト」の理念性とVČELAコンペにおける現実性の対比へと至った。これらの一連の言説に見られるタイゲの建築思想の振幅を整理することで、1920年代後半から1930年代前半のチェコの建築の近代化過程における理論的背景とその実践とが相克する歴史的な状況を明らかにした。

3-4) 同じく『最小限住居』において、タイゲは社会階級問題から捉えた女性の解放の思想を建築論として展開し、社会における性差を含む階級の共存のあり方を具体的な建築提案として示した。ここに見られる女性の解放を建築論として追求したタイゲの思想の、フェミニズムの歴史的側面からの先駆性を明らかにした

#### 4) 第四章について

以上の1920年代後半から1930年代前半のタイゲの建築思想の枠組みを踏まえ、第四章では1930年代後半からその晩年の1940年代にいたる一連の論稿と、最後の建築論である1947年「建築と自然の序論」を整理することで、この時代のタイゲの建築思想の一端を整理した。

4-1) 論稿「社会主義リアリズムとシュルレアリスム」において、1932年のソビエト・パレスのコンペを契機とするスターリニズムに基づく社会主義リアリズムの建築の台頭に明確に反対の意を示し、そこから本来的な社会主義リアリズムの考えとシュルレアリスムとを架橋することでスターリニズムが台頭する状況に活路を見出すことを試みる、この時期のタイゲの思想的な評価軸が明らかになったといえる。

4-2) 論稿「ソビエト建築の発展 ―古典主義の復活とソビエト様式の追求」において、スターリニズムが台頭する1930年代後半の政治的な状況下におけるソビエトの社会主義リアリズムの建築に対する明確な批判と、自らの建築思想の立脚点を明確にすることで反スターリニズムを貫徹する、この時期のタイゲの建築思想の一端が明らかになったといえる。

4-3) 論稿「建築と自然の序論」において、人間と建築と自然の関係を、絵画表現における歴史的な考察から整理し、それらの考察をもとに、当時の都市・建築の状況に対するランドスケープの新たな位置づけについての理路を示そうとした。そこから、絵画の二次元イメージを三次元へと転換するという、ランドスケープに対するタイゲの特異な建築思想の一端が明らかにされたといえる。

4-4) また同上論稿において、タイゲは人間と自然と建築の歴史のおよび思想的な背景を総括し、当時の近代都市が置かれた状況への批判から、人間と自然と建築の関係性へと自らの理論を展開しており、この一連の言説には自然と人間の生活についての見直しを試みるタイゲの姿勢が確認できる。そして、そこに見られるタイゲの建築思想は、今日の自然環境の問題に基づく主題を含んでおり、これによって自然環境と建築の領域における彼の先駆的といえる思想の一端が明らかにされたといえる。

以上、本論文において、カレル・タイゲの残した建築に関する論稿から彼の言説を体系的かつ詳細に整理し、彼の建築思想の枠組みの詳細、およびチェコの建築の近代過程との具体的な関連を解明した。

#### 参考文献一覧

本論文の参考文献に関しては、カレル・タイゲおよびその関連者の言説の資料、チェコを含む海外の補足資料、日本語の参考文献、の三つに分類した。

カレル・タイゲおよびその関連者の言説の資料：

- Karel Teige, "Obrazy a předobrazy", *Musaion 2*, 1921.
- Karel Teige, "Poetismus", *Host*, Vol. 3, No. 9-10, 1924.
- Karel Teige, "K nové architekture", *Stavba 2*, 1923, pp179-83.
- Karel Teige, "Hyperdada", *ReD. Ročník 1*, 1927-1928, pp35-38.
- Karel Teige, "Mundaneum", *Stavba 1*, 1928-1929, pp145-155.
- Karel Teige, "Etapy vývoje", *Stavba 8*, 1929-1930, pp6-16, pp19-23.
- Karel Teige, "Le Corbusier a nová architektura", *Index2*, 11-12, 1930, pp.83-86, 1930.
- Karel Teige, "Le Corbusierovo Zárící", *Stavitel 13*, 1932, pp.21-28.
- Karel Teige, "Odpoved' Le Corbusierovi", *Musaion*, 1931.
- Karel Teige, "K sociologii architektury", *ReD 3*, 6-7, 1930, pp.161-223,
- Karel Teige, "Minimální byt a kolektivní dům", *Stavba 9*, 1930-1931, pp.28-29, 1930, pp.47-50, pp.65-68,
- Karel Teige, "Architektura a třídní boj", *ReD 3*, 10, pp297-310, 1931.
- Karel Teige, "Vyvoj sovětské architektury -Obnova klasicismu a hledání sovětského slohu-", *třetí kapitola studie vývoj sovětské architektury*, 1-63.; v souboru *Monografie SSSR*, 1936, str. 239-299.
- Karel Teige, K teorii konstruktivism, *Stavba VII*, č.1, červenc, 1928, pp7-12.
- Ladislav Žák, *obytná krajina*, S.V.U. Mánes - Svoboda, 1947.
- Karel Teige, *M.S.A.2. moderní architektura v československu*, Odeon, 1930.
- Karel Teige, *nejmenší byt*, Václav Petr, 1932.



- Karel Teige, *Surrealismus proti proudu*, Společnost Karla Teiga, 1938.
- Karel Teige, *práce jaromíra krejčara*, Václav Petr, 1933.
- Karel Teige, *FILM*, Václav Petr, 1925.
- Karel Teige, "Vnitřní model", *Kvart 5*, 1945-1946, pp.149-154.
- Karel Teige, *sovětská kultura*, Odeon, 1927.
- Karel Teige, Jiří Kroha, *Avantgardní architektura*, Čs. spis., 1969
- Jan Kotěra, "o novém umění.", *volně směry IV.*, S.V.U. Mánes, 1900.
- *Stavba 9*, Klub architektů, 1930-1931, p.117
- *Stavitel 12*, Stavitelská sekce Klubu inženýrů a stavitelů, 1931, p.76
- Karel Teige, Výbor z díla II Zápasy o smysl moderní atvoby Československý spisovatel, 1969.
- Karel Teige, *Osvobozvani života a poezie: Studie ze čtyřicatyh let*, Aurora, 1994.
- Yaroslav Seifelt, Karel Teige, *REVOLUČNÍ SBORNÍK DEVĚTSIL*, UMĚLECKÝ SVAZ, 1922.

チェコを含む海外の研究資料 :

- Rostislav Švácha: Jan Malý, *The architecture of new Prague : 1895-1945*, MIT press, 1995.
- Rostislav Švácha, Surrealism and Czech Functionalism, *Umění LV*, 2007, pp. 316–328.
- Rostislav Švácha, Karel Teige jako teoretik architektury, *Historia artium*. Olomouc : Univerzita Palackého, 1998, pp. 145-155.
- *53 Rassegna (Karel Teige ,Architecture and Poetry)*, Princeton Architectural Press, 1993.
- Gustav Peichl, Vladimír Šlapeta, *Czech Functionalism 1918-1938*, Architectural Association Publications, 1987.
- Vladimír Šlapeta and Wojciech Leśnikowski, *East European Modernism: Architecture in Czechoslovakia, Hungary and Poland Between the Wars*, Thames & Hudson Ltd, 1996,

- Eric Dluhosch and Rostislav Svacha, *Karel Teige / 1900-1951: L'Enfant Terrible of the Czech Modernist Avant-Garde*, The MIT Press,
- Karel Srp, *Karel Teige*, TORST, 2001.
- Lenka Bydžovská, Karel Srp, *Český surrealismus 1929-1953*, Galerie hlavního města Prahy, 1996.
- František Šmejkal, *Devětsil: Czech Avant-garde Art - Architecture and Design of the 1920's and 1930's*, Museum of Modern Art, Oxford, 1990, p.9.
- Karel Srp, *Karel Teige a typografie-Asymetrická harmonie*, Akropolis, 2009.
- Anders Åman, *Architecture and Ideology in Eastern Europe during the Stalin Era: An Aspect of Cold-War History*, The MIT Press,1992
- Jan Kotera ,*Jan Kotera: 1871-1923 : The Founder of Modern Czech Architecture*,Kant ,2003.
- Karel Teige (Author), Eric Dluhosch (Translator, Foreword),*The Minimum Dwelling*, The MIT Press, 2002
- Karel Teige (Author), Irena Murray (Translator), David Britt (Translator), Jean-Louis Cohen (Introduction), *Modern Architecture in Czechoslovakia and Other Writings*, Getty Research Institute, 2000.
- Stephan Templ, *Baba: Die Werkbundsiedlung Prag / The Werkbund Housing Estate Prague*, Birkhäuser, 1999.
- N.A.Miliutin, *Sotsgorod: The Problem of Building Socialist Cities*, The MIT Press, 1975.

#### その他海外の参考文献

- Walter Bosing, *Hieronymus Bosch c.1450-1546: Between Heaven and Hell* ,Taschen Basic Art Series,Taschen America Llc, 2010.
- Ann Temkin , *Rousseau: The Dream*, Museum of Modern Art, 2012.
- Thomas Mical (Editor), *Surrealism and Architecture*, Routledge, 2004.
- Ebenezer Howard, *Garden Cities of Tomorrow*, S. Sonnenschein & Co., Ltd. 1902.

日本語の参考文献：

(カレル・タイゲ)

- ・ 岩澤錠児, 入江正之, 「カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想とその変遷-カレル・タイゲ研究 (1) -」, 日本建築学会計画系論文集 2012年10月 第77巻 第680号.
- ・ 岩澤錠児, 入江正之, 「著作『最小限住居 (Nejmější byt)』に見る1930年代前半のカレル・タイゲの建築思想-カレル・タイゲ研究 (2) -」, 日本建築学会計画系論文集 2013年5月 第78巻 第687号.
- ・ 岩澤錠児、入江正之、「カレル・タイゲの論説に見るチェコの建築近代化過程における建築思想の推移」、日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系 (51)、761-764、2011-05-25、社団法人日本建築学会.
- ・ 岩澤錠児、入江正之、「カレル・タイゲ研究 最小限住宅 The Minimum Dwelling にみるマルキシズム建築論」、日本建築学会大会学術講演会梗概集、F-2, p. 755、2011-9、社団法人日本建築学会.
- ・ 岩澤錠児、大石将平、「カレル・タイゲの「最小限住宅」論にみる都市、建築思想に関する研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集、F-2, p. 783、2011-9、社団法人日本建築学会.
- ・ 矢代真己、市川祐子、近江栄、「カレル・タイゲのチェコスロヴァキア近代建築運動に果たした役割について：建築理論家カレル・タイゲ研究・その1」, 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1997, pp. 355-356, 1997-07-30, 日本建築学会.
- ・ 矢代真己、市川祐子、近江栄、「論文「構成主義の理論」にみるタイゲの近代建築理念について：建築理論家カレル・タイゲ研究・その2」, 学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 1997, pp. 357-358, 1997-07-30 日本建築学会.
- ・ 市川 祐子、矢代真己、「前衛芸術家組織「デヴィエトシル」の建築分野の会員とその活動内容について：建築理論家カレル・タイゲ研究・その3」, 学術講演梗概集, F-2, 建築歴史・意匠 1999, pp. 337-338, 1999-07-30, 日本建築学会.
- ・ 井口壽乃, 『カレル・タイゲによる「ポエティスム」の造形概念についてチェコにおける近代デザインに関する研究 (1)』 デザイン学研究. 研究発表大会概要集 (47), 4-5, 2000-10-16.
- ・ 井口壽乃 「グループ「デヴィエトシル」とカレル・タイゲ--チェコ・アヴァンギャルド芸術研究(1)」, 北九州市立大学文学部紀要 (64), 1-22, 2002.
- ・ 井口壽乃, 「カレル・タイゲの構成主義論--チェコ・アヴァンギャルド芸術研究(2)」, 北九州市立大学文学部紀要 (65), 39-57, 2003.

(チェコおよび東欧史)

- ・ 矢田俊隆, 『ハンガリー チェコスロヴァキア現代史』, 山川出版社, 1978.
- ・ 山田朋子, 『中東欧史概論』, 鳳書房, 2001.
- ・ 薩摩秀登, 『物語チェコの歴史—森と高原と古城の国』, 中央公論新社, 2006.
- ・ 石川達夫, 『チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』, 岩波書店, 2010.
- ・ ペーテル F. シュガー, I. J. レデラー (編), 東欧史研究会 (訳) 『東欧のナショナリズム—歴史と現在』, 刀水書房, 1981.
- ・ 三谷研爾, 『世紀転換期のブラハ—モダン都市の空間と文学的表象』, 三元社, 2010.
- ・ ペトル・クラール (著), 阿部 賢一 (訳), 『ブラハ』, 成文社, 2006.

(建築)

- ・ シーマ・イングバーマン (著), 宮島照久, 大島哲蔵 (訳), 『ABC: 国際構成主義の建築1922-1939』, 大竜堂書店, 2001.
- ・ ル・コルビュジェ (著), 山口 知之, エスプリ・ヌーヴォー, 鹿島出版会, 1980
- ・ 八束はじめ, 『ロシア・アヴァンギャルド建築』, INAX 出版, 1993.
- ・ 八束はじめ, 『希望の空間—ロシア・アヴァンギャルドの都市と住宅 (住まい学大系)』, 住まいの図書館出版局, 1988.
- ・ H. グレーツェッカー, M. パイントナー (著), 伊藤哲夫, 衛藤信一 (訳), 『オットー・ワーグナー—ウィーン世紀末から近代へ』, 鹿島出版会 (1984
- ・ 杉本俊多, 『バウハウス—その建築造形理念』, 鹿島出版会 (1979
- ・ ル・コルビュジェ (著), 吉阪隆正 (訳), 『建築をめざして』, 鹿島出版会, 1967
- ・ ル・コルビュジェ (著), 坂倉準三 (訳), 『輝く都市, 鹿島出版会』, 1968.
- ・ ル・コルビュジェ (著), 井田安弘 (訳), 『住宅と宮殿』, 鹿島出版会, 1979
- ・ ル・コルビュジェ (著), 井田安弘, 芝優子 (訳), 『プレジジョン—新世界を拓く 建築と都市計画 (上、下)』, 鹿島出版会, 1984

- ・ ジークフリート・ギーディオ(著), 太田寛(訳), 『新版 時間・空間・建築』, 丸善, 2009.
- ・ 橋本文隆, 『図説 アールヌーボー建築』, 河出書房新社.
- ・ ジャック・リュカン 監修, 加藤邦男 訳, 『ル・コルビュジェ事典』, 中央公論美術出版, 2007
- ・ レイナー・バンハム(著), 石原達二, 増成隆士 (訳), 『第一機械時代の理論とデザイン』, 鹿島出版会, 1976
- ・ アドルフ・ロース(著), 伊藤哲夫 (訳), 『装飾と犯罪—建築・文化論集』, 中央公論美術出版, 2005.
- ・ アドルフ・ロース(著), 加藤淳(訳), 鈴木了二・中谷礼仁 (監修), 『虚空へ向けて』, 編集出版組織体アセテート, 2012
- ・ エル・リシツキー(著), 阿部公正 (訳), 『革命と建築』, 彰国社, 1983 年.
- ・ 吉田 鋼市, 『トニー・ガルニエ (SD 選書)』, 鹿島出版会, 1993.
- ・ 山口廣, 『ドイツ表現派の建築—近代建築の異端と正統』, 井上書院, 1987.
- ・ ブルーノ・タウト (著), 齊藤 理 (訳) 『新しい住居—つくり手としての女性』, 中央公論美術出版, 2004.
- ・ K. マイケル ヘイズ (著), 松畑 強 (訳) 『ポストヒューマニズムの建築—ハンネス・マイヤーとルートヴィヒ・ヒルベルザイマー』, 鹿島出版会, 1997
- ・ ケネス フランプトン (著), 中村 敏男 (訳), 『現代建築史』, 青土社, 2003.
- ・ 田中充子, 『ブラハ建築の森』, 学芸出版社, 1999.

(芸術・文化・社会・思想)

- ・ アンドレ・ブルトン(著), 生田耕作(訳), 『超現実主義宣言』, 中公文庫, 1999.
- ・ フリードリッヒ・エンゲルス(著), 土屋保男(訳), 『家族・私有財産・国家の起源』, 新日本出版社, 1999.
- ・ 井口壽乃, 『ハンガリー・アヴァンギャルド MA とモホイ＝ナジ』, 彩流社, 2000.
- ・ 石川達夫, 『黄金のブラハ 幻想と現実の錬金術』, 平凡社, 2000.
- ・ ヤロスラフ・サイフェルト, 関根日出男, 飯島周(訳), 『この世の美しきものすべて』, 恒文社, 1998.

- ・ カール マルクス(著), 今村仁司, 鈴木 直, 三島 憲一 (訳), 『資本論』, 筑摩書房, 2005.
- ・ カール マルクス (著), 植村 邦彦 (訳) 『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日—初版』, 平凡社, 2008.
- ・ カール・マルクス(著), 今村仁司, 三島憲一, 鈴木直, 塚原史, 麻生博之(訳), 『マルクス コレクション I ドデモクリトスの自然哲学とエピクロス其自然哲学の差異、ヘーゲル法哲学批判序説、ユダヤ人問題によせて、経済学哲学草稿』, 筑摩書房, 2005.
- ・ カール・マルクス(著), 今村仁司, 三島憲一, 鈴木直, 塚原史, 麻生博之(訳), 『マルクス コレクション II ドイツイデオロギー、哲学の貧困、コミュニスト宣言』, 筑摩書房, 2005
- ・ 赤塚若樹, 『シュババンクマイエルとチェコ・アート』, 未知谷, 2008.
- ・ 江原由美子, 金井淑子・編, 『フェミニズムの名著50』, 平凡社, 2002.
- ・ 酒井健, 『バタイユ入門』, 筑摩書房, 1996.
- ・ アンドレ・ブルトン(著), 足立和浩 (訳), 『通底器』, 現代思潮社, 1978.
- ・ 鈴木雅雄 (編), 『シュルレアリスムの射程—言語・無意識・複数性』, セリか書房, 1998.
- ・ ヴァルター ベンヤミン (著), 浅井健二郎, 久保 哲司 (訳), 『ベンヤミン・コレクション 〈1〉 近代の意味』, 筑摩書房, 1995.
- ・ 老子 (著), 蜂屋 邦夫 (訳) 『老子』, 岩波書店, 2008.
- ・ 塚原史, 『アヴァンギャルドの時代—1910年 - 30年代』, 未来社, 1997
- ・ アントニオ・グラムシ(著), 東京グラムシ会 『獄中ノート』 研究会 (訳), 『 ノート 22 アメリカニズムとフォーディズム』, いりす, 2006.
- ・ 鈴木雅雄, 『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』, 平凡社, 2007.
- ・ 巖谷國士, 『シュルレアリスムとは何か』, 筑摩書房, 2002.
- ・ 鈴木雅雄, 林道郎, 『シュルレアリスム美術を語るために』, 水声社, 2011.
- ・ フリードリヒ・エンゲルス(著), 秋間実 (訳), 『反デューリング論 〈上, 下〉』, 新日本出版社, 2001.
- ・ フリードリヒ・エンゲルス(著), 石田 精一 (訳), 『空想から科学へ』, 新日本出版社, 1999.

- ・ フリードリヒ・エンゲルス(著), 村田 陽一 (訳), 『住宅問題』, 大月書店, 1974.
- ・ 井上洋子, 富永桂子, 松田昌子, 古賀邦子, 星乃治彦, 『ジェンダーの西洋史』, 法律文化社, 2006.
- ・ 谷本尚子, 『国際構成主義—中欧モダニズム思考』, 世界思想社, 2007.
- ・ ドーン・エイズ, 岩本 憲児 (翻訳), 『フォトモンタージュ 操作と創造—ダダ、構成主義、シュルレアリスムの凶像』, フィルムアート社, 2000.
- ・ 伊藤 セツ, 『クララ・ツェトキンの婦人解放論』, 有斐閣, 1984.
- ・ T.G. マサリク(著), ドラガ・B. シリングロウ (編), 柴田卓弘, 家田裕子 (訳), 『マサリクの講義録—チェコ・スロヴァキア小史』, 恒文社, 1994.
- ・ シャルル フーリエ (著), 巖谷国士 (訳), 『四運動の理論〈上, 下〉』, 現代思潮新社, 2002.
- ・ ヤン・ムカジョフスキー (著), 平井 正 (翻訳), 千野 栄一 (翻訳), 『チェコ構造美学論集—美的機能の芸術社会学』, せりか書房, 1975.
- ・ ヴァーツラフ ハヴェル (著), 飯島周 石川達夫, 関根日出男 (訳) 『反政治のすすめ』, 恒文社, 1991.
- ・ 平野嘉彦, 『ブラハの世紀末—カフカと言葉のアルチザンたち』, 岩波書店, 1993.
- ・ 阿部賢一, 『複数形のブラハ』, 人文書院, 2012
- ・ ヴラスタ チハーコヴァー, 『ブラハ幻景—東欧古都物語』, 新宿書房, 1993.
- ・ 桑野隆, 『夢みる権利—ロシア・アヴァンギャルド再考』, 東京大学出版会, 1996.
- ・ 西野嘉章, 『チェコ・アヴァンギャルド—ブックデザインにみる文芸運動小史』, 平凡社, 2006.
- ・ 五十殿利治, 土肥美夫 編, 『コンストラクツィア 構成主義の展開』, 国書刊行会, 1991.
- ・ 五島茂, 坂本慶一, 『世界の名著 続8 オウエン サン・シモン フーリエ』, 中欧公論社, 1975年,
- ・ 石井洋二郎, 『科学から空想へ』, 藤原書店, 2009.
- ・ 井口壽乃, 『ハンガリー・アヴァンギャルド—MA とモホイ=ナジ』, 彩流社, 2000.
- ・ 井口壽乃, 『アヴァンギャルド宣言—中東欧のモダニズム』, 三元社, 2005.

・デイヴィッド・クラウリー（著）、井口壽乃（訳）、菅靖子（訳）、『ポーランドの建築・デザイン史—工芸復興からモダニズムへ』、彩流社、2006.

・石川達夫、『マサリクとチェコの精神—アイデンティティーと自律性を求めて』、成文社、1995.

・上野千鶴子、『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』、岩波書店、1990.



## 謝辞

本博士論文は、筆者が早稲田大学大学院 創造理工研究科建築学専攻 博士博士過程後期の中で入江正之研究室において行った研究をまとめたものであります。

はじめに、本研究に関して終始ご指導ご鞭撻を頂きました入江正之教授に心より感謝を申し上げます。また、本論文をご精読頂き、貴重なご指導、ご助言を頂きました中川武教授、古谷誠章教授に深く感謝申し上げます。

そしてロスティスラフ・シュバーハ教授のタイゲについての偉大な先行研究に敬意を表します。また、シュバーハ教授におかれましては本論文について直接的なご助言、ご協力をいただきましたことを深く御礼申し上げます。本研究の調査にあたっては、チェコ工科大学のウラジミール・シュラペタ教授には、タイゲに関するご助言ならびにチェコ近代建築に関する貴重な資料をご提供いただきましたことを心より御礼申し上げます。

元チェコ・センター所長にして現「チェコ蔵」主宰のペトル・ホリー様には本論著者のタイゲ研究について御推薦をいただき、筆者の日本におけるタイゲの研究活動における大きな励みとなりました。早稲田大学ヘレナ・チャプコヴァー教授には貴重なお時間を割いて頂き有益なご助言をいただきましたことを深く御礼申し上げます。カレル大学レンカ・クジュヴァルトヴァー様には幾度にも渡り、貴重な資料のご提供やご助言をいただきましたことを感謝申し上げます。プラハの「民宿桐渕」の桐渕様御一家様には研究旅行の滞在時に大変お世話になり、またチェコにおける一次資料の収集に多大な御協力をいただきました。

そして最後に、鈴木了二先生に心より感謝を申し上げます。

以上の皆様に心より感謝、御礼申し上げます。

## Acknowledgement

I would like to express my sincere gratitude to my supervisor, professor Msayuki Irie for providing me this precious study opportunity as a Ph.D student in his laboratory.

And I would like to express my sincere gratitude to professor Takeshi Nakagawa and professor Nobuaki Furuya for providing me the guidance and advice.

I especially would like to express my deepest appreciation to professor Rostislav Švácha, who is the great pioneer of the research of Karel Teige, for providing me the advice. And I express the biggest respect to professor Švácha's previous research.

Providing the precious research material given by professor Vladimír Šlapeta has been a great help in my research. And also, I would like to express my sincere gratitude to professor Šlapeta for providing me the advice.

Mr. Petr Holý, (ex.) the director of Czech center Tokyo, presiding "Czech-Gra" now, provided me the recommendation to my research of Teige, and which gave me a great encouragement to my research.

I would like to express my sincere gratitude to professor Helena Čapková for providing me the advice. I am particularly grateful for the assistance given by Ms. Lenka Kužvartová who provided me valuable materials and advice.

I would also like to express my gratitude to Kribuchi family ("Minshuku Kiribuch") for supporting my research while I was stayin in Praha.

And, I would like to express my deepest gratitude to the master, professor Ryoji Suzuki.

## 著者研究業績

### 研究業績

---

#### 査読付の学術論文：

・岩澤錠児, 入江正之, 「カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想とその変遷-カレル・タイゲ研究 (1) -」, 日本建築学会計画系論文集, 2012年10月, 第77巻, 第680号.

・岩澤錠児, 入江正之, 「著作『最小限住居(Nejmenší byt)』に見る1930年代前半のカレル・タイゲの建築思想 -カレル・タイゲ研究 (2) -」, 2013年5月, 日本建築学会計画系論文集第78巻, 第687号.

#### 国内外の学会での口頭発表：

・岩澤錠児, 入江正之 「カレル・タイゲの論説に見るチェコの建築近代化過程における建築思想の推移」、日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系 (51)、761-764, 2011-05-25、社団法人日本建築学会.

・岩澤錠児, 入江正之 「カレル・タイゲ研究 最小限住宅 The Minimum Dwelling にみるマルキシズム建築論」、日本建築学会大会学術講演会梗概集、F-2, p. 755、2011-9、社団法人日本建築学会.

・岩澤錠児, 大石将平, 「カレル・タイゲの「最小限住宅」論にみる都市、建築思想に関する研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集、F-2, p. 783、2011-9、社団法人日本建築学会.

### 作品

---

- ・清水の齒科医院 (医院・静岡県静岡市)、2000年
- ・高橋邸 (住宅・静岡県静岡市)、2004年
- ・武蔵小山の集合住宅 (店舗付集合住宅・東京都品川区)、2006年
- ・府中の家 (住宅・東京都府中市)、2007年
- ・ひたちなかのデイサービス (デイサービス施設/茨城県ひたちなか市)、2007年